

第134図 第532号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅100cmである。

火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化しゴツゴツしている。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。第2層から土師器片が多量に出土している。

竈土層解説

- 1 褐色 ム粒子・砂粒多量
- 2 褐色 焼土粒子・褐色土少量
- 3 赤褐色 焼土ブロック・砂粒多量
- 4 灰褐色 焼土粒子少量・炭化粒子微量、軟らかい

**ピット** 南壁際にあるP<sub>1</sub>は長径20cm、短径10cmの橢円形で、深さ16cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 7層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	赤褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
2	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム中・小ブロック微量、軟らかい
3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4	灰褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
5	褐色	ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
6	褐色	ローム中・小ブロック多量、焼土粒子少量
7	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

**遺物** 土師器片176点、須恵器片45点が出土している。第134図1の須恵器高台付坏は正位で南壁際の覆土下層から、2の土師器甕は造構確認面から出土している。覆土中から出土した3の須恵器瓶口縁部片、4の須恵器甕部片は、ともに外面に横位の平行叩きが施されている。

**所見** 本跡では、壁溝が確認されなかった。時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。重複している第12号掘立柱建物跡より古い。

第532号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134図 1	高台付坏	A 15.4 B 5.9 C 9.0 D 1.0	体部から口縁部一部欠損。平底で高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部斜板ハラ切り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部外側下部斜板ハラ削り。体部から口縁部内・外側ロコナデ。	砂粒・雲母・小石 黄褐色 普通	P7020 70% P L65 南壁際覆土下層
2	甕 土師器	A [27.0] B (5.5)	口縁部片。甕部でくびれ、口縁部は外反する。口容部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外両面削りナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・石英・ 赤色粒子 に赤褐色 普通	P7021 5% 造構確認面

#### 第534号住居跡(第82・135図)

**位置** 調査7区西部、M11f区。

**重複関係** 北西部が第533号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と平面形** 一辺[2.8]mの方形と推定される。

**主軸方向** N-124°-E

**壁** 遺存状態は悪く、南西壁の立ち上がりのみが確認できた。壁高は5cmである。

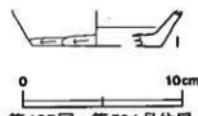
**壁溝** 南西壁下で確認された。上幅10~17cm、下幅4cm、深さ6cmで、断面形はU字形をしている。

**床** ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められている。

**竈** 南東壁中央部に構築されている。撹乱を受けているため火床部しか確認できなかった。火床部は床面を約5cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

**覆土** 単一層である。土層解説は、第533号住居跡の中で記述した。

**遺物** 土師器片58点、須恵器片4点、礫1点が出土している。第135図1の須恵器坏は西部の床面から出土している。



第135図 第534号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡では、ピットは確認できなかった。覆土が薄いため壁の立ち上がりが確認できなかった部分は、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。重複している第533号住居跡より新しい。

第534号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第535図 1	壺 須恵器	B [2.2] C [8.0]	底部から全体下端にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・畫母・白色 粒子 灰黄色 普通	P7035 西部表面 10%

#### 第535号住居跡 (第136~138図)

位置 調査7区中央部、M11g区。

重複関係 東部が第558号住居跡を掘り込み、第18号井戸に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.65m、短軸3.40mの方形である。

主軸方向 N-86°-E

壁 壁高は56~60cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。規模は上幅27~10cm、下幅4~10cm、深さ7~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められている。

竈 東壁のやや南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅120cmである。第3層の下面が赤変硬化しゴツゴツしているため、火床部と考えられる。火床部は床面を約8cm掘りくぼめている。天井部の一部は遺存している。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化しゴツゴツしている。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土師器片が出土している。

#### 竈土解説

- 1 砂褐色 砂粒多量、燒土粒子少量、軟らかい
- 2 砂褐色 烧土中量、燒土粒子少量
- 3 にぶい赤褐色 烧土粒子多量、炭化粒子中量、砂粒少量、ゴツゴツしている
- 4 暗赤褐色 烧土粒子多量
- 5 暗赤褐色 烧土粒子多量、炭化粒子少量

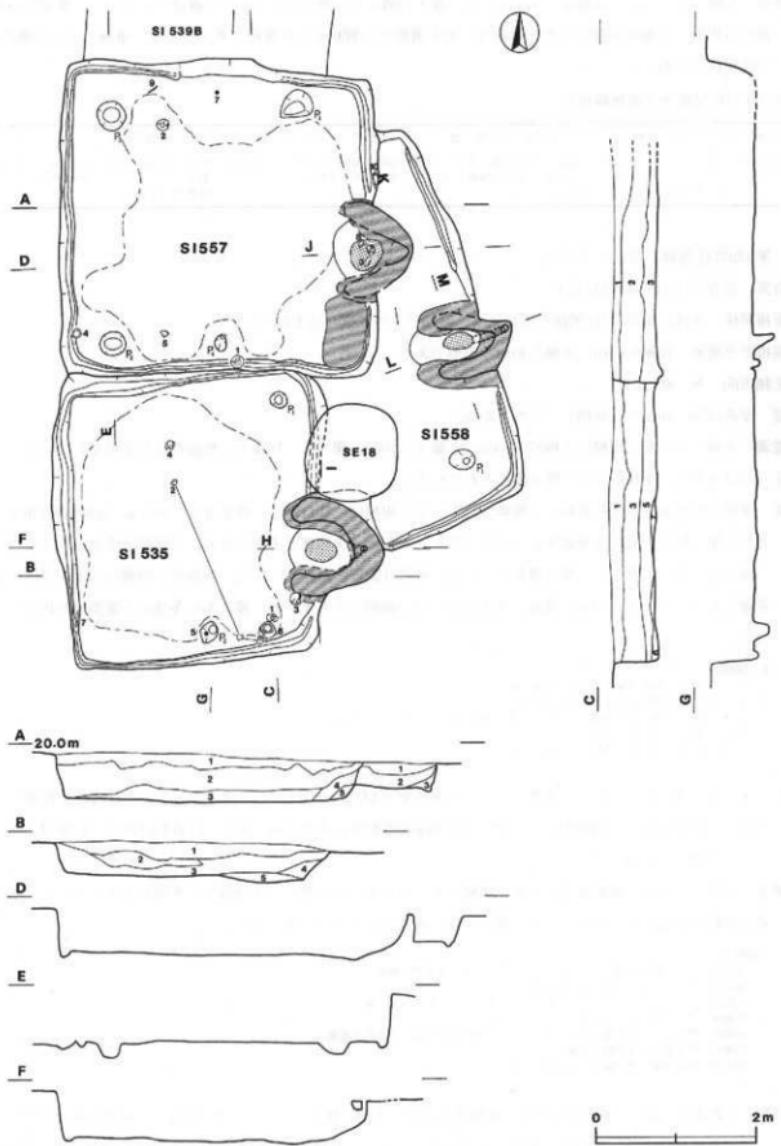
ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。北東コーナーにあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ20cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>2</sub>は径20cmの円形で、深さ22cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。第3層から土師器片が多量に出土している。第7層は砂粒を多量に含んでいるため、竈の一部が流れ込んだものと考えられる。

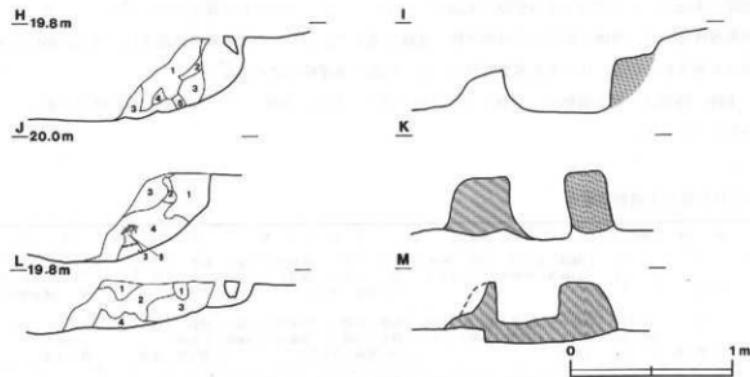
#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子、炭化粒子少量、軟らかい
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子少量、軟らかい
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 烧土ブロック中量、ローム小ブロック・燒土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 烧土粒子、炭化粒子少量
- 7 暗褐色 砂粒多量、燒土粒子、炭化粒子中量

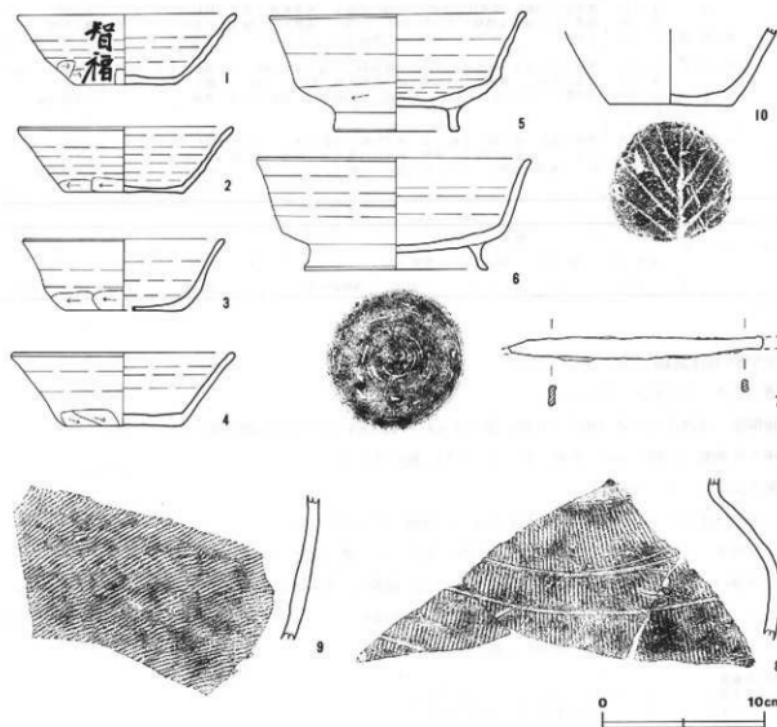
遺物 土師器片236点、須恵器片92点、鉄製品（刀子）1点が出土している。第138図1の須恵器壺は正位で、3の須恵器壺は逆位で竈南側の床面から出土している。1の側面に「智福」と墨書きされている。2の須恵器壺は覆土下層から、4の須恵器壺は中央部からやや北側の覆土中層から、5と6の須恵器高台付壺は逆位で



第136図 第535・557・558号住居跡実測図（1）



第137図 第535・557・558号住居跡実測図（2）



第138図 第535号住居跡出土遺物実測図

南壁際の床面から、7の刀子は西壁際の床面から出土している。8から10は覆土中から出土している。8の須恵器壺部片は、外面に縦位の平行叩き後、沈線を施している。9の須恵器壺部片は、外面に斜位の平行叩きが施されている。10の土器壺底部には、底部に木葉痕が認められる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。重複している第558号住居跡より新しく、第18号井戸より古い。

第535号住居跡出土遺物観察表

器皿番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
						P 7036 P L 67 覆土「質 幅」 蓮瓣床面	
第138図 1	壺 須恵器	A 13.5 B 44 C 62	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部へラ削り。体部外面下端手持ちへラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 灰色 普通	P 7036 P L 67 蓮瓣床面	90 %
		A 13.3 B 41 C 7.4	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部へラ削り。体部外面下端手持ちへラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・小石・ 白色粒子 黄灰色 普通	P 7037 P L 67 覆土下層	80 %
		A [12.4] B 44 C [7.0]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内壁気味に外傾し、 口縁部は外傾する。	底部へラ削り。体部外面下端手 持ちへラ削り。体部から口縁部 内・外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・長石 灰白色 普通	P 7038 P L 67 蓮瓣床面	50 %
2	壺 須恵器	A 13.6 B 46 C 7.0	体部から口縁部一部欠損。平底。 体部から口縁部は外傾して立ち 上がる。	底部へラ削り。体部外面下端手 持ちへラ削り。体部からロクロナヂ。	砂粒・小石・長石 灰黄色 普通	P 7039 覆土中層	50 %
		A 15.8 B 7.4 D 7.6 E 1.6	体部から口縁部一部欠損。平底。 高台が付く。体部から口縁部 は外傾して立ち上がる。	底部回転へラ削り後高台貼り付 け。体部外面下端回転へラ削り。 体部からロクロナヂ。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P 7040 P L 67 南壁床面	80 %
		A 16.9 B 7.1 D 11.4 E 1.5	体部口縁部一部欠損。平底。高 台は「L」の字形に開く。体部 から口縁部は外傾して立ち上 がる。	底部回転へラ削り後ナヂ。高台 貼り付け後ナヂ。体部からロクロ ナヂ。	砂粒・雲母・長石・ 白色粒子 灰色 普通	P 7041 P L 67 南壁床面	80 %

器皿番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
7	刀子	(15.8)	1.5	0.4~0.5	(34.0)	西壁際床面	M7002 P L 67

### 第536A号住居跡（第85・86・139図）

位置 調査7区中央部、M11e区。

重複関係 東側部分が第536B号住居跡に掘り込まれ、第538A・538B号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸2.50m、短軸[2.4]mの方形と推定される。

主軸方向 N-65°-W

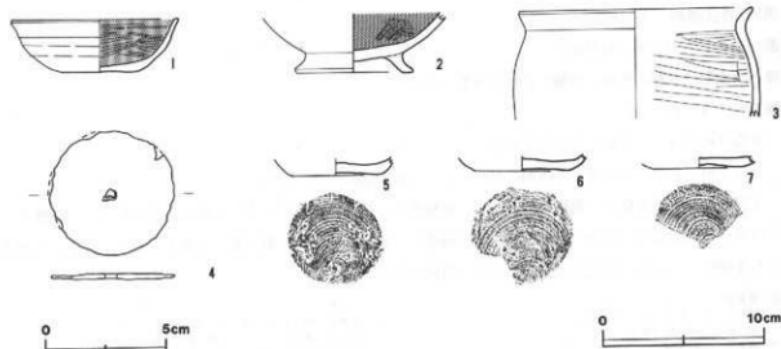
壁 東壁は確認できなかった。壁高は約7cmで、外傾して立ち上がる。

床 東側部分は搅乱を受けているが、それ以外は平坦でよく踏み固められている。

窓 西壁のやや北寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅95cmである。火床部は床面を約7cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 窓土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小プロック中量、砂粒少量
- 2 暗赤褐色 ローム小プロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量



第139図 第536A号住居跡出土遺物実測図

覆土 単一層である。覆土が薄いため、堆積状況は確認できなかった。

土層解説  
1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片130点、須恵器片7点、鉄製品（劔鍔車）1点、礫1点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第139図1の环と4の劔鍔車は南東部の床面から、2の高台付环は逆位で西壁際の床面から、3の甕は竈南袖部から出土している。覆土中から出土した5から7は皿底部片で、いずれも底部回転糸切りである。

所見 本跡では、壁溝とピットは確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第536B号住居跡より古く、第538A・538B号住居跡より新しい。

第536A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第139図 1	环	A 10.4 B 3.4 C 4.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部ハラ削り後ナデ。体部から口部外側ロクロナデ、内面丁寧なハラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい橙色(外側) 普通	P7042 P L67 南東部床面
2	高台付环	B (3.7) D 7.2 E 1.2	高台部から体部にかけての破片。 高台は「八」の字状に聞く。体部は内側気味に立ち上がる。	底部回転ハラ削り後ナデ。高台端に付け後ナデ。体部外側横ナデ。 内面丁寧なハラ磨き。内面赤色。	砂粒・長石・小石 褐色(外側) 普通	P7043 西壁際床面 40%
3	甕	A [14.4] B (6.8)	体部上位から口縁部にかけての 破片。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外側ナデ。内面ヘラナデ。 口縁部内・外側横ナデ。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P7044 竈南袖部 5%

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
4	劔鍔車	5.1	0.3	0.5	13.0	南東部床面	P L67

第537号住居跡（第140図）

位置 調査7区中央部、M11d区。

規模と平面形 長軸2.95m、短軸2.75mの方形である。

主軸方向 N-34°W

壁 壁高は約12cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。中央部から西側にかけて、よく踏み固められている。

壁 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。東袖部は、搅乱を受けているため確認できなかった。規模は、焚口部から煙道部まで60cmである。天井部は崩落しており、第1層と第3層が崩落土と考えられる。火床部は赤茶硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

竪土層解説

- 1 暗褐色 煙土粒子多量、砂少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 砂粒多量

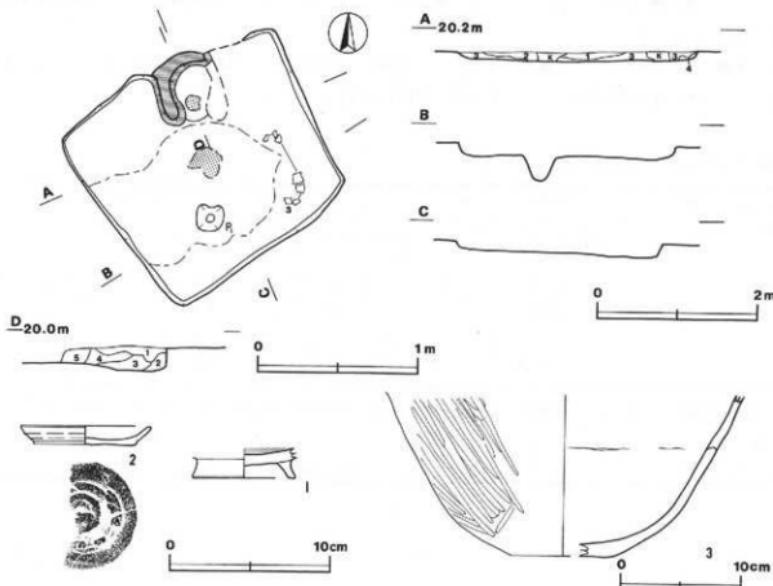
- 4 暗褐色 煙土粒子中量、灰少量
- 5 褐色 煙土小ブロック・煙土粒子中量

ピット 南壁際にあるP<sub>1</sub>は径約40cmの円形で、深さ32cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・煙土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 砂粒中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム小ブロック少量



第140図 第537号住居跡・出土遺物実測図

遺物 土師器片97点、須恵器片2点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第140図1の高台付杯と2の皿は遺構確認面から、3の甕は東部の床面から出土している。

所見 本跡では、壁溝は確認されなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉と考えられる。

第537号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 1	高台付杯	B (19) D 6.4 E 12	高台部から底部にかけての破片。 高台は「ハ」の字形に開く。	底部へラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。内面黑色処理。	砂粒・長石 にぶい橙色(外側) 普通	P7045 10% 遺構確認面
2	皿	A [8.2] B 12 C [6.4]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。底部はやや突出する。体部からU字縫合部は外傾して立ち上がる。	底部内輪へラ切り。体部から口縁部へ外輪ロクロナデ。	雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P7046 40% 遺構確認面
3	甕	B (13.4) C [8.4]	底部から体部にかけての破片。 平底。底部は内傾して立ち上がる。	底部へラ削り。体部外腹中位から下位縱方向のヘラ磨き。内面ナデ。輪積み底。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P7047 15% 東部床面

#### 第538B号住居跡 (第85・86・141図)

位置 調査7区中央部、M11e区。

重複関係 西部が第536A・536B号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。北東部が第538A号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.95m、短軸3.70mの方形である。

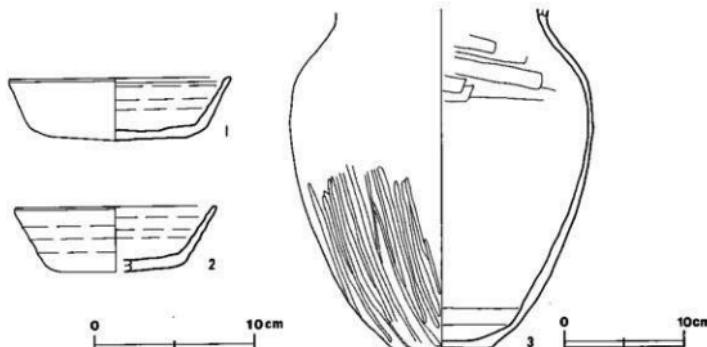
主軸方向 N - 4° - W

壁 壁高は44~64cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下と南西コーナー壁下の部分は確認できなかった。上幅10~20cm、下幅約6cm、深さ7~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

竈 北壁中央に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅140cmである。第6層の下面が赤変硬化しているため、火床部と考えられる。床面を約10cm掘りくぼめて、火床面としている。



第141図 第538B号住居跡出土遺物実測図

天井部は崩落しており、第1層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 竪土層解説

- 1 明褐色 砂粒多量
- 2 焼土ブロック、ゴツゴツしている
- 3 黒 色 燃土粒子・粘土多量、焼土小ブロック中量
- 4 明赤褐色 燃土小ブロック中量
- 5 男 色 砂粒中量、燃土粒子少量
- 6 橙 色 燃土中ブロック多量、褐色土中量、燃土粒子少量
- 7 黑 色 燃土粒子、焼土ブロック多量、粘土粒子中量
- 8 黑 色 燃土粒子多量、砂粒少量
- 9 黑 色 焼土粒子多量、砂粒中量

ピット 2か所( $P_1 \cdot P_2$ )。南壁際にある $P_2$ は径20cmの円形で、深さ31cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。南西コーナーにある $P_1$ は径約30cmの円形で、深さ20cmである。性格は不明である。  
覆土 7層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒 色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 灰褐色 ローム粒子・燃土粒子少量
- 4 灰褐色 ローム中・小ブロック中量
- 5 灰褐色 ローム中ブロック・粒子中量、燃土粒子少量
- 6 黑 色 ローム粒子中量、燃土粒子少量
- 7 灰褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片243点、須恵器片7点、礫1点が出土している。第141図1の土師器片は正位で南東コーナー部の床面から、2の須恵器片は覆土中層から、3の土師器片は窓内から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀と考えられる。重複している第536A・536B号住居跡より古く、第538A号住居跡より新しい。

第538B号住居跡出土遺物観察表

調査番号	部 像	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	地 士・色調・焼成	備 考
第141図 1 土 帽 器	壺	A 138 B 39 C 84	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部削りヘラ削り。体・口縁部内・外面クロナデ。	雲母・石英・赤色 粒子 橙色 普通	P7056 80% P L68 南東コーナー部床面
	壺	A [125] B 40 C [80]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体・口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・長石・石英・ 黒色粒子 灰色 普通	P7057 50% 覆土中層
	甕	B (28.0) C 80	口縁部一部欠損。平底。体部は内寄り味に立ち上がり、上位に叢人注をもつ。腹部でくびれる。	底部ヘラ削り。体部外面下段丁寧なヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P7058 60% P L68 窓内

第539A号住居跡(第142・143図)

位置 調査7区中央部、M11e区。

重複関係 南西部が第539B号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。全体的に第14号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

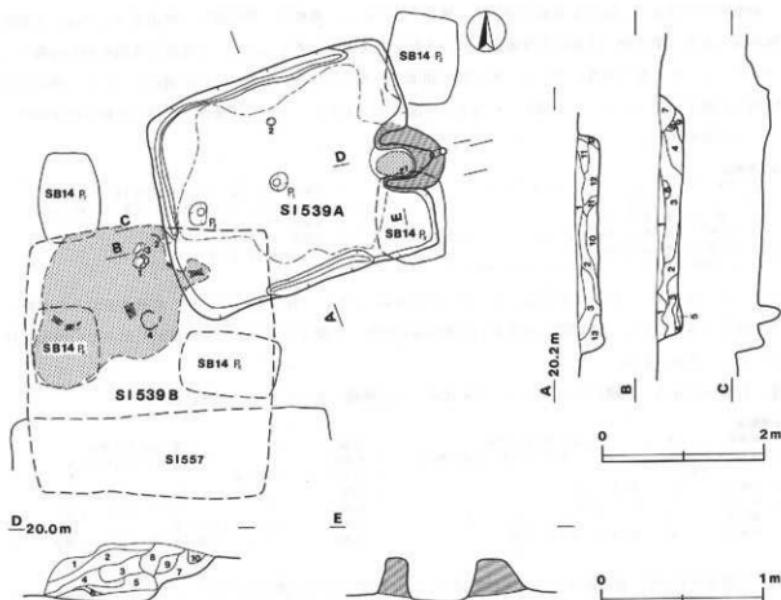
規模と平面形 長軸3.28m、短軸2.70mの長方形である。

主軸方向 N-74°-E

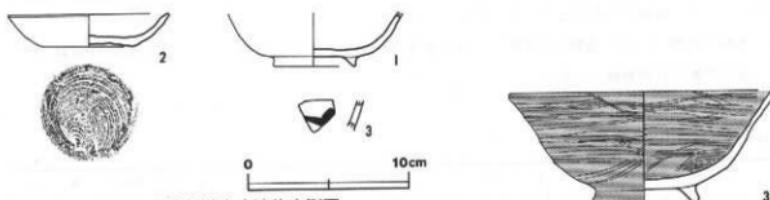
壁 壁高は約33cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第539B号住居跡と重複している部分以外は確認できた。上幅20cm、下幅6~10cm、深さ7~10cmで、断面形はU字形をしている。

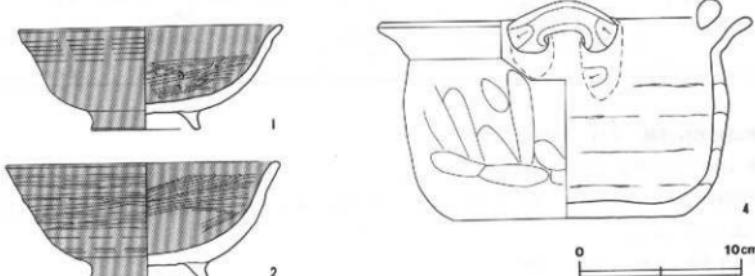
床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。



第142図 第539A・539B号住居跡実測図



第143図 第539A号住居跡出土遺物実測図



第144図 第539B号住居跡出土遺物実測図

**竪** 東壁のやや南寄りに粘土を多量に使用して構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅80cmである。第7層の下面が赤変硬化しているため、火床部と考えられる。火床部は床面を約10cm掘りくぼめている。天井部は崩落しており、第3層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。覆土から多量の土器片が出土している。南袖部下に第14号掘立柱建物跡のピットが検出された。

#### 遺土層解説

1 細 葵 色 ローム粒子・焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、砂粒少量	6 にふい赤褐色 砂粒多量、褐色土中量、焼土粒子少量
2 細 葵 色 烧土粒子中量	7 細 赤 葵 色 烧土ブロック・焼土粒子多量、粘土粒子中量
3 灰 赤 葵 色 烧土粒子・粘土多量、焼土小ブロック中量	8 にふい赤褐色 烧土粒子多量
4 細 葵 色 烧土粒子少量、サラサリしている	9 にふい赤褐色 烧土粒子多量、砂粒中量
5 にふい赤褐色 烧土小ブロック・焼土粒子多量、砂粒少量	10 細 赤 葵 色 烧土粒子多量

**ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)** 中央部にあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ46cmであり、規模と位置から判断して主柱穴と考えられる。西壁際にあるP<sub>2</sub>は径20cmの円形で、深さ31cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 13層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。全体に軟らかい。

#### 土層解説

1 赤褐色 ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量	7 赤褐色 ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
2 赤褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	8 赤褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3 赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量	9 赤褐色 ローム粒子少量
4 赤 色 ローム中・小ブロック少量	10 赤褐色 ローム中・小ブロック少量
5 赤 色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	11 赤褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
6 赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	12 赤褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
	13 赤褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物** 土器部401点、須恵器片38点、灰釉陶器片1点、陶器片1点、礫1点が出土している。第143図1の土器部高台付杯は竪内から、2の土器部皿は正面で北側の床面から出土している。覆土中層から出土した3の土器部杯体部外面に「ナカ」と墨書きされている。覆土中から猿投窯黒笠90号窯式の灰釉陶器長頸瓶の破片が出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀中葉と考えられる。重複している第539B号住居跡より古く、第14号掘立柱建物跡より新しい。

第539A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 横	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第143図 1	高 台 付 杯	B (3.3) D 5.1 E 0.6	高台部から底部にかけての破片。 高台は短く「ハ」の字状に開く。 体部は内側気泡に立ち上がる。	底部切削後剥離ナダ。 貼り付け後ナダ。体部内・外側クロナダ。	砂粒・雲母・白色 粘土粒子 にふい赤褐色 普通	P7059 竪内 30 %
	土 器 盤	A 10.0 B 2.1 C 5.6	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内側気泡に立ち上がる。	底部回転切り。体・口縁部内・外側クロナダ。	砂粒・瓦石・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P7060 P L 68 90 %
	土 器 器					北側床面
2	皿	A 10.0 B 2.1 C 5.6	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内側気泡に立ち上がる。	底部回転切り。体・口縁部内・外側クロナダ。	砂粒・瓦石・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P7060 P L 68 90 %
	土 器 器					北側床面

#### 第539B号住居跡 (第142・144図)

**位置** 調査7区中央部、M11e区。

**重複関係** 北東部が第539A号住居跡を、南部が第557号住居跡を掘り込み、また全体的に第14号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

**規模と平面形** 長軸 [3.4]m、短軸 [3.1]mの長方形と推定される。

**床** ほぼ平坦で、よく踏み固められている。第14号掘立柱建物跡と重複している部分は貼り床をしている。

遺物 土師器片9点、炭化材が出土している。図示したものはいずれも土師器である。第144図1から3の高台付杯は横位で北部の床面から出土している。4の内耳鍋は正位で中央部から北部の床面にかけて出土している。炭化材は北部の床面から出土している。

所見 本跡は、床面しか確認できなかったため、床質から規模と平面形を推定した。窓とピットは確認できなかった。しかし、床面の東部にゴツゴツした赤変化部分が検出できたため、火床部の可能性がある。時期は、出土遺物から判断して10世紀中葉から後葉と考えられる。また、床面が赤変化して屋根材や柱材と思われる炭化材が床面から多量に出土しているため、焼失家屋と考えられる。重複している第539A・557号住居跡、第14号掘立柱建物跡より新しい。

第539B号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	高台付杯 土 師 器	A 16.4 B 6.4 D 6.8 E 1.1	口縁部一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内縁気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体・口縁部内・外面丁寧なヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・小石 にぶい橙色 普通	P7061 P L68 北部床面
2	高台付杯 土 師 器	A 16.9 B 7.3 D 7.2 E 1.1	口縁部一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内縁気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体・口縁部内・外面丁寧なヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・小石 灰黄褐色 普通	P7062 P L68 北部床面
3	高台付杯 土 師 器	A [16.5] B 6.9 D 6.0 E 1.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内縁気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体・口縁部内・外面丁寧なヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・小石 灰黄褐色 普通	P7063 P L68 北部床面
4	内 耳 鍋 土 師 器	A [23.0] B 12.4 C 14.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外側ヘラナデ、内面磨ナデ。口縁部内・外ナデ。輪積み底。	砂粒・長石・小石・ 石英 明赤褐色 普通	P7064 P L68 北部床面

#### 第540号住居跡(第145・146図)

位置 調査7区中央部、M11ds区。

重複関係 南部が第321号土坑、東部が第541号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.15m、短軸3.10mの方形である。

主軸方向 N-105°-E

壁 壁高は約12cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下と東壁下の一部に確認できた。上幅17~20cm、下幅約7cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部から南側が特に踏み固められている。

窓 東壁中央部からやや南寄りに砂質粘土で構築されている。袖部は良好に遺存している。規模は、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅80cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変化している。天井部は確認できなかった。雲母片岩を袖部の補強材に使用している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。第5層と第6層から多量の土師器片が出土している。

#### 窓土層解説

1	白	褐色	燒土粒子少量
2	白	褐色	燒土粒子・炭化粒子中量
3	白	褐色	ローム粒子・燒土粒子多量

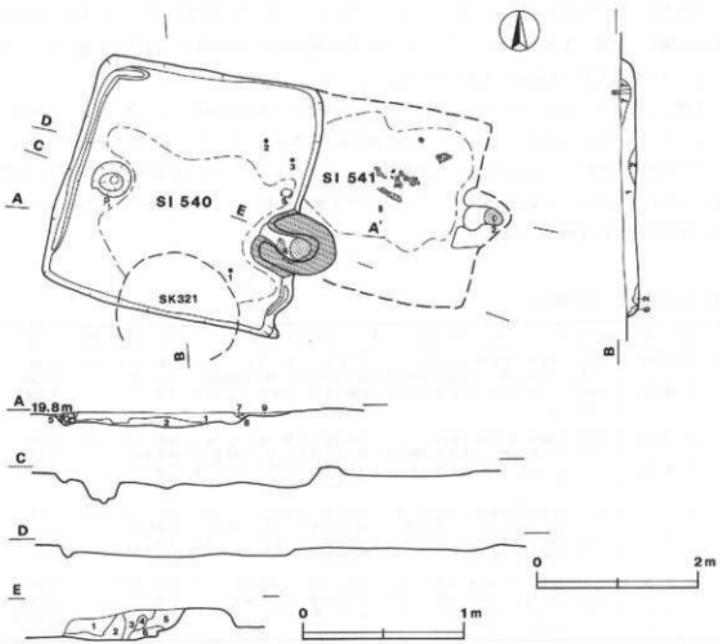
4 にぶい赤褐色 燒土粒子・炭化粒子中量

5 白

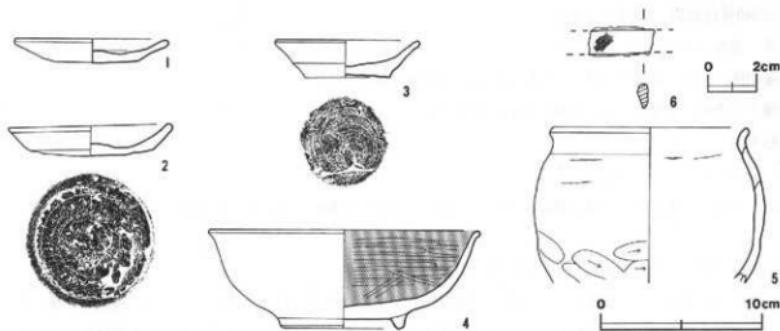
褐色 燃土粒子少量

6 白

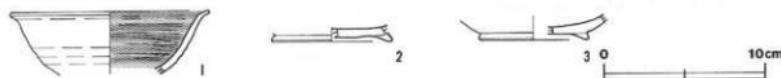
褐色 燃土粒子中量、やや硬い



第145図 第540・541号住居跡実測図



第146図 第540号住居跡出土遺物実測図



第147図 第541号住居跡出土遺物実測図

ピット 西壁際にあるP<sub>1</sub>は径50cmの円形で、深さ25cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。第1層から多量の土師器片が出土している。

#### 土層解説

1	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
2	明	褐	ローム小ブロック・ローム粒子多量
3	暗	褐	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4	褐	色	ローム粒子少量
5	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
6	棕	色	ローム粒子中量・粘土粒子少量
7	にい	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
8	にい	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
9	褐	色	ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片330点、須恵器片55点、鉄製品（刀子）1点、礫17点、炭化米、炭化物（種子）が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第146図1の皿は南東部の床面から、4の高台付杯は窓内から出土している。2と3の小形甕は竈北側の床面から出土している。2と3は正位で出土している。覆土下層から6の刀子が出土している。竈の火床部から炭化米と炭化種子が出土しているが、種子の種類は不明である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第541号住居跡、第321号土坑より新しい。

第540号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	備考	
					底	壁
第146図 1	皿	A 9.4 B 1.5 C 5.7	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 にいり褐色 普通	P7065 100% P L68 南東部床面
	土師器					
	皿	A 10.1 B 2.0 C 7.9	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色 粒子 普通	P7066 100% P L68 竈北側床面
2	土師器					
	皿	A 8.8 B 2.3 C 5.3	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・赤色粒子 橙色 普通	P7067 90% P L68 竈北側床面
	土師器					
3	高台付杯	A [16.8] B 6.1 D [7.2]	高台部から口縁部にかけての破片。高台は「八」の字状に開く。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部外側ロクロナデ、内面丁寧なヘラ磨き。内面墨色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子 にいり褐色 (外副) 普通	P7068 50% P L68 窓内
	土師器					
	小形甕	A [12.0] B (9.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ハラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み張。	雲母・長石・石英 にいり褐色 普通	P7069 20% 外側窓付蓋 竈北側床面
5	土師器					

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	刀子	(2.8)	1.2	0.4	(246)	窓下層	M7004

#### 第541号住居跡（第145・147図）

位置 調査7区中央部、M11d区。

重複関係 西部が第540号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 第540号住居跡に掘り込まれているため、平面形は推定できなかった。規模は、南北(2.0)m、東西[2.4]mである。

主軸方向 N-103°-E

床 中央部に踏み固められた部分が確認できた。

竈 床面の東部に火床部と思われる赤変硬化した部分が確認できた。

遺物 土師器片149点、須恵器片5点、礫6点、炭化材が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第147図2の高台付杯は竈内から、1の杯と3の高台付杯は遺構確認面から、炭化材は中央部の床面から出土している。

所見 本跡では、壁溝とピット、壁は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀中葉と考えられる。床面が赤変硬化し、柱材と思われる炭化材が出土しているため、焼失家屋と考えられる。重複している第540号住居跡より古い。

第541号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計面積 (m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第147図 1	杯	A [122] B [38]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内層気味に立ち上がり、 口縁部は外反する。	体部から口縁部外側ロクロナデ、 内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色 處理。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 (外面) 普通	P7070 10% 遺構確認面
	土師器					
2	高台付杯	B [10] D [74] E 0.5	高台部から底部にかけての破片。 平底で、高台は短く「ハ」の字 状に開く。	底部ヘラ削り後ナデ。高台貼り 付け後ナデ。底部内面丁寧なヘ ラ磨き。内面黒色処理。	雲母・赤色粒子 褐色 (外面) 普通	P7071 10% 竈内
	土師器					
3	高台付杯	B [15] D [68] E 0.5	高台部から底部にかけての破片。 平底で、高台は短く「ハ」の字 状に開く。	底部凹削へら切り。高台貼り付 け後ナデ。	雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 (外面) 普通	P7072 10% 遺構確認面
	土師器					

#### 第542号住居跡 (第88・148図)

位置 調査7区中央部、M11g区。

重複関係 南西コーナー部が第543号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.15m、短軸4.10mの方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は20~51cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナー壁下を除いては確認された。上幅20~30cm、下幅7~10cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで110cm、両袖部幅120cmである。

火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。第3層と第7層から多量の土師器片が出土している。

#### 遺土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	5	ロームブロック
2	暗褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子中量	6	暗赤褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量
3	にぶい赤褐色	焼土中ブロック・焼土粒子多量	7	暗赤褐色 焼土大・中ブロック・焼土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量
4	赤褐色	焼土大・中ブロック・焼土粒子中量		

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径30cmの円形で、深さ16cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径20cmの円形で、深さ22cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。第4層は、壁溝の覆土である。

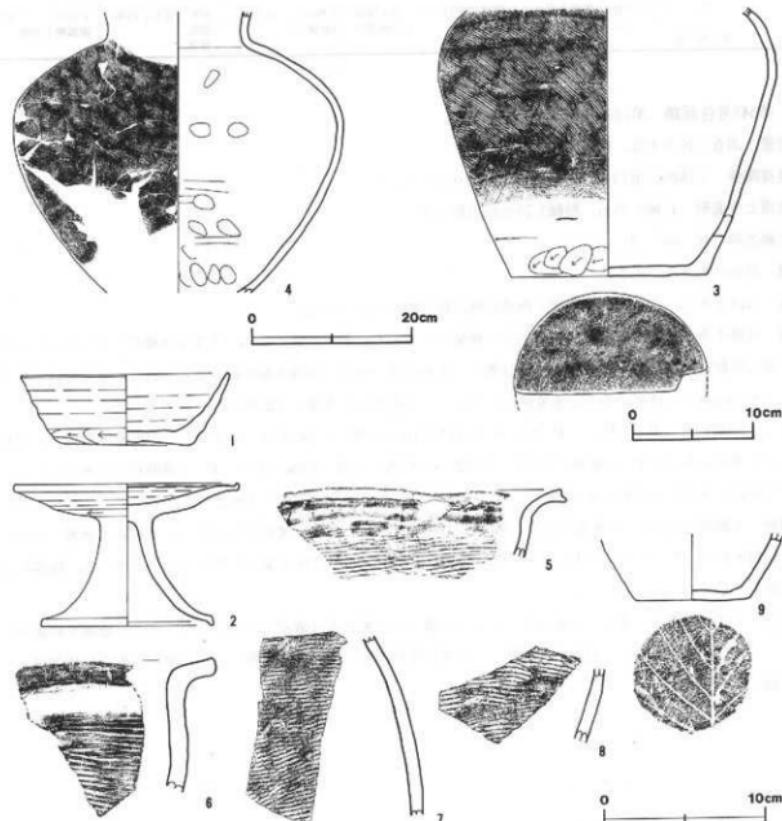
土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、軟らかい。
- 2 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、軟らかい。
- 3 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、軟らかい。
- 4 褐 色 ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量。
- 5 にじむ赤褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量。

遺物 土器器片501点、須恵器片189点、礫4点が出土している。図示した1から8はいずれも須恵器である。

第148図1の杯は横位で竈東側の覆土下層から、3の甕と5の瓶は南側の覆土下層から、4の壺は南西側の覆土下層から、2の高盤は遺構確認面から出土している。6の甕口縁部片は、外面に横位の平行叩きが施されている。7と8の甕体部片は、外面に横位の平行叩きが施されている。9の土器器底片には、木葉痕が認められる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀と考えられる。重複している第543号住居跡より新しい。



第148図 第542号住居跡出土遺物実測図

第542号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 1 須恵器	壺	A 13.1 B 45 C 8.0	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内、外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・石英 灰黄色 普通	P 7073 90% P L 69 東東側覆土下層
	高 瓢	A [14.0] B 8.9 D [10.6] E 6.9	脚部と口縁部一部欠損。脚部はラバ状に開き、瓶底部の折り返しには短い。体部は大きく開き、口縁部は上方に短く折り曲げられている。	脚部から体部内、外面ロクロナダ。体部外面下端回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・ 石英 灰色 普通	P 7074 60% P L 69 邊構造認面
	甕	B [22.3] C [16.0]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、上位に最大径をもつ。	底部ヘラ削り後ナダ。体部外斜位の平行叩き後、等間隔を開いた横位のナダ。下位ヘラ削り。内面ナダ。輪樋み底。	砂粒・長石・石英・ 小石 灰色 普通	P 7075 30% 南部覆土上下層
4 須恵器	壺	B (34.3)	体部から頸部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部はほぼ直立する。	体部外面同心円状の叩きが施され、内面当て具痕。頸部内、外間ナダ。	砂粒・雲母・ 黄灰色 普通	P 7076 40% P L 69 南西部覆土下層
	甕	A [32.0] B (4.2)	体部上部から口縁部にかけての破片。口縁部は外反する。	体部外面上位横位の平行叩き。口縁部内、外面横ナダ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P 7077 5% 南部覆土下層

## 第545号住居跡（第149図）

位置 調査7区中央部、M11i区。

重複関係 全体的に第13号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.05m、短軸3.75mの方形である。

主軸方向 N-60°-E

壁 壁高は約3cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部から北部と西部が特に踏み固められている。

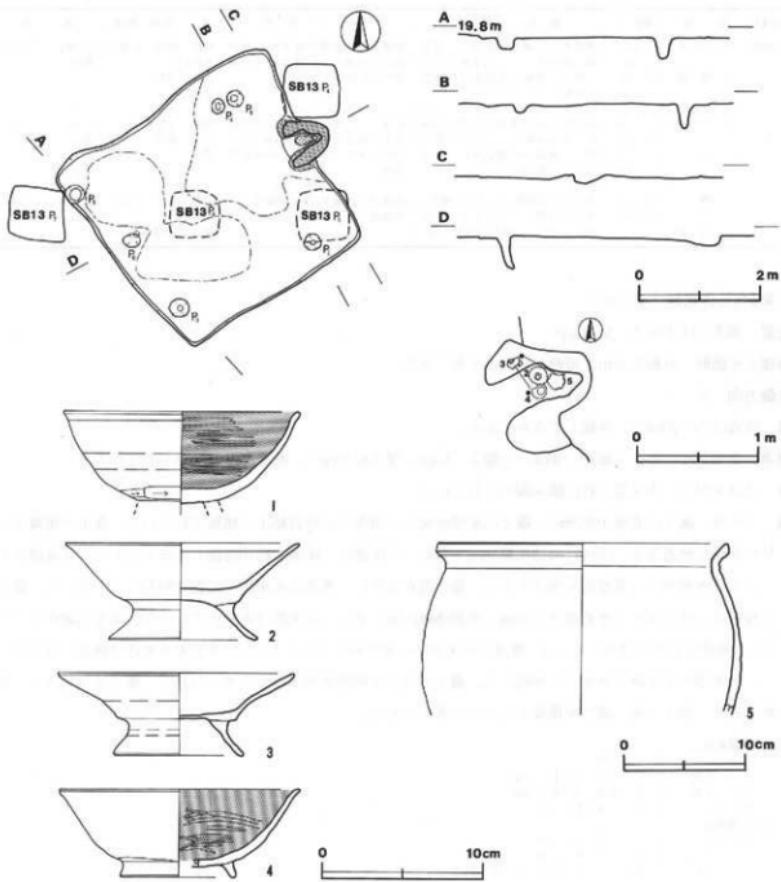
竈 北壁中央からやや東寄りに砂質粘土で構築されている。覆土が薄いため、天井部は確認できなかった。袖部の痕跡は残存している。規模は焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅80cmと推定される。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。火床面から多量の土器器片が出土している。

ピット 6か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径約24cmの円形で、深さ20～40cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。P<sub>4</sub>の東側にあるP<sub>5</sub>は径20cmの円形で、深さ12cmであり、P<sub>4</sub>の補助柱穴と考えられる。西壁際にあるP<sub>6</sub>は径30cmの円形で、深さ52cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土器器片121点、須恵器片21点、陶器片1点が出土している。図示した土器はいずれも土器である。

第149図2、3、4の高台付壺、5の甕は竈内から、1の高台付壺は覆土下層から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡は、覆土が薄いため壁の立ち上がりと覆土の堆積状況は確認できなかった。また、壁溝も確認されなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第13号掘立柱建物跡より新しい。



第149図 第545号住居跡・出土遺物実測図

第545号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149図 1	高台付环 土 師 器	A 14.6 B ( 5.5)	高台部欠損。体部から口縁部にかけで一部欠損。体部は内埋気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部外面ロクロナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子 明赤褐色(外面) 普通	P7089 P L69 覆土下層
2	高台付环 土 師 器	A 14.6 B 6.0 D [ 9.2] E 2.3	高台部一部欠損。高台は「ハ」の字状に大きく開く。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英・ 赤色粒子 橙色 普通	P7090 P L69 龜内

図版番号	器種	計測値 (mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149図 3	高台付环 土 部 番	A 14.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台は「ハ」の字状に大きく開く。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部削軋・ハラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子にぶい・橙色普通	P7091 60% 蔵内
		B 5.1				
		D 8.0				
		E 2.2				
4	高台付环 土 部 番	A [15.0] B 5.5 D [ 7.0] E 1.0	高台部から口縁部にかけての破片。高台は短く「ハ」の字状に開く。体部は内凹気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部ハラナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部外面ナデ、内面丁寧なハラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・赤色粒子にぶい・橙色普通	P7092 30% 蔵内
5	壺 土 部 番	A [23.1] B (14.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内縁して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子褐色普通	P7093 15% 蔵内

### 第546号住居跡（第150図）

位置 調査7区中央部、M11b区。

規模と平面形 長軸3.20m、短軸3.15mの方形である。

主軸方向 N - 0°

壁 壁高は15~20cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅20~30cm、下幅4~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 2か所。竈1は北壁中央部に、竈2は東壁中央から南寄りに砂質粘土で構築されている。竈1の規模は、焚口部から煙道部まで60cm、両袖部幅80cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。西袖部は一部搅乱を受けており、竈の遺存は悪い。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。竈2の規模は、焚口部から煙道部まで50cm、両袖部幅80cmである。火床部は赤変しているが、あまり硬化していない。袖部は良好に遺存している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。いずれも天井部は確認できなかつた。火床部の赤変硬化状況から判断して、竈1の方が長期間使用されたと考えられる。竈の遺存状況から判断すると、竈1の後、竈2を構築したものと考えられる。

#### 竈1 土層解説

- 1 にぶい赤褐色 搾土粒子中量
- 2 にぶい赤褐色 搾土粒子中量 粘土粒子少量
- 3 にぶい赤褐色 搾土粒子中量 粘土粒子微量
- 4 黒褐色 搾土粒子 少量

#### 竈2 土層解説

- 1 黒褐色 搾土粒子 粘土粒子少量
- 2 にぶい赤褐色 搾土粒子 粘土粒子少量
- 3 にぶい赤褐色 搾土粒子 中量 粘土粒子微量

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。南壁際にあるP<sub>1</sub>は長径20cm、短径10cmの楕円形で、深さ18cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P<sub>1</sub>の西側にあるP<sub>2</sub>は長径30cm、短径20cmの楕円形で、深さ28cmである。性格は不明である。

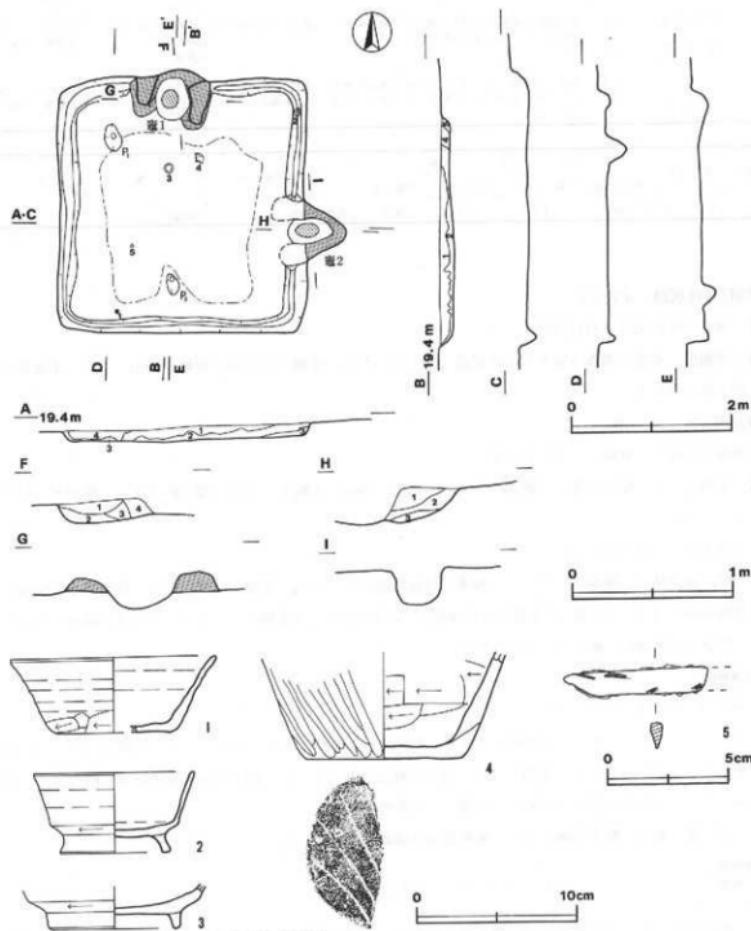
覆土 5層からなる。堆積状況から人為堆積と考えられる。第3層は壁際から自然に堆積したものと考えられる。

#### 土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子中量、焼土中プロック、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黑褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黑褐色 ローム粒子、焼土粒子少量
- 5 黑褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量

**遺物** 土師器片84点、須恵器片24点、鉄製品（刀子）1点、礫1点が出土している。第150図1の須恵器杯は逆位で南西コーナー部の床面から、2の須恵器高台付杯は北東コーナー部の覆土下層から、3の須恵器高台付杯は逆位で中央部からやや北側の覆土下層、4の土師器甕は中央部からやや北側の覆土中層、5の刀子は中央部から南西側床面で出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。



第150図 第546号住居跡・出土遺物実測図

第546号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	基形の特徴	手法の特徴	黏土・色調・焼成	備考
第150回 1	环 須恵器	A [128] B 47 C [70]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外側下端手 持ちヘラ削り。体部から口縁部 内・外面ロクロナザ。	砂粒・雲母・石英 灰黄褐色 普通	P7094 30% 南西コーナー部床 面
2	高台付环 須恵器	A 10.0 B 5.0 D 6.6 E 12	口縁部一部欠損。高台は「ハ」 の字状に開く。平底。体部から 口縁部は外傾して立ち上がる。	底部削軸ヘラ削り。高台貼り付 け後ナザ。体部外側下端回軸ヘ ラ削り。体部から口縁部内・外 面ロクロナザ。	砂粒・雲母・長石 赤色粒子 灰黄色 普通	P7095 95% P.L.70 北東コーナー部覆 土下層
3	高台付环 須恵器	B (27) D 7.8 E 1.0	高台部から底部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。平 底。	底部削軸ヘラ削り。高台貼り付 け後ナザ。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	P7096 30% 北無覆土下層
4	壺 土師器	B (6.4) C [9.7]	底部から体部下位にかけての破 片。平底。体部下位は外傾して 立ち上がる。	底部木葉底。体部外面下位ヘラ 削き、内面ナザ。輪積み痕。	雲母・長石・石英 橙色 普通	P7097 10% 北無覆土中層
図版番号	種別	計 国 値			出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
5	刀子	(6.0)	1.4	0.5	(4.78)	南西側床面 M7005

## 第547号住居跡（第151図）

位置 調査7区中央部, M11e区。

規模と平面形 東部が調査区域外のため確認できなかったが、長軸(3.0)m、短軸2.60mである。平面形は長方形と推定される。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高は15cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナー壁下を除いて確認できた。上幅10~20cm、下幅4~8cm、深さ約4cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、踏み固められている。

竈 北壁に砂質粘土で構築されている。袖部は良好に遺存している。規模は、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅80cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかつた。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

## 竈土層解説

- 1 橙色 焼土粒子・粘土粒子少量  
2 橙色 焼土粒子中量、粘土粒子少量

ピット 2か所(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。南壁際にあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ19cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。南西コーナー部から確認されたP<sub>2</sub>は、長径80cm、短径50cmの楕円形で、深さ19cmであり、規模や位置から判断して貯蔵穴の可能性がある。

覆土 単一層である。覆土が薄いため、堆積状況は確認できなかった。

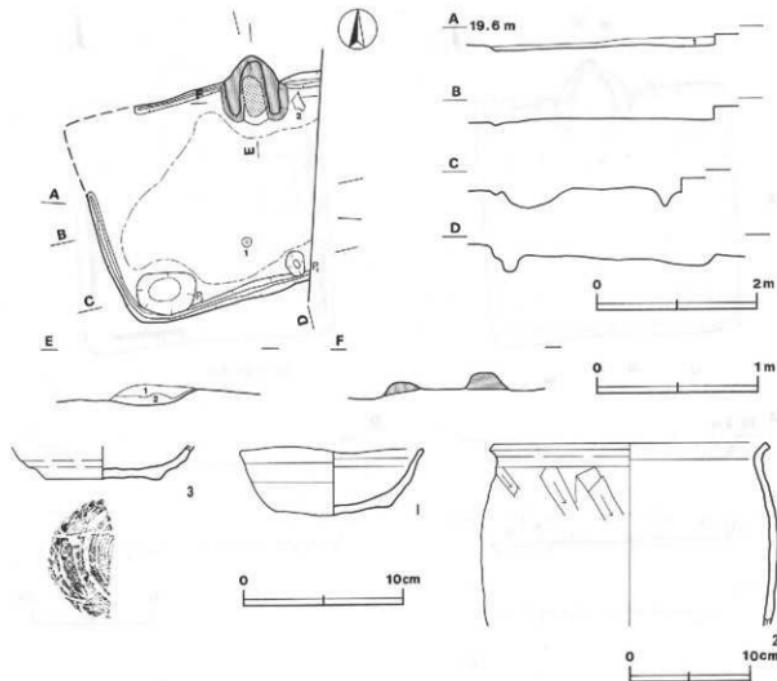
## 土層解説

- 1 焼褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片51点、須恵器片5点、碟3点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第151

図1の环は正位で南部の床面から、2の壺は横位で竈前の覆土下層から、3の皿は竈内から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。



第151図 第547号住居跡・出土遺物実測図

第547号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎上・色調・流域	備考
第151図 1	壺	A 11.5 B 3.7 C 7.0	平底。体部は内骨氣味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英・赤色 粒子 褐色 普通	P7098 P.L70 南部床面
2	甕	A [22.4] B (15.3)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内側して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り後ナデ。内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・辰石・ 石英 明赤褐色 普通	P7099 20% 壁底面裏上下層
3	皿	B ( 6.0) C 7.2	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後ヘラナデ。 底部内・外面ロクロナデ。	砂粒・赤色粒子 褐色 普通	P7100 30% 窓内
	土師器					

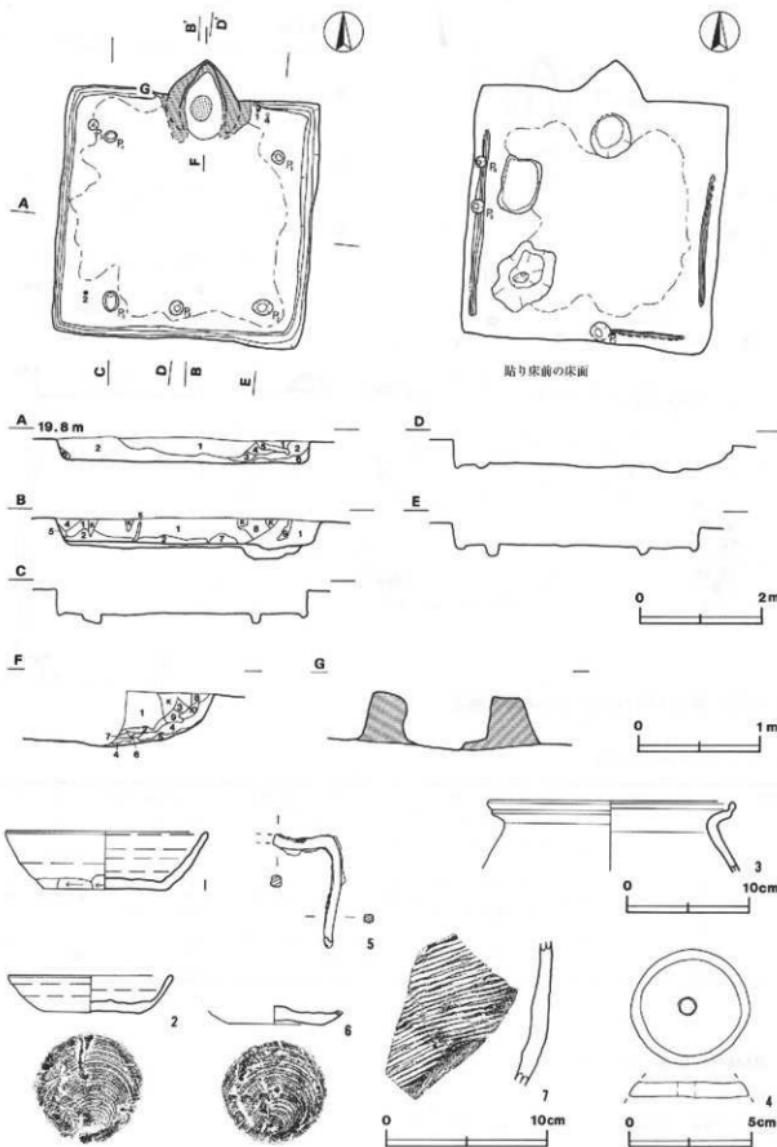
第548号住居跡（第152図）

位置 調査7区中央部, N11a区。

規模と平面形 長軸4.20m, 短軸4.15mの方形である。

主軸方向 N - 5° - E

壁 壁高は26~42cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第152図 第548号住居跡・出土遺物実測図

壁溝 全周している。上幅20~30cm、下幅7~10cm、深さ8~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。床面全体に厚さ8~10cmの貼り床をしている。貼り床を除去したところ、壁溝と思われる溝が東西壁下と南壁下東側半分に検出できた。また、出入り口施設に伴うピットと考えられるP<sub>7</sub>が南壁際で検出された。規模は、径30cmの円形で、深さ12cmである。西壁際のP<sub>8</sub>とP<sub>9</sub>は性格は不明である。全体的に踏み固められたように硬化しているため、貼り床する以前の床面の可能性がある。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで120cm、両袖部幅120cmである。第5層の下面が焼土ブロックでゴツゴツしているため、火床部になると考えられる。火床部は、床面を約9cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第9層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 遺土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	6 暗赤褐色	焼土大・中ブロック多量
2 黒褐色	砂粒多量、焼土中ブロック・焼土粒子少量	7 暗赤褐色	焼土大・中ブロック多量、炭化物少量
3 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	8 ぶい褐色	砂粒多量、焼土粒子少量
		9 焼土ブロック	
4 暗赤褐色	焼土粒子多量	10 灰褐色	焼土大・中ブロック・焼土粒子・砂粒多量、硬い
5 暗赤褐色	焼土ブロック・焼土・炭化粒子多量		

ピット 6か所(P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径20~30cmの円形で、深さ14~20cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。P<sub>4</sub>の北側にあるP<sub>5</sub>は径18cmの円形で、深さ13cmであり、位置的に補助柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>6</sub>は径20cmの円形で、深さ9cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ローム中ブロック・焼土粒子少量
	子微量	7 明褐色	ローム小ブロック・粒子中量、炭化粒子微量
2 褐色	ローム小ブロック多量	8 暗褐色	ローム大ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
3 極暗褐色	ローム小ブロック・褐色土少量、軟らかい	9 褐色	ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子少量
4 褐色	ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量		
5 褐色	ローム小ブロック・焼土粒子少量、硬い		

遺物 土師器片214点、須恵器片53点、石製品(紡錘車)1点、不明鉄製品1点、陶器片1点、礫1点が出土している。第152図1の須恵器杯は逆位で竈東側の覆土下層から、2の土師器皿は南西コーナー部の覆土中層から、3の土師器甕は南西部の覆土上層から、4の鋸鉋車は竈東側の覆土中層から、5の不明鉄製品は覆土中から出土している。6の土師器皿底部片は、回転糸切り痕が認められる。7の須恵器甕部片には、外面に横位の平行叩きが施されている。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。貼り床する以前の床面やピット、壁溝などが検出されたことから判断して、住居の建て替えが行われたものと考えられる。

第548号住居跡出土遺物観察表

面版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1 須恵器	壺	A [12.6] B 3.6 C 7.6	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外 面下端手持ちヘラ削り。体部か ら口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P7101 40% 竈東側覆土下層
	皿	A 10.2 B 2.3 C 6.0	体部から口縁部一部欠損。平底。 体部から口縁部は外傾して立ち 上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁 部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P7102 70% 南西コーナー部覆 土中層
	土師器					

図版番号	器種	片側幅 (cm)	器形の特徴		手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 3	甕 土器	A (20.0) B (5.2)	口縁部片。頭部でくびれ、口唇部は上方につまみ上げる。		口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P7103 5% 南西部覆土上層
図版番号	種別	計測値			出土地点	備考	
4	統計率	長さ (cm) (48)	厚さ (cm) (0.6)	孔径 (cm) 0.7	重量 (g) (18.0)	鹿東側複土中層	Q7002 ホルンフェルス PL102
図版番号	種別	計測値			出土地点	備考	
5	不明鉄製品	長さ (cm) (6.9)	幅 (cm) -	厚さ (cm) 0.5 ~ 0.7	重量 (g) (14.0)	覆土中	M7006

#### 第549号住居跡（第153図）

位置 調査7区中央部、N11a区。

規模と平面形 長軸4.20m、短軸3.96mの方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 壁高は4~10cmである。

壁溝 北壁下を除いて確認された。上幅約20cm、下幅6~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。北東コーナーに長径80cm、短径60cmの梢円形で、深さ30cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

竈 2か所。竈1は北壁の西側に、竈2は北壁中央部に砂質粘土で構築されている。竈1の規模は、焚口部から煙道部まで60cm、両袖部幅100cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変しているあまり硬化していない。竈2の規模は、焚口部から煙道部まで60cm、両袖部幅100cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。いずれも遺存状態は悪い。火床部の赤変硬化状況から判断して、竈2の方が長期間使用されたと考えられる。

ピット 南壁際にあるP1は長径60cm、短径20cmの梢円形で、深さ29cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層からなる。覆土が薄いため、堆積状況は確認できなかった。

##### 土層解説

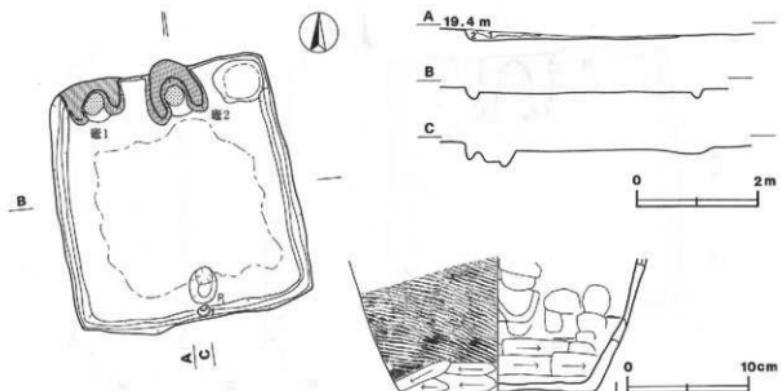
- 1 黒褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
- 2 細褐色 燃土粒子・炭化粒子多量

遺物 土師器片75点、須恵器片21点、礫6点が出土している。第153図1の須恵器鉢は南側壁溝の中央部から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。

#### 第549号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	片側幅 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 1	鉢 須恵器	B (110) C (158)	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラナデ。体部外面下傾ヘラ削り。外面斜面の平行叩き。 内面ヘラナデ後指揮押圧。垂積み底。	砂粒・雲母・石英 灰色 普通	P7104 20% PL70 南壁溝中央部



第153図 第549号住居跡・出土遺物実測図

#### 第551号住居跡（第154図）

位置 調査7区西部、M10a<sub>4</sub>区。

規模と平面形 長軸3.55m、短軸3.25mの方形である。

主軸方向 N - 0°

壁 壁高は33～40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下の一部が搅乱を受けているため確認できなかったが、全周していたと推定される。上幅約20cm、下幅4～10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央から西側が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部はトレンチャーによる搅乱を受けているため、遺存状態が悪い。規模は焚口部から煙道部まで90cm、肉袖部幅80cmと推定される。第6層は焼土ブロックがゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2層と第4層が崩落土と考えられる。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 遺土層解説

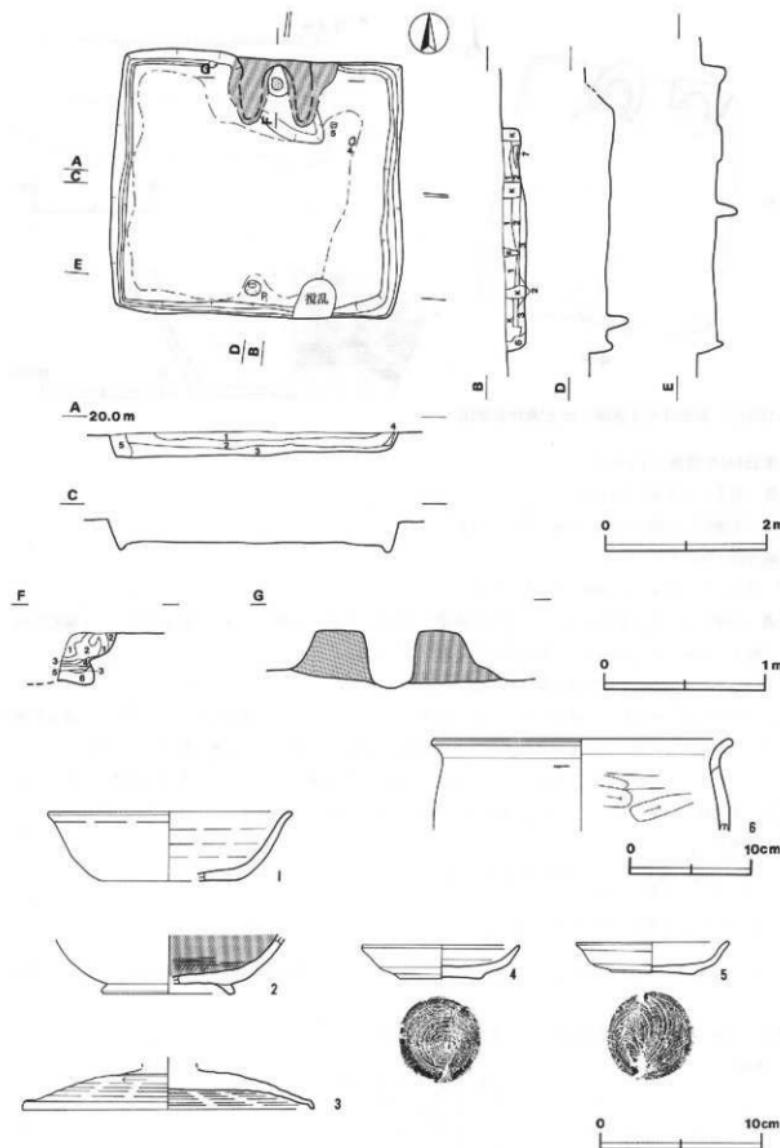
- |   |       |   |                     |                             |
|---|-------|---|---------------------|-----------------------------|
| 1 | 褐     | 色 | 地上中ブロック・焼土粒子少量      |                             |
| 2 | にじ・黄緑 | 色 | 地土中ブロック・焼土粒子多量、砂粒中量 |                             |
| 3 | 赤     | 褐 | 色                   | 暗褐色土多量                      |
| 4 | 砂質    | 粘 | 土層                  |                             |
| 5 | 明     | 赤 | 褐色                  | 暗褐色土中量、焼土粒子少量               |
| 6 | 暗     | 赤 | 褐色                  | 焼土ブロック・焼土粒子多量、砂粒中量、ゴツゴツしている |

ピット 南壁際にあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ28cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- |   |    |    |    |                                |
|---|----|----|----|--------------------------------|
| 1 | 暗  | 褐  | 色  | ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 2 | 黒  | 褐  | 色  | ローム大・中ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量   |
| 3 | 暗  | 赤  | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量          |
| 4 | にじ | ・赤 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子少量        |
| 5 | 暗  | 褐  | 色  | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量          |
| 6 | 暗  | 褐  | 色  | ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 7 | 黒  | 褐  | 色  | ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量          |



第154図 第551号住居跡・出土遺物実測図

**遺物** 土師器片128点、須恵器片13点、陶器片3点、礫6点が出土している。第154図1の土師器杯、2の土師器高台付杯、3の須恵器蓋、6の土師器甕は竈内から、4と5の土師器皿は竈前東側の覆土下層から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。

第551号住居跡出土遺跡観察表

既版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 1	杯	A [150] B 43 C [86]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内唇気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転糸切り。体部から口縁部ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7108 25% 竈内
	高台付杯	B (36) D [82] E 05	高台部から体部にかけての破片。平底。 高台は深く「U」の字状に開く。 体部は内唇気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部外腹ナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7109 30% 竈内
	土師器	A 18.0 B (25)	つまみ、口縁部・部欠損。天井部は笠形である。口縁部は下方に短く屈曲する。	天井部外腹上半回転ヘラ削り、F半・内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 灰白色 普通	P 7110 60% 竈内
4	壺	A 97 B 21 C 52	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内唇気味に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外腹ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P 7111 90% P L 70 竈内東側覆土下層
	土師器	A 95 B 20 C 50	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内唇気味に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外腹ロクロナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 7112 70% P L 70 竈内東側覆土下層
	甕	A [244] B (75)	体部と位から口縁部にかけての破片。頭部でくびれ。口縁部は外反する。	体部外腹ナデ、内面ヘラナデ。口縁部内・外腹横ナデ。輪模み質。	砂粒・雲母・石英・ 小石 にぶい赤褐色 普通	P 7113 5% 竈内
6	土師器					

### 第552号住居跡（第155図）

**位置** 調査7区西部、N11a区。

**重複関係** 東壁際が第342号土坑、南東コーナー部が第570号住居跡に掘り込まれている。第570号住居跡の掘り込みは床面まで達していない。

**規模と平面形** 長軸3.78m、短軸3.70mの方形である。

**主軸方向** N - 0°

**壁** 壁高は27~30cmで、外傾して立ち上がる。

**壁溝** 第342号土坑と重複している部分は確認できなかった。西壁下から南壁下と東壁下の一部にかけて確認されている。上幅約20cm、下幅4~6cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

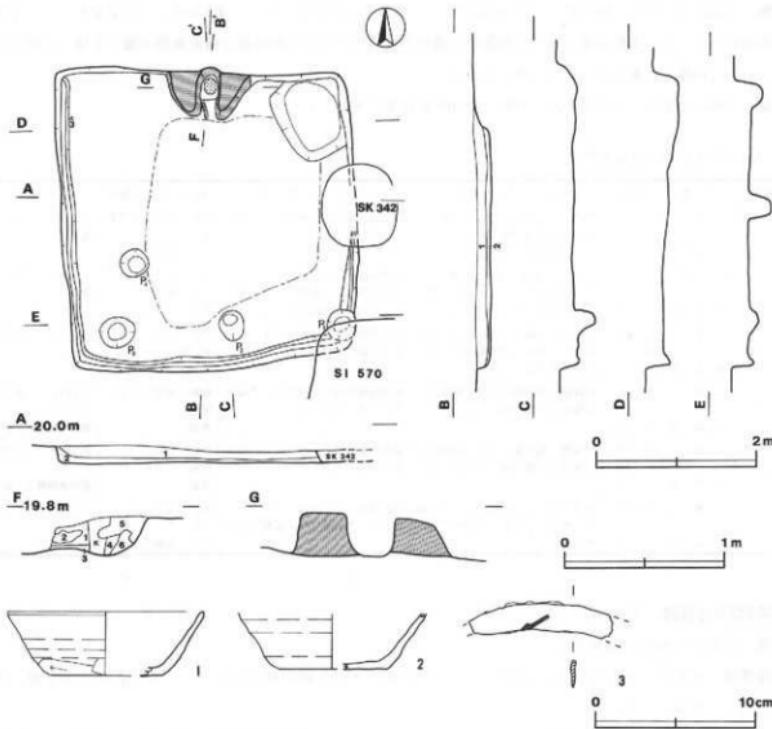
**床** ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。北東コーナーに長径100cm、短径80cmの梢円形で、深さ20cm程の掘り込みが確認されている。覆土から灰が多量に出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

**竈** 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで50cm、両袖部幅90cmである。第6層の下部が焼土ブロックでゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。袖部は良好に遺存している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

#### 竈土層解説

- |   |        |                     |
|---|--------|---------------------|
| 1 | 暗褐色    | 燒土中ブロック・燒土粒子少量      |
| 2 | 暗褐色    | 燒土中ブロック・燒土粒子・炭化粒子中量 |
| 3 | にぶい赤褐色 | 炭化粒子多量              |

- |   |      |                 |
|---|------|-----------------|
| 4 | 暗赤褐色 | 暗褐色土中量、燒土粒子少量   |
| 5 | 暗褐色  | 燒土粒子多量、粘土中量     |
| 6 | 赤褐色  | 燒土粒子多量、ゴツゴツしている |



第155図 第552号住居跡・出土遺物実測図

ピット 4か所 ( $P_1 \sim P_4$ )。 $P_1$ と $P_3$ は共に径30cmの円形で、深さ14cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にある $P_2$ は径30cmの円形で、深さ26cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。南西部にある $P_4$ は径約38cmの円形で、深さ17cmである。性格は不明である。

覆土 2層からなる。

土層解説

- 1 淡褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、軟らかい
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量、軟らかい

遺物 土師器片110点、須恵器片41点、鉄製品(鎌)1点、陶器片1点、礫1点、炭化材が出土している。第155図1と2の須恵器片は南東部の覆土下層から、3の鎌は北西コーナー壁際の床面から出土している。竈の焚口部から炭化材が出土している。竈で燃やした燃え差しと思われる。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀と考えられる。重複している第570号住居跡、第342号土坑より古い。

第552号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第155図 1 須恵器	壺	A [122] B 40 C [70]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 黄灰色 普通	P 7114 20% 南京層覆土下層
	壺	B [35] C [66]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 開灰色 普通	P 7115 5% 南東部覆土上層
	須恵器					
図版番号	種別	計画値			出土地點	備考
3	壺	長さ(cm) (9.0)	幅(cm) 2.4	厚さ(cm) 0.3	重量(g) (9.50)	北西コーナー壁際床面 M 7007 P L 70

第554号住居跡（第156・157図）

位置 調査7区西部、N11c区。

重複関係 南壁を第555号住居跡の窓に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [2.7]m、短軸2.48mの方形と推定される。

主軸方向 N-2°-E

壁 第555号住居跡の窓に掘り込まれている南壁は確認できなかった。壁高は約23cmで、外傾して立ち上がる。

盤溝 東西壁下に確認できた。上幅約14cm、下幅4~8cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、窓口部から煙道部まで40cm、両袖部幅90cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

## 竈層解説

- 1 明褐色 砂粒多量
- 2 明赤褐色 焼土中ブロック中量
- 3 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量
- 4 増褐色 烧色土多量、焼土中ブロック・焼土粒子中量

ピット 南壁際にあるP<sub>1</sub>は径30cmの円形で、深さ21cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

## 土層解説

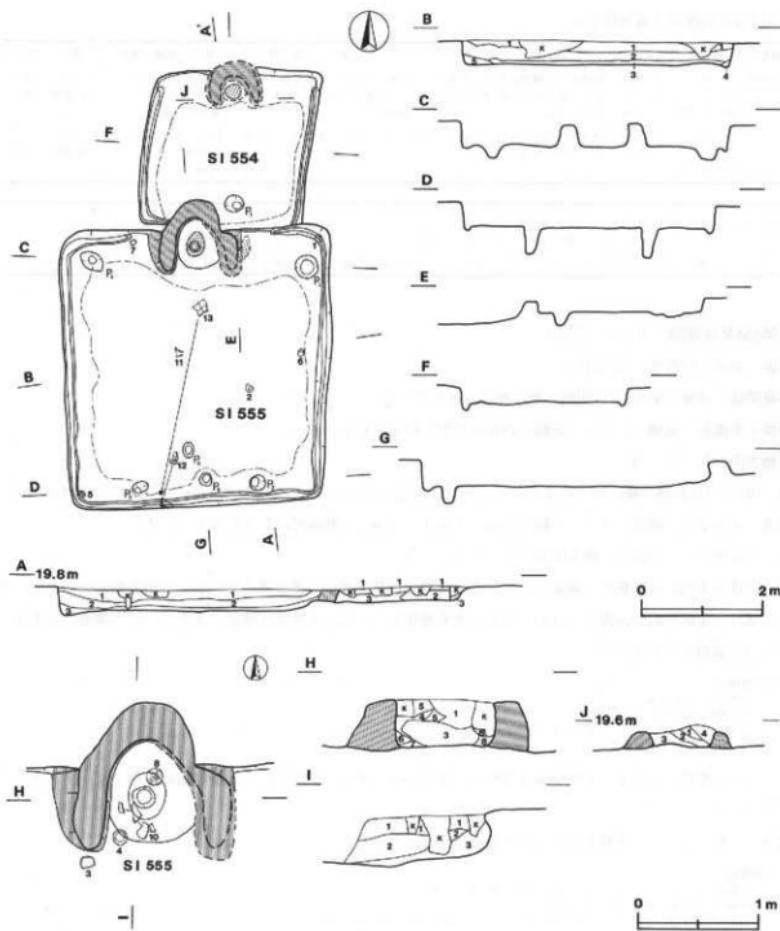
- 1 増褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 増褐色 焼土粒子多量、粘土粒子中量
- 3 増褐色 焼土粒子多量、ローム大・中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量

遺物 土師器片44点、須恵器片5点が出土している。第157図1の須恵器片は北東部の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀と考えられる。重複している第555号住居跡より古い。

第554号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 1 須恵器	壺	B [31] C [88]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 7122 10% 北東部覆土中
	須恵器					



第156図 第554・555号住居跡実測図



第157図 第554号住居跡出土遺物実測図

### 第555号住居跡（第156・158・159図）

位置 調査7区西部、N11ds区。

重複関係 本跡の竈が第554号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.65m、短軸4.45mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は約45cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅10~20cm、下幅4~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅140cmである。

第3層の下部が焼土ブロックでゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は赤変硬化し、その中に支脚を置いたと思われる落ち込みが検出された。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土師器片や須恵器片が出土している。

#### 竈土層解説

- |   |     |      |   |                         |
|---|-----|------|---|-------------------------|
| 1 | 暗   | 褐    | 色 | 燒土中ブロック・砂粒多量            |
| 2 | 暗   | 褐    | 色 | 燒土中ブロック・燒土粒子中量          |
| 3 | 明   | 赤    | 褐 | 燒土中ブロック・燒土粒子・炭化粒子多量     |
| 4 | 灰   | 灰    | 色 | 高土多量、燒土中ブロック・燒土粒子中量     |
| 5 | 褐   | 灰    | 色 | 燒土中ブロック・燒土粒子多量、サラサラしている |
| 6 | 褐   | 灰    | 色 | 燒土中ブロック中量               |
| 7 | ローム | ブロック |   |                         |
| 8 | 暗   | 赤    | 褐 | 燒土中ブロック・燒土粒子多量          |

ピット 6か所 ( $P_1 \sim P_6$ )。 $P_1 \sim P_4$ は径20~40cmの円形で、深さ25~50cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にある $P_5$ は径20cmの円形で、深さ28cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。 $P_5$ の北部に位置する $P_6$ は、径20cmの円形で、深さ100cmとかなり深い。性格は不明である。

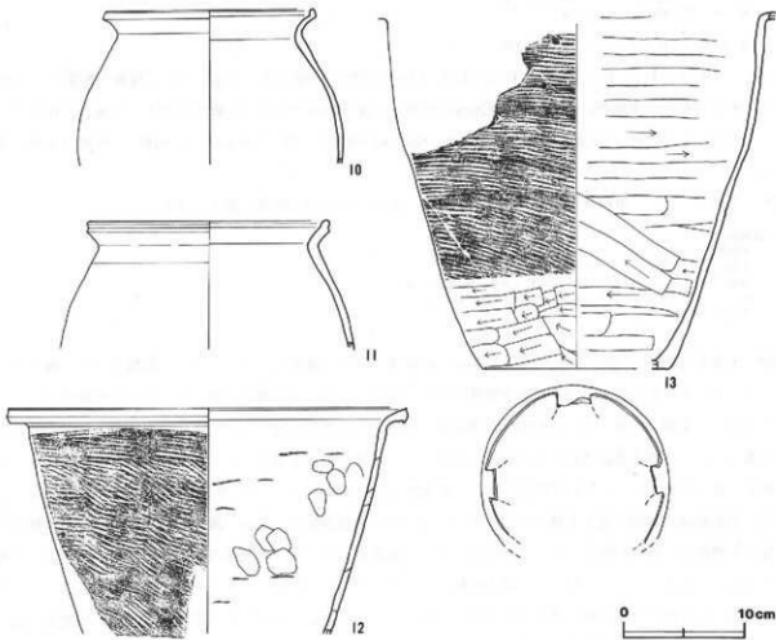
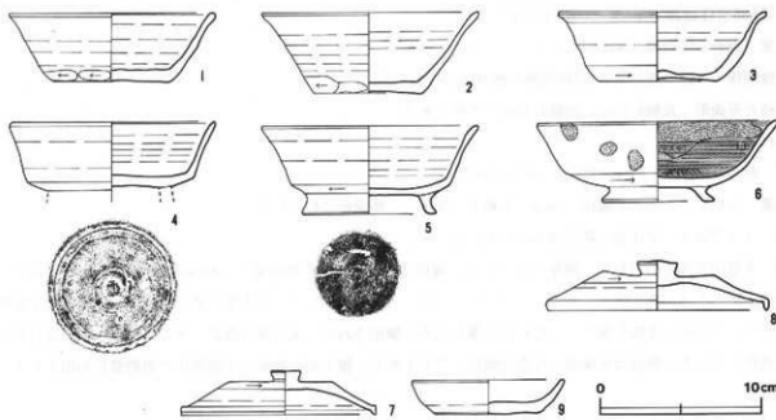
覆土 5層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。第4層は壁溝の覆土である。

#### 土層解説

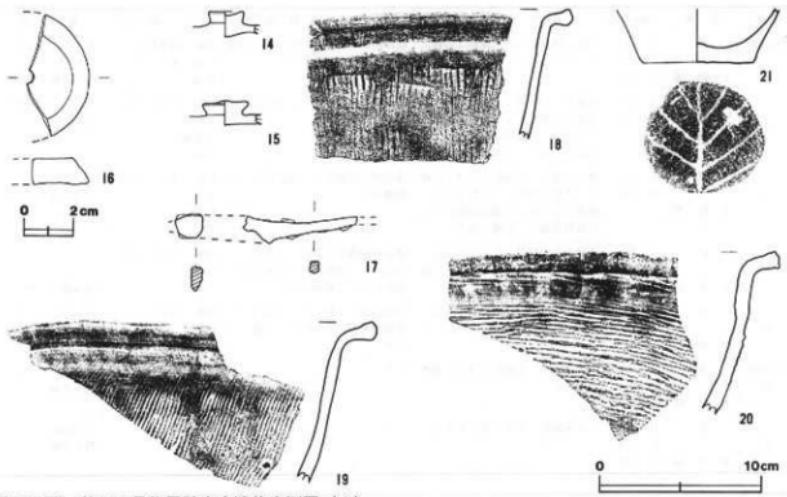
- |   |     |                           |                          |
|---|-----|---------------------------|--------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、燒土粒子少量   |                          |
| 2 | 黒褐色 | ローム小ブロック・燒土粒子中量           |                          |
| 3 | 暗褐色 | ローム大・中ブロック・ローム粒子中量、燒土粒子少量 |                          |
| 4 | 褐   | 色                         | ローム粒子・燒土粒子多量、粘土粒子中量、軟らかい |
| 5 | 黒褐色 | 燒土粒子少量                    |                          |

遺物 土師器片498点、須恵器片262点、石製品（紡錘車）1点、鐵製品（刀子）1点、陶器片4点、礫5点が出土している。第158・159図1の須恵器片は正位で北東コーナー部の覆土下層から、2の須恵器片は正位で中央部から東側の床面、3の須恵器片は竈袖部の南側、4の須恵器高台付片、8の須恵器蓋、10の土師器壺は竈内から、5の須恵器高台付片は正位で南西コーナー部の覆土下層から、6の土師器高台付片は正位で東壁際の覆土下層から、7の須恵器蓋は逆位で竈西側の覆土中層から、11の土師器壺は中央部の覆土中層から、12の須恵器鉢は南側の覆土下層から出土している。13の須恵器片は、竈前の覆土下層出土の破片と南壁際の覆土下層出土の破片が接合したものである。9の土師器皿、14と15の須恵器蓋、16の紡錘車、17の刀子は覆土中層から出土している。18と19の須恵器片の口縁部片は、外側に縦位の平行叩きが施されている。20の須恵器片の口縁部片は、外側に横位の平行叩きが施されている。21の土師器壺底部片は、底部に木葉痕が認められる。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第554号住居跡より新しい。



第158図 第555号住居跡出土遺物実測図（1）



第159図 第555号住居跡出土遺物実測図(2)

第555号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第158図 1	壺	A 128 B 43 C 72	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	P 7123 100% P L 70 北東コーナー面覆上下層
	壺	A 135 B 50 C 66	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 褐色 普通	P 7124 75% P L 70 中央部東側裏床面
	頬窓器					
2	壺	A [128] B 43 C 73	口縁部一部欠損。平底。体部は内凹気味に外傾し、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黃褐色 普通	P 7125 70% P L 70 竈袖部南側
	高台付壺	A 121 B (40)	高台部欠損。平底。体部から口縫部は外反気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部外面下端回転ヘラ削り。体部から口縫部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 小石 灰色 普通	P 7126 80% P L 70 竈内
	頬窓器					
3	高台付壺	A [134] B 55 C 82 D 15	体部から口縫部にかけて一部欠損。平底。高台は「八」の字状に開く。体部は内凹気味に立ち上がり、口縫部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台取り付け後ナデ。体部外面下端回転ヘラ削り。体部から口縫部内・外面部ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7127 60% P L 70 南西コーナー一部 覆土下層
	土師器	A [148] B 50 C 69 D 69 E 09	体部から口縫部にかけて一部欠損。高台は「八」の字状に開く。体部は内凹気味に立ち上がり、口縫部は笠形である。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台取り付け後ナデ。体部外面下端回転ヘラ削り。体部から口縫部内・外面部ロクロナデ。	砂粒・長石・赤色 粒子 褐色 普通	P 7160 40% P L 70 東壁際斜面上下層 I層部外表面燒接付着
	蓋	A 121 B 27 F 18 G 07	ギターン状のつまみが付く。天井部は笠形である。口縫部は下方に短く屈曲し、外面上部が突出する。	天井部外面上半回転ヘラ削り、下半・内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 灰色 普通	P 7128 100% P L 71 竈西側裏土中層
	頬窓器	A [135] B 32 F 27 G 11	口縫部一部欠損。ボタン状のつまみが付く。天井部は笠形である。口縫部は下方に短く屈曲する。	天井部外面上半回転ヘラ削り、下半・内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 灰褐色 普通	P 7129 70% P L 71 竈内

器物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第158回 9	皿	A 84 B 21 C 64	平底。体部からの口縁部は内壁気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部から口縁部内・外面クロコナダ。	砂粒・赤色粒子 にぼい橙色 普通	P 7130 100% P L 71 覆土中層
	甕	A [176] B (126)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内側で立ち上がる。腹部でくびれ、口縁部は外反する。 口唇部は上方につまみ上げる。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 小石 明赤褐色 普通	P 7131 20% 覆土内
	土器	A [200] B (104)	体部上部から口縁部にかけての破片。 体部は内側で立ち上がる。 腹部でくびれ、口縁部は外反する。 口唇部外面直下に後が嵩る。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P 7132 10% 中央部覆土中層
11	甕	A [328]	体部から口縁部にかけての破片。	体部外側面横位と新位の平行叩き。	砂粒・雲母・石英	P 7133 10%
	須恵器	B (185)	体部は外傾して立ち上がり、口縁部は屈曲する。	内面ナデ、滑頭押圧。口縁部内・外面横ナデ。輪積み表。	灰色 普通	P L 71 南側覆土上下層
12	鉢	A [328]	体部から口縁部にかけての破片。	体部外側面横位と新位の平行叩き。	砂粒・雲母・石英	P 7134 30%
	須恵器	B (292)	底部・体部から口縁部一部欠損。 多孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外側下位横位のヘラ割り。体部外側面横位の平行叩き。内面ヘラナデ。	灰色 普通	P L 71 覆土下層
	甕	C 154				
第159回 14	蓋	B (16)	つまみ部片。上面がくぼみ、環状を呈する。	ナデ。	砂粒・雲母 暗青灰色 普通	P 7135 5% 覆土中層
	須恵器	F 21				
	蓋	G 69				
15	甕	B (15) F 28 G 69	つまみ部片。ボタン状を呈する。	ナデ。	砂粒・雲母 黄灰色 普通	P 7136 5% 覆土中層

器物番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
16	筋錐車	[ 5.2 ]	12	-	(140)	覆土中層	D P 7035 P L 102

器物番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
17	刀子	( 8.7 )	18	0.6~0.7	(140)	覆土中層	M 7008

### 第557号住居跡(第136・137・160回)

位置 調査7区中央部, M11a区。

重複関係 東部で第558号住居跡を掘り込み、北部が第539B号住居跡に掘り込まれている。第539B号住居跡の掘り込みは床面までは達していない。

規模と平面形 長軸3.90m, 短軸3.85mの方形である。

主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は55~60cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁中央部に搅乱を受けており、一部確認できないが、全周していたと推定される。上幅10~27cm, 下幅4~10cm, 深さ7~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的によく踏み固められている。南東コーナー部に粘土ブロックが確認できた。性格は不明である。

竈 東壁のやや南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm, 両袖部幅110cmである。第4層の下面が赤変硬化しゴツゴツしているため、火床部と考えられる。火床部は床面を約10cm掘りくぼめている。天井部は崩落しており、第3層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化しゴツゴツしている。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。火床部から出土した高杯の脚部は支脚に転用されていた。

## 竪土層解説

- 1 黒赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、砂粒少量
- 2 赤褐色 焼土粒子多量
- 3 男裸灰褐色 烧土粒子多量
- 4 明赤褐色 烧土ブロック多量、ゴツゴツしている

**ピット** 4か所 ( $P_1 \sim P_4$ )。 $P_1$ から $P_3$ は径30~40cmの円形で、深さ15~20cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にある $P_4$ は径20cmの円形で、深さ26cmであり、南向き斜めに掘り込まれており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 5層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

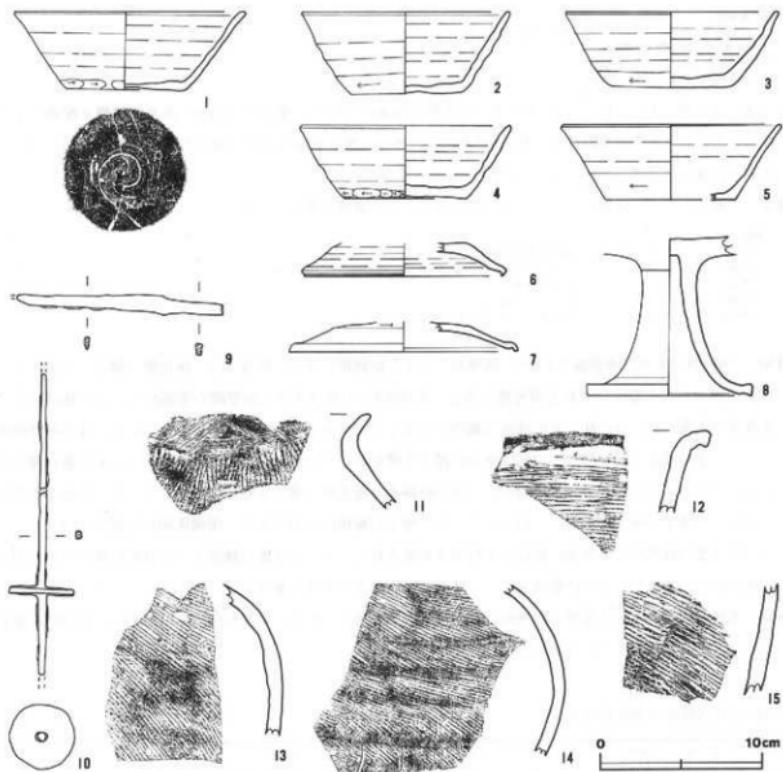
- 1 褐色 ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、軟らかい
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 黑褐色 烧土粒子中量、ローム小ブロック少量
- 5 黑褐色 ローム中・小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

**遺物** 土器器片399点、須恵器片156点、鉄製品（刀子、紡錘車）2点、鉄滓1点、炭化物（種子）が出土している。図示した土器はいずれも須恵器である。第160回1の杯は正位で南壁際の床面から、2の杯は正位で北西部の床面から、3の杯、8の高杯は窓内から出土している。8は支脚に転用されている。4の杯は南西コーナー部の覆土下層から、5の杯は南部の覆土中層から、7の蓋は北部の覆土中層から、6の蓋は覆土中から、9の刀子は北西部の覆土下層から、10の紡錘車は窓北側の覆土下層から出土している。床面中央部から炭化した種子が焼土に混じって出土している。種子の種類は不明である。南側床面から鉄滓が出土している。11は甕口縁部片で、外面に縱位の平行叩きが施されている。12は甕口縁部片で、外面に横位の平行叩きが施されている。13から15は甕底部片で、外面に斜位の平行叩きが施されている。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。重複している第558号住居跡より新しい。

第557号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計量(m)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	竪土・色調・焼成	備 考
第160回 1	杯	A 143 B 50 C 74	平底。体部からの口縁部は外傾して立ち上がる。	底部羽根状ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	P 7137 100% P L 71 南壁際床面
	杯	A 128 B 50 C 68	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい黄褐色 普通	P 7138 90% P L 71 北西部床面
	須恵器	A 132 B 47 C 74	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい黄褐色 普通	P 7139 90% P L 71 窓内
2	杯	A [128] B 45 C 74	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 灰黄色 普通	P 7140 90% 南西コーナー部 覆土下層
	須恵器	A [134] B 47 C 80	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・石英 灰色 普通	P 7141 40% P L 71 南部覆土中層
	蓋	A [124] B (21)	天井部から口縁部にかけての破片。口縁部は下方に短く屈曲し、外面上部が突出する。	天井部外面上半圓軸ヘラ削り、下半・内面クロナダ。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	P 7142 20% 覆土中
7	蓋	A [142] B (19)	天井部から口縁部にかけての破片。口縁部は下方に短く屈曲する。	天井部外面上半圓軸ヘラ削り、下半・内面クロナダ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7143 10% 北部覆土中層
	須恵器					



第160図 第557号住居跡出土遺物実測図



第161図 第558号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 8	高環 須恵器	B (98) D 102 E 85	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・石英 灰色 普通	P 7144 40% P L 71 二次焼成 蓋内

図版番号	種別	計測値				出土地點	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
9	刀子	(129)	1.3	0.3-0.4	(120)	西北部櫻下層	M 7009 P L 71
10	紡錘車	径 4.1	孔径 0.7	0.5	28.0	竈北側櫻下層	M 7010 (後) 径 0.7 厚さ 0.5, 長さ 18cm P L 71

### 第558号住居跡（第136・137・161図）

位置 調査7区中央部、M11f区。

重複関係 西部が第535・557号住居跡、第18号井戸に掘り込まれている。

規模と平面形 撮影がはなはだしいため、平面形は推定できなかった。規模は、南北4.80m、東西(2.0)mである。

主軸方向 N-68°-E

壁 南壁から東壁にかけて確認できた。壁高は約30cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下から東壁下にかけて確認できた。上幅20cm、下幅7cm、深さ7~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 床前の踏み固められた部分だけが残存している。

竈 東壁のやや南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで120cm、両袖部幅100cmである。第4層の下部が赤変化してゴツゴツしているため、火床部と考えられる。天井部の大部分は崩落しているが、一部遺存している。第2層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変化しゴツゴツしている。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 覆土層解説

- 1 黄色 ローム粒子・焼土粒子中量、砂粒少量
- 2 黄色 砂粒・粘土ブロック多量、褐色土中量、焼土粒子少量
- 3 にじい褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 4 赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子多量、ゴクゴクしている

ピット 南東コーナーにあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ28cmである。位置的に主柱穴と考えられる。

覆土 3層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土器層解説

- 1 褐色 ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 浅褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、軟らかい
- 3 黄色 ローム粒子少量、軟らかい

遺物 土器片71点、須恵器片21点、躰3点が出土している。第161図1の須恵器は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。重複している第535・

557号住居跡、第18号井戸より古い。

### 第558号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161図 I	壺	A [120] B 40 C [65]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持 ちヘラ削り。体部内・外面ロクロ ナデ。	砂粒・雲母・石英 灰色 普通	P 7145 10% 覆土中

### 第560号住居跡（第162図）

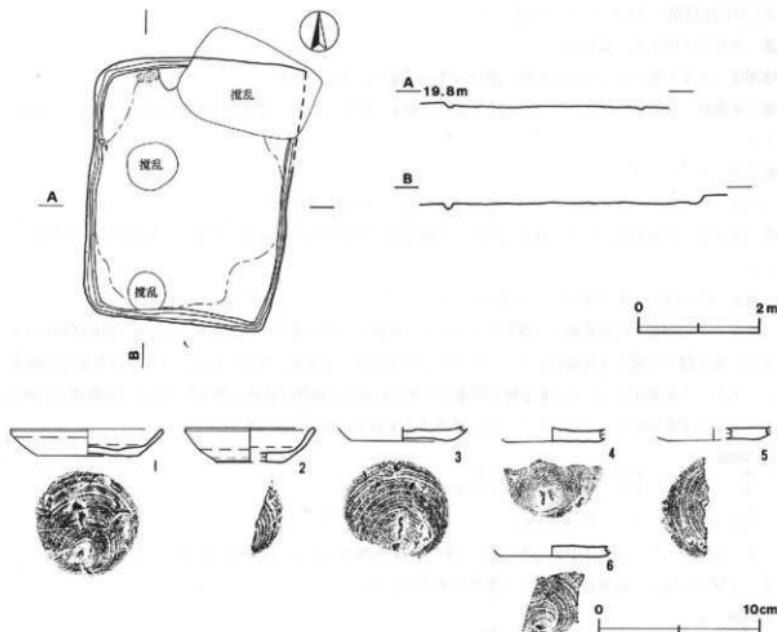
位置 調査7区西部、N10f区。

規模と平面形 長軸4.30m、短軸3.40mの長方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁溝 北東コーナー部は撮影を受けているため確認できなかったが、全局していたと推定される。上幅約20cm、下幅4~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、踏み固められている。



第162図 第560号住居跡・出土遺物実測図

竈 床面北側にゴツゴツした赤変硬化部分が検出できたため、火床部の可能性がある。

遺物 土師器片142点、須恵器片3点が出土している。図示した土器はいずれも土器である。第162図1の皿は北西部の壁溝内から、2の皿は遺構確認面から出土している。3から6は土師器皿底部片で、いずれも底部回転糸切りである。

所見 本跡では壁とピットが確認できなかったため、壁溝から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。

第560号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図 1	皿	A 94 B 17 C 63	平底。体部から口縁部は内厚気味に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 7158 100% P L 72 北西部壁溝
	土師器					
2	皿	A [ 80 ] B 21 C [ 40 ]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は内厚気味に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 7159 20% 遺構確認面
	土師器					

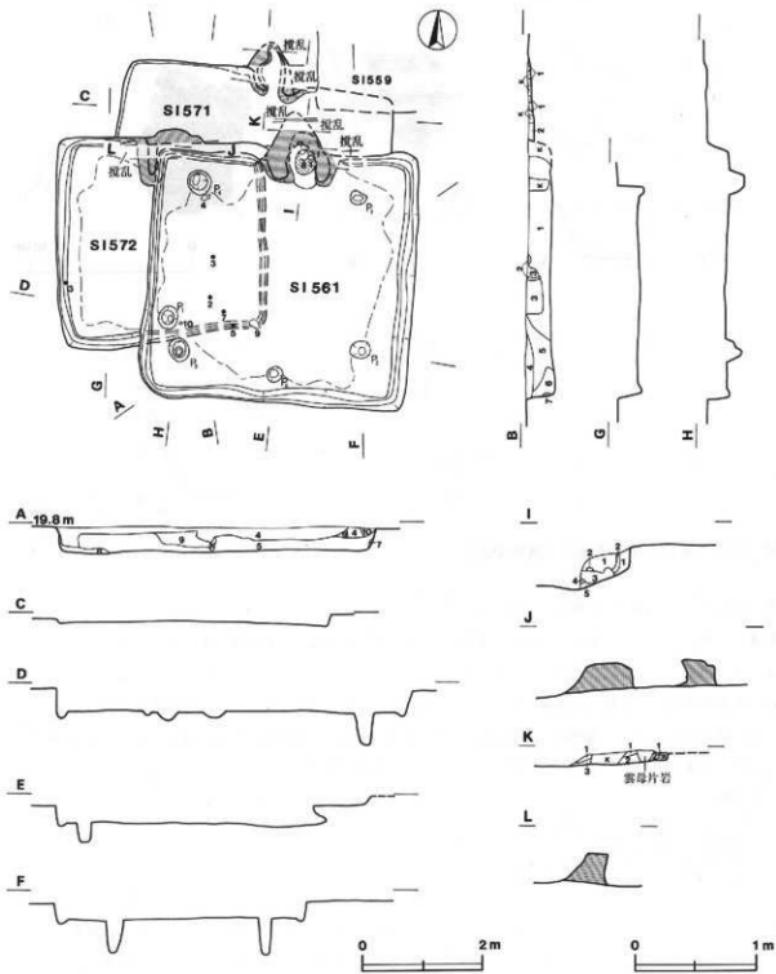
第561号住居跡（第163・164図）

位置 調査7区西部、N10es区。

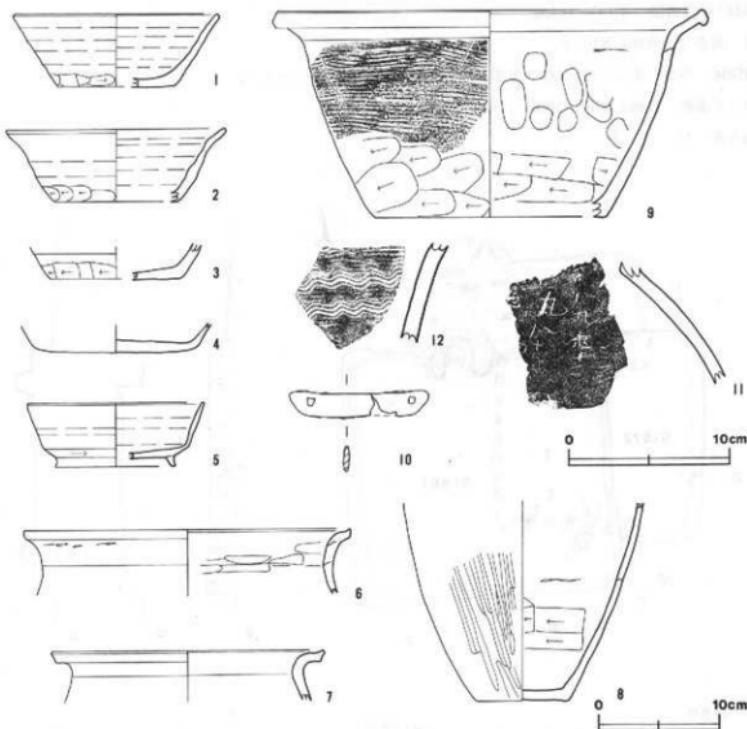
重複関係 西部が第572号住居跡、北部が第571号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.60m、短軸4.10mの長方形である。

主軸方向 N-4°-E



第163図 第561・571・572号住居跡実測図



第164図 第561号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は25~37cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅20~30cm、下幅10~17cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。煙道部の一部がトレンチャーによる搅乱を受けているため、袖部の遺存状態は悪い。規模は、焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅120cmと推定される。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。

#### 遺土層解説

- 1 にじい褐色 粘土大ブロック・燒土粒子少量
- 2 灰 赤 色 粘土ブロック・燒土粒子中量
- 3 純 褐 色 烧土粒子少量
- 4 純 褐 色 ルーム粒子・焼土粒子中量
- 5 純 赤 褐 色 烧土粒子・砂粒中量・燒土粒子少量

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径約30cmの円形で、深さ約50cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径24cmの円形で、深さ35cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり、各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。第3層から多量に土師器片が出土している。

#### 土層解説

- 1 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 ロームブロック
- 3 暗 褐 色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐 色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 5 褐 色 ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 2層と同じ
- 8 明 褐 色 ローム中・小ブロック多量
- 9 にい(黄褐色) 焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 10 明 褐 色 ローム中・小ブロック多量、暗褐色土中量

遺物 土師器片401点、須恵器片56点、鉄製品(手鎌)1点、鉄滓1点、礫2点が出土している。第164回の須恵器は西部の覆土下層から、4の須恵器は北西コーナー部の覆土下層から、5の須恵器高台付杯、7の土師器甕、9の須恵器鉢は南西部の床面から、1の須恵器、8の土師器甕は窓内から、3の須恵器、6の土師器甕は覆土中から、10の手鎌は南西コーナー部の覆土下層から出土している。造構確認面から出土した11は、須恵器甕部片で外面に掛け算九九「八九七十二、、九八十一」が刻書されている。当初「八九六十二」と書かれているが、後から「六」の上に「七」と改めた痕跡が認められる。さらに、恐らく「、」は「々」の意味と思われる。すなわち、「九、」と書くべきところを「、九」と誤ったものと考えられる。掛け算九九は焼成以前に刻書されたものである。12の須恵器甕部片は、外面に3条の櫛描波状文が施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。掛け算九九が刻書された須恵器片は、胎土から判断して在地の窯のものではなく搬入品と考えられる。この時代(奈良・平安時代)、掛け算九九を知っている者は、公家や官吏等教養人である。すなわち、掛け算九九が出土したことで、本跡は官吏等と何らかの関連があった可能性も考えられる。重複している第571・572号住居跡より新しい。

第561号住居跡出土遺物観察表

回取番号	器種	計測量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 須恵器	壺	A [28] B 45 C [72]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部のヘラ削り。体部外面下端手持 ちヘラ削り。体部から口縁部内・ 外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・石英 灰黃褐色 普通	P 7161 30% 窓内
	壺	A [28] B 45 C [72]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部は外反する。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持 ちヘラ削り。体部から口縁部内・ 外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・石英 灰黃褐色 普通	P 7162 10% 西側覆土下層
	壺	B (20) C [80]	底部から体部にかけての破片。平 底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持 ちヘラ削り。内面ロクロナヂ。	砂粒・雲母 灰色 普通	P 7163 10% 覆土中
4 須恵器	壺	B (18) C 100	底部。平底。	底部ヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P 7164 20% 北西コーナー部 甕土下層
	高台付壺	A [110] B 40 D [75] E 07	高台部から口縁部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。平底。 体部から口縁部は外傾して立ち上 がる。	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け 後ナヂ。体部外面下端回転ヘラ削 り。体部から口縁部内・外面ロク ロナヂ。	砂粒・長石 灰色 普通	P 7165 30% 南西部床面
6 土師器	甕	A [27] B (53)	口縁破片。断面でくびれ、口縁部 は外反する。口唇部は上方につま み上げる。	口縁部外面横ナヂ、内面ヘナナ テ後ナヂ。輪目模様。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 橙色 普通	P 7166 5% 覆土中
	甕	A [226] B (42)	口縁破片。断面でくびれ。口縁部 は大きく外反する。口唇部は上方 につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナヂ。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 橙色 普通	P 7167 5% 南西部床面

図版番号	器種	音響値(ms)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 8	甕	B [162] C 78	底部から全体にかけての破片。平底。体部は内側気味に立ち上がる。	底部ヘラナデ。体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。輪積み底。	砂粒・露母・長石・石英・赤色粒子 輪積み底。	P 7168 40% P L 72 竈内
	鉢	A [264] B 129 C [142]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部が外傾する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面下位ヘラ削り、上位横位の平行叩き。内面下位ヘラナデ、上位渦頭押圧。口縁部内・外面横ナデ。輪積み底。	砂粒・露母・長石・石英 黄褐色 普通	P 7169 20% 南西部床面
9	須恵器					
図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
10	手錠	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	M 7011 P L 72
		8.7	1.8	0.3	9.0	

### 第562号住居跡（第165・166図）

位置 調査7区南西部、N10W5区。

規模と平面形 長軸4.00m、短軸3.85mの方形である。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は25~36cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅10~20cm、下幅約5cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央から東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅110cmである。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。第1層は天井部と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

#### 竈土層解説

- |                                 |                    |
|---------------------------------|--------------------|
| 1 にいび緑色 砂質粘土が熱を受けて赤変硬化しゴツゴツしている | 4 離赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 2 離褐色 桃土粒子・炭化粒子少量               | 5 離赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量 |
| 3 赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量     |                    |

ピット 5か所（P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>）。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径20~40cmの円形で、深さ約30cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径24cmの円形で、深さ28cmであり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

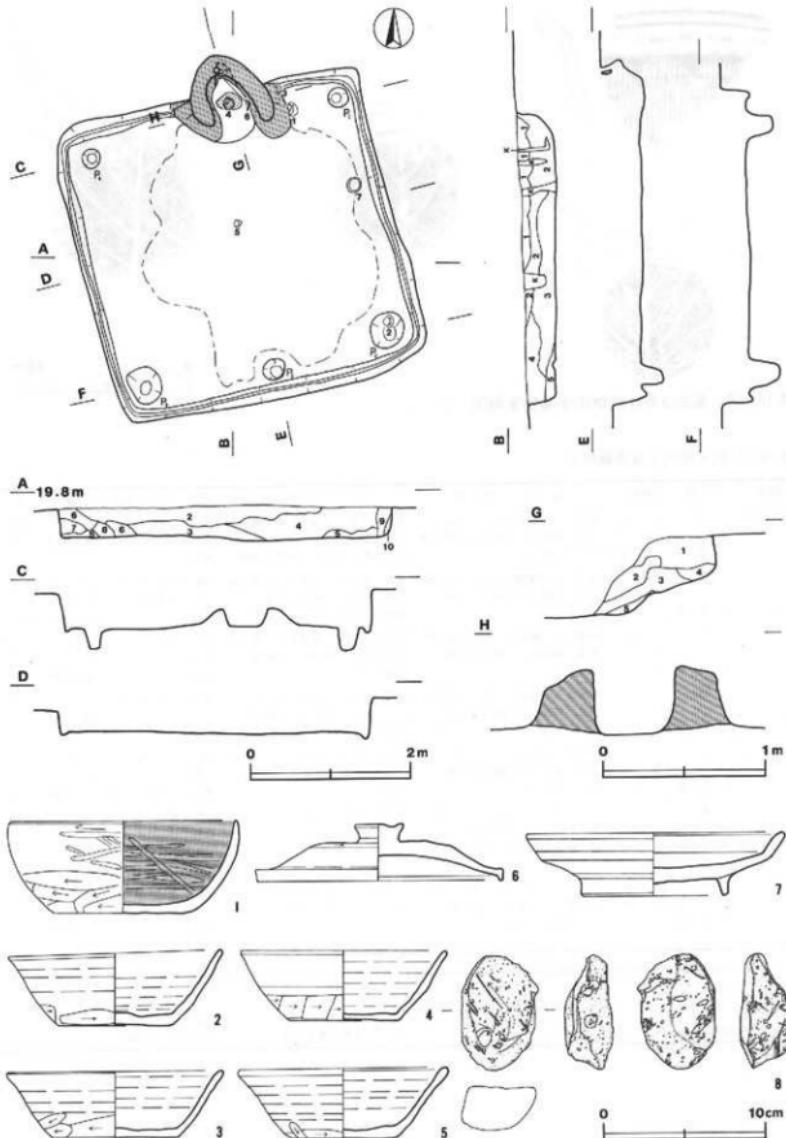
覆土 10層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

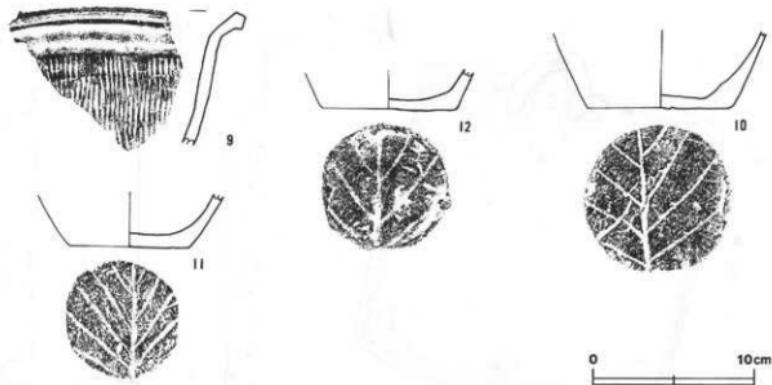
- |                                    |                            |
|------------------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量        |
| 2 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量      | 7 明褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量  |
| 3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量           | 8 黒褐色 焼土粒子少量               |
| 4 赤褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量      | 9 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量       |
| 5 黑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量               | 10 黒褐色 ローム中・小ブロック多量、焼土粒子少量 |

遺物 土師器片204点、須恵器片52点、石製品（砥石）1点、礫3点が出土している。第165・166図1の土師器杯は逆位で、3の須恵器杯は正位で竈東側の覆土下層から、2の須恵器杯は正位で南東コーナー部の床面から、4の須恵器杯、6の須恵器蓋は竈内から、5の須恵器杯は中央部の覆土中層から、7の須恵器盤は正位で東壁際の床面から、8の砥石は北西部の覆土中層から出土している。9の須恵器瓶部から口縁部片は、体部外面に縱位の平行叩きが施されている。10から12の土師器甕底部片には、底部に木葉痕が認められる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。



第165図 第562号住居跡・出土遺物実測図（1）



第166図 第562号住居跡出土遺物実測図（2）

第562号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
1 樂165図	環	A [140]	底部から口縁部にかけての破片。	底部へラ削り。体部外下面下端へラ削り、上端・内面へラ磨き。口縁部内・外面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英 明赤鶏色（外面） 普通	P 7170 40% 東東側覆土下層	
	上飾器	B 57	平底。体部から口縁部は内厚気味				
	C [85]		に立ち上がる。				
2	環	A 133	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。	底部一方角のへラ削り。体部外下面下端手持ちへラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 7171 70% P L 72	
	須恵器	B 47	体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			青葉コーナー部底面	
3	環	A 132	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。	底部へラ切り。体部外下面下端手持ちへラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 暗灰色 普通	P 7172 60% P L 72	
	須恵器	B 41	体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			東東側覆土下層	
4	環	A [123]	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。	底部へラ切り。体部外下面下端手持ちへラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7173 50% 窓内	
	須恵器	B 44	体部から口縁部は外傾して立ち上がる。				
5	環	A [130]	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。	底部へラ削り。体部外下面下端手持ちへラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 褐灰色 普通	P 7174 50% P L 73	
	須恵器	B 42	体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			中央部覆土中層	
	C 64						
6	蓋	A 152	ボタン状のつまみが付く。天井部は笠形である。口縁部は下方に短く屈曲し、外面上部が突出する。	天井部外面上半回転へラ削り。下半・内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 暗灰褐色 普通	P 7175 90% P L 73	
	須恵器	B 35				窓内	
7	盤	F 30					
	須恵器	G 10					
	A 159	高台は「ハ」の字状に開く。体部は外傾し、口縁部との境に棱をもつ。口縁部は外傾する。	底部回転へラ削り。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 灰色 普通	P 7176 100% P L 73	東壁底床面	
図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	砥石	7.1	4.6	3.0	17.0	北西部覆土中層	Q 7004 流紋岩

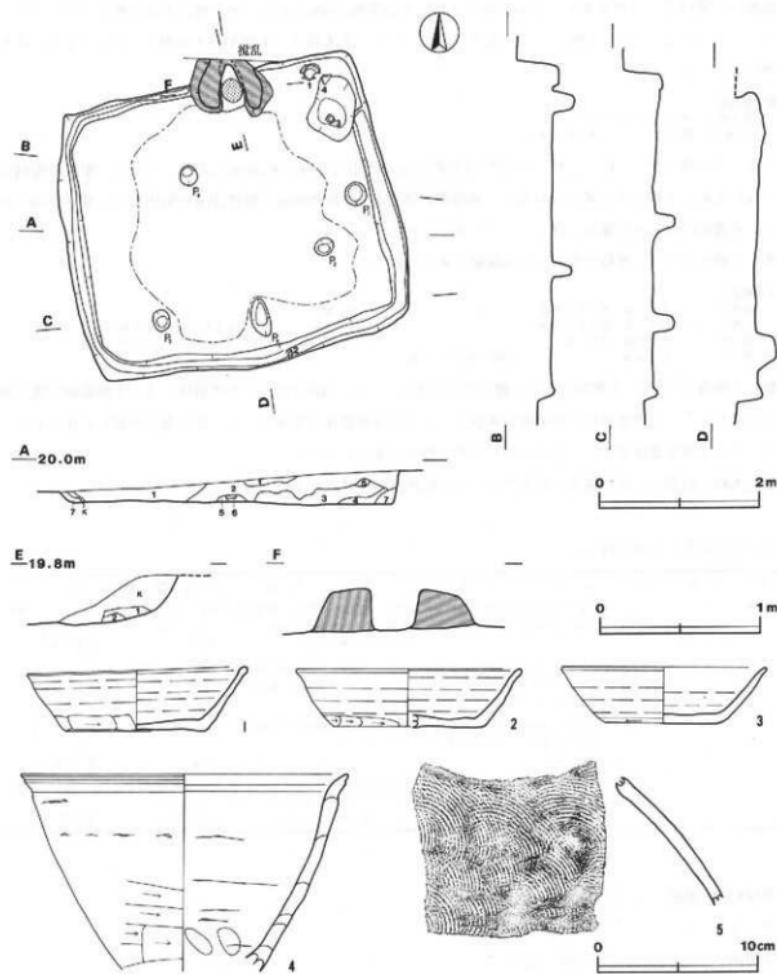
第563号住居跡（第167図）

位置 調査7区中央部、N11c区。

規模と平面形 長軸4.20m、短軸3.65mの長方形である。

主軸方向 N-12°-W

壁 壁高は9~45cmで、外傾して立ち上がる。



第167図 第563号住居跡・出土遺物実測図

**壁溝** 北東コーナー壁下を除いては確認された。上幅10~25cm、下幅5~20cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

**床** ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。北東コーナーに長径80cm、短径60cmの楕円形で、深さ24cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

**竈** 北壁中央から東寄りに砂質粘土で構築されている。煙道部と天井部が搅乱を受けており、遺存状態は悪い。規模は、焚口部から煙道部まで70cmと推定され、両袖部幅100cmである。第2層の下部が焼土ブロックでゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- 1 灰褐色 焼土粒子・砂粒多量
- 2 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量

**ピット** 5か所 ( $P_1 \sim P_5$ )。 $P_1$ から $P_4$ は径約20cmの円形で、深さ約30cmである。しかし、配置に規則性がないため、主柱穴とは考えられない。南壁際にある $P_5$ は長径50cm、短径20cmの楕円形で、深さ25cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 7層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- |   |     |                           |   |                         |
|---|-----|---------------------------|---|-------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量            | 5 | 砂 層                     |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量            | 6 | 褐 色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量 |
| 3 | 褐 色 | ローム粒子多量、砂粒少量              | 7 | 褐 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 褐 色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量 |   |                         |

**遺物** 土器片144点、須恵器片3点、礫1点が出土している。第167図1の須恵器片、4の土師器鉢は竈東側の床面から、2の須恵器片は南壁際の床面から、3の須恵器片は北東コーナー部の覆土中層から出土している。5は須恵器壺体部片で、外面に同心円状の叩きが施されている。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。

第563号住居跡出土遺物観察表

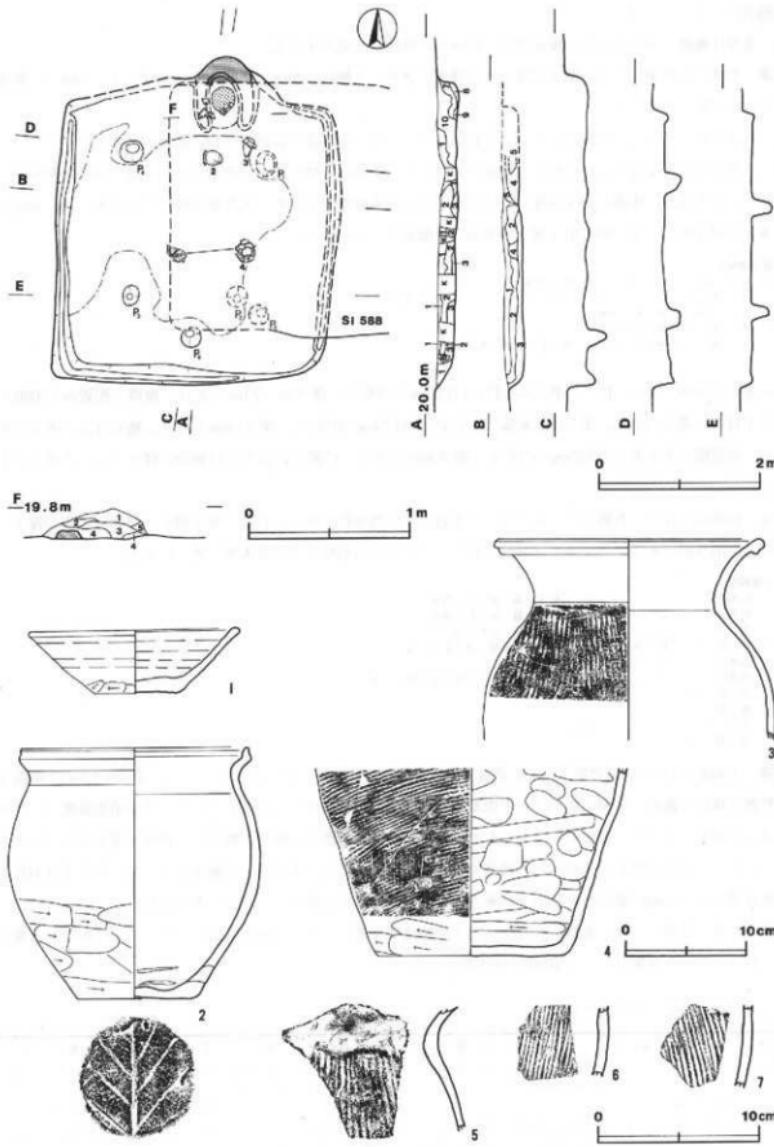
図版番号	器種	計量値(cm)	輪形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
1 須恵器	壺	A 137 B 49 C 87	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外側下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 7177 90% P L 73 竈東側床面
	壺	A [140] B 37 C [92]	A [140] 底部から口縁部にかけての破片。 B 37 平底。体部は外傾して立ち上がり、 C [92] 口縁部はやや外反する。	底部ヘラ削り。体部外側下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7178 40% 南壁際床面
	壺	A [128] B 35 C 74	A [128] 底部から口縁部にかけての破片。 B 35 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・小石 灰色 普通	P 7179 50% 北東コーナー部 覆土中層
4 土師器	鉢	A 204 B (123)	底部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外側下位ヘラ削り、上位・内面ナダ。内面下位折頭押捺。口縁部内・外側ロクロナダ。輪積み底。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 橙色 普通	P 7180 70% P L 73 竈東側床面
	器					

第564号住居跡(第168図)

**位置** 調査7区中央部、N11d区。

**重複関係** 東部が第588号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

**規模と平面形** 長軸3.80m、短軸3.50mの方形である。



第168図 第564号住居跡・出土遺物実測図

主軸方向 N - 3° - E

壁 東壁は確認できなかった。壁高は13~15cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下と南東コーナー壁下を除いては確認できた。上幅10~20cm、下幅約6cm、深さ4~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦であるが、中央部にわずかな起伏がみられる。中央部から西側が特に踏み固められている。

窓 北壁中央から東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで70cm、両袖部幅80cmである。火床部は、床面を約4cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部の遺存状況は悪い。第2層と第4層から多量の土器片が出土している。

#### 竪土層解説

- 1 前 赤 棕 色 ローム粒子・焼土粒子多量
- 2 灰 棕 色 ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子多量
- 3 にじい赤褐色 烧土粒子多量
- 4 黒 棕 色 烧土粒子中量
- 5 灰 棕 色 烧土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子多量

ピット 6か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径20cmの円形で、深さ20~23cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。P<sub>2</sub>の南東側にあるP<sub>5</sub>は径20cmの円形で、深さ14cmであり、補助柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>6</sub>は径23cmの円形で、深さ30cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり、各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。第7層から第10層は窓の覆土である。第9層は焼土ブロックでゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。

#### 土層解説

- 1 純褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 純褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 3 棕 色 ローム大ブロック・ローム粒子多量、砂粒少量
- 4 棕 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
- 5 純褐色 ローム小ブロック多量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 7 窓3層と同じ
- 8 窓4層と同じ
- 9 焼土ブロック、ゴツゴツしている
- 10 窓1層と同じ

遺物 土器片144点、須恵器片28点、鉄滓2点、陶器片3点、礫3点が出土している。第168図2の土器小形甕は横置で竪前の床面から、3の須恵器甕は竪東袖部前の床面から出土している。4の須恵器甕は、中央部の床面から出土した破片を接合したものである。1の須恵器甕は覆土中層から、鉄滓は覆土中から出土している。5は須恵器甕の体部から口縁部片で、体部外面に縦位の平行叩きが施されている。6と7は須恵器甕体部片で、外面に縦位の平行叩きが施されている。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。重複している第588号住居跡より古い。

第564号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	長廣径(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・施成	備考
第168図 1	甕	A 130 B 40 C 50	口縁部一部欠損。平底。体部から 口縁部は内側して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面 下端手持ちヘラ削り。体部から口 縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7181 80% P L 73 覆土中層
	須恵器					
2	小形甕	A [140]	体部から口縁部一部欠損。平底。 体部は内側して立ち上がる。頭部 でくびれ、口縁部は外反する。口 縁部は上方につまみ上げる。	底部木裏蓋。体部外側下位から中 位ヘラ削り。上位・内面ナダ。口 縁部内・外側横ナダ。輪積み底。	砂粒・雲母・長石 石英 にじい褐色 普通	P 7182 45% P L 73 竪前床面
	土器	B 156 C 71				

面版番号	器種	計量値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	地土・色調・焼成	備考
第168回 3	甕	A (21.8) B (16.4)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がる。頸部ぐいり、口縁部は外反する。	体部外面堅位の平行叩き、内面ナダ。口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 7183 20% P L 73 竈東塗部前床面
	須恵器	B (15.4) C 15.4	底部から体部中位にかけての破片。底部は外傾して立ち上がる。	底部ハラ割り後ヘラナダ。体部外 面下位横位のハラ削り。中位堅位 の平行叩き。内面下位沿御削り後、 横ナダ、中位当て具痕。	砂粒・雲母・小石 黄灰色 普通	P 7184 50% 中央塗部床面
4	甕	B (15.4)	底部から体部中位にかけての破片。底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ハラ割り後ヘラナダ。体部外 面下位横位のハラ削り。中位堅位 の平行叩き。内面下位沿御削り後、 横ナダ、中位当て具痕。	砂粒・雲母・小石 黄灰色 普通	P 7184 50% 中央塗部床面

### 第565号住居跡（第169・170図）

位置 調査7区中央部、N10g区。

規模と平面形 一辺3.55mの方形である。

主軸方向 N-101°-E

壁 壁高は25~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅約17cm、下幅4~6cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央から南側が特に踏み固められている。

竈 東壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅95cmである。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土師器片が出土している。第7層は土師器窯内の覆土である。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子中量
- 4 明赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 5 明赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、灰中量
- 6 男赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量

ピット 5か所（P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>）。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は各コーナーにあり、径約20cmの円形で、深さ30~40cmで、いずれも内側向に掘り込まれている。規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径30cmの円形で、深さ20cmであり、ピット周辺の床面が硬化している。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

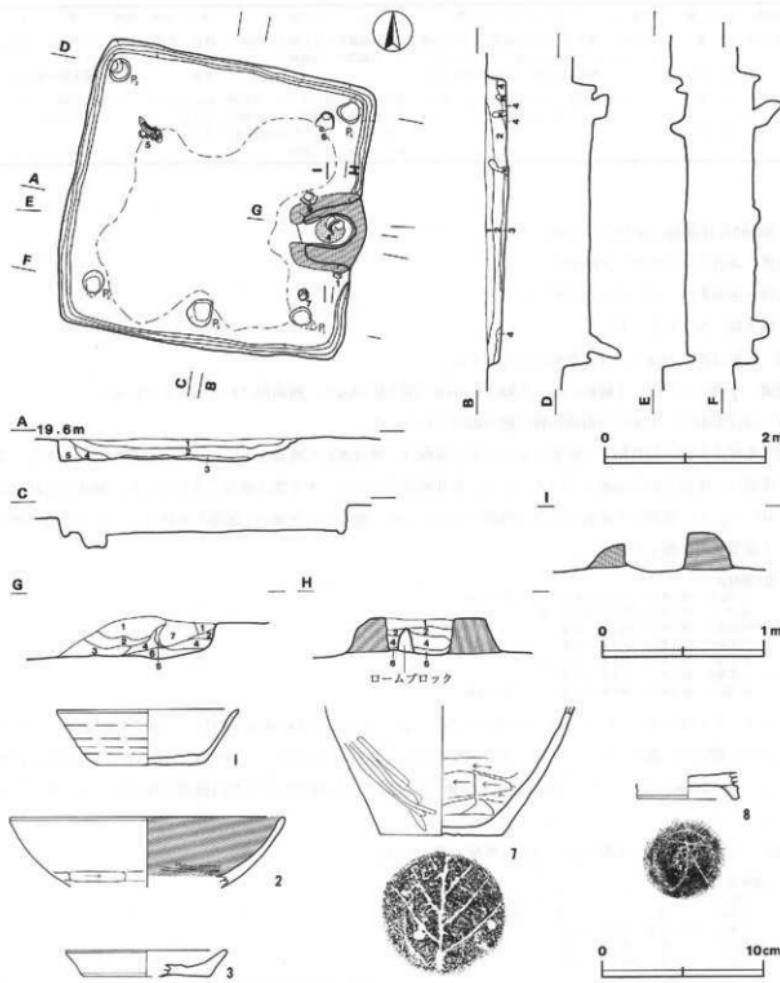
覆土 5層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子数量
- 2 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 炭化粒子多量、炭化粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量

遺物 土師器片343点、須恵器片5点、砾3点が出土している。第169・170図1の土師器片は逆位で竈南側の床面から出土している。内面全体には漆が付着している。4の土師器片は竈内から、5の土師器片は北西コーナー部の床面から、6の土師器片は横位で北東コーナー部の覆土下層から、7の土師器片は正位で竈南側の覆土下層から、9の須恵器片は竈北側の覆土中層から、2と3の土師器皿、8の土師器皿高台付片の高台部は遺構確認面から出土している。8の底部に「大」と刻書されている。10は土師器皿底部片で、回転糸切りである。11は土師器皿底部片で、底部に木葉痕が認められる。

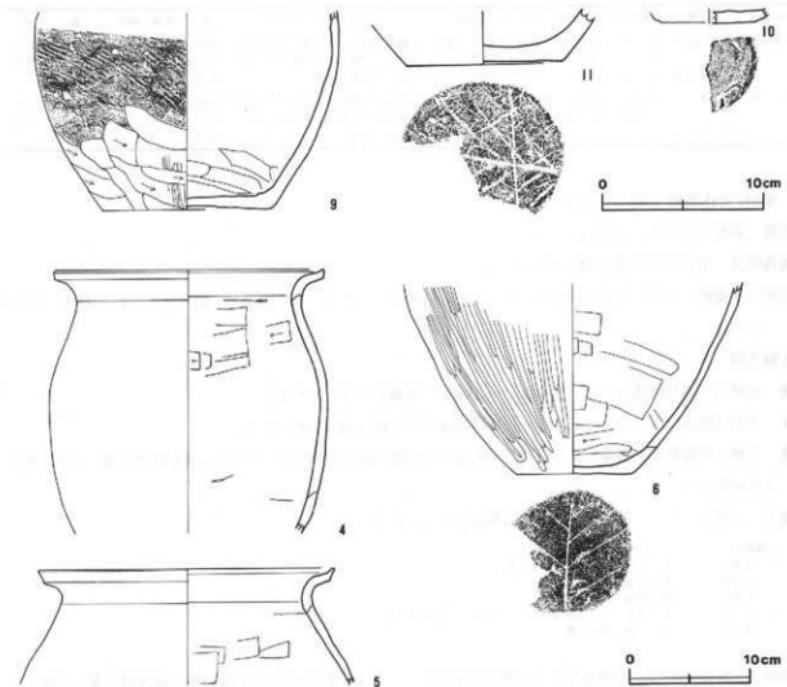
所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉と考えられる。



第169図 第565号住居跡・出土遺物実測図(1)

第565号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	直面積(cm)	形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第169図 1 土 部 器	壺	A [112] B 34 C [70]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部削転ヘラ削り。体部から口縁 部ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 黒褐色 普通	P 7185 40% 内面漆付着 窓南側床面



第170図 第565号住居跡出土遺物実測図（2）

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第169-170回 2	土師器	A [169] B (43)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は内壁気味に立ち上がる。	体部外下葉手持ちヘラ削り、上端、 口縁部外側ロクロナダ。体部・口縁部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英 橙色(外側) 普通	P 7186 20% 遺構確認面
		A [200] B 16 C [78]	底部から口縁部にかけての破片。 半底。体部から口縁部は外横して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P 7187 20% 遺構確認面
3	土師器	A [224] B (215)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内壁気味に立ち上がる。頭部にくびれ、口縁部は外反する。 口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面ナダ、内面ヘラナダ。口縁部内・外側横ナダ。輪積み板。	砂粒・雲母・長石・ 小石・赤色粒子 橙色 普通	P 7188 30% 窓内
		A [244] B (93)	体部上位から口縁部にかけての破片。 体部は内壁気味に立ち上がる。頭部にくびれ、口縁部は外反する。 口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面ナダ、内面ヘラナダ。口縁部内・外側横ナダ。輪積み板。	砂粒・雲母・長石・ 小石・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P 7189 10% 北西コーナー部 床面
4	土師器	B (156) C 94	底部から体部にかけての破片。平底。 体部は内壁気味に立ち上がる。	底部木葉痕。体部外面ヘラ磨き、 内面ナダ、内面ヘラナダ。口縁部 にぶい褐色 普通	砂粒・雲母・長石・ 小石 輪積み板。	P 7190 30% P L 73 北東コーナー部 覆土下層
		B (80) C 76	底部から体部下位にかけての破片。 平底。体部は内壁気味に立ち上がる。	底部木葉痕。体部外面ヘラ磨き、 内面ヘラナダ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい黄褐色 普通	P 7191 20% 竈南側覆土下層

剖面番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第169回 8	高台付壺	B (17) D 62 E 69	高台部から底部にかけての被片。 高台は「ハ」の字状に開く。	底部面板へラ削り後ナデ。内面丁寧なヘラ磨き。高台貼り付け後ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母 明黄褐色(外面) 普通	P7192 10% PL73 底部「大」刻符 遺構確認面
	土師器					
	須恵器	B (122) C 105	底部から体部にかけての被片。半底。体部は内縫して立ち上がる。	底部ヘラ削り後ヘラナダ。体部外側下部へラ削り。中位斜傾の平行叩き。内面ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぼい赤褐色 普通	P 7193 30% 竈北側覆土中層
第170回 9	壺					
	須恵器					

### 第567号住居跡（第97・171図）

位置 調査7区西部、M10ca区。

重複関係 第566号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 西部は調査区域外のため、平面形は確認できなかった。規模は、南北 [2.7]m、東西 (1.8)m である。

主軸方向 N - 5° - E

壁 北壁の一部が確認できた。壁高は12~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 西部は確認できなかったが、それ以外はほぼ平坦で踏み固められている。

電 北壁に砂質粘土で構築されている。天井部から袖部は搅乱を受けているため、遺存状況が悪い。火床部は、赤変硬化している。

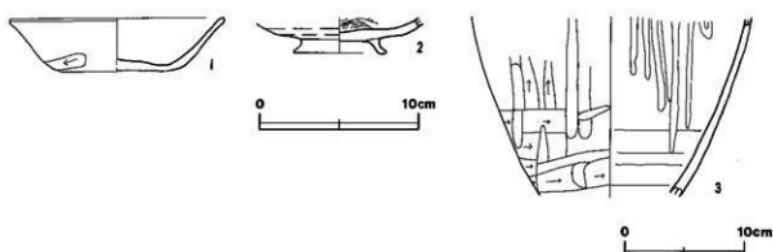
覆土 5層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 青褐色 ローム粒子・挽土粒子・炭化粒子中量
- 2 青褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子中量
- 4 黑色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・挽土粒子・炭化粒子少量
- 5 黑色 ローム粒子・挽土粒子中量

遺物 土師器片101点、須恵器片6点、礎2点が出土している。第171図3の土師器壺は竈西側の覆土下層から、1の須恵器壺、2の土師器高台付壺は覆土中層から出土している。

所見 本跡では、ピットと壁溝は確認できなかった。壁が確認できなかった部分は、床質で規模を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。重複している第566号住居跡より新しい。



第171図 第567号住居跡出土遺物実測図

## 第567号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第171図 1	壺	A [133] B 33 C [73]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持 ちヘラ削り。体部から口縁部内・ 外面クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 に赤い褐色 普通	P 7198 35% 覆土中層
2	高台付壺 須恵器	B (18) D 58 E 09	高台部から底部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。平底。	底部粗軸ヘラ削り後ナダ。高台點 り付け後ナダ。底部内層丁なへ ラ磨き。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P 7199 20% 覆土中層
3	壺 土師器	B (146)	体部片。体部は外傾して立ち上 がる。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナダ	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 に赤い褐色 普通	P 7200 20% 覆土中層

## 第568号住居跡(第172図)

位置 調査7区西部、N10c区。

重複関係 東壁際が第359号土坑、南壁際が第360号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 一辺2.95mの方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 南壁と東壁の一部は確認できなかった。壁高は30~45cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下と東壁下の一部は重複しているため、確認できなかったが、全周していたと推定される。上幅8~10cm、下幅4~6cm、深さ約4cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦であるが、中央部にわずかな起伏がみられる。中央部から西側が特に踏み固められている。

竈 北壁中央からやりや東寄りに砂質粘土で構築されている。火床部の一部から煙道部にかけて、トレンチャによる搅乱を受けているため奥行きは不明であるが、両袖部幅は95cmと推定される。火床部は、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変化している。

## 竈土層解説

- 1 煙赤褐色 焼土粒子多量
- 2 灰褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 3 明褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量
- 4 明褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量、軟らかい。

ピット 南壁際にあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ18cmであり、南側に傾斜して掘り込んでいる。位置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

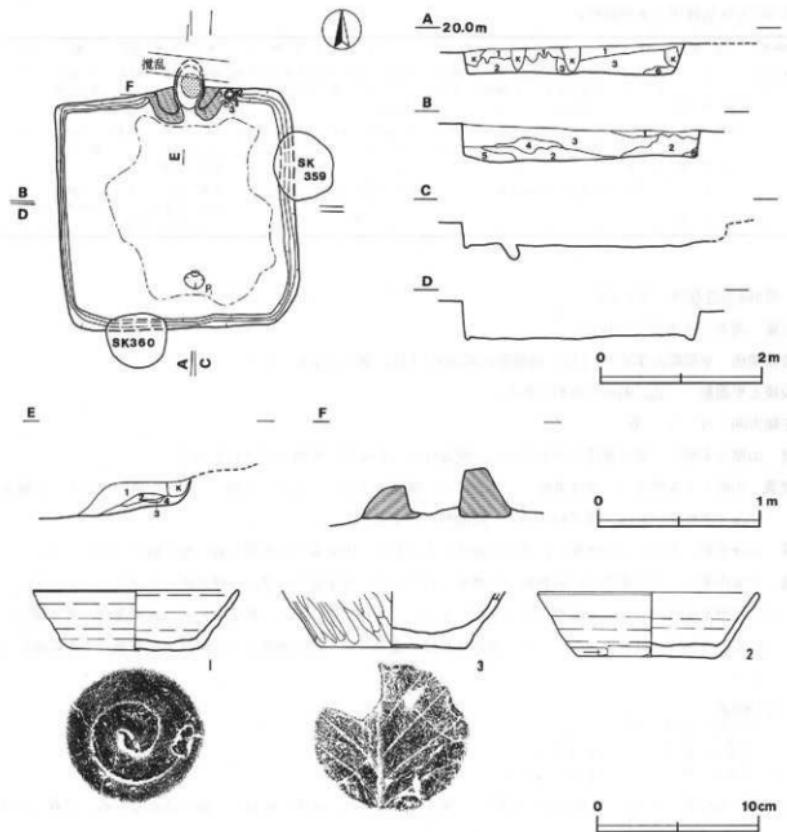
覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム中ブロック・粒子中量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、砂粒少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子少量
- 5 黒褐色 炭化粒子多量
- 6 浅褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子、焼土粒子中量、粘土粒子少量

遺物 土師器片102点、須恵器片21点、陶器片3点、磁器片2点、礫12点が出土している。遺物は竈東側の覆土中層に集中して出土している。図示した土器はその一部である。第172図1と2の須恵器壺は正位で、3の土師器壺は横位で出土した。陶器片と磁器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀と考えられる。重複している第359・360号土坑より古い。



第172図 第568号住居跡・出土遺物実測図

第568号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	壺	A 128	半底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部へラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P 7201 100% P L 73
	須恵器	B 38				竈東側壁上中層
	C 80					
2	壺	A 136	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のへラ削り。体部外面下端手持ちへラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・石英・長石 橙色 普通	P 7202 75% P L 73
	須恵器	B 41				竈東側壁上中層
	C 85					
3	甕	B ( 35 )	底部から体部下位にかけての破片。	底部本紫灰。体部外面下位へラ削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 7203 15% 竈東側壁上中層
	土器	C 90	平底。			

第569号住居跡（第173図）

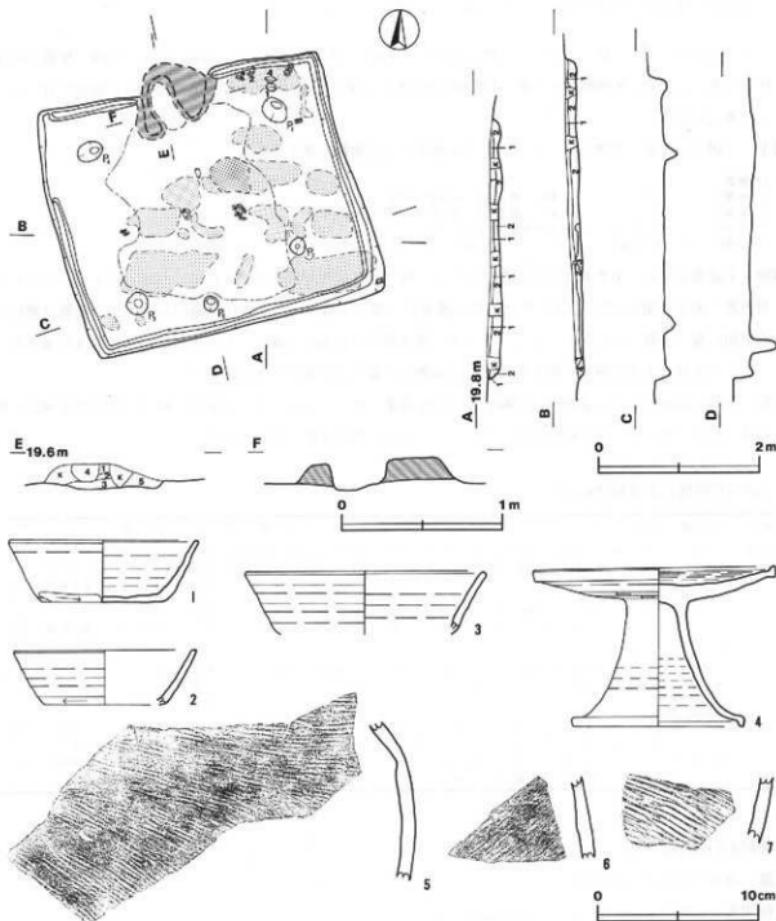
位置 調査7区中央部、N11b区。

規模と平面形 長軸3.72m、短軸3.15mの長方形である。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は12~17cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下の一部を除き全周している。上幅10~20cm、下幅4~6cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。



第173図 第569号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。全域から屋根材や柱材と思われる炭化材が出土し、床が全面焼けて赤変化している。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。トレンチャーによる搅乱がはなはだしいが、規模は焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅100cmと推定される。火床部はあまり赤変化していないため、短期間しか使用されなかったものと考えられる。

#### 竈土層解説

- 1 赤褐色 焙土粒子多量
- 2 暗赤褐色 焙土粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焙土粒子中量
- 4 暗赤褐色 焙土粒子・炭化粒子多量
- 5 暗赤褐色 焙土粒子・炭化粒子多量、ローム粒子少量

ピット 5か所 ( $P_1 \sim P_5$ )。 $P_1$ から $P_4$ は径20~30cmの円形で、深さ15~20cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にある $P_5$ は径20cmの円形で、深さ35cmであり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 鮎褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 深褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・炭化材多量
- 3 黒褐色 ローム中・小ブロック・炭化粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化材少量

遺物 土器片91点、須恵器片23点、陶器片2点、礫3点、炭化材が出土している。図示した土器はいずれも須恵器である。第173図1と2の杯は正位で竈東側の覆土下層から、3の杯は竈内から、4の高盤は横位で竈東側の覆土中層から出土している。5と7の壺体部片の外面には横位、6には斜位の平行叩きが施されている。炭化材は床面全域から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。また、床面が焼けて住居の全域から屋根材や柱材と思われる炭化材が出土していることから、焼失家屋と考えられる。

第569号住居跡出土遺物観察表

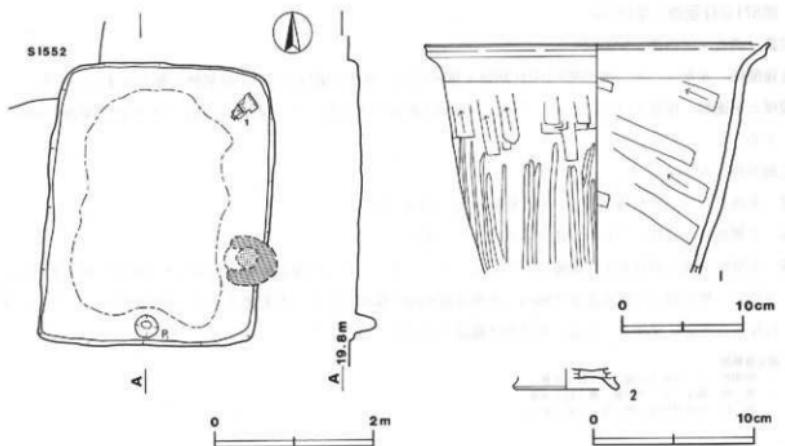
図版番号	器種	青銅像(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第173図 1 須恵器	杯	A 11.8 B 39 C 75	口縁部は一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 黄灰褐色 普通	P 7204 95% P L 73 竈東側覆土下層
	杯	A [11.2] B 34 C [7.4]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母 オリーブ黒色 普通	P 7205 20% 竈東側覆土下層
	杯	A [15.0] B (39)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P 7206 10% 竈内
4 須恵器	高盤	A 15.1 B 100 D 105 E 7.8	脚部はラック状に開き、脚部は下方に強く折り曲げられている。体部は鏡やかに開き、口縫端部は上方に強く折り曲げられている。	脚部内・外側ロクロナデ。体部外側下端回転ヘラ削り。体部から口縫部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7207 100% P L 73 竈東側覆土中層

第570号住居跡（第174図）

位置 調査7区西部、N11b区。

重複関係 北西コーナー部が第552号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.50m、短軸2.80mの長方形である。



第174図 第570号住居跡・出土遺物実測図

主軸方向 N-93°-E

壁 壁高は9~15cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

窓 東壁中央から南寄りに砂質粘土で構築されている。トレンチャーによる搅乱がはなはだしいため、土層の堆積状況は確認できなかった。規模は、両袖部幅60cmと推定される。天井部は確認できなかった。火床部はあまり赤変硬化していない。

ピット 南壁際にあるP<sub>1</sub>は径30cmの円形で、深さ26cmであり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土師器片59点、須恵器片10点、陶器片4点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第174図1の瓶は北東コーナー部の床面から、2の高台付杯は窓前の覆土中から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡はトレンチャーによる搅乱がはなはだしいため、覆土の堆積状況は確認できなかった。壁溝は確認されなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第552号住居跡より新しい。

#### 第570号住居跡出土遺物観察表

出典番号	器種	片漢量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 1 土師器	瓶	A 28.6 B (19.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部下面下位ヘラ磨き、上位肩部のヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内外横ナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子・石英にぶい橙色 普通	P 7208 55% P L 73 北東コーナー部床面
	高台付杯	B (13) D [64] E 0.8	高台基部から底部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。	底部外面下部ヘラ削り後ナテ。内面丁寧なヘラ磨き。高台貼り付け後ナテ。内面黒色処理。	砂粒・雲母にぶい橙色(外側) 普通	P 7209 5% 窓前覆土中

### 第571号住居跡（第163図）

位置 調査7区西部、N10d区。

重複関係 北東コーナー部が第559号住居跡を掘り込み、南部が第572・561号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 墓乱かははだしたため、平面形は推定できなかった。規模は、南北(2.0)m、東西4.80mである。

主軸方向 N-7°-E

壁 北西コーナー壁が残存している。壁高は6~18cmである。

床 北側部分が残存しており、踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。トレンチャによる擾乱を受けており、詳細は不明であるが、規模は、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅80cmと推定される。火床部はあまり赤変硬化していない。實母片岩を支脚に使用している。天井部は確認できなかった。

#### 覆土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 深色 粘土ブロック中量、焼土粒子少量
- 3 深色 烧成材中量、焼土粒子少量、軟らかい。

覆土 2層からなる。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 浅色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 深色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量

遺物 覆土中から土師器片9点が出土しているが、いずれも細片である。

所見 本跡では、壁溝は確認できなかった。時期は、判断する遺物がないため不明である。しかし、7世紀中葉から後葉の第559号住居跡を掘り込み、8世紀後葉の第572号住居跡と9世紀の第561号住居跡に掘り込まれていることから、7世紀中葉以降で8世紀後葉以前の時期と考えられる。

### 第572号住居跡（第163・175図）

位置 調査7区西部、N10e区。

重複関係 東部が第561号住居跡に掘り込まれ、北東部が第571号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.50m、短軸3.40mの方形と推定される。第561号住居跡の床面を精査したところ、本跡の壁溝が検出できたため、壁が確認できなかった部分は壁溝から規模と平面形を推定した。

主軸方向 N-0°

壁 東側ほぼ半分が確認できなかった。壁高は33~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

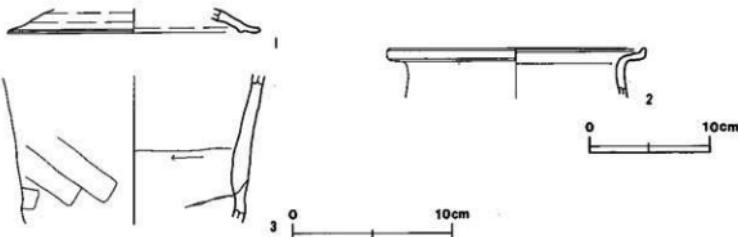
壁溝 全周している。上幅約20cm、下幅約10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 第561号住居跡に掘り込まれている東部は確認できなかったが、中央部から西部は、ほぼ平坦でよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に構築されている。火床部から東袖部にかけて第561号住居跡に掘り込まれているが、西袖部は残存している。

ピット 南壁際にあるP<sub>1</sub>は径約30cmの円形で、深さ約17cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土師器片16点、須恵器片2点が出土している。第175図1の須恵器蓋、2の土師器壺は窓西袖部付近の覆土下層から、3の土師器壺は西壁際の覆土下層から出土している。



第175図 第572号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は搅乱がはなはだしいため、覆土の堆積状況は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。本跡は重複している第561号住居跡より古く、時期不明の第571号住居跡より新しい。

#### 第572号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	駄土・色調・焼成	備考
第175図 1 灰窓器	蓋	A [15.8] B (15)	口縁部片。内面に短いかえりをもつ。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・白色粒子 灰色 普通	P 7210 5% 竈西袖部付近覆土下層
	壺	A [21.4] B (41)	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 に赤い褐色 普通	P 7211 5% 竈西袖部付近覆土下層
2 3 土師器	壺	B (33)	体部片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ヘラナデ。輪積み底。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 に赤い褐色 普通	P 7212 5% 西壁際覆土下層
	土師器					

#### 第573A号住居跡（第176・177図）

位置 調査7区南西部、N10e点。

重複関係 全体的に第573B号住居跡に掘り込まれ、南部は第357号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [3.1]m、短軸 [3.0]mの方形と推定される。

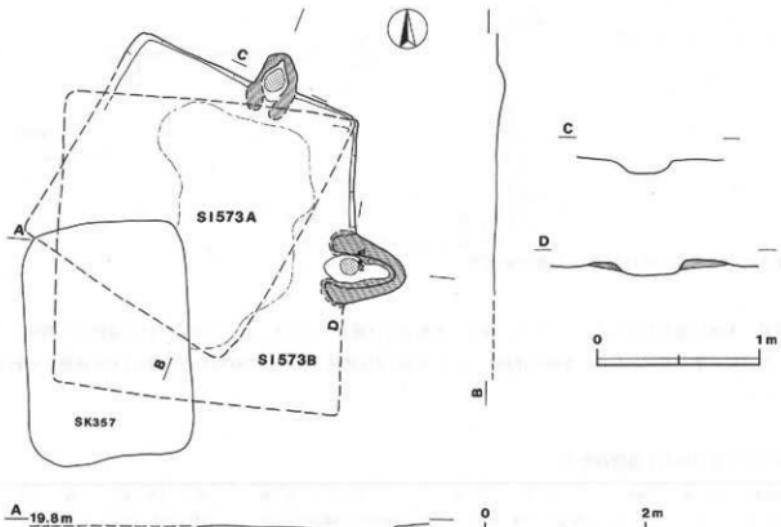
主軸方向 N-28°-E

床 第357号土坑に掘り込まれている部分は確認できなかったが、中央部から東側が特に踏み固められている。

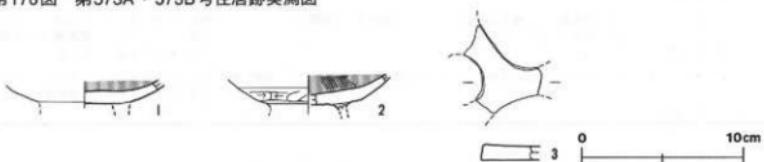
竈 北壁の東寄りに構築されている。わずかに袖部の痕跡が残存している。火床部は床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

遺物 土師器片48点、須恵器片3点が出土している。第177図1と2の土師器高台付杯は遺構確認面から出土している。3の土師器瓶は竈内から出土している。

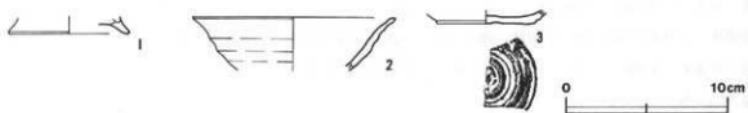
所見 本跡の壁や塹溝、ピットは確認できなかった。床質から住居跡の四隅を判断し、そこから規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉と考えられる。重複している第573B号住居跡、第357号土坑より古い。



第176図 第573A・573B号住居跡実測図



第177図 第573A号住居跡出土遺物実測図



第178図 第573B号住居跡出土遺物実測図

第573A号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	資源量(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177図 1 高台付环 土師器	B ( 14)	底部片。	底部外側回転ヘラ削り、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 明赤褐色（外面） 普通	P 7213 10% 遺構確認面	
2 高台付环 土師器	B ( 22)	高台の一部から体部にかけての破片。体部は内縁気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ、高台貼り付け候ナデ。体部外側下端ヘラ削り、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色。	砂粒・灰母に赤褐色（外面） 普通	P 7214 10% 遺構確認面	
3 瓶 土師器	B ( 10)	底部片。多孔式。	ヘラ削り後、ヘラナデ。	砂粒 に赤い橙色 普通	P 7215 5% 窓内	

### 第573B号住居跡（第176・178図）

位置 調査7区南西部、N10es区。

重複関係 全体的に第573A号住居跡を掘り込み、南西部が第357号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [3.7]m、短軸 [3.6]mの方形と推定される。

主軸方向 N-94°-E

床 第357号土坑と重複している部分は確認できなかったが、中央部から西側が特に踏み固められている。

竈 東壁の中央部に構築されている。わずかに袖部の痕跡が残存している。火床部は床面を約10cm掘りくぼめしており、赤変硬化している。

遺物 土師器片14点、須恵器片1点が出土している。第178図1の土師器高台付环の高台、2と3の土師器皿は竈内から出土している。

所見 本跡の壁や壁溝、ビットは確認できなかった。床質から北西コーナーと南東コーナーを判断し、そこから規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第573A号住居跡より新しく、第357号土坑より古い。

### 第573B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画量(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第178図 1	高台付环 土 師 器	D [7.4] E 10	高台部片。高台は「ハ」の字状に聞く。	ナデ。	砂粒・赤色粒子 明赤褐色 普通	P 7216 5% 竈内
		A [12.6] B (33)	体部から口縁部にかけての被片。 体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	体部から口縁部クロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P 7217 10% 竈内
2	土 師 器	B (68) C [60]	底部片。	底部円転ヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 7218 5% 竈内

### 第574号住居跡（第179図）

位置 調査7区南西部、N10gs区。

規模と平面形 長軸3.95m、短軸3.63mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は20~27cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下の西側の一部が確認できなかったが、それ以外は巡っている。上幅17~20cm、下幅6~10cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

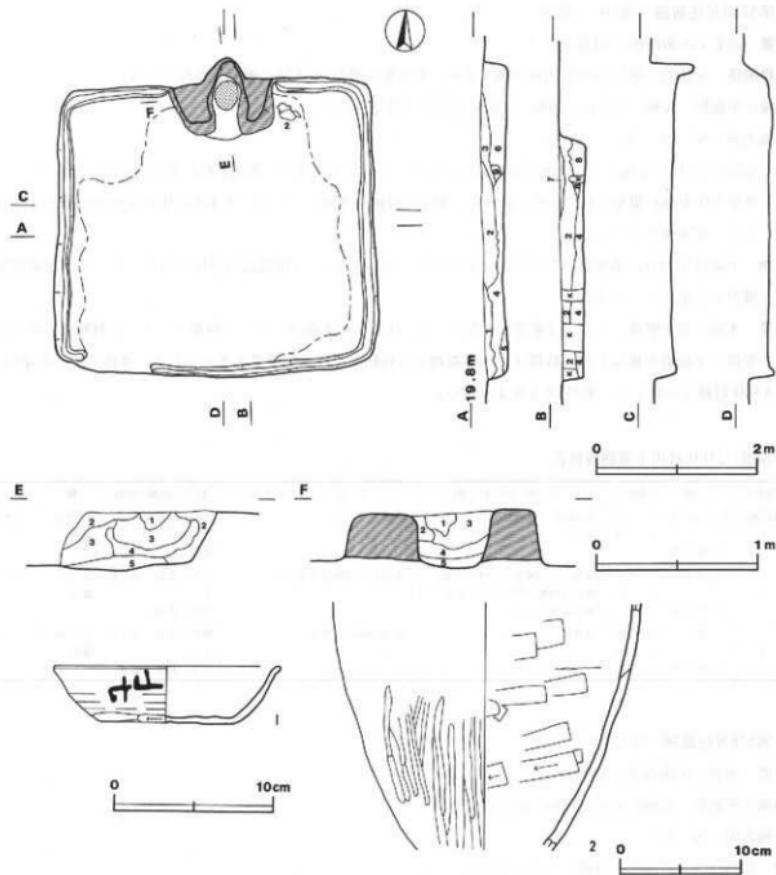
床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅120cmである。

火床部は床面を約7cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 焼 黄 色 粘土粒子少量
- 2 焼 黄 色 ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 灰 烟 色 焙土粒子・粘土粒子中量、燒土粒子少量
- 4 烟 黄 色 焙土粒子・砂粒多量
- 5 烟赤 黄 色 焙土粒子・炭化粒子多量、砂粒中量、ローム粒子少量



第179図 第574号住居跡・出土遺物実測図

覆土 9層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- |       |                           |       |                            |
|-------|---------------------------|-------|----------------------------|
| 1 純褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量     | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 2 褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子多量     | 7 褐色  | ローム粒子・炭化材多量・炭化粒子中量         |
| 3 褐色  | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量・炭化粒子中量 | 8 黒褐色 | 焼土粒子・炭化材多量                 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量・ローム中ブロック・焼土粒子少量   | 9 黑褐色 | 粘土粒子・砂粒多量                  |
| 5 褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量     |       |                            |

遺物 土師器片67点、須恵器片9点、磯1点が出土している。第179図1の須恵器片は南西部の覆土中層から出土している。側面に墨書きされているが、判読不能である。2の土師器片は竈東側の覆土下層から出土している。

所見 本跡では、ピットは確認されなかった。時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。

第574号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計画値(m)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第179回 1	壺	A 14.1 B 3.6 C 8.0	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内厚気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・長石 黄褐色 普通	P 7219 60% P L74 墓吉土器 南西部覆土中層
	甌	B (20.4)	体部片。体部は内厚気味に立ち上がる。	体部外面下位ヘラ磨き、内面ヘラナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母 暗褐色 普通	P 7220 20% 甌葉鉢覆土下層
2	土 筒 器					

第575号住居跡（第180・181図）

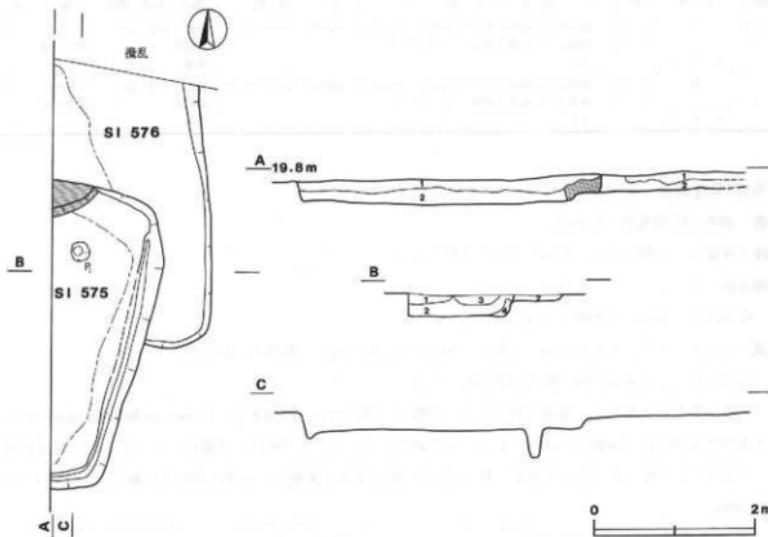
位置 調査7区西部, N10gs区。

重複関係 北部が第576号住居跡を掘り込んでいる。

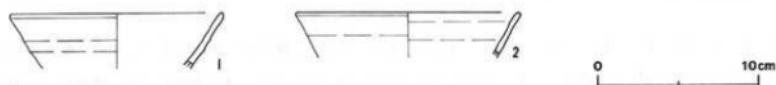
規模と平面形 西部は調査区域外のため、平面形は確認できなかった。規模は、南北2.95m、東西(2.9)mである。

主軸方向 [N-11°-E]

壁 北壁の一部と東壁から南壁にかけての一部が確認できた。壁高は約22cmで、外傾して立ち上がる。



第180図 第575・576号住居跡実測図



第181図 第575号住居跡出土遺物実測図

**壁溝** 東壁下から南壁下にかけて確認できた。上幅20~30cm、下幅6~10cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

**床** よく踏み固められている。

**竈** 北壁に砂質粘土で構築されている。東袖部だけが残存している。

**ピット** 北東部にあるP<sub>1</sub>は径24cmの円形で、深さ38cmである。位置と規模から判断して主柱穴と考えられる。

**覆土** 4層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

1	暗褐色	ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
2	暗褐色	燒土粒子多量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
3	褐色	燒土粒子多量、ローム小ブロック・ローム粒子中量
4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量

**遺物** 土師器片41点、須恵器片9点、炭化材が出土している。第181図1と2の須恵器は覆土中層から、炭化材は覆土中層から出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。時期不明の第576号住居跡を掘り込んでいたため、本跡の方が新しい。

第575号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第181図 1	壺	A [132] B (34)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	体部から口縁部内・外面ロクロナ デ。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	P 7221 5% 覆土中層
	須恵器	A [140] B (28)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	体部から口縁部内・外面ロクロナ デ。	砂粒・雲母・長石 褐灰色 普通	P 7222 5% 覆土中層

第577号住居跡（第182図）

**位置** 調査7区南西部、N10h区。

**規模と平面形** 長軸4.30m、短軸4.10mの方形である。

**主軸方向** N-0°

**壁** 壁高は25~35cmで、外傾して立ち上がる。

**盤溝** 全周している。上幅約20cm、下幅6~8cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

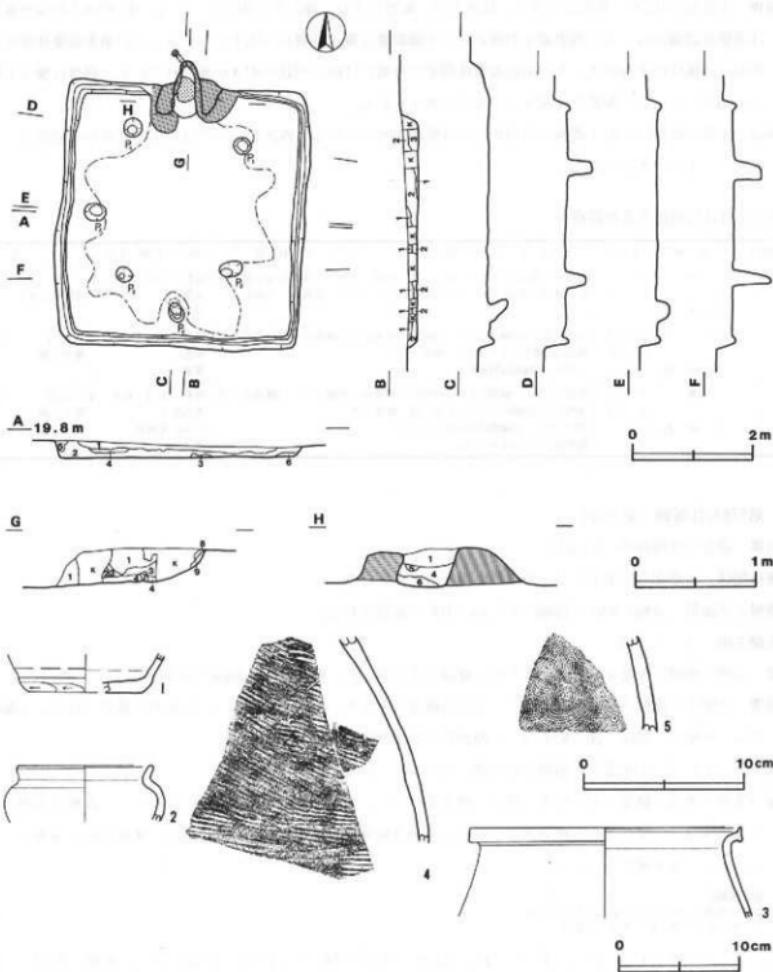
**床** ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

**竈** 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅130cmである。火床部は床面を約4cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は一部遺存しているが、大部分が崩落しており、第1層と第7層が崩落土と考えられる。煙道部は火床面からやや西側向きに緩やかに立ち上がる。

**竈土層解説**

1	灰褐色	粘土ブロック・砂粒多量、燒土粒子少量	6	にじむ褐色	燒土中ブロック・燒土粒子多量、炭化粒子少量
2	赤褐色	燒土粒子多量、炭化粒子少量	7	粘土ブロック	
3	赤褐色	燒土粒子多量、粘土粒子中量	8	褐色	燒土粒子少量
4	暗赤褐色	燒土粒子・炭化粒子中量	9	明赤褐色	燒土粒子・砂粒多量
5	明赤褐色	燒土粒子多量、ローム粒子少量			

**ピット** 6か所（P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>）。P<sub>1</sub>からP<sub>5</sub>は径20~24cmの円形で、深さ40~60cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>6</sub>は長径30cm、短径22cmの楕円形で、深さ30cmであり、南側向に斜めに掘り込まれている。位置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第182図 第577号住居跡・出土遺物実測図

覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、軟らかい
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 にぶい褐色 粘土粒子中量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化材多量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量

**遺物** 土器片162点、須恵器片56点、鐵滓1点、陶器片4点、礪24点が出土している。第182図1の須恵器片は遺構確認面から、2の須恵器小形壺と3の土器片は覆土下層から出土している。4の須恵器壺体部片の外側には横位の平行叩き、5の須恵器壺体部片の外側には同心円状の叩きが施されている。鐵滓は覆土上層から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀と考えられる。鐵滓については、出土状況から判断して、混入したものと考えられる。

第577号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	古酒性(ka)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第182図 1	壺	B [23]	底部から全体にかけての破片。平底。全体は外傾して立ち上がる。	底部へラブリ。全体外面下端手持ちへラブリ。全体内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 灰色 普通	P 7223 15% 遺構確認面
	須恵器	C [72]				
2	小形壺	A [84]	全体上位から口縁部にかけての破片。全体は内傾して立ち上がる。頭部でくびれ。口縁部は外反する。	全体から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P 7224 5% 覆土下層
	須恵器	B [35]				
3	壺	A [226]	全体上位から口縁部にかけての破片。全体は内傾して立ち上がる。頭部でくびれ。口縁部は外反する。口部は上方につまみ上げる。	全体内・外側ナデ。口縁部内・外側横ナデ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P 7225 5% 覆土下層
	土器	B [74]				

### 第578号住居跡（第183図）

**位置** 調査7区南西部、N10j区。

**重複関係** 南壁部分が第367・368号土坑に掘り込まれている。

**規模と平面形** 長軸3.80m、短軸[3.7]mの方形と推定される。

**主軸方向** N - 9° - W

**壁** 北壁と南壁は搅乱を受けていたため、確認できなかった。壁高は4~10cmである。

**壁溝** 北壁下と南壁下は搅乱を受けているため確認できなかったが、全周していたものと推定される。上幅約20cm、下幅8~10cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

**床** ほぼ平坦で、中央部から南側が特に踏み固められている。

**竈** 北壁中央部に構築されている。特に、煙道部はトレンチャーによる搅乱がはなはだしく、詳細は不明であるが、規模は、焚口部から煙道部まで70cm、両袖部幅80cmと推定される。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- 1 焰赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 2 明赤褐色 焼土粒子多量、灰塵量

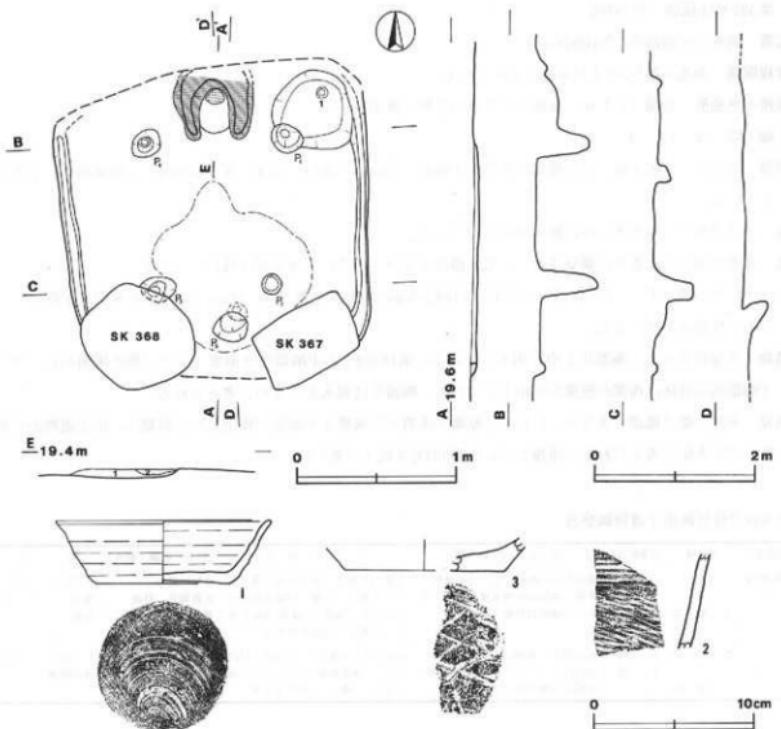
**ピット** 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径20~30cmの円形で、深さ50~60cmであり、規模と配列から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径40cmの円形で、深さ40cmであり、南向き斜めに掘り込まれている。

位置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 単一層である。覆土が薄いため、堆積状況は確認できなかった。

#### 土層解説

- 1 黑褐色 ローム中・小ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子中量



第183図 第578号住居跡・出土遺物実測図

**遺物** 土師器片29点、須恵器片4点、灰釉陶器片2点が出土している。第183図1の須恵器片は正位で北東コーナー部の床面から出土している。2は須恵器裏部片で、外面に横位の平行叩きが施されている。3は土師器裏底部片で、底部に木葉痕が認められる。灰釉陶器長頸瓶の破片が覆土中から出土しており、猿投糞井ヶ谷78号窯式期のものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。重複している第367・368号土坑より古い。

第578号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画寸(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第183図 1 須 恵 器	片 皿	A 13.4 B 4.0 C 8.3	口縁部一部欠損。平底。体部から 口縁部は外側して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部から口縁 部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石 灰青褐色 普通	P 7226 90% P L 74 北東コーナー部床面

### 第580号住居跡（第184図）

位置 調査 8 区南西部、N10bs区。

重複関係 南部が第393号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 [3.4]m、短軸 [3.2]mの方形と推定される。

主軸方向 N-15°-E

壁溝 北壁下の一部を除いては確認できた。上幅20~30cm、下幅10~20cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央から東寄りに構築されている。搅乱を受けているが、火床部は残存している。

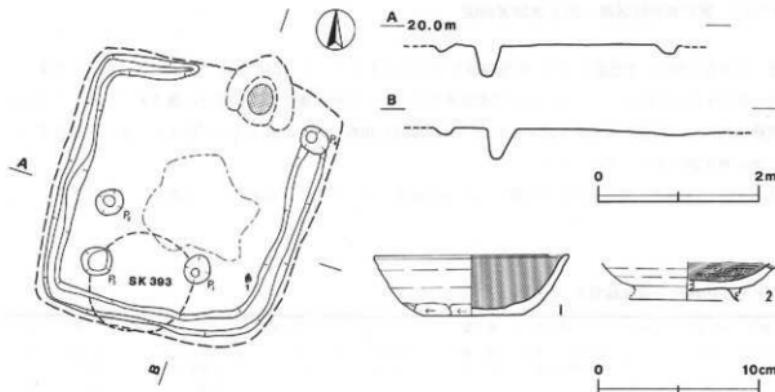
ピット 4か所 ( $P_1 \sim P_4$ )。 $P_1$ から  $P_4$ は径約30cmの円形で、深さ30~50cmであり、不規則な配置をしている。性格は不明である。

遺物 土器片 6点、陶器片 1点が出土している。第184図1の土器器皿は南東コーナー部の床面から、2の土器器皿高台付灰は西部の壁溝から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の壁は確認できなかったため、壁溝や床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。重複している第393号土坑より新しい。

第580号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	直径(㎝)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第184図 1	壺	A [22]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内骨氣味に立ち上がり、口縁部は外傾する。	底部ヘラ削り。体部外端下端手持ちヘラ削り、上端・口縁部外面クロナデ。体部・口縁部内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 灰黄褐色(外面) 普遍	P 7227 25% 南東コーナー部 床面
	土 器 器	B [38] C [62]				
2	高 台 付 壺	B [24]	高台部から体部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に聞く。平底。 体部は内骨氣味に立ち上がる。	底部ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部外端ロクロナデ、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P 7228 5% 西部壁溝
	土 器 器	E [9]				



第184図 第580号住居跡・出土遺物実測図

第581号住居跡（第185図）

位置 調査7区南西部、N10d区。

規模と平面形 長軸3.70m、短軸3.35mの長方形である。

主軸方向 N - 0°

壁 壁高は2～5cmである。

壁溝 全周している。上幅14～20cm、下幅4～6cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

床 西側部分と南壁際が擾乱を受けている。ほぼ平坦で、竈前から中央部にかけて特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に構築されている。袖部の痕跡と火床部しか確認できなかった。火床部は、床面を約8cm掘り

くぼめており、赤変化している。規模は、両袖部幅100cmと推定される。

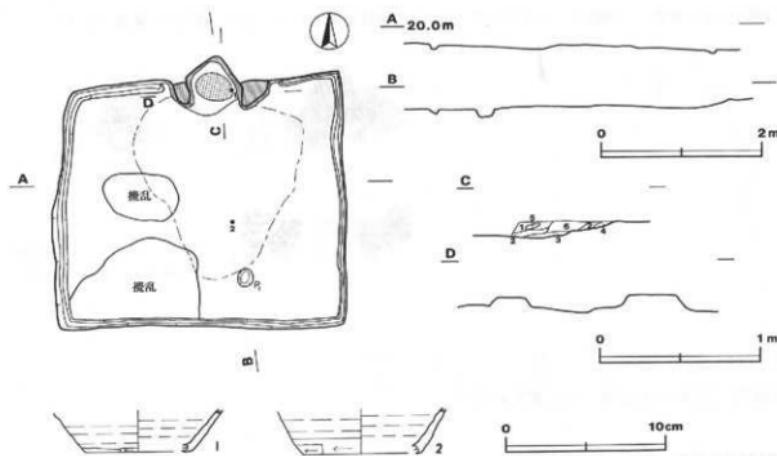
竈土層解説

- 1 細 褐色 粘土粒子・焼土粒子・砂粒少量
- 2 細 褐色 粘土粒子・砂粒中量
- 3 深暗赤褐色 ローム粒子少量
- 4 細 褐色 粘土粒子中量
- 5 深赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子少量、軟らかい
- 6 細 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

ピット P<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ12cmであり、中央部からやや南東寄りに位置している。性格は不明である。

遺物 土師器6点、須恵器片4点が出土している。第185図1の須恵器片は竈内から、2の須恵器片は中央部の床面から出土している。

所見 本跡は、壁の立ち上がり状況は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。



第185図 第581号住居跡・出土遺物実測図

第581号住居跡出土遺物観察表

団数番号	器種	世遺物(件)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18526 1	壺 須恵器	B (29) C [66]	底部の一部から体部にかけての破片。底底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下端手持ちヘラ削り。体部内・外面クロナデ。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P 7229 5% 壁内
2	壺 須恵器	B (31) C [74]	底部の一部から体部にかけての破片。底底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下端手持ちヘラ削り。体部内・外面クロナデ。	砂粒 灰色 普通	P 7230 5% 中央部床面

第582号住居跡 (第186図)

位置 調査7区南西部、O10as区。

規模と平面形 西部は調査区域外のため、平面形は確認できなかった。規模は、南北 [3.0]m、東西 (2.4)m である。

主軸方向 [N - 0°]

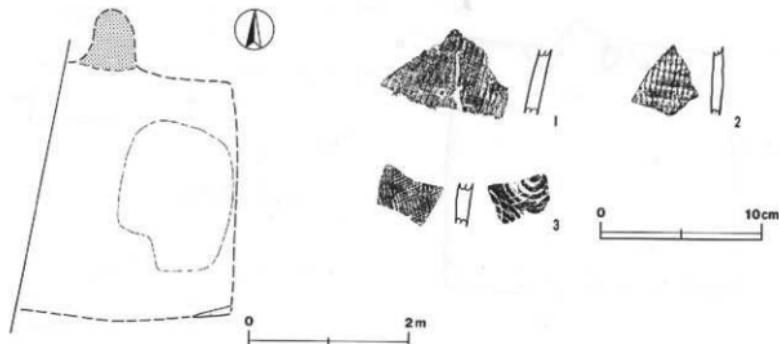
床 東側部分に特に踏み固められた部分が残存している。

竈 北壁に構築されていたと推定される。床面北側に火床部と考えられる赤変硬化部分が確認できた。

遺物 遺構確認面から土師器片21点、須恵器片3点、鉄滓1点、陶器片1点、礫2点が出土している。第186図1と2は須恵器片で、外面に縦位の平行叩きが施されている。3の須恵器片の外面には斜位の平行叩きが施され、内面に同心円状の當て具痕が見られる。1から3は遺構確認面から出土している。覆土中から鉄滓が出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の壁と壁溝、ピットは確認できなかった。壁が確認できなかった部分は、床質から規模を推定した。

時期は、出土遺物から判断して8世紀と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。



第186図 第582号住居跡・出土遺物実測図

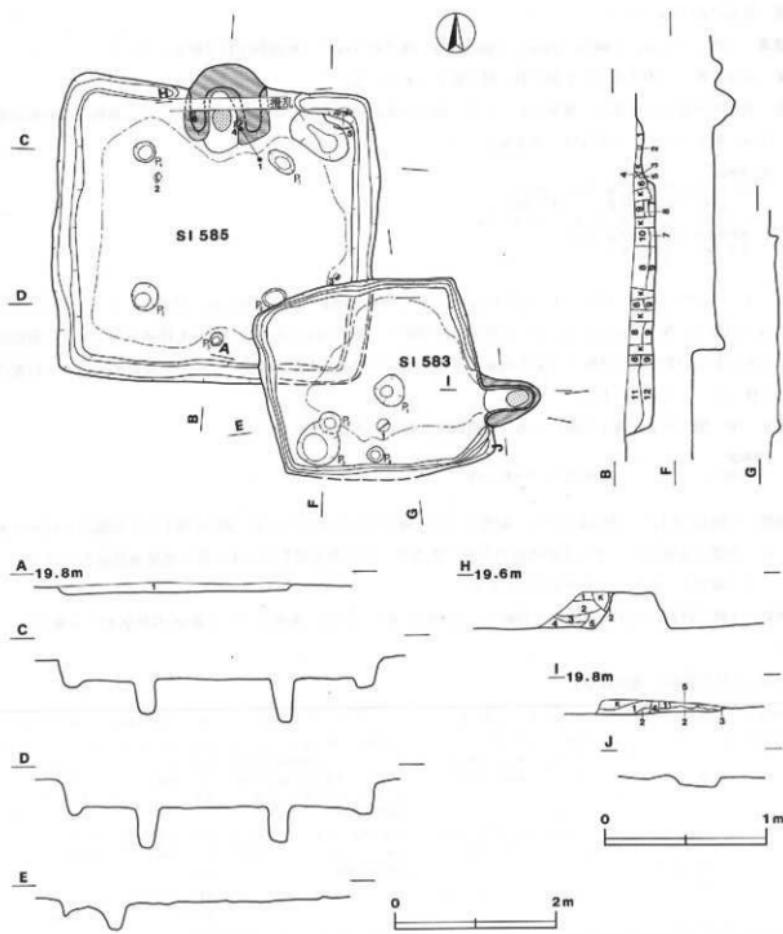
第583号住居跡 (第187・188図)

位置 調査7区南西部、O10as区。

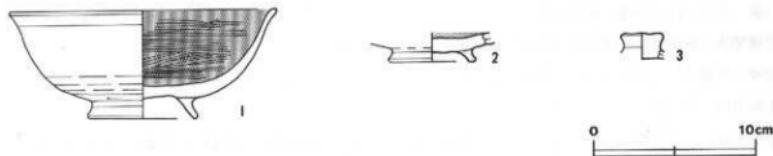
重複関係 北西部が第585号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸2.70m、短軸2.45mの長方形である。

主軸方向 N - 84° - E



第187図 第583・585号住居跡実測図



第188図 第583号住居跡出土遺物実測図

壁高は約9cmである。

壁溝 全周している。上幅約20cm、下幅約5cm、深さ約5cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部から北側が特に踏み固められている。

竈 東壁中央部から南寄りに構築されている。袖部の痕跡と火床部しか確認できなかった。規模は、両袖部幅60cmと推定される。火床部は、赤変硬化している。

竈土層解説	
1	褐色
2	灰褐色
3	暗赤褐色
4	深暗赤褐色
5	極暗赤褐色

ピット 4か所（P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>）。P<sub>1</sub>は径40cmの円形で、深さ68cmであり、中心部に位置している。P<sub>2</sub>は径20cmの円形で、深さ32cmであり、P<sub>3</sub>は径50cmの円形で、深さ29cmである。いずれも性格不明である。南壁際にあるP<sub>4</sub>は径18cmの円形で、深さ20cmであり、ピット周辺の床面が硬化している。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 単一層である。覆土が薄いため、堆積状況は確認できなかった。

土層解説	
1	暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土器片64点、須恵器片9点、陶器片4点、礫2点が出土している。第188図1の土器高台付杯は逆位で南部の床面から、2の土器高台付杯の底部片と3の須恵器蓋のつまみ部は遺構確認面から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第585号住居跡より新しい。

第583号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第188図 1	高台付杯	A 165 B 67 D 66 E 11	口縁部一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削りナデ。高台貼り付け後ナデ。体部下面下端回転ヘラ削り。体部から口縁部外面ロタナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 橙色(外面) 普通	P 7248 PL 74 南部床面 95%
	土器	B (18) D [52] E 08	高台部から底部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。	底部ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 橙色(外面) 普通	P 7231 遺構確認面 5%
	蓋	B (15) F 25	つまみ部片。ボタン状を呈する。	ナデ。	砂粒・雲母・長石 黒灰色 普通	P 7232 遺構確認面 5%
	須恵器					

第584号住居跡（第189図）

位置 調査7区南西部、O11a:区。

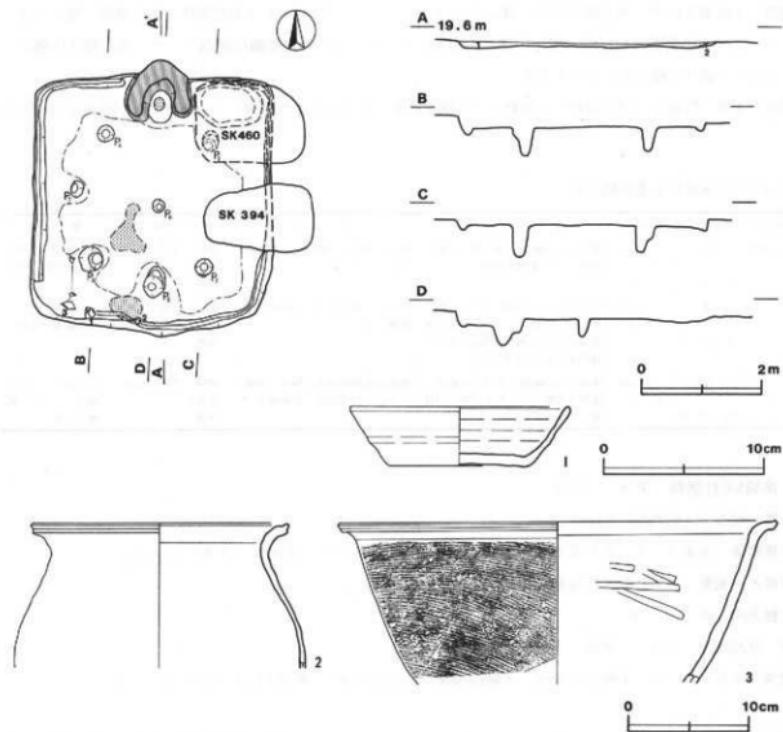
重複関係 東壁部分が第394・460号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.20m、短軸3.95mの方形である。

主軸方向 N=0°

壁 東壁の一部は擾乱を受けているため、確認できなかった。壁高は8～23cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁下の一部と南西コーナー壁下は確認できなかったが、全周していたと推定される。上幅約22cm、下



第189図 第584号住居跡・出土遺物実測図

幅4~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

**床** ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。北東コーナー部に長径110cm、短径70cmの楕円形で、深さ20cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。中央部と南壁際に焼土ブロックが確認されている。

**竈** 北壁中央部に構築されている。袖部の痕跡と火床部しか確認できなかった。規模は、両袖部幅110cmと推定される。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

**ピット** 7か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径約30cmの円形で、深さ約50cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径30cmの円形で、深さ43cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P<sub>6</sub>は径20cmの円形で、深さ28cmであり、中心部に位置する。P<sub>7</sub>は径24cmの円形で、深さ21cmであり、西壁際に位置する。いずれも性格不明である。

**覆土** 2層からなる。第2層は竈の覆土である。覆土が薄いため、堆積状況は確認できなかった。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量、ゴツゴツしている

遺物 土器片69点、須恵器片15点、礫2点が出土している。第189図1の須恵器は南西壁際の覆土下層から、2の土器は南壁際の覆土中層から出土している。3の須恵器は南西コーナー部の覆土中層から出土した破片を接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。重複している第394・460号土坑より古い。

第584号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	直溝値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189図 1	壺	A [136] B 37 C 86	体部から口縁部一部欠損。平底。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部へテ割り。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	P 7233 60% 南西壁際覆土下層
	壺	A [214] B (119)	体部上段から口縁部にかけての破片。 体部上段は内傾して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口番部は上方につまみ上げる。	体部内・外面ナダ。口縁部内・外面横模ナダ。	砂粒・雲母 に赤褐色 普通	P 7234 5% 南西壁際覆土中層
	瓶	A [360] B (125)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面横位の平行叩き、内面へラナダ。口縁部内・外面横模ナダ。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	P 7235 10% 南西コーナー部 覆土中層
2	土器					
3						

第585号住居跡(第187・190図)

位置 調査7区南西部、N10a区。

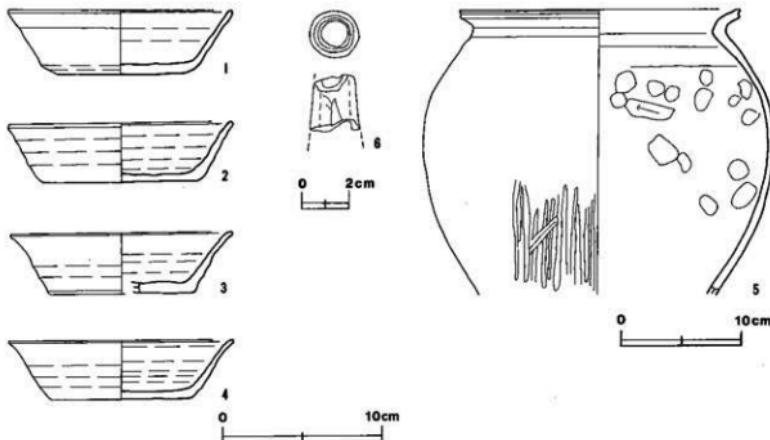
重複関係 南東コーナー部を第583号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸4.00m、短軸3.70mの方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は28~33cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅25~30cm、下幅約20cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。



第190図 第585号住居跡出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。北東コーナーに長径70cm、短径40cmの梢円形で、深さ28cmの掘り込みを確認できた。覆土から灰が多量に出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部の一部が東西方向のトレンチャーにより擾乱を受けている。規模は、竈口部から煙道部まで80cm、両袖部幅100cmである。火床部は、赤変化してゴツゴツしている。

#### 竈土層解説

- 1 黄 色 焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 にじむ褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、炭化物
- 5 極暗赤褐色 焼土粒子中量

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径20～30cmの円形で、深さ40～50cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径14cmの円形で、深さ22cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 12層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。第5層は竈の覆土である。

#### 土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 明暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 赤褐色 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量
- 4 黑褐色 ローム粒子微量
- 5 にじむ赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量、ゴツゴツしている
- 6 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 7 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 8 黑褐色 ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子多量
- 9 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 10 黑褐色 ローム中・小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 11 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子中量
- 12 黑褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量

遺物 土師器片235点、須恵器片40点、土製品1点、陶器片9点、礫2点が出土している。第190図1の須恵器片は、竈内と竈前の覆土下層から出土した破片を接合したものである。2の須恵器片は中央部からやや西側の覆土中層から、3の須恵器片は南東部の覆土中層から、4の須恵器片は竈内の覆土下層から、5の土師器片は竈東側の床面から、6の土製品は竈西側の覆土中層から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀中葉と考えられる。重複している第583号住居跡より古い。

第585号住居跡出土遺物観察表

国版番号	器種	剖面図(m)	器 形 の 特徴	手 法 の 特徴	胎土・色調・焼成	備考
第190図 1	壺	A [140]	体部から口縁部一部欠損。平底。	底部削除へラ削り。体部から口縁部内・外側面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・小石 灰色 普通	P 7236 50% P L 74 竈内と竈前覆土下層
	須恵器	B 40	体部から口縁部は外傾して立ち上る。			
		C 80	がる。			
2	壺	A [140]	底部から口縁部にかけての破片。	底部へラ削り。体部から口縁部内・外側面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・石英 灰青色 普通	P 7237 40% 中央部や西側 覆土中層
	須恵器	B 37	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上る。			
		C [96]	がる。			
3	壺	A [138]	底部から口縁部にかけての破片。	底部削除へラ削り。体部から口縁部内・外側面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・石英 灰色 普通	P 7236 40% 南東部覆土中層
	須恵器	B 38	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。			
		C [90]				
4	壺	A [140]	底部から口縁部にかけての破片。	底部へラ削り。体部から口縁部内・外側面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・石英 黄灰色 普通	P 7239 40% 竈内覆土下層
	須恵器	B 36	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。			
		C 88				

図版番号	器種	計画値(cm)	器 形 の 特 故	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第190回 5	甕 土師器	A [230] B [238]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内側して立ち上がる。縁部 でくびれ、口縁部は外反する。口 唇部は上方につまみ上げる。	体部外面下位へラ磨き、内面指頭 押圧。口縁部内・外面模ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぼい褐色 普通	P 7240 30% P L 74 甕東側床面

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
6	不明土製品	19~21	(23)	1.2~1.4	(498)	竈西側覆土中層	D P 7004 P L 101

### 第586号住居跡（第191図）

位置 調査7区南西部、N11j区。

規模と平面形 一辺4.00mの方形である。

主軸方向 N-4°-E

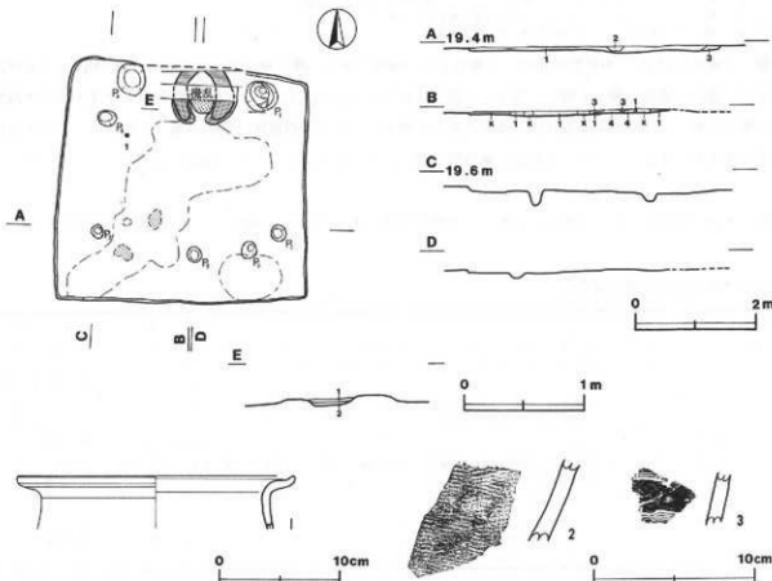
壁 壁高は4~9cmである。

床 ほぼ平坦で、竈前から南西コーナーに向かって特に硬化している。

竈 北壁中央部に構築されている。トレンチャーによる擾乱がはなはだしく、袖部と火床部の一部しか確認できなかった。規模は、両袖部幅100cmと推定される。火床部は、赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 煙土粒子中量、ローム粒子少量
- 2 赤褐色 煙土中ブロック・燒土粒子多量、炭化材



第191図 第586号住居跡・出土遺物実測図

ピット 7か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径20～40cmの円形で、深さ40～60cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径20cmの円形で、深さ9cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P<sub>6</sub>は径20cmの円形で、深さ14cmであり、P<sub>4</sub>の南側に位置する。P<sub>7</sub>は径20cmの円形で、深さ42cmであり、P<sub>2</sub>の東側に位置する。いずれも補助柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量
- 4 黄色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土器片37点、須恵器片4点、陶器片5点、礫2点が出土している。第191図1の土器部はP<sub>6</sub>の南東部の覆土下層から出土している。2は須恵器部で外面に横位の平行叩きが、3の須恵器部には外面に櫛描波状文が施されている。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡では、壁溝は確認できなかった。また、壁の立ち上がり状況も確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。

第586号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	目測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	黏土・色調・焼成	備考
第191図 1	甕 土 器	A [23.0] B (43)	口縁部片。頸部でくびれ、口縁部は大きく外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 7241 5% P <sub>6</sub> 南京部 覆土下層

### 第587号住居跡 (第192図)

位置 調査7区西南部、O11c区。

重複関係 西部が第20号溝、北西コーナー部が第430号土坑に掘り込まれている。第20号溝は床面を掘り込んでいる。本跡の窓が第437号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.30m、短軸3.70mの長方形である。

主軸方向 N-70°-E

壁 西壁は確認できなかった。壁高は4～7cmである。

壁溝 北西コーナー壁下では確認できなかったが、全周していと推定される。上幅約20cm、下幅6～10cm、深さ6～10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

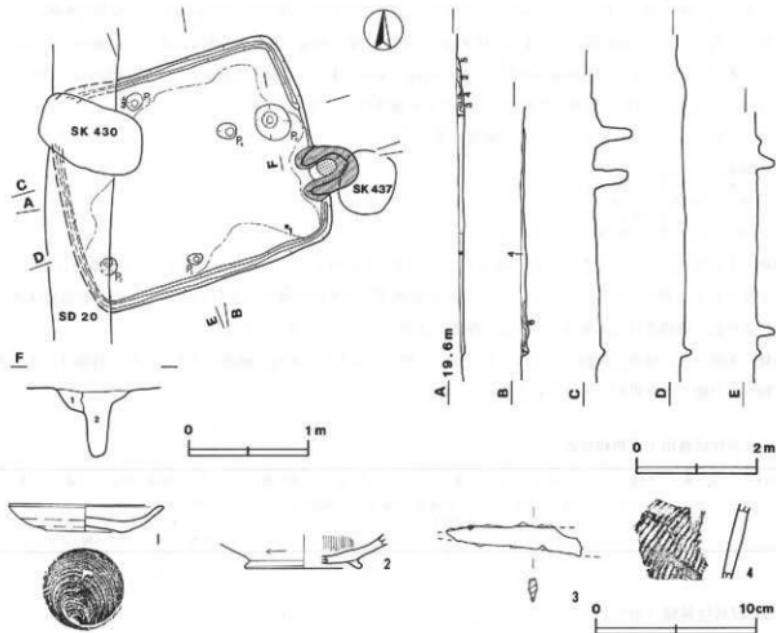
窓 東壁中央部から南寄りに構築されている。覆土が薄いため、袖部の痕跡と火床部しか確認できなかった。

規模は、両袖部幅100cmと推定される。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。南壁際にあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ29cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットについては、規模や配置に規則性がなく性格不明である。

P<sub>1</sub>土層解説

- 1 薄褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼土粒子微量、軟らかい
- 2 薄褐色 ローム小ブロック、ローム粒子少量、焼土中ブロック微量



第192図 第587号住居跡・出土遺物実測図

覆土 7層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子中量、燒土粒子少量
- 2 赤褐色 ローム粒子中量、燒土中プロック少量
- 3 黄色 ローム粒子多量、燒土粒子、炭化粒子中量
- 4 黄色 ローム粒子多量、燒土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子、燒土中プロック、燒土粒子多量
- 6 黑褐色 ローム小プロック、ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子中量
- 7 黑褐色 ローム中・小プロック、ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子少量

遺物 土器師片37点、須恵器片4点、鐵製品（刀子）1点、陶器片3点が出土している。第192図1の土器師皿は南東コーナー部の床面から、2の土器師高台付杯の底部片はP<sub>2</sub>の覆土中から、3の刀子はP<sub>3</sub>西側の床面から出土している。4は須恵器甕体部片で外面に縱位の平行叩きが施されている。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第20号溝、第430号土坑より古く、第437号土坑より新しい。

第587号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第192図 1	皿	A 9.6 B 1.7 C 4.8	平底。体部から口縁部は内厚気味に立ち上がる。	底部回転系切り。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぼい橙色 普通	P 7242 70% 南東コーナー部床面
	土師器					
	高台付环	B (2.1) D [6.2]	高台部から体部にかけての被片。 高台は近く「ハ」の字状に聞く。	底部ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部外面下端回転ヘラ削り。内面丁寧なヘラ磨き。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぼい橙色 普通	P 7243 10% P:壁土巾
2	土師器	E 0.5	体部は外傾する。			
図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
3	刀子	(8.6)	2.1	0.6 (15.0)	P:西側床面	M 7012

## 第588号住居跡（第193・194図）

位置 調査7区中央部、N11da区。

重複関係 西部が第564号住居跡を、東が第655号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 [3.2]m、短軸 [3.1]mの方形と推定される。

主軸方向 N-90°-E

壁 南東コーナーだけ確認できた。壁高は約5cmである。

壁溝 南東コーナー壁下のみ確認できた。上幅17~20cm、下幅約6cm、深さ8cmで、断面形はU字形をしている。

床 等間隔のトレンチャーによる擾乱を受けているが、その合間に踏み固められた硬化面が残存している。

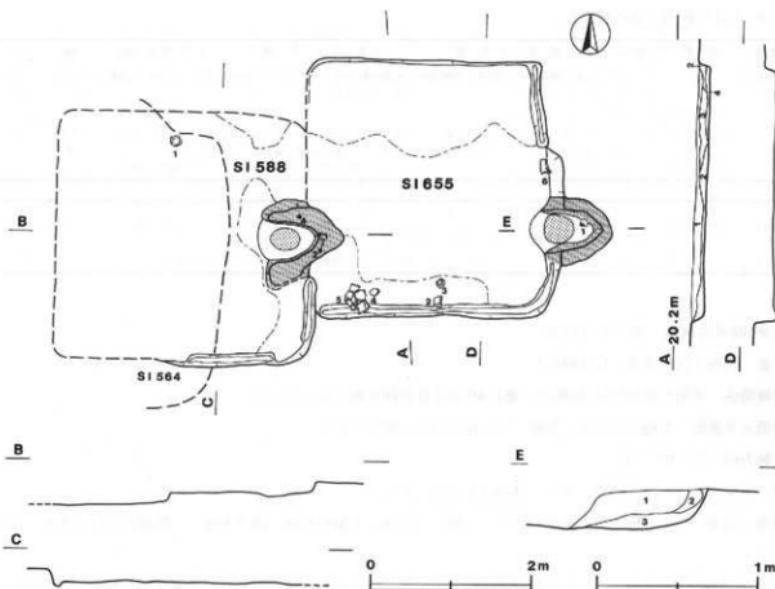
竈 東壁のはば中央部に構築されている。覆土が薄く、トレンチャーによる擾乱もはなはだしいため、袖部と火床部しか確認できなかった。規模は、両袖部幅100cmと推定される。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、あまり赤変硬化していない。

遺物 土師器片105点、須恵器片3点、陶器片3点、礫4点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第194図1の高台付环、3の皿は遺構確認面から、2の高台付环は竈内から出土している。4の甕の口縁部片は竈北袖部内から出土しており、袖部補強材として使用されたものと考えられる。陶器片は混入したものと考えられる。

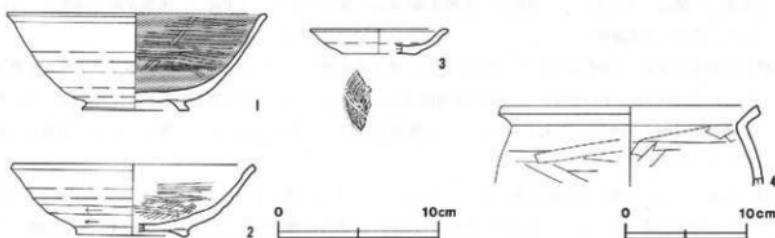
所見 本跡のピットと覆土の堆積状況は確認できなかった。また、壁の立ち上がり状況もほとんど確認できなかった。壁が確認できなかつた部分は、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第564・655号住居跡より新しい。

第588号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第194図 1	高台付环	A 16.0 B 6.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 高台は近く「ハ」の字状に聞く。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部外面ロクロナダ、内面丁寧なヘラ磨き。内面黑色処理。	砂粒・長石 明褐色(外面) 普通	P 7244 60% P L 74 遺構確認面
	土師器	D 6.6 E 0.7	体部は内厚気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。			
2	高台付环	A [15.0] B 4.4	高台部から口縁部にかけての被片。 高台は近く「ハ」の字状に聞く。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部外面下端回転ヘラ削り。体部から口縁部外面ロクロナダ、内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・赤色粒子 明赤褐色 普通	P 7245 30% 竈内
	土師器	D [6.8] E 0.4	体部は内厚気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。			



第193図 第588・655号住居跡実測図



第194図 第588号住居跡出土遺物実測図

国版番号	器種	片調査(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第194図 3	皿 土師器	A [ 8.4] B [ 1.6] C [ 5.0]	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内壁気球形に立ち上がり。口 縁部は外反する。	底部回転糸切り。体部・口縁部内・ 外面ロクロナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 7246 10% 遺構確認面
4	甕 土師器	A [21.1] B [ 6.4]	体部上部から口縁部にかけての破 片。体部は内脣して立ち上がる。 口縁部は「く」の字形に外傾する。 口縁部は上方につまみ上げる。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・ 外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 橙色 普通	P 7247 10% 遺北袖部内

第591号住居跡（第195図）

位置 調査7区南部、O11d・区。

規模と平面形 長軸3.05m、短軸2.70mの長方形である。

主軸方向 N-75°-E

壁 壁高は5~12cmである。

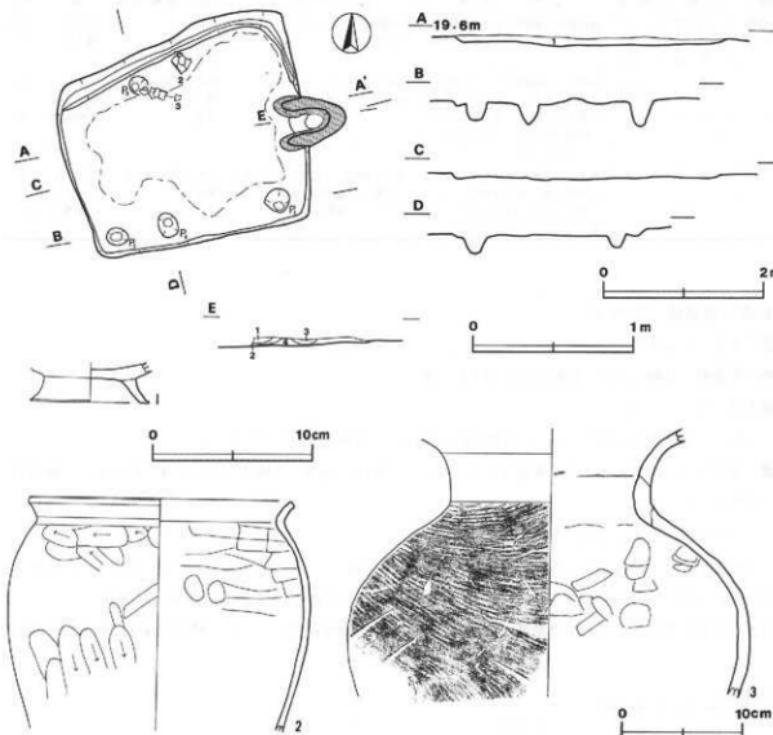
壁溝 北壁下と東壁下の一部に確認できた。上幅約20cm、下幅6~10cm、深さ約5cmで、断面形はU字形をしている。

床 やや起伏があり、全体的に踏み固められている。

竈 東壁中央部に構築されている。覆土が薄いため、袖部の痕跡と火床部しか確認できなかった。規模は、両袖部幅60cmと推定される。火床部は、床面を約4cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 煙土粒子中量、炭化粒子少量
- 2 黒褐色 煙土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 煙土粒子少量
- 4 桃紅赤褐色 煙土粒子微量、灰化材



第195図 第591号住居跡・出土遺物実測図

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>3</sub>は径約20cmの円形で、深さ20～30cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際西寄りにあるP<sub>4</sub>は径25cmの円形で、深さ26cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 単一層である。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片53点、須恵器片16点、鉄滓1点、礫1点が出土している。第195図2の土師器壺は北壁際の覆土下層から出土している。3の須恵器壺は北部の覆土下層から出土した破片を接合したものである。1の土師器高台付杯の底部片は覆土中から、鉄滓は北部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。鉄滓が出土しているが、出土状況から判断して、混入したものと考えられる。

第591号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第195図 1 土 師 器	高 台 付 壺	B (25) D [74] E 15	高台から底部にかけての破片。 高台は「ハ」の字形に開く。平底。	底部面版へラ剝り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・ぶい橙色 普通	P 7254 10% 覆土中
	壺	A [21.8] B (18.9)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内側して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面へラ剝り。内面へナナナ・指痕押捺。口縁部内・外側横ナナ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P 7255 30% P L 74 北壁際覆土下層
	須 惠 器	B (22.3)	体部から口縁部にかけての破片。 口唇部欠損。体部は内側して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面横位の平行印き、内面当て具痕。口縁部外側横ナナ、内面へナナナ。輪積み質。	砂粒・雲母・小石 褐灰色 普通	P 7256 30% P L 74 北部覆土下層

#### 第592号住居跡(第196図)

位置 調査7区南部、O12e区。

規模と平面形 長軸3.70m、短軸3.66mの方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 東壁の一部が擾乱を受けている。壁高は25～33cmで、外傾して立ち上がる。

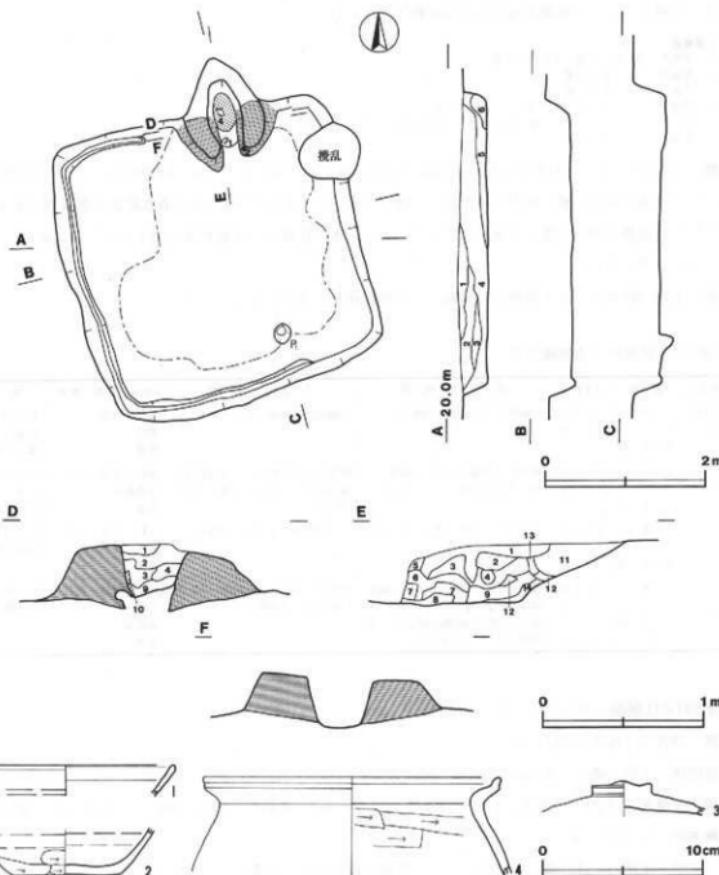
壁溝 東壁下から南壁下の一部は確認されていない。上幅20～30cm、下幅4～10cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部から東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約95cmで、両袖部幅約120cmである。火床部は床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子多量
- 2 黒褐色 粘土粒子多量。ローム粒子中量
- 3 灰褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量。焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黑褐色 焼土粒子中量



第196図 第592号住居跡・出土遺物実測図

- |           |                        |
|-----------|------------------------|
| 5 黒褐色     | 燒土粒子多量                 |
| 6 棕褐色     | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量      |
| 7 黒褐色     | ローム小ブロック・ローム粒子中量       |
| 8 棕褐色     | 燒土粒子・炭化粒子微量            |
| 9 紅褐色     | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 10 黒褐色    | 粘土粒子多量                 |
| 11 黒褐色    | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量      |
| 12 にぶい赤褐色 | 粘土粒子多量・燒土粒子・炭化粒子微量     |
| 13 紅褐色    | 燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量       |
| 14 咖褐色    | ローム粒子・燒土粒子・粘土粒子中量      |

ビット 南壁際にあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ21cmである。位置的に出入り口施設に伴うビットと考えられる。

**覆土** 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、軟らかい
- 4 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 褐褐色 ローム粒子少量

**遺物** 土器片148点、須恵器片42点、陶器片1点、炭化米が出土している。第196図1、2の須恵器は北東コーナー部の覆土下層と竈内から出土した破片を接合したものである。3の須恵器蓋は南西部の覆土中層から、4の土器部は竈内の中層から出土している。竈火床部からは炭化米が出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。

第592号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第196図 1 須恵器	壺	A [136] B [19]	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・紫母 黒色 普通	P 7257 10% 北東コーナー部 覆土下層と竈内
	壺	B [28] C 66	底部から体部にかけての破片。半瓦。体部は外傾して立ち上がる。	底部ハラ削り後ナデ。体部外面下端手持ちハラ削り、上端・内面クロナデ。	砂粒・紫母・石英 灰黄褐色 普通	P 7258 40% 北東コーナー部 覆土下層と竈内
第593号 須恵器	蓋	B [22] F 37 G 67	天井部片。ボタン状のつまみが付く。	天井部外側上半回転ヘラ削り。	砂粒・紫母・石英 灰色 普通	P 7259 30% 南西部覆土中
	壺	A [186] B [59]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内側で立ち上がる。頭部ぐりげ、口縁部は外反する。口部は上方につまみ上げる。	体部上位外面ナデ、内面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・紫母・長石・ 石英 赤褐色 普通	P 7260 5% 竈内覆土中層
	土器部					

**第593号住居跡（第197図）**

**位置** 調査7区南部、O11b区。

**重複関係** 本跡の竈が、第594号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と平面形** 北部から東部にかけて搅乱を受けているが、長軸[3.3]m、短軸[3.0]mの方形と推定される。

**主軸方向** N-83°-E

**壁** 北壁と東壁の一部は確認できなかった。壁高は約15cmで、外傾して立ち上がる。

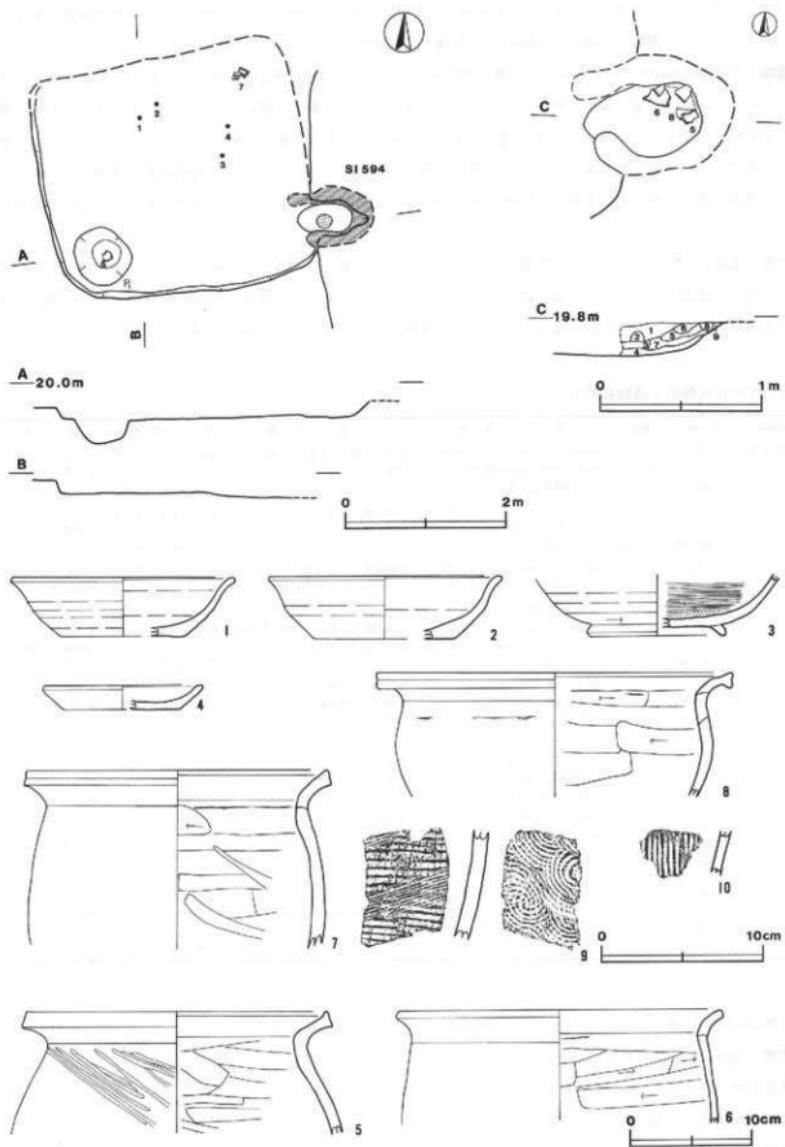
**床** ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

**竈** 東壁の南部に構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約95cm、両袖部幅約70cmである。火床部は、

床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は遺存している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

**竈土層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 2 稲ぬ褐色 焼土粒子中量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 稲ぬ褐色 焼土粒子多量
- 5 赤褐色 焚土中ロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 6 黑褐色 焼土粒子中量
- 7 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量
- 9 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子中量



第197図 第593号住居跡・出土遺物実測図

ピット 南西コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、径約80cmの円形で、深さ30cmであり、底面から5の土師器窓の破片が出土している。規模と位置から判断して、貯蔵穴の可能性がある。

遺物 土師器片164点、須恵器片23点、礫3点が出土している。第197図1から8はいずれも土師器である。1の杯と2の杯は北部の覆土下層から、3の高台付杯は中央部の覆土下層から、4の皿は中央部から北側の覆土中層から出土している。5の窓は窓内とP<sub>1</sub>の底面から出土した破片を接合したものである。6と8の窓は窓内から、7の窓は北東コーナー部の覆土下層から出土している。9と10は須恵器窓の体部片である。9は外面に横位の平行叩きを施し、内面に同心円状の当て具痕が見られる。10は外面に縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡はトレッチャによる搅乱がはなはだしいため、覆土の堆積状況は確認できなかった。また、壁溝と柱穴も確認できなかった。壁が確認できなかった部分は、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀中葉と考えられる。重複している第594号住居跡より新しい。

第593号住居跡出土遺物観察表

田取番号	種類	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	駆出・色調・焼成	備考
第197図 1 土師器	杯	A [118] B 36 C [76]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内唇気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部ヘラ切り。体部から口縁部内・ 外側クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7261 30% 北部覆土下層
	杯	A [144] B 39 C [86]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内唇気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・ 外側クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7263 10% 北部覆土下層
	高台付杯	B (35) D [84] E 0.7	高台部から体部にかけての破片。 高台は短く「フ」の字状に開く。 体部は内唇気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナダ。高台貼り付けナダ。 体部外側クロナダ、内側丁寧なヘラ磨き。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7262 20% 中央部覆土下層
2 土師器	皿	A [98] B 15 C [72]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外側して 立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部・口縁部内・ 外側クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P 7264 30% 北部覆土下層
	窓	A [250] B (100)	体部上位から口縁部にかけての破片。 体部は内唇して立ち上がる。 頭部でくびれ、口縁部は外反する。 口唇部は上方につまみ上げる。	体部外側ヘラ磨き、内面ヘラナダ。 口縁部内・外側横ナダ。	砂粒・小石 にぶい赤褐色 普通	P 7265 5% 窓内とP <sub>1</sub> 、底面
	窓	A [266] B (93)	体部上位から口縁部にかけての破片。 体部は内唇気味に立ち上がり、 口縁部は外反する。	体部外側ナダ・内面ヘラナダ。口 縁部内・外側横ナダ。輪積み底。	砂粒・長石・小石・ 赤色粒子 明赤褐色 普通	P 7266 5% 窓内
7 土師器	窓	A [186] B (111)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内唇気味に立ち上がり。 頭部でくびれ、口縁部は外反する。 口唇部は上方につまみ上げる。	体部外側ナダ・内面ヘラナダ。口 縁部内・外側横ナダ。輪積み底。	砂粒・長石・小石・ 石英 明赤褐色 普通	P 7267 5% 北東コーナー部 覆土下層
	窓	A [222] B (77)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内唇して立ち上がる。 頭部でくびれ、口縁部は外反する。 口唇部は上方につまみ上げる。	体部外側ナダ・内面ヘラナダ。口 縁部内・外側横ナダ。輪積み底。	砂粒・雲母・長石・ 小石・石英 赤褐色 普通	P 7268 5% 窓内

#### 第594号住居跡（第198・199図）

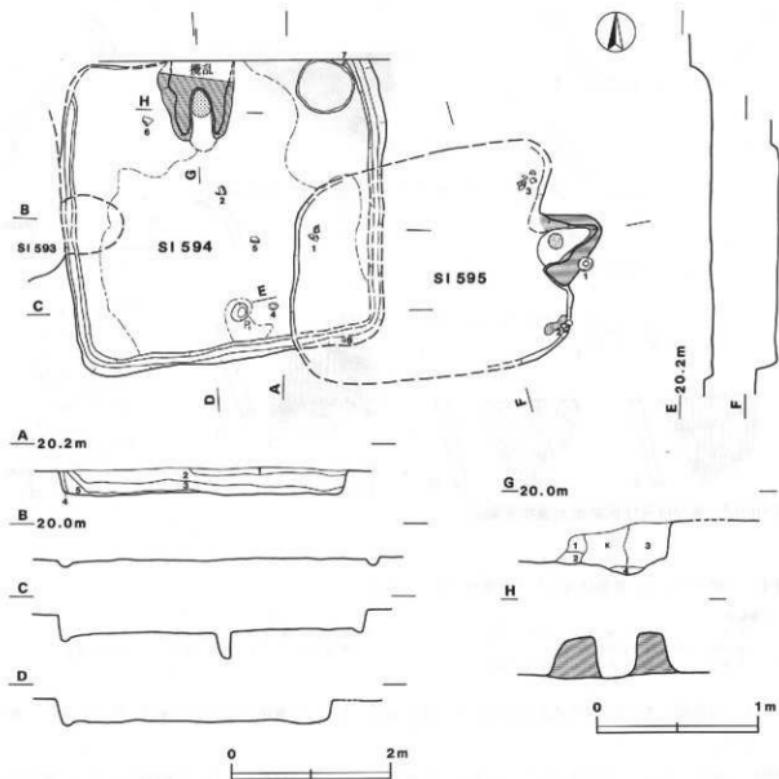
位置 調査7区南部、O11b区。

重複関係 西部が第593号住居跡、東部が第595号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸4.00m、短軸3.80mの方形である。

主軸方向 N-6°-W

壁 北壁と第593・595号住居跡の重複部分の壁の立ち上がりは確認できなかった。壁高は約27cmで、外傾して



第198図 第594・595号住居跡実測図

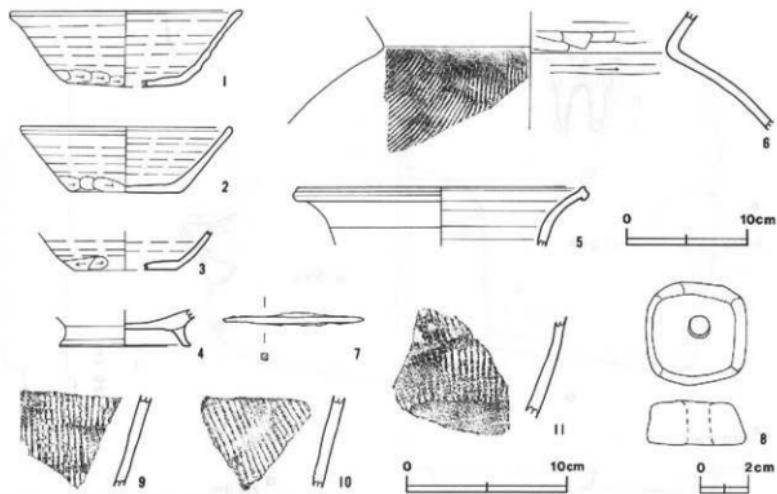
立ち上がる。

**壁溝** 北壁下では確認できなかった。上幅約18cm、下幅8~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。  
**床** ほぼ平坦で、よく踏み固められている。北東コーナーに長径70cm、短径60cmの楕円形で、深さ10cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

**竈** 北壁中央部に構築されている。煙道部の一部がトレンチャによる擾乱を受けている。規模は、焚口部から煙道部まで約80cm、両袖部幅約80cmと推定される。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がるとして推定される。

#### 遺土層解説

- 1 褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 2 にじむ褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子少量
- 4 極端赤褐色 焼土粒子多量、炭化物



第199図 第594号住居跡出土遺物実測図

覆土 5層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

- 4 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 南壁際にあるP<sub>1</sub>は径約20cmの円形で、深さ36cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土器片112点、須恵器片41点、石製品(紡錘車)1点、不明鉄製品1点、灰釉陶器片1点、繰1点が出土している。第199図1から6はいずれも須恵器である。1の杯は南東部の覆土下層から、2の杯は逆位で中央部の覆土下層から、4の高台付杯の底部は南部の覆土中層から、5の甕の口縁部は中央部の覆土上層から、6の甕は北西部の覆土下層から、3の杯は覆土中層から、7の不明鉄製品は北東コーナー部の床面から出土している。8の紡錘車は南東コーナー部の床面から出土しており、砥石を転用したものである。9から11は須恵器甕の体部片で、いずれも外面に継位の平行叩きが施されている。覆土中から灰釉陶器の細片が出土している。器種は不明である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第593・595号住居跡より古い。

第594号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	直測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199図 1 須恵器	杯	A 145 B 48 C [73]	底部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 7269 60% P L 74 南東部覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199回 2	環	A [31] B 41 C [69]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部下面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 黄灰色・普通	P 7270 40% 中央部覆土下層
	環	B (24) C [64]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部下面下端手持ちヘラ削り。体部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	P 7271 10% 覆土中
	高台付環	B (23) D 88 E 13	高台部から底部にかけての破片。平底。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P 7272 10% 南部覆土中層
第5回 5	甕	A [40] B (47)	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部外側直下に棱が並び、上方につまみ上げる。	口縁部外側横ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 7273 5% 中央部覆土上層
	甕	B (97)	体部上部から口縁部にかけての破片。体部上位は内傾する。瓶部で「く」の字状にくびれ。口縁部は外傾する。	体部外面上位斜位の平行叩き、内面ナデ。口縁部外側横ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 良好	P 7274 5% 北西部覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	不明鉄製品	8.8	0.8	0.5	8.2	北東コーナー部床面	M 7014 P L 74

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
8	筋縫草	4.2	1.9	0.9	49.0	南東コーナー部床面	Q 7005 砂石を軸用 繩縫苔 P L 102

### 第595号住居跡（第198・200図）

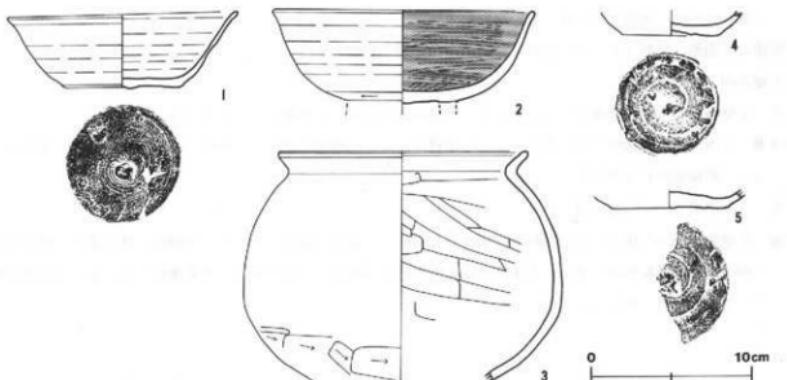
位置 調査7区南部, O11b区。

重複関係 西部が第594号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.50m, 短軸2.77mの長方形である。

主軸方向 N-78°-E

壁 壁高は約22cmで、外傾して立ち上がる。



第200図 第595号住居跡出土遺物実測図

**床** ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

**竈** 東壁中央部に砂質粘土で構築されている。トレンチャによる搅乱を受けているため、堆積状況と北袖部は確認できなかった。南袖部の一部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで約80cmと推定される。火床部は赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土師器片が出土している。

**遺物** 土師器片103点、須恵器片22点、陶器片1点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。

第200図1の杯は逆位で竈南袖部の上部から、2の高台付杯は南東コーナー部の覆土下層から出土している。

3の小形甕は北東コーナー部の覆土中層から出土した破片を接合したものである。4と5の皿底部片は、回転ヘラ切り痕を残している。陶器片は混入したものと考えられる。

**所見** 本跡では、壁溝とピットは確認できなかった。覆土の堆積状況は、搅乱がはなはだしいため不明である。時期は、出土遺物から判断して10世紀中葉と考えられる。重複している第594号住居跡より新しい。

第595号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画(m)	器 形 の 特徴	手 法 の 特徴	胎土・色調・焼成	備考
第200図 1	杯	A 142 B 47 C 70	口縁部一部欠損、平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ切り。体部から口縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P 7275 96% P L 74 竈南袖部上部
	高台付杯	A [164] B (56)	高台部と口縁部の一部欠損。体部は内側外味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。体部・口縁部外面クロコナデ、内面丁寧なハラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい黒褐色(外面) 普通	P 7276 70% P L 74 南東コーナー部覆土下層
	土 師 器	A [154] B (143)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側外味で立上がり、中位に最大径をもつ。底部でくびれ、口縁部は外傾する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面下位ヘラ削り、中位から上位ナデ。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P 7277 30% P L 74 北東コーナー部 覆土中層
2	小形甕	A [154]	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面下位ヘラ削り、中位から上位ナデ。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P 7277 30% P L 74 北東コーナー部 覆土中層
	土 師 器	B (56)	体部は内側外味で立上がり、中位に最大径をもつ。底部でくびれ、口縁部は外傾する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面下位ヘラ削り、中位から上位ナデ。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P 7277 30% P L 74 北東コーナー部 覆土中層

#### 第596号住居跡（第201～203図）

**位置** 調査7区南部、O11c区。

**重複関係** 全体的に第600号住居跡に掘り込まれ、北東部が第597号住居跡を掘り込んでいる。第600号住居跡の掘り込みは、床面までは達していない。

**規模と平面形** 長軸 [3.7]m、短軸 [3.0]mの長方形と推定される。

**主軸方向** N-15°-W

**壁** 東壁の立ち上がりは確認できなかった。壁高は20～27cmで、外傾して立ち上がる。

**壁溝** 北西コーナー部壁下から南西コーナー部壁下にかけて確認できた。上幅約14cm、下幅約8cm、深さ約9cmで、断面形はU字形をしている。

**床** ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

**竈** 北壁中央部から東寄りに砂質粘土で構築されている。袖部は遺存している。規模は、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅95cmである。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

## 覆土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・焼土粒子中量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 5 黒褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子中量
- 7 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 8 黑褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 9 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子中量

ピット 南東コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、長径60cm、短径50cmの椭円形で、深さ30cmであり、覆土中から第203

図2の高台付杯が出土している。規模と位置から判断して、貯蔵穴の可能性がある。

覆土 4層からなる。堆積状況から人為堆積と考えられる。

## 土層解説

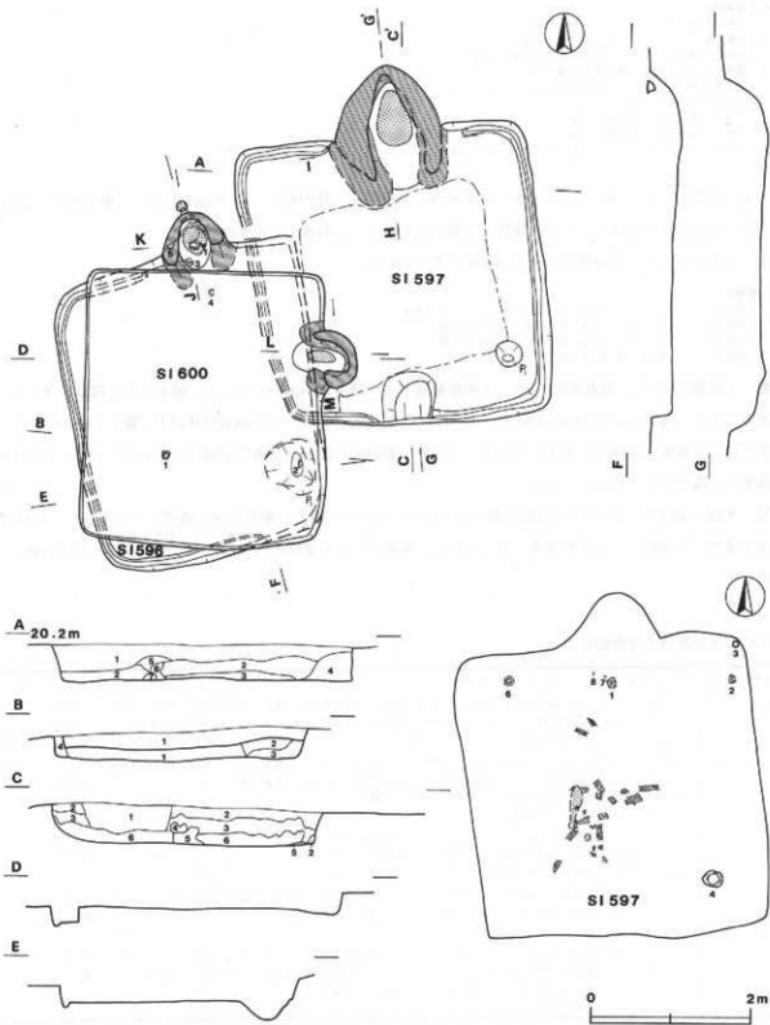
- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子中量、焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

遺物 土器器片485点、須恵器片139点、不明鉄製品1点、礫2点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第203図1の皿は正位で、3の皿は逆位で窓内から、2の高台付杯はP<sub>1</sub>覆土上層から、4の皿は逆位で窓口部前から出土している。5の甕は窓内から出土した破片を接合したものである。6の不明鉄製品は覆土中から出土している。

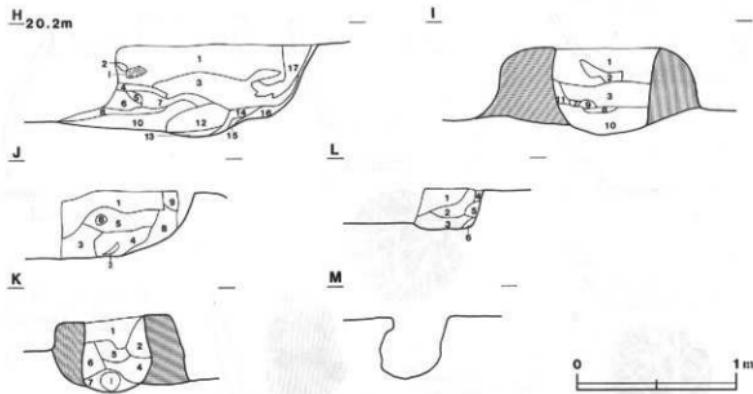
所見 本跡は全体的に第600号住居跡に掘り込まれているため、覆土の堆積状況は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第600号住居跡より古く、第597号住居跡より新しい。

## 第596号住居跡出土遺物観察表

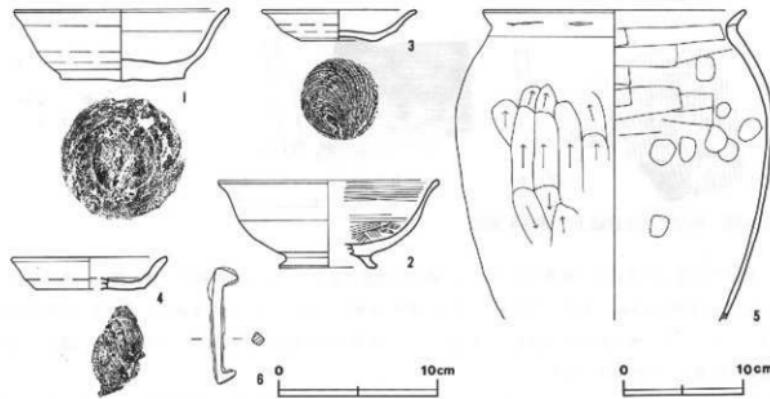
回収番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	焼土・色調・焼成	備考	
						P	L
第203図 1	杯	A 13.5 B 4.5 C 7.8	平底。底部はやや突出する。体部は内縁気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部ハラ切り後ナデ。体部から口縁部にかけての破片。	砂粒・長石・小石・赤色粒子 緑部内・外面クロナデ。	P 7278 P L 74	100% 窓内
	高台付杯	A [137] B 55 C [60]	高台部から口縁部にかけての破片。 高台は近く「八」の字状に聞く。 体部は内縁気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	高台割り付け後ナデ。体部から口縁部外面クロナデ、内削丁寧なハラ磨き。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 7279 P L 74	40% P; 覆土上層
	土師器	E 9.8					
2	皿	A [96] B 18 C 46	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内縫して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。体部・口縁部内外面クロナデ。	砂粒・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7280	55% 窓内
	土師器	B 20 C [68]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外縫して立ち上がる。	底部回転ハラ削り。体部・口縁部内外面クロナデ。	砂粒・長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7281	30% 窓突口部窓
	甕	A [220] B (255)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内縫気味に立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部ぐくびれ、口縁部は外反する。	体部外縫側のハラ削り、内面ハラナデ・指痕押捺。口縁部内・外面横ナデ。輪積み構。	砂粒・雲母・小石・石英・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7282	30% 窓内
5	土師器						
	角釘	7.7	0.9	0.8	150	覆土中	M 7015
回収番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	角釘						



第201図 第596・597・600号住居跡実測図（1）



第202図 第596・597・600号住居跡実測図（2）



第203図 第596号住居跡出土遺物実測図

#### 第597号住居跡（第201・204図）

位置 調査7区南部, O12c1区。

重複関係 西部が第596・600号住居跡に掘り込まれているが, 床面までは達していない。

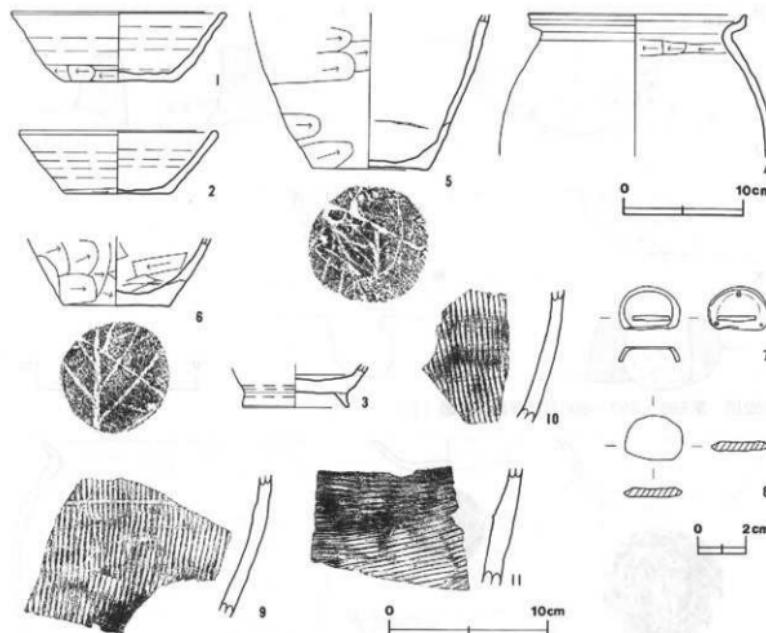
規模と平面形 一辺3.70mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は38~54cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅10~20cm, 下幅4~10cm, 深さ約10cmで, 断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で, よく踏み固められている。南壁中央部から床面向かって, スロープ状になっており, 上面は踏み固められている。位置的なことも加味すると出入り口施設の可能性がある。



第204図 第597号住居跡出土遺物実測図

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部は良好に遺存している。規模は、焚口部から煙道部まで150cm、両袖部幅150cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第5層と第6層が崩落土と考えられる。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土器片と須恵器片が出土している。

遺土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・砂質粘土微量
- 2 褐褐色 砂質粘土少量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・少量
- 5 褐褐色 砂質粘土多量、焼土小ブロック・燒土粒子中量、炭化粒子少量
- 6 褐褐色 烧土粒子多量、焼土中ブロック・燒土粒子少量
- 7 暗褐色 烧土粒子少量
- 8 暗褐色 烧土粒子・炭化粒子中量、炭化材
- 9 黑褐色 烧土粒子・炭化粒子多量
- 10 黑褐色 烧土中ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子少量
- 11 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子少量・砂質粘土微量
- 12 褐褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 13 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量
- 14 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 15 にじむ褐色 砂質粘土・焼土中ブロック・燒土粒子中量
- 16 褐色 ローム粒子多量、焼土中ブロック・燒土粒子少量
- 17 褐色 烧土小ブロック多量、燒土粒子・炭化粒子少量

ピット 南東コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、径30cmの円形で、深さ33cmである。性格は不明である。

覆土 7層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 深褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量
3 褐褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
4 褐褐色	ローム粒子中量

5 深褐色	砂質粘土多量、ローム粒子少量
6 暗褐色	ローム粒子少量、軟らかい
7 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子少量

遺物 土器器片342点、須恵器片114点、銅製品（丸瓶、留め具）2点、礫1点、炭化材が出土している。第204図1の須恵器片は逆位で竈火床面から、5の土器器片は竈内から、2の須恵器片、3の須恵器高台付片は北東コーナー部の覆土中層から、4の土器器片は逆位で南東コーナー部の床面から、6の土器器片は逆位で北西コーナー部の床面から、7の丸瓶、8の丸瓶の留め具はセットで竈火床部から、炭化材は中央部の床面から出土している。9から11は須恵器片の体部片で、9と10は外面に縦位、11は横位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。また、床面から柱材と思われる炭化材が出土していることから判断して、焼失家屋と考えられる。重複している第596・600号住居跡より古い。

第597号住居跡出土遺物観察表

記録番号	器種	計量(g)	器形の特徴	手法の特徴	鉢土・色調・焼成	備考
第204図 1	壺	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。	底部ヘラ削り後ナデ。体部外腹下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外縁クロコナデ。	砂粒・雲母・石英 灰黄色 普通	P 7283 40% 竈火床面
	壺	B 43	平底。体部から口縁部は外傾して立上がる。			
	須恵器	C [6.6]	立上がる。			
2	壺	A [12.4]	底部から口縁部にかけての破片。	底部ヘラ削り。体部から口縁部内・外縁クロコナデ。	砂粒・雲母・石英 石英 にぶい黄褐色 普通	P 7284 30% 北東コーナー部 覆土中層
	壺	B 40	平底。体部から口縁部は外傾して立上がる。			
	須恵器	C [6.6]	立上がる。			
3	高台付壺	B (27)	高台部から底部にかけての破片。	底部削輪ヘラ削り。高台貼り付け後ナデ。	砂粒 灰色 普通	P 7285 20% 北東コーナー部 覆土中層
	壺	D 66	平底。高台は「ハ」の字形に開く。			
	須恵器	E 05				
4	壺	A 18.4	体部下位から底部にかけて欠損。	体部内・外削ナデ。口縁部内・外縁削ナデ。	砂粒・雲母・石英 赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 7286 40% P 7286 北東コーナー部 床面
	土器	B (11.7)	体部上位は内傾して立ち上がる。 底部にくびれ、口縁部は外反する。 口縁部は上方にまみ上げる。			
5	壺	B (9.7)	底部から体部下位にかけて欠損。 平底。体部下位は外傾して立ち上がる。	底部木業痕・ナデ。体部外腹下位横位のヘラ削り・内面ナデ。輪郭み痕。	砂粒・雲母・石英 暗褐色 普通	P 7287 10% 竈内
	土器	C 72				
6	壺	B (42)	底部から体部下位にかけて欠損。 平底。体部下位は外傾して立ち上がる。	底部木業痕。体部外腹下位横位のヘラ削り・内面ヘナダ。輪郭み痕。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P 7288 5% 北西コーナー部床面
	土器	C 67				
土器						

記録番号	種別	計測値				出土地點	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	丸瓶	2.6	1.8	0.6	5.20	竈火床部	M 7016 外面に焼けた黒斑が一部残存 P 1.74
8	留め具	2.4	1.9	0.4	2.20	竈火床部	M 7017 丸瓶の留め具

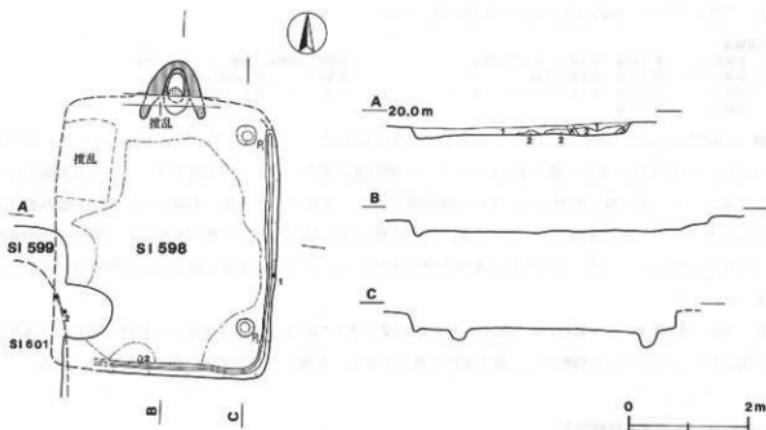
第598号住居跡（第205・206図）

位置 調査7区南部、N11ja区。

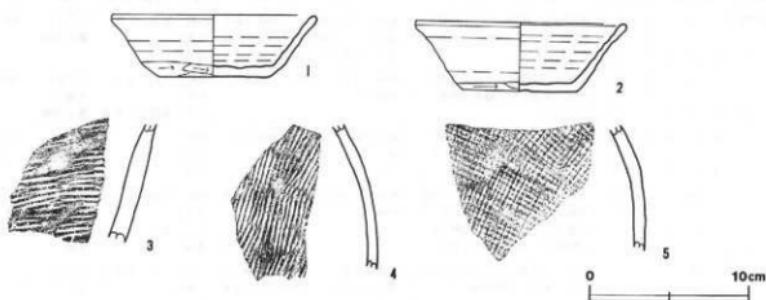
重複関係 西壁際が第599・601号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 南西コーナー部の壁の立ち上がりが確認できなかったが、長軸 [4.5]m、短軸 [3.7]mの長方形と推定される。

主軸方向 N - 4° - E



第205図 第598・599号住居跡実測図



第206図 第598号住居跡出土遺物実測図



第207図 第599号住居跡出土遺物実測図

**壁** 北壁から西壁にかけて確認できなかった。壁高は20~33cmで、外傾して立ち上がる。

**壁溝** 東壁下から南壁下にかけて確認できた。上幅約20cm、下幅6~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

**床** 北西コーナー部が搅乱を受けているが、ほぼ平坦で踏み固められている。

**竈** 北壁中央部に構築されていたと推定される。搅乱を受けているため、火床部の一部しか確認できなかった。

火床部は赤変硬化している。

ピット 2か所 ( $P_1$ ・ $P_2$ )。いずれも径30cmの円形で、深さ約20cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。

覆土 3層からなる。搅乱を受けているため、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 焙土粒子・炭化粒子少量
- 2 黑褐色 ローム粒子少量
- 3 黑褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片203点、須恵器片92点、陶器片7点、礫1点が出土している。第206図1の須恵器片は東壁溝から、2の須恵器片は南壁際の床面から出土している。3から5は須恵器壺の体部片で、3は外面に横位、4は縦位の平行叩き、5は格子目叩きが施されている。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 壁が確認できなかった部分は、床質から規模を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第599・601号住居跡より古い。

第598号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第206図 1	壺	A [12.8]	底部から口縁部にかけての破片。	底部ヘラ削り。体部外下面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 褐灰色 普通	P 7289 40% 東壁溝
	須恵器	B 39	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			
	C 68					
2	壺	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。	底部ヘラ削り。体部外下面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 褐灰色 普通	P 7290 40% 南壁原床面
	須恵器	B 43	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			
	C [72]					

第599号住居跡（第205・207図）

位置 調査7区南部、N11j区。

重複関係 全体的に第601号住居跡に掘り込まれ、本跡の竈が第598号住居跡を掘り込んでいる。

竈 覆土が薄く、袖部の一部と火床部しか確認できなかった。火床部から土師器片が多量に出土している。

遺物 土師器片53点、須恵器片7点が出土している。図示した土器片はいずれも土師器である。第207図1の壺、2・3の高台付壺、4の皿は竈内から出土している。

所見 本跡は、全体的に第601号住居跡に掘り込まれているため、規模や平面形及び覆土の堆積状況は確認できなかったが、竈のみは残存していた。竈の向きから判断して、東壁に構築されたものと考えられ、時期は出土遺物から判断して、10世紀中葉と考えられる。重複している第598号住居跡より新しく、第601号住居跡より古い。

第599号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第207図 1	壺	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。	底部切削条切り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 7291 10% 竈内
	土師器	B 34	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			
	C [70]					
2	高台付壺	B (17)	底部から体部下端にかけての破片。 高台部欠損。平底。体部下端外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り後ナデ。体部外下面下端手前部ヘラ削り、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色處理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色(外側) 普通	P 7292 30% 竈内
	土師器					

既版番号	器種	計画位(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第207図 3	高台付杯	B [3.8]	高台部から体部にかけての破片。	底部ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部外面ロクロナデ、内面丁寧なヘラ磨き。	砂粒・赤色粒子 に赤い黄褐色 普通	P 7293 10% 竈内
	土師器	D [8.0] E 0.6	高台は「ハ」の字状に開く。体部は内側気味に立ち上がる。			
4	皿	A 9.4	口縁部一部欠損。平底。体部から	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・青母・赤色粒子 に赤褐色 普通	P 7294 70% P L 74
	土師器	B 2.0 C 3.2	口縁部は内側気味に立ち上がる。			

### 第600号住居跡（第201・208図）

位置 調査7区南部、O11c区。

重複関係 全体的に第596号住居跡、東部が第597号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.40m、短軸3.05mの長方形である。

主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は約18cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

窓 東壁中央部から北寄りに砂質粘土で構築されている。袖部は遺存している。規模は、焚口部から煙道部まで約100cm、両袖部幅約95cmである。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。各層に砂質粘土、焼土粒子等が含まれているため、天井部及び袖部内面が崩落したものと考えられる。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 砂質粘土多量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黑褐色 砂質粘土多量、燒土粒子・炭化材少量
- 3 黑褐色 砂質粘土多量、燒土小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 砂質粘土・炭化材多量、燒土粒子少量
- 5 黑褐色 砂質粘土・燒土粒子多量
- 6 黑褐色 砂質粘土多量、燒土粒子微量

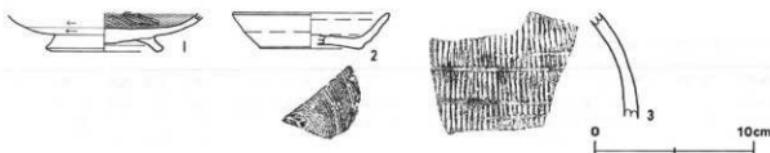
覆土 単一層である。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、燒土粒子微量

遺物 土器器片76点、須恵器片27点、陶器器片3点が出土している。第208図1の土師器高台付杯は南部の覆土下層から、2の土師器皿は覆土中から出土している。3は須恵器甕の体部で、外面は縦位の平行叩き後、横位の沈線が施されている。陶器器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡では、ピットと壁溝は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第596・597号住居跡より新しい。



第208図 第600号住居跡出土遺物実測図

第600号住居跡出土遺物観察表

団数番号	器種	記音値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第208団 1	高台付环	B [ 2.0 ] D 66 E 09	高台部から体部下端にかけての破片。高台は「八」の字状に開く。	底部ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。底部内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・良石・赤色粒子 に黒色 普通	P 7295 30% 南部覆土下層
	土師器	A [ 96 ] B 22 C [ 64 ]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 に黒色 普通	P 7296 20% 覆土中
2	皿	A [ 96 ] B 22 C [ 64 ]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 に黒色 普通	P 7296 20% 覆土中

第601号住居跡 (第209図)

位置 調査7区南部, O11as区。

重複関係 全体的に第599号住居跡、東部が第598号住居跡を掘り込んでいる。

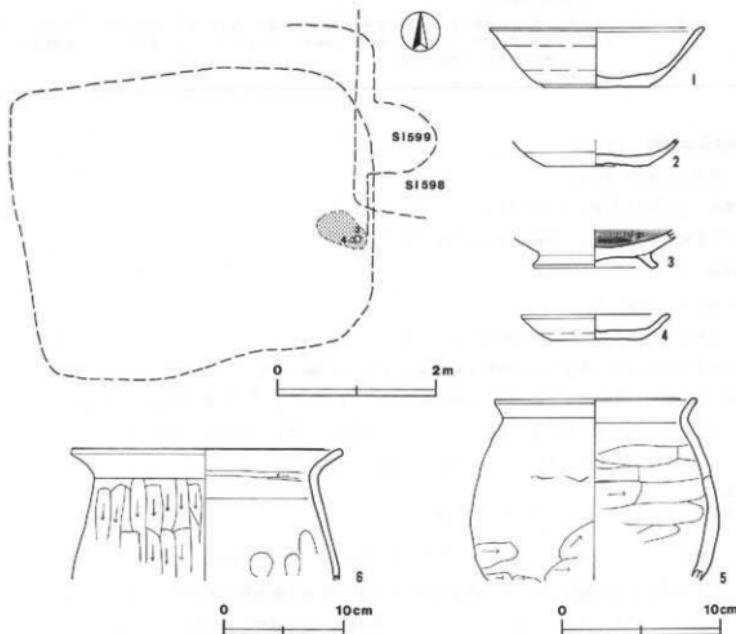
規模と平面形 長軸 [4.5]m, 短軸 [3.6]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-87°-E

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 東側床面に火床部が検出できたため、東壁中央部から南寄りに構築されていたと推定される。覆土が薄いため、火床部しか確認できなかった。火床部は赤変硬化している。

遺物 土師器片171点、須恵器片35点、陶器片9点、礫2点が出土している。図示した土器はいずれも土師器



第209図 第601号住居跡・出土遺物実測図

である。第209図3の高台付杯と4の皿は龜内から、1と2の杯は龜付近の遺構確認面から出土している。5の小形壺と6の甕は遺構確認面から出土した破片を接合したものである。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の壁とピット、壁溝は確認できなかったため、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀中葉から後葉と考えられる。重複している第598・599号住居跡より新しい。

第601号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	駆土・色調・焼成	備 考
1 第209図	杯	A [13.4] B 37 C (6.8) 土師器	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内摩氣味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・外画ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 7297 20% 遺構確認面
	杯	B (16) C 65 土師器	底部から体部下端にかけての破片。 平底。体部下端は内摩氣味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部下端内・外画ロクロナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 橙色 普通	P 7298 40% 遺構確認面
	高台付杯	B (19) D 78 E 69 土師器	高台部から底部にかけての破片。 高台は仄く「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台點り付け後ナデ。底部内面丁寧なへり磨き。内面黒色処理。	砂粒・赤色粒子 橙色 普通	P 7299 20% 龜内
4 第602号住居跡 (第210図)	皿	A [9.2] B 16 C 56 土師器	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部・口縁部内・外画ロクロナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P 7300 60% 龜内
	小形壺	A [12.6] B (11.3) 土師器	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内摩氣味に立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部内・外画ロクロナデ。口縁部内・外画横ナデ。輪模み底。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P 7301 15% 遺構確認面
	甕	A [22.4] B (10.8) 土師器	体部上位から口縁部にかけての破片。 体部上位は内傾して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外傾する。	体部外側底位のヘラ削り、内面指壓押。口縁部内・外画横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	P 7302 10% 遺構確認面

#### 第602号住居跡 (第210図)

位置 調査7区南部、O12d区。

重複関係 第603号住居跡の東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.00m、短軸2.80mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は4~10cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部からやや東寄りに砂質粘土で構築されている。覆土は薄いが、両袖部はわずかに遺存している。

規模は焚口部から煙道部まで約50cm、両袖部幅約80cmと推定される。火床部は床面を約5cm掘りくぼめており、赤変化している。天井部は確認できなかった。覆土から多量の土師器片が出土している。

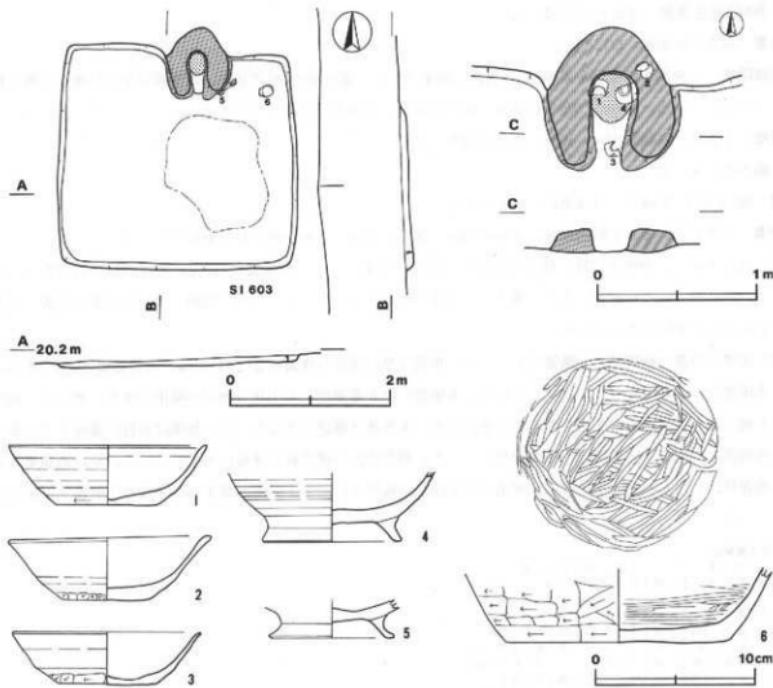
覆土 単一層である。覆土が薄いため、堆積状況は確認できなかった。

#### 土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量

遺物 土師器片223点、須恵器片61点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第210図1~3の杯と4の高台付杯は龜内から、5の高台付杯と6の鉢の底部は龜東側の床面から出土している。

所見 本跡では、壁溝とピットは確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第603号住居跡より新しい。



第210図 第602号住居跡・出土遺物実測図

第602号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第210図 1	壺	A 12.2	口縁部一部欠損。平底。体部から	底部ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面部クロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子	P 7303 90%
	土師器	B 37	口縁部は内壁気味に立ち上がる。			P L 75
	C 64				橙色 普通	窓内
2	壺	A 12.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内	底部ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面部クロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子	P 7304 80%
	土師器	B 41	壁気味に立ち上がり、口縁部はや			P L 75
3	壺	A 11.7	や外反する。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面部クロナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子	P 7305 70%
	土師器	B 32	口縁部一部欠損。平底。体部は内			窓内
	C 60	壁気味に立ち上がり、口縁部はや			にぶい橙色 普通	
4	高台付壺	B (4.0)	や外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部内・外面部クロナデ。	砂粒・小石・赤色粒子	P 7306 35%
	土師器	D 8.4	高台は「ハ」の字状に開く。体部			窓内
	E 16	は内壁気味に立ち上がる。			にぶい橙色 普通	
5	高台付壺	B (2.4)	高台部から底部にかけての破片。	底部ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・長石・小石・赤色粒子	P 7307 30%
	土師器	D 7.6	高台はラバ状に開く。			窓東側床面
	E 16				橙色 普通	
6	鉢	B (43)	底部から体部下位にかけての破片。	底部外面ヘラ削り、内面丁寧なヘラ削り。体部外面下位横位のヘラナデ。	砂粒・石英・赤色粒子	P 7308 10%
	土師器	C 14.0	平底。体部下位は外傾する。	内面丁寧なヘラ削り。	明赤褐色 普通	窓東側床面

### 第603号住居跡（第211・212図）

位置 調査7区南部、O12da区。

重複関係 中央部から東部を第602号住居跡、南東コーナー部を第606号住居跡、南壁際を第10号地下式塙に掘り込まれている。第602・606号住居跡の掘り込みは、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸5.60m、短軸5.30mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は45~55cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅約20cm、下幅約10cm、深さ約12cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。北東コーナー部に長径110cm、短径70cmの楕円形で、深さ24cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約120cm、両袖部幅160cmである。

火床部は、赤変硬化しゴツゴツしている。火床部には赤変硬化した山状の地山が検出できた。恐らく、地山を掘り残し支脚として使用したものと思われる。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。袖部内から炭化材が多量に出土しているため、竈構築時の補強材にしたものと考えられる。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。覆土から多量の土器片が出土している。

#### 竈土層解説

- |          |                             |
|----------|-----------------------------|
| 1 黒褐色    | ローム粒子・炭化粒子少量                |
| 2 黒褐色    | 燒土粒子少量、炭化材                  |
| 3 暗赤褐色   | 燒土小ブロック・燒土粒子中量              |
| 4 灰褐色    | 燒土小ブロック・少量化                 |
| 5 灰赤褐色   | 燒土中ブロック・燒土粒子中量              |
| 6 灰赤褐色   | 燒土中ブロック・燒土粒子中量、炭化材          |
| 7 暗赤褐色   | 燒土中・小ブロック・燒土粒子中量            |
| 8 ぶい赤褐色  | 燒土中ブロック・燒土粒子中量              |
| 9 暗赤褐色   | 燒土粒子多量、燒土小ブロック少量化           |
| 10 暗赤褐色  | 燒土小ブロック・燒土粒子中量              |
| 11 板岩赤褐色 | 燒土中ブロック多量、炭化材               |
| 12 板岩赤褐色 | ローム粒子・燒土粒子少量                |
| 13 暗赤褐色  | 燒土中ブロック・燒土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 14 灰赤褐色  | 燒土粒子多量、ローム小ブロック・ローム粒子少量     |
| 15 黑色    | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・灰少量         |

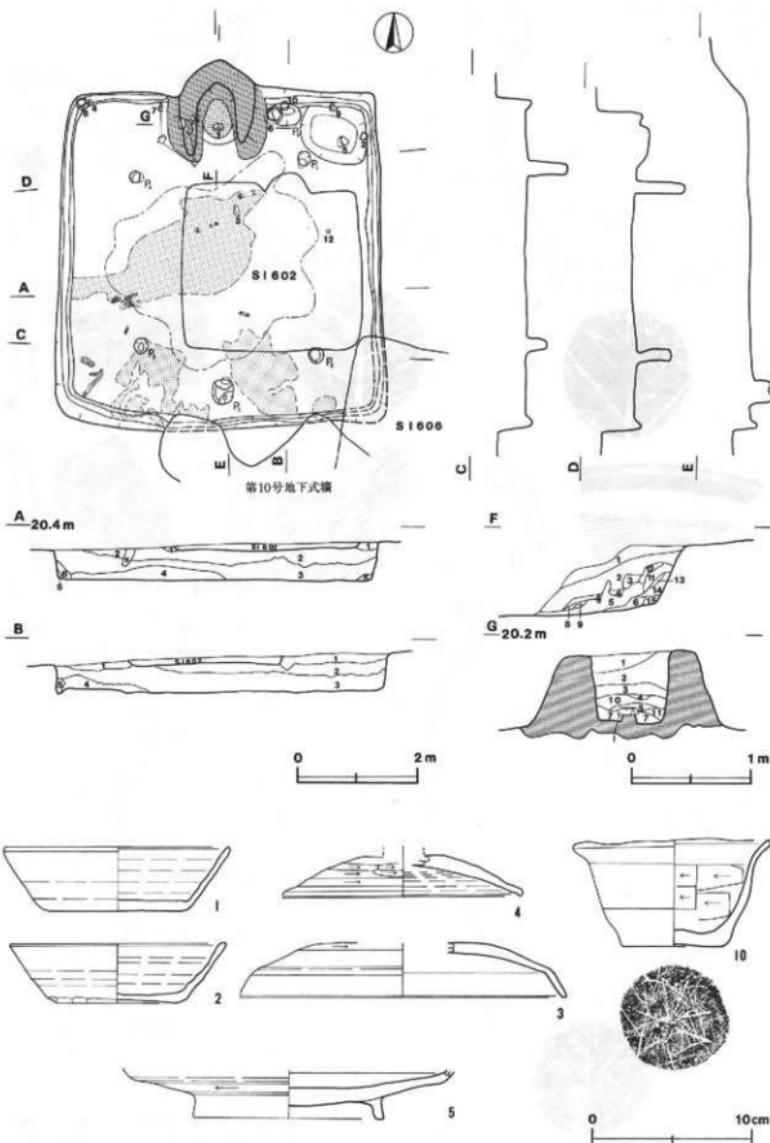
ピット 6か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径約20cmの円形で、深さ約60cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径30cmの円形で、深さ40cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。竈東側にあるP<sub>6</sub>は、径40cmの円形で、深さ41cmである。性格は不明である。

覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

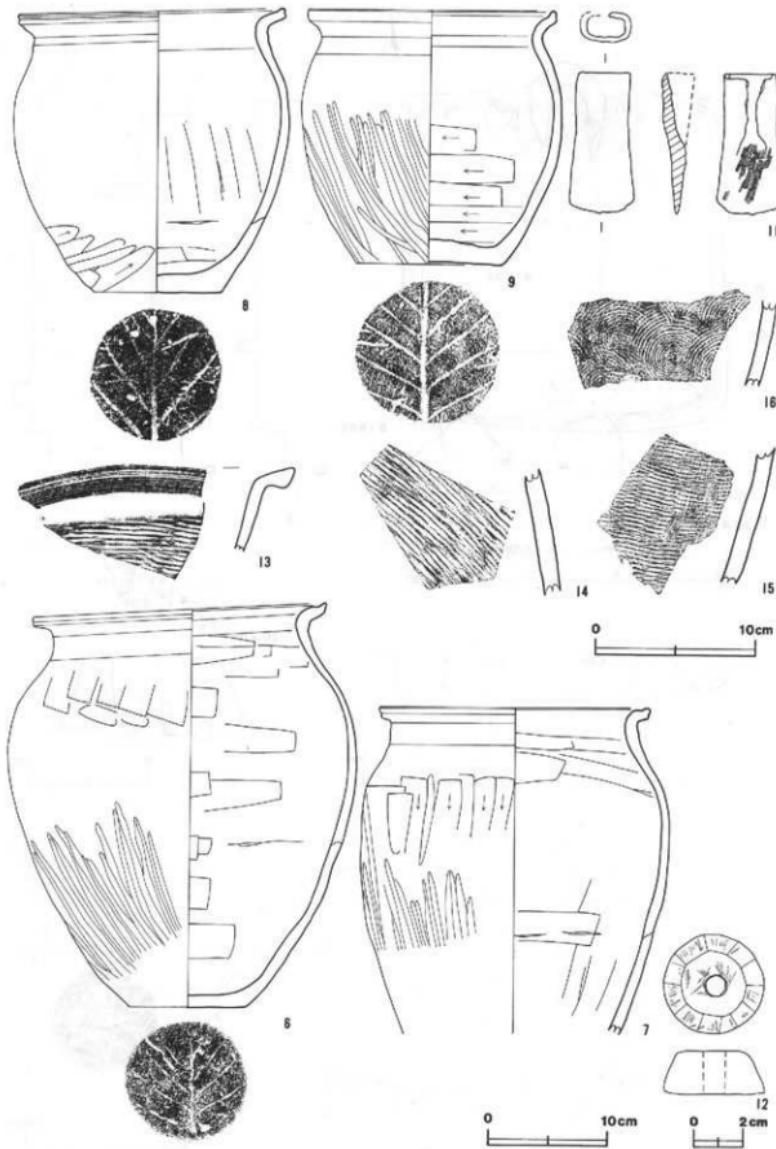
#### 土層解説

- |       |                       |
|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 燒土粒子・炭化粒子少量           |
| 3 暗褐色 | 炭化粒子多量、ローム粒子少量        |
| 4 暗褐色 | 炭化粒子多量、ローム粒子中量        |
| 5 黑色  | ローム中・小ブロック・ローム粒子中量    |
| 6 黑褐色 | 炭化粒子多量                |

遺物 土器片853点、須恵器片152点、石製品（訪錠車）1点、鉄製品（鉄斧）1点、流動滓5点、陶器片4点、礫3点、炭化材が出土している。第211・212図1の須恵器は、竈火床部の支脚の上部から逆位で出土している。2の須恵器は正位で北東コーナー部の床面から、3の須恵器蓋は中央部から北側の覆土中層から、4の須恵器蓋と8の土器片小形甕は北西コーナー部の床面から、5の須恵器蓋と9の土器片小形甕は北東コーナー部の灰の中から、6の土器片甕は正位で竈東側の床面から出土している。7の土器片甕は竈西側



第211図 第603号住居跡・出土遺物実測図（1）



第212図 第603号住居跡出土遺物実測図（2）

の覆土下層から出土した破片を接合したものである。10の土師器小鉢は竈東側の壁溝から、11の鉄斧、流動斧は覆土中から、12の紡錘車は東部の床面から出土している。炭化材は床面全域から出土している。13は須恵器瓶の口縁部片で、外面に横位の平行叩きが施されている。14から16は須恵器壺の体部片で、外面に14は斜位、15は横位の平行叩き、16は同心円状の叩きが施されている。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀前葉と考えられる。流動斧が出土しているが、鐵治炉は確認されていない。また、床面から屋根材や柱材と思われる炭化材が出土していることから判断して、焼失家屋と考えられる。重複している第602・606号住居跡、第10号地下式塙より古い。

第603号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計量(g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第211図 1	壺	A 140 B 40 C 86	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り跡ナデ。体部から口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7309 80% P L 75 窯内
	壺	A 135 B 38 C 76	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・長石 石英 灰黄色 普通	P 7310 80% P L 75 北東コーナー部床面
	壺	A [204] B (34)	天井部から口縁部にかけての破片。 天井部は笠形であり、口縁部との境で下方に崩屈する。	天井部外面上半回転ヘラ削り。下半・内面クロナデ。	砂粒・雲母・石英 灰黄色 良好	P 7311 40% P L 75 北東部中層
第212図 5	壺	A [150] B (25)	天井部から口縁部にかけての破片。 天井部は笠形であり、口縁部が下方に下がる。	天井部外面上半回転ヘラ削り。下半・内面クロナデ。	砂粒・雲母・石英 黄灰色 普通	P 7312 25% 北西コーナー部床面
	盤	B (30) D 120 E 14	口縁部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。体部は継ぎやかに外傾する。	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・小石 灰黄色 普通	P 7313 30% 北東コーナー部 窯裏土中
	土師器	A 246 B 332 C 97	平底。体部は内傾して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頭部でくびれ、口縁部は外傾する。口唇部は上方につまみ上げる。	底部木葉痕。体部外面下位ヘラ磨き、上位へナデ。内面ヘラナデ。口縁部内・外面糊ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石 赤色粒子 橙色 普通	P 7314 95% P L 75 窯裏床面
第213図 7	壺	A 225 B (267)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頭部でくびれ、口縁部は外傾する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面上半回転ヘラ削り。上位底盤のヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・外面糊ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石 石英 にぶい褐色 普通	P 7315 60% P L 75 北西側壁下層
	土師器	A 165 B 175 C 79	口縁部一部欠損。平底。体部は内傾して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頭部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	底部木葉痕。体部外面上半回転ヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・外面糊ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石 石英 にぶい褐色 普通	P 7316 95% P L 75 北西コーナー部 床面
	土師器	A [54] B 157 C 90	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内傾して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頭部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	底部木葉痕。体部外面上半回転ヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・外面糊ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P 7317 55% P L 75 北西コーナー部 窯裏土中
第211図 10	小鉢	A 123 B 66 C 63	口縁部一部欠損。平底。体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部木葉痕。体部外面上半回転ヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・外面糊ナデ。	砂粒・雲母・石英 黒褐色 普通	P 7318 95% P L 75 窯裏側壁

図版番号	種別	計測値				出土地點	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第212図11	鉄斧	8.8	4.1	1.9	121.0	覆土中	M 7018 P L 75

図版番号	種別	計測値				出土地點	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
12	紡錘車	4.2	1.8	0.9	46.0	東部床面	Q 7006 滑石 P L 102

### 第604号住居跡（第213・214図）

位置 調査7区南部、O12b区。

規模と平面形 長軸3.60m、短軸3.35mの方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は50~52cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅30~40cm、下幅約20cm、深さ6~10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

窓 北壁中央部からやや東寄りに砂質粘土で構築されている。袖部は良好に遺存している。規模は焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅95cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

天井部は崩落しており、第4層と第5層が崩落土と考えられる。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

#### 竈土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量	6 灰褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子
2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量	7 極暗褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色 ローム粒子・變土粒子中量	8 灰褐色 烧土粒子多量
4 暗赤褐色 砂質粘土多量、焼土小ブロック・炭化粒子少量	9 暗赤褐色 烧土粒子多量、焼土小ブロック少量
5 暗赤褐色 砂質粘土多量、焼土中ブロック・焼土粒子中量	10 灰褐色 烧土粒子中量

ピット 3か所（P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>）。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は径約20cmの円形で、深さ約25cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>3</sub>は径30cmの円形で、深さ17cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

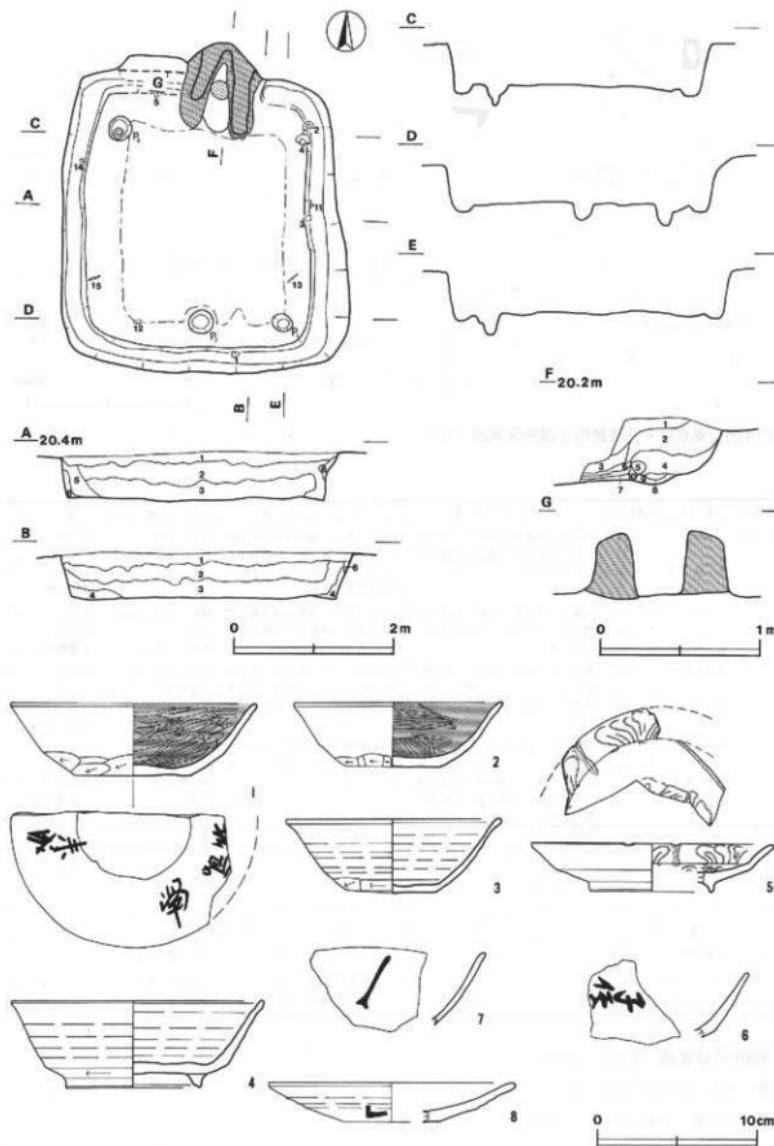
1 橙赤褐色 ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子少量	4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	6 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片289点、須恵器片132点、鉄製品（刀子2、鎌1、不明1）4点、石製品（丸瓶）1点、鉄滓1点、礫8点が出土している。第213・214図1の土師器片は逆位で南壁際の床面から出土している。側面に「未成」、「榮」、「備々」と墨書きされている。2の土師器片と4の須恵器高台付片は逆位で北東コーナー部の覆土中層から、3の須恵器片は逆位で東壁際の覆土下層から出土している。5の縦輪陶器輪皿は蓮西側の覆土中層と逆構確認面から出土した破片が接合したものである。猿投窯黒瓦14号窯式のものである。6から10は土師器片に墨書きされているが、判読不能である。11は東壁際の覆土下層から、15は西壁際の覆土中層から出土した刀子である。12の鎌は南西コーナー部の覆土上層から、13の不明鉄製品は南東側の覆土中層から、14の丸瓶は北西側の覆土下層から、鉄滓は覆土中から出土している。

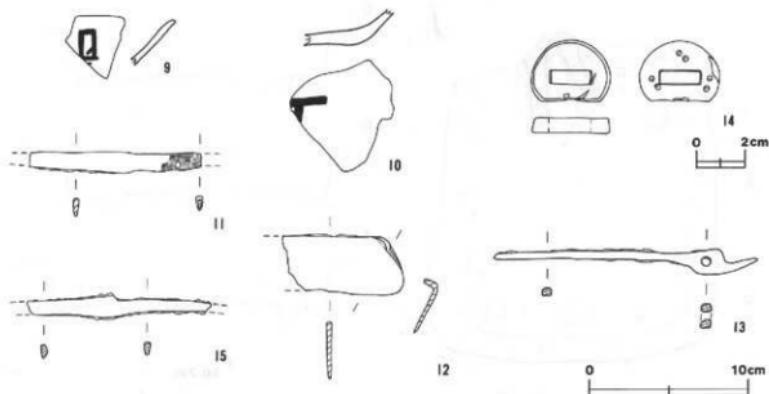
所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。

第604号住居跡出土物観察表

回収番号	器種	計重量(g)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第213図 I	坏 土師器	A [154] B 45 C [72]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。底部から口縁部は内厚気球 に立ち上がる。	底部ヘラ削り。底部外表面下端手持 ちヘラ削り。底部から口縁部外表面 ロクロナギ。内面丁寧なへき焼き。 内面黑色處理。	砂紋・雲母・石英 橙色（外側） 普通	P 7319 50% P L 76 墨書き器 南壁際床面



第213図 第604号住居跡・出土遺物実測図（1）



第214図 第604号住居跡出土遺物実測図（2）

器種番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第213期 2	壺	A 130 B 41 C 60	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は内厚気球に立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外端下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部外端クロロナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黑色処理。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色(外側) 普通	P 7320 80% P L 76 北東コーナー部 覆土中層
	土師器					
3	壺	A 135 B 46 C 55	口縁部一部欠損。平底。体部は内厚気球に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部ヘラ削り。体部外端下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部外端クロロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 黄褐色 普通	P 7321 80% P L 76 東側斜面下層
	須恵器					
4	高台付壺	A 157	体部から口縁部にかけて一部欠損。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 灰色 普通	P 7322 70% P L 76 北東コーナー部 覆土中層
	須恵器	B 54 D 8.4 E 0.8	高台は「ハ」の字形に開く。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	体部から口縁部外端ヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロロナデ。		
5	輪花壺	A [152]	高台部から口縁部にかけての被片。	全面に銀釉発色。体部・口縁部内面丁寧なヘラ磨き。輪花文が施されている。	細砂 胎土 灰色 釉 緑色 良好	P 7323 20% P L 76 窓西側覆土中層 と遺構確認 壁堂 黒瓦14号式
	縄繩陶器	B 30 D [7.4] E 0.6	高台は直立する。平底。体部は縄やかに外傾し。口縁部との境に継ぎをもつて上方に屈曲する。口縁部に輪花を施す。			

器種番号	種別	計測値	出土地点	備考
212期II	刀子	(10.9) 1.4 0.4 (13.0)	東側斜面下層	M 7019 P L 76
12	鋸	(7.7) 3.8 0.3 (27.0)	南西コーナー部覆土上層	M 7020 P L 76
13	不明鉄製品	16.6 1.6 0.6~0.7 31.0	南東部覆土中層	M 7021 鉄鉗? P L 76
14	丸鉗	3.3 0.6 0.6 9.0	北西部覆土下層	Q 7040 緑色岩 P L 102
15	刀子	(11.6) 1.7 0.4 (15.0)	西壁斜面中層	M 7023

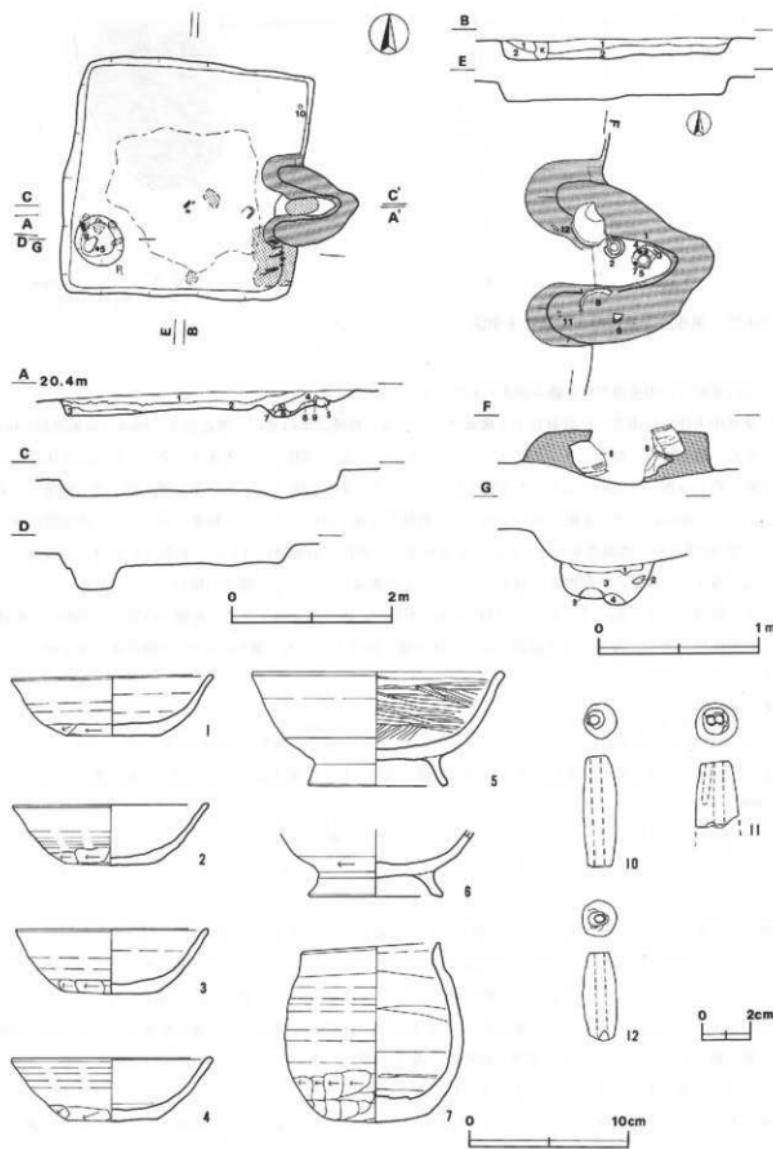
第605号住居跡（第215・216図）

位置 調査7区南部, O12d区。

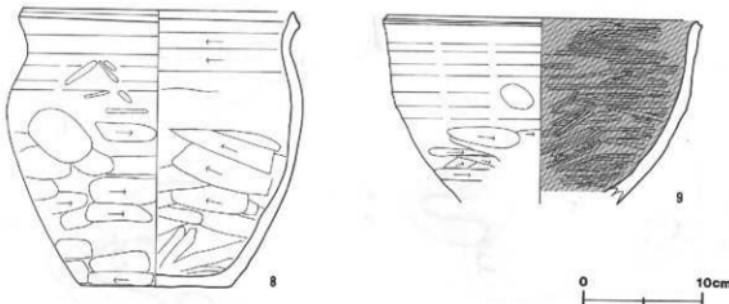
規模と平面形 長軸2.90m, 短軸2.85mの方形である。

主軸方向 N-93°-E

壁 壁高は14~20cmで、外傾して立ち上がる。



第215図 第605号住居跡・出土遺物実測図（1）



第216図 第605号住居跡出土遺物実測図（2）

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 東壁中央部から南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅100cmである。第8層は、焼土ブロックがゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第5層と第7層が崩落土と考えられる。袖部は、地山を掘り残し土台とし砂質粘土を貼り付けしっかり構築されている。両袖部内側には、第216図8の土師器甕を二分した破片を北袖部には逆位、南袖部には正位の状態で貼り付け、補強している。覆土から多量の土師器片が出土している。土層解説については、覆土の項目で記す。

ピット 南西コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、径約60cmの円形で、深さ約30cmである。規模と位置から判断して貯蔵穴の可能性がある。覆土から土師器の高台付壺や甕が出土している。第216図9の土師器甕は第4層から出土したものである。

P<sub>1</sub>土層解説

- 1 純赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量  
2 純褐色 焼土粒子微量

- 3 褐色 ローム中ブロック・焼土粒子中量  
4 純褐色 炭化粒子・焼土粒子少量。土器片が多量に出土している

覆土 第1層から第3層は、堆積状況から自然堆積と考えられる。第4層から第9層は、甕の覆土である。

土層解説

- 1 純褐色 ローム粒子少量  
2 純褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量  
3 純褐色 ローム粒子・炭化粒子少量  
4 褐色 焼土粒子中量  
5 焼土ブロック、砂質粘土ブロック

- 6 純赤褐色 焼土中ブロック多量  
7 5層と同じ  
8 焼土ブロック、ゴツゴツしている  
9 純赤褐色 焼土ブロック多量

遺物 土師器片144点、須恵器片27点、土製品（管状土錘）3点、鉄滓1点、礫8点、炭化米、炭化材が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第215・216図1・3・4の壺は逆位で、2の壺は正位で、6の高台付壺、7の小形甕、8の甕は甕内から出土している。5の高台付壺は甕内とP<sub>1</sub>から出土した破片を接合したものである。9の甕はP<sub>1</sub>から、10の管状土錘は北東コーナー部の床面から、11と12の管状土錘は甕内から出土している。鉄滓は南壁際の覆土中層から出土している。炭化材は床面中央部から南側にかけて多量に出土している。少量の炭化米が甕火床部から出土している。

所見 本跡では、壁溝は確認されなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。また、床面中央部から南側にかけて屋根材と思われる炭化材や焼土ブロックが出土していることから判断して、焼失家屋と考えられる。

第605号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	目測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第215図 1	坏	A 127 B 38 C 57	口縁部一部欠損。平底。体部は内 唇気味に立ち上がり、口縁部はや や外反する。	底部へラ削り。体部外面下端手持 ちへラ削り。体部から口縁部内・ 外面クロコナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 7324 90% P L 76 窓内
	坏	A 122 B 38 C 55	口縁部一部欠損。平底。体部は内 唇気味に立ち上がり、口縁部はや や外反する。	底部へラ削り。体部外面下端手持 ちへラ削り。体部から口縁部内・ 外面クロコナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 7325 90% P L 76 窓内
	土 師 器	A 120 B 40 C 56	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内唇気味 に立ち上がる。	底部一方側のへラ削り。体部外面 下端手持ちへラ削り。体部から口 縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・赤色仔 子 P L 76 橙色 普通	P 7326 70% P L 76 窓内
4	坏	A 126 B 39 C 60	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内唇気味 に立ち上がる。	底部一方側のへラ削り。体部外面 下端手持ちへラ削り。体部から口 縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・石英 赤色仔子 橙色 普通	P 7327 60% P L 76 窓内
	土 師 器	A 154 B 71 D 84 E 20	高台付坏 高台部から口縁部にかけて一部欠 損。高台は「ハ」の字状に開く。 体部から口縁部は内唇気味に立ち 上がる。	高台部斜面・ハ形後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部外 面クロコナデ。内面丁寧なへラ磨き。	砂粒・長石 灰色 普通	P 7328 70% P L 76 窓内と P
	高 台 付 坏	B (41) D 82 E 16	高台部から体部下端にかけての破 片。高台は「丁」の字状に開く。 体部下端は内唇気味に立ち上がる。	底部ナデ。高台貼り付け後ナデ。 体部外面下端回転へラ削り。内面 ロクロナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P 7329 40%
第216図 8	小 形 楊	A 84 B 111 C 65	平底。体部は唇を立て立ち上がり、 口縁部との境に瘤をもつ。口縁部 はほぼ直立する。	底部へラ削り。体部外面下位模様 のへラ削り。体部から口縁部内・ 外面クロコナデ。	砂粒・赤色仔子 にぶい褐色 普通	P 7330 100% P L 76 窓内
	土 師 器	A [260] B (149)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内唇気味に立ち上がり、口 縁部はやや外反する。口唇部に沈 縫が進る。	体部外面下位模様のへラ削り。体 部中位から口縁部外側ロクロナデ。 内面丁寧なへラ磨き。内面黒色處 理。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P 7332 30% P
	楊	A 227 B 222 C 124	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部は内唇気味に立ち上がり、 口縁部は外反する。	底部へラ削り。体部外面下端模様 のへラ削り。体部から口縁部内・ 外面クロコナデ。	砂粒・赤色仔子 橙色 普通	P 7331 80% P L 76 窓内
9	土 師 器					

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第215図 11	管 状 土 錠	1.4	4.5	0.4	7.40	東北コーナー部床面	D P 7005 P L 101
11	管 状 土 錠	1.8	( 2.7 )	0.4	( 6.15 )	窓内	D P 7006 P L 101
12	管 状 土 錠	1.4	3.6	0.4	4.70	窓内	D P 7007 P L 101

## 第606号住居跡（第217図）

位置 調査7区南部, O12ds区。

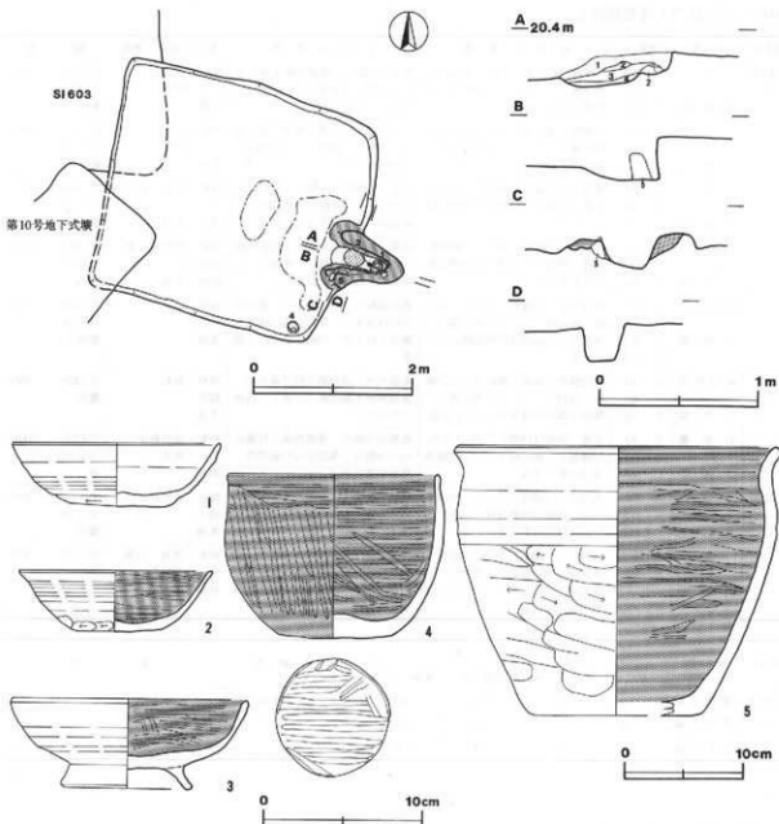
重複関係 北西部が第603号住居跡を掘り込み、南西コーナー部が第10号地下式壇に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.35m, 短軸2.95mの長方形である。ほとんど床面が露出した状態で確認されたため、規  
模と平面形は床面や窓から判断した。

主軸方向 N-104°-E

床 ほぼ平坦で、窓前が特に踏み固められている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに砂質粘土で構築されている。袖部は痕跡のみが残存している。規模は焚口部  
から煙道部まで70cm, 両袖部幅80cmと推定される。第4層の底部が焼土ブロックでゴツゴツしていることか  
ら判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約20cm掘りくぼめている。天井部は確認できなかった。  
両袖部の内側には、補強材として土師器片が使用されている。覆土から多量の土師器片が出土している。



第217図 第606号住居跡・出土遺物実測図

竪土層切説

- 1 白 色 焼土中ブロック・炭化粒子少量
- 2 焼土ブロック
- 3 赤 白 色 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 4 陶器赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・灰中量、ゴフゴクしている

遺物 土器片92点、須恵器片11点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第217図1の杯は逆位で、3の高台付杯と竪内から出土している。2の杯は竪内から出土した破片を接合したものである。

5の甕は竪の火床部と南袖部から、4の小形甕は正位で南東コーナー部の床面から出土している。

所見 本跡では、壁と壁溝、ピットは確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉と考えられる。重複している第603号住居跡より新しく、第10号地下式塙より古い。

第606号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第217図 1 土師器	壺	A 13.1 B 40 C 60	口縁部一部欠損。平底。体部から 口縁部は内厚気味に立ち上がる。	底部へラ削り。体部から口縁部内・ 外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・小石・ 赤色粒子 橙色 普通	P 7333 90% P L 76 窓内
	壺	A 12.0 B 38 C 60	底部・体部一部欠損。半底。体部 は内厚気味に立ち上がり、口縁部 はやや外反する。	底部回転へラ削り。体部外面下端 手持ちヘラ削り。体部から口縁部外 面ロクロナダ。内面丁寧なヘラ 磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 橙色(外面) 普通	P 7334 90% P L 76 窓内
	高台付壺	A [14.6] B 56 D [7.5] E 14	高台部から口縁部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。平底。 体部から口縁部は内厚気味に立ち 上がる。	底部回転へラ削り後ナダ。高台貼 り付け後ナダ。体部から口縁部外 面ロクロナダ。内面丁寧なヘラ磨 き。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英 橙色(外面) 普通	P 7335 35% 窓内
4 土師器	小形甕	A 13.2 B 10.2 C 7.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内 厚して立ち上がり。口縁部はほぼ 直立する。	全面丁寧なヘラ磨き。内・外面黒 色処理。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P 7336 90% P L 77 窓東コーナー部床面
	甕	A [26.8] B 22.2 C [13.8]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内厚気味に立ち上 がり、口縁部は外反する。	底部へラ削り。体部外面下端へラ 削り。上段横ナダ。内面丁寧なヘ ラ磨き。口縁部内・外側横ナダ。 内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色(外面) 普通	P 7337 30% P L 77 窓火床部と南東 部

## 第607号住居跡(第218・219図)

位置 調査7区南部, N12j1区。

重複関係 北西コーナー部を第609号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.10m, 短軸3.70mの長方形である。

主軸方向 N - 0°

壁 北西コーナー部は確認できなかった。壁高は10~15cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナー部の壁下では確認できなかったが、全周していたと推定される。上幅約20cm, 下幅4~10cm, 深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部からやや東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで80cm, 両袖部幅95cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は、地山を掘り残して土台とし砂質粘土を貼り付けて構築している。両袖部の内側は、火を受けて赤変化している。

## 竈土層解説

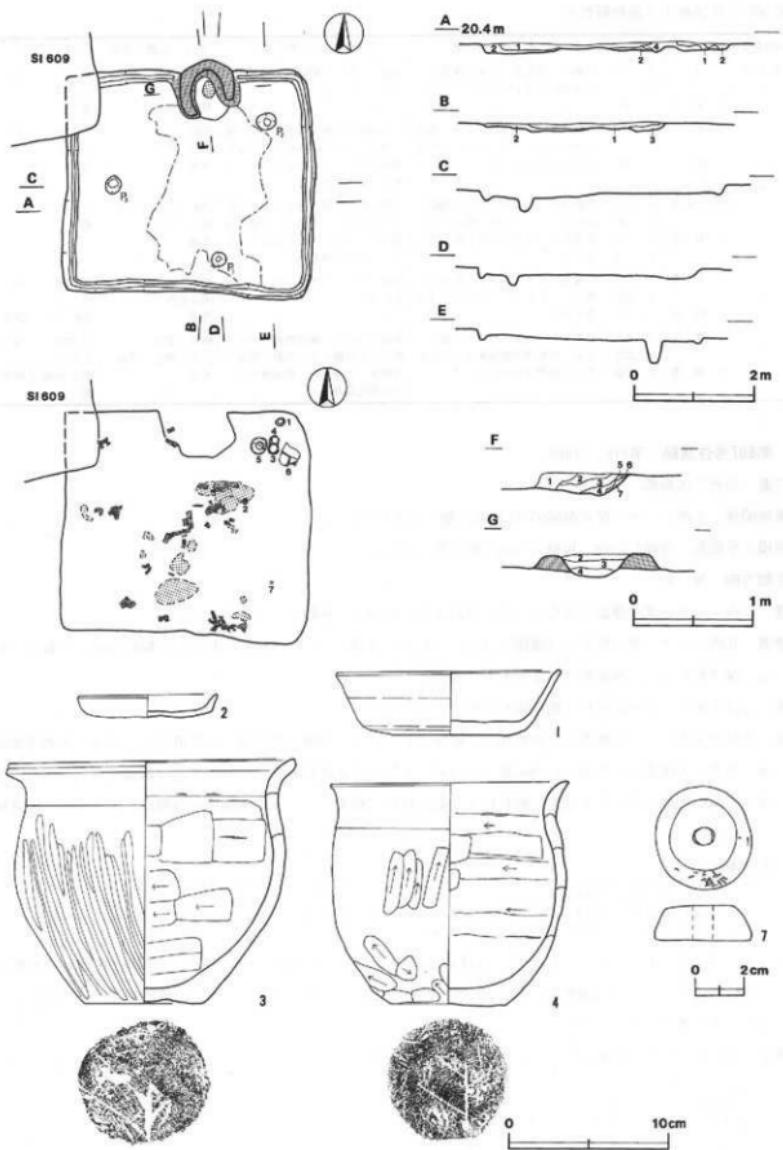
1	暗褐色	燒土中プロック・炭化粒子少量	5	灰褐色	燒土粒子多量
2	にぶい赤褐色	燒土粒子・炭化粒子少量	6	灰褐色	燒土中プロック・燒土粒子多量
3	にぶい赤褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	7	暗赤褐色	燒土中・小プロック・燒土粒子・灰中量
4	にぶい赤褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量、軟らかい			

ピット 3か所(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>は径約27cmの円形で、深さ20~30cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ17cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

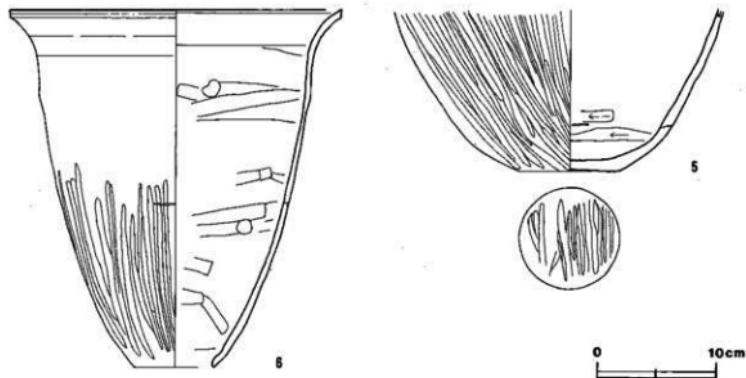
覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

## 土層解説

1	板状褐色	ローム粒子・燒土中プロック・炭化粒子中量
2	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
3	暗赤褐色	燒土粒子多量、炭化粒子少量
4	黒褐色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量



第218図 第607号住居跡・出土遺物実測図(1)



第219図 第607号住居跡出土遺物実測図（2）

遺物 土師器片218点、須恵器片67点、石製品（鉗錠車）1点、礫5点、炭化材が出土している。第218・219図1は内面に漆が付着した須恵器壺で、逆位で北東コーナー部の覆土下層から、2の土師器皿は逆位で東部の覆土中層から、3と4の土師器小形壺、5の土師器壺は正位で北東コーナー部の床面から出土している。6の土師器瓶は北東コーナー部の床面から出土した破片を接合したものである。7の鉗錠車は南東部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。重複している第609号住居跡より古い。また、床面全域から屋根材や柱材と思われる炭化材、焼土ブロックが出土しており、焼失家屋と考えられる。

第607号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	片数(点)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第218図 1	壺	A 139 B 41 C 74	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7338 85% PL 77 内面漆付着 北東 コーナー部覆土下層
	皿	A 86 B 15 C 77	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り後ナダ。体部から口縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 橙色 普通	P 7339 100% PL 77 東部覆土中層
	土 師 器	A 178 B 152 C 75	口縁部一部欠損。平底。体部は内側して立ち上がり、上位に最大径をもつ。底部でくびれ。口縁部は外反する。口唇部に沈線がある。	底部木素窯。体部外面ヘラナデ後 ヘラ磨き、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み底。	砂粒・雲母・石英 黒色 普通	P 7340 80% PL 77 外面漆付着 北東コーナー部床面
第219図 4	小形壺	A 147 B 139 C 70	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内側して立ち上がり、中位に最大径をもつ。底部でくびれ、口縁部は外反する。	底部木素窯。体部外面下位ヘラ削り、中位から上位・内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み底。	砂粒・雲母・小石 赤色 普通	P 7341 75% PL 77 外面漆付着 北東コーナー部床面
	土 師 器	B (132) C 84	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部下位は内側気味に立ち上がる。	底部・体部外面丁寧なヘラ磨き、内面ナデ。輪積み底。	砂粒・雲母・石英 に赤い褐色 普通	P 7342 35% PL 77 外面漆付着 北東コーナー部床面
	瓶	A [280] B 295 C [71]	底部から口縁部にかけての破片。無底式。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は上方にまみ上げる。	体部外面下位丁寧なヘラ磨き。内面ヘラナデ・指痕押正。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 に赤い褐色 普通	P 7343 30% PL 77 体部外面漆付着 北東コーナー部床面
5	土 師 器					

調査番号	種別	計測値			出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)		
B21図7	鉢 縁 車	4.1	14	0.8	42.0	東南部覆土下層 Q 7007 鈍紋岩 P L 102

### 第608号住居跡（第220・221図）

位置 調査7区南部、N11j区。

重複関係 本跡の窓が第609号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.30m、短軸3.15mの方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高は16~22cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南西コーナー部の壁下で確認できた。上幅15~20cm、下幅4~8cm、深さ約4cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竪 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部は遺存している。規模は焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅95cmである。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。

#### 竪層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子多量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	6	暗赤褐色	焼土中プロック・焼土粒子多量
3	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7	暗赤褐色	ローム粒子・焼土中・プロック・灰中量
4	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子多量、粘土粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子・焼土中プロック・灰多量

ピット 2か所( $P_1$ ・ $P_2$ )。南壁際にある $P_1$ は径30cmの円形で、深さ19cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。北西コーナー部にある $P_2$ は、径30cmの円形で、深さ17cmである。性格は不明である。

覆土 5層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

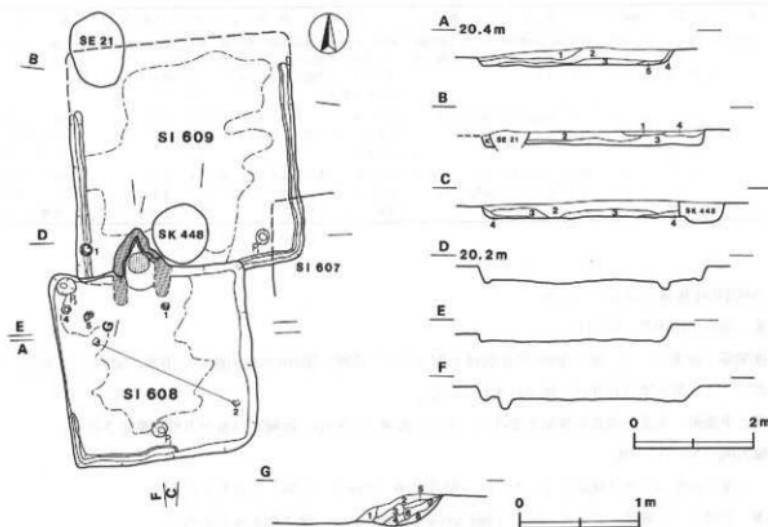
1	埴輪褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量	4	褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5	暗褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量
3	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量			

遺物 土師器片191点、須恵器片128点、礫5点が出土している。第221図1の土師器は逆位で北部の覆土下層から出土している。2の土師器は南東コーナー部と北西コーナー部の覆土中から出土した破片を接合したものである。側面に墨書きされているが判読不能である。3の土師器は窓内から、4と5の須恵器は正位で北西コーナー部の覆土中層から出土している。

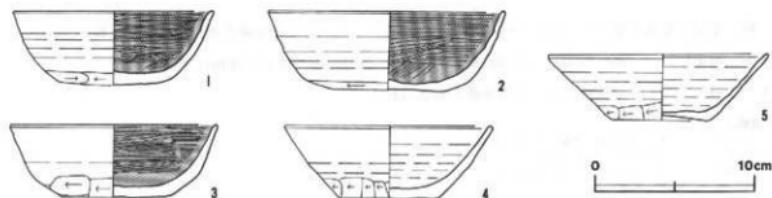
所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第609号住居跡より新しい。

### 第608号住居跡出土遺物観察表

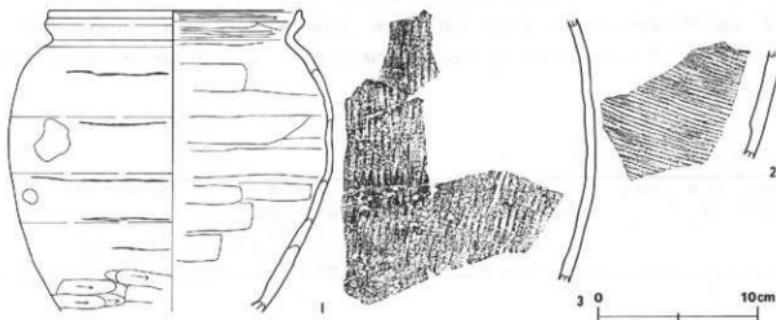
調査番号	器種	直面積(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・施成	備考
第221図 1	壺	A 124	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内唇気味に立ち上がる。	底部一方向へのハラ削り。体部外面下端手持ちハラ削り。体部から口縁部外面ロクロナデ、内面丁寧なハラ磨き。内面黑色処理。	砂粒・窑母・赤色絵	P 7344 95%
		B 46				P L 77
		C 72			にぶい赤褐色	北部覆土下層
2	壺	A 148	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内唇気味に立ち上がる。	底部ハラ削り。体部外面下端手持ちハラ削り。体部から口縁部外面ロクロナデ、内面丁寧なハラ磨き。内面黑色処理。	砂粒・窑母・長石・赤色粒子	P 7345 80%
		B 51			にぶい橙色(外面)	P L 77
		C 70			普通	南東・北西コーナー部覆土中



第220図 第608・609号住居跡実測図



第221図 第608号住居跡出土遺物実測図



第222図 第609号住居跡出土遺物実測図

器種番号	器種	計量値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第221図 3	壺 土師器	A [125]	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は内骨気味に立ち上がる。	底部へラ削り。体部外面下端下端手持ちヘラ削り。体部から口縫部外側ロクロナダ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 にぶい橙色(外面) 普通	P 7346 60% P L 77 室内
		B 45				
		C 63				
4	壺 須恵器	A 129	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縫部外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・灰黄色 普通	P 7347 100% P L 77 北西コーナー部覆土中層
		B 45				
		C 61				
5	壺 須恵器	A 137	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部削板へラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縫部外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 黒褐色 普通	P 7348 60% P L 77 北西コーナー部覆土中層
		B 42				
		C 60				

### 第609号住居跡(第220・222図)

位置 調査7区南部、N115°E。

重複関係 南東コーナー部が第607号住居跡を掘り込み、南壁が第608号住居跡に、南部が第448号土坑に、北西コーナー部が第21号井戸に掘り込まれている。

規模と平面形 北部と南部が搅乱を受けているが、長軸[3.8]m、短軸3.72mの方形と推定される。

主軸方向 N-4°W

壁 北壁と南壁の一部は確認できなかった。壁高は20~28cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下では確認できなかった。上幅約20cm、下幅約8cm、深さ約8cmである。

床 第21号井戸と第448号土坑に掘り込まれている部分は確認できなかったが、ほぼ平坦で踏み固められている。

竈 特に北部が搅乱を受けているが、火床部と思われるゴソゴソした赤変硬化面が北側床面に検出された。

ピット 南東コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、径20cmの円形で、深さ15cmである。性格は不明である。

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・燒土粒子多量、炭化粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
- 3 黑褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
- 4 黄褐色 ローム粒子多量

遺物 土師器片34点、須恵器片15点、磚2点が出土している。第222図1の土師器壺は逆位で西側壁溝の南部から出土している。2と3は須恵器壺の体部片で、2は外面に横位、3は縱位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の壁が確認できなかった部分は、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。重複している第607号住居跡より新しく、第608号住居跡、第21号井戸、第448号土坑より古い。

### 第609号住居跡出土遺物観察表

器種番号	器種	計量値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第222図 1	壺 土師器	A 156	底面欠損。体部は内傾して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部で「く」の字に屈曲する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面下端横位のヘラ削り。中位から上位へラナダ。内面ヘラナダ。口縫部外側ロクロナダ。内面丁寧なヘラ磨き。棒積み痕。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 7349 80% P L 77 西壁溝の南部
		B (187)				

## 第610号住居跡（第223～225図）

位置 調査7区南部、N12hs区。

重複関係 南西部が第615号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.04m、短軸3.60mの長方形である。

主軸方向 N-87°-E

壁 壁高は23～42cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第615号住居跡と重複している部分は確認できなかったが、全局していたと推定される。上幅17～30cm、下幅4～10cm、深さ約8cmであり、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 東壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部は遺存している。規模は焚口部から煙道部まで140cm、両袖部幅100cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土器片と須恵器片が出土している。

### 竈層解説

1	暗褐色	焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	6	暗赤褐色	焼土中ブロック・焼土粒子少量
2	暗赤褐色	ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子少量	7	暗赤褐色	焼土中・小ブロック・灰中量
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒少量	8	暗褐色	ローム粒子・焼土中ブロック多量
4	赤褐色	焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量、粘土粒子微量	9	黄褐色	焼土ブロック
5	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子多量			

覆土 2層からなる。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

### 土層解説

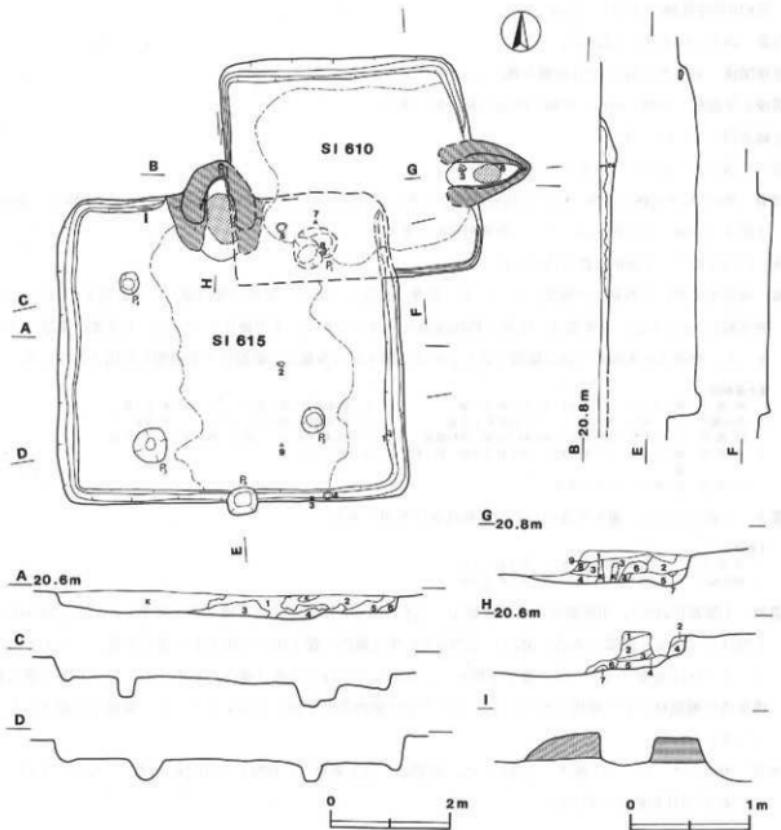
1	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2	赤褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量

遺物 土器片219点、須恵器片70点、鉄製品（刀子）1点、陶器片1点、礫2点が出土している。図示した土器はいずれも土器である。第224・225図1の杯は窓内と覆土中から出土した破片を接合したものである。2の杯は南東コーナー部の覆土下層から、3から5の高台付杯は窓内から出土している。6の壺は窓構築時の補強材として使用されている。7の刀子は南西部の床面から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

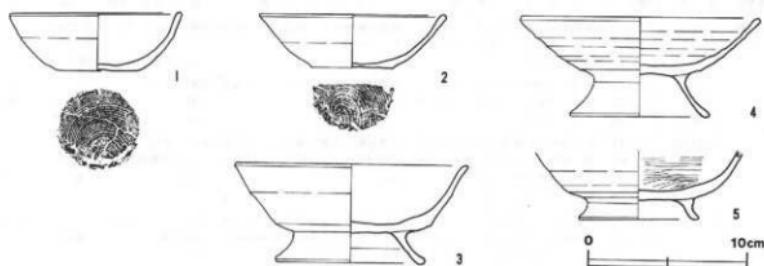
所見 本跡では、ピットは確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第615号住居跡より新しい。

## 第610号住居跡出土遺物観察表

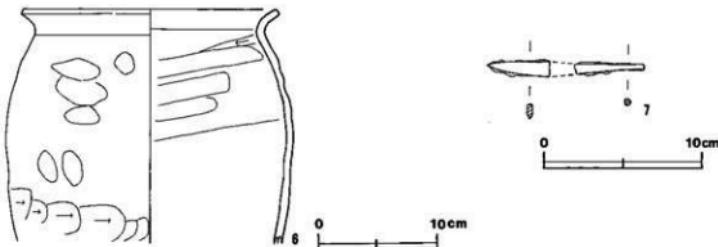
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第224図 1	杯	A 107 B 37 C 49	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内壁気味 に立ち上がる。	底部圓軸糸切り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂紋・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7350 PL78 窓内
	土器					
	土器					
2	杯	A [116] B 33 C [ 50 ]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は内壁気味 に立ち上がる。	底部圓軸糸切り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂紋・長石 黄褐色 普通	P7351 南東コーナー部窓 土下層
	土器					
	土器					
3	高台付杯	A 144 B 61 D 92 E 18	高台部から口縁部にかけて一部欠 損。高台はラッパ状に開く。平底。 体部は内壁気味に立ち上がり、口 縁部はやや外反する。	底部圓軸ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部内・ 外面ロクロナデ。	砂紋・雲母 にぶい赤褐色 普通	P7352 PL78 窓内
	土器					
	土器					
4	高台付杯	A [150] B 62 D [ 86 ] E 27	高台部から口縁部にかけての破片。 高台はラッパ状に開く。平底。体 部から口縁部は緩やかに外傾する。	底部圓軸ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部内・ 外面ロクロナデ。	砂紋・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P7353 窓内
	土器					
	土器					



第223図 第610・615号住居跡実測図



第224図 第610号住居跡出土遺物実測図(1)



第225図 第610号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第224図 5	高台付环	B (41)	体部から口縁部にかけて一部欠損。	底部削軸ヘラ削り後ナダ。高台點り付け後ナダ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子	P7354 35% 露内
	D 75	高台は「ハ」の字状に開く。平底。		体部外縁ロクロナダ、内面丁寧なヘラ磨き。	橙色 普通	
	E 13	体部は内部氣味に立ち上がる。				
第225図 6	土師器	A [21.2]	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面下位横位のヘラ削り、内面ヘラナダ。口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・雲母・長石・石英	P7355 25% 露地塗材
	土師器	B (19.2)	体部は内側して立ち上がる。頭部でくびれ、口縁部は外反する。		橙色 普通	
図版番号	種別	計測値			出土地點	備考
7	刀子	長さ(cm) (8.3)	幅(cm) 1.1	厚さ(cm) 0.4	重量(g) (5.75)	南西部床面 M7024

#### 第611号住居跡(第226・227図)

位置 調査7区中央部, N12h区。

重複関係 北部が第680号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.25m, 短軸3.07mの方形である。

主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がる。

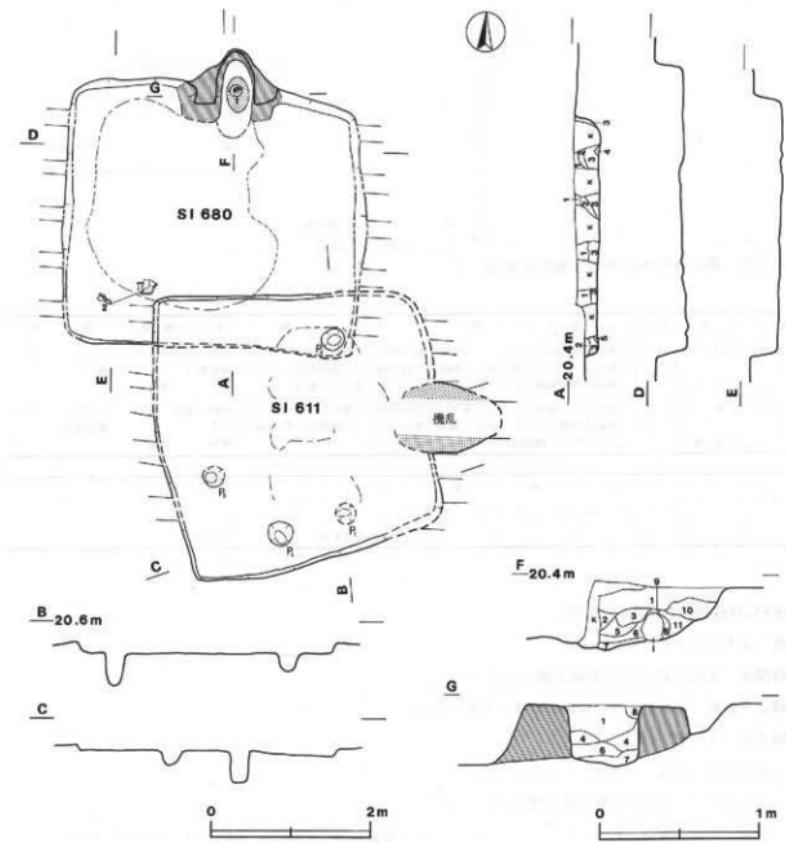
床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 東壁中央部に構築されている。トレンチャーによる搅乱が甚だしいが、両袖部の一部が残存している。

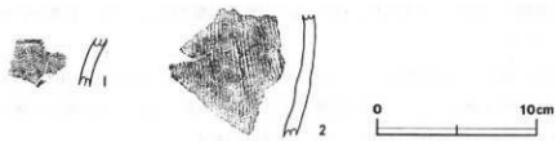
ピット 4か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>3</sub>は径20~24cmの円形で、深さ20~40cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際やや西寄りにあるP<sub>4</sub>は径30cmの円形で、深さ18cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土師器片97点、須恵器片29点、鉄滓1点、陶器片3点が出土している。覆土中から出土した第227図1は須恵器壺の口縁部片で、外面に櫛描波状文が、2の須恵器壺の体部片には外面に縱位の平行叩きが施されている。鉄滓も覆土中から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡は搅乱が甚だしいため、堆積状況は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。重複している第680号住居跡より新しい。



第226図 第611・680号住居跡実測図



第227図 第611号住居跡出土遺物実測図

### 第612号住居跡（第228～230図）

位置 調査7区中央部、N12g区。

重複関係 南部が第661号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.95m、短軸3.85mの方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高は40～46cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅18～30cm、下幅4～10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

窓 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部は搅乱を受けているため、確認できなかった。規模は焚口部から煙道部まで110cmである。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。搅乱を受けているため、覆土の堆積状況は確認できなかった。

ピット 南西コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、径28cmの円形で、深さ20cmである。性格は不明である。

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

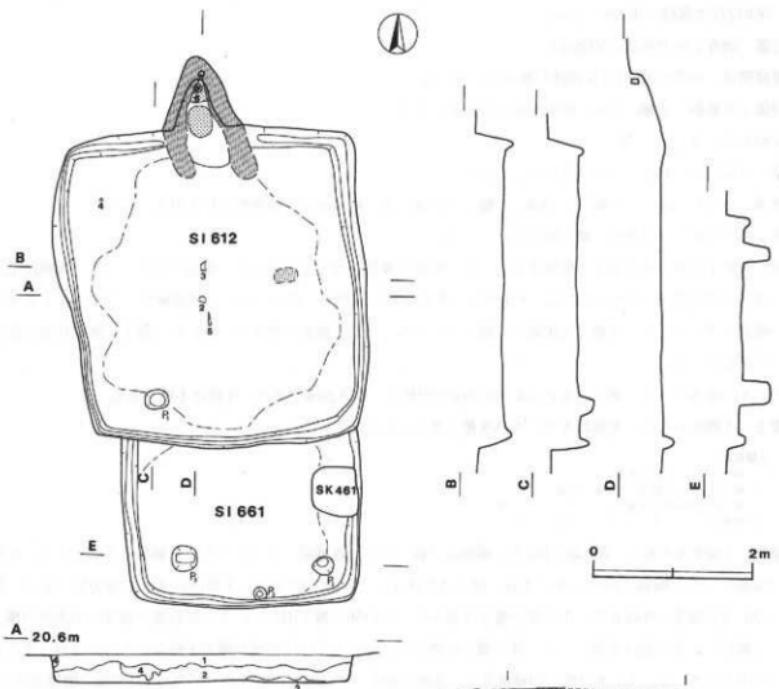
- 1 黄色 ローム粒子多量
- 2 紫色 ローム粒子・洗土粒子多量
- 3 紫色 洗土多量、ローム中プロック少量
- 4 暗褐色 ローム中・小プロック少量

遺物 土器片330点、須恵器片192点、銅製品（鉈）1点、鐵製品（刀子）1点、土製品（支脚）1点、灰釉陶器片1点、陶器片18点、瓦片2点、礫4点が出土している。図示した土器はいずれも須恵器である。第229・230図2の杯は正位で中央部の覆土下層から、1の杯は覆土中から、3の長頸瓶の頸部は中央部の覆土中層から、4の鉈は北西コーナー部の覆土中層から、5の刀子は中央部の覆土下層から、6の支脚は窓内から出土している。7と8は瓶の口縁部片で、外面に縦位の平行叩きが施されている。9は外面に櫛描波状文、10は櫛描波状文と櫛描区画文が施された甕の口縁部片である。11から13は甕の体部片で、外面に縦位の平行叩きが施されている。覆土中から猿投窯黒鉈14号窯式期の灰釉陶器長頸瓶の細片が出土している。陶器片と瓦片は混入したものと考えられる。瓦片は近世のものと思われる。

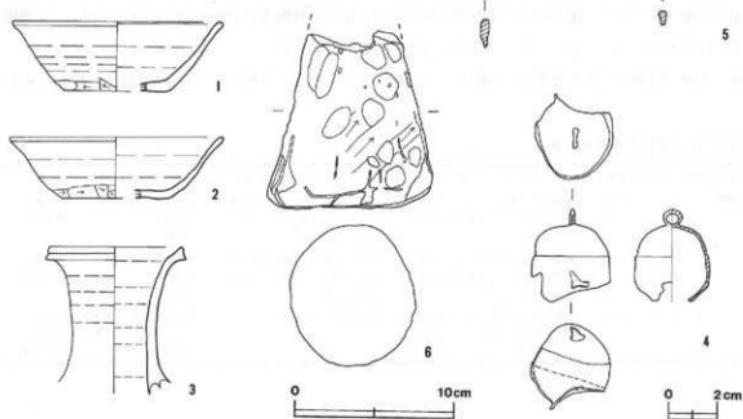
所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。重複している第661号住居跡より新しい。

第612号住居跡出土遺物観察表

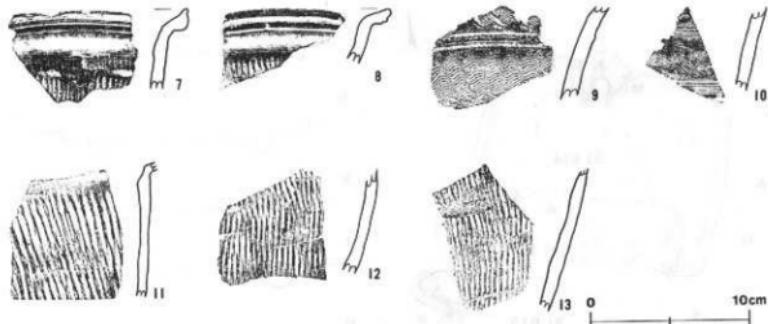
遺物番号	器種	計画値(cm)	器 形 の 特徴	手 法 の 特徴	胎土・色調・焼成	備考
第229図 1	杯	A [13.2] B 43 C [ 6.4]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。外側から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部へラ前り。体部外側下端手持 ちへラ前り。体部から口縁部内・ 外側ロクロナデ。	砂粒・藍母・長石 灰黄色 普通	P7356 20% 覆土中
	須恵器					
第230図 2	杯	A [13.2] B 38 C [ 6.8]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部へラ前り。体部外側下端手持 ちへラ前り。体部から口縁部内・ 外側ロクロナデ。	砂粒・藍母・長石 石英 黄灰色 普通	P7357 10% 中央部覆土下層
	須恵器					
第231図 3	長頸瓶	A [ 8.2] B [ 8.4]	瓶底から口縁部にかけての破片。瓶部 は外反気味に立ち上がり、口縁部は外 反する。口唇部は上方につまみ上げる。	内・外側ロクロナデ。	砂粒・長石・黒色粒 子 灰色 自然胎 普通	P7358 20% PL78 中央部覆土中層
	須恵器					



第228図 第612・661号住居跡実測図



第229図 第612号住居跡出土遺物実測図（1）



第230図 第612号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6229図4	鉦	3.8	3.3	—	(120)	北西コーナー部覆土中層	M7025 PL78
5	刀子	(15.5)	2.1	0.6	(280)	中央部覆土上層	M7026 PL78

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
6	土製支柱	(10.9)	8.0~8.7	(914.0)	龜内	DP7008

### 第613号住居跡(第231・232図)

位置 調査7区中央部, N12J区。

重複関係 北部が第614号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.05m, 短軸3.35mの長方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は8cmである。

壁溝 南壁下から西壁下にかけて確認できた。上幅20~25cm, 下幅4~10cm, 深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 2か所。竈1は、北壁中央部から東寄りに構築されているが、遺存状態が悪く規模は確認できなかった。

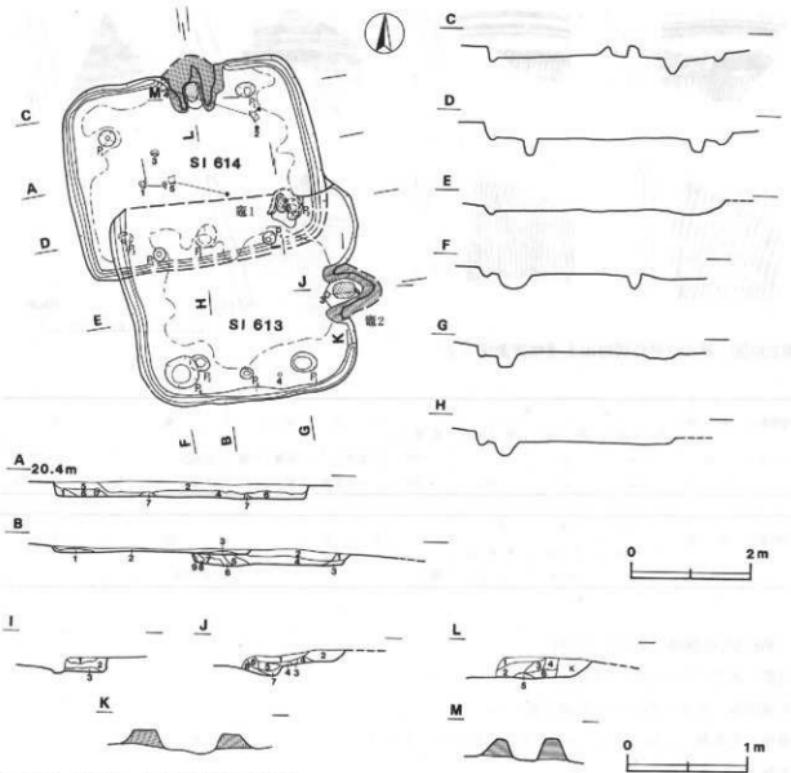
天井部は崩落しており、第1層が崩落土と考えられる。竈2は、東壁中央部に砂質粘土で構築されている。

規模は焚口部から煙道部まで85cm, 両袖部幅90cmである。火床部は、床面を約9cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。覆土から多量の土器片が出土している。残存状況から判断して、竈1を廃棄した後、竈2が構築されたものと考えられる。

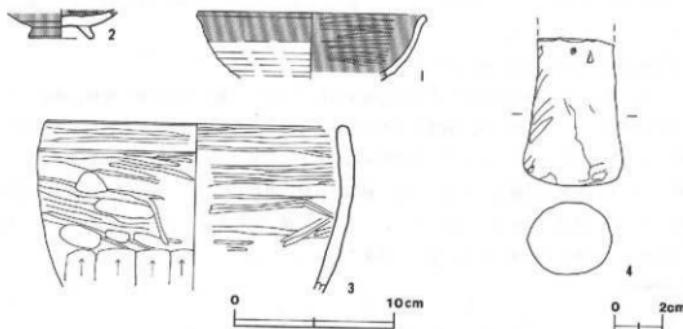
竈1土層解説  
1 にじい褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量

2 陶赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

3 陶赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、粘土粒子微量



第231図 第613・614号住居跡実測図



第232図 第613号住居跡出土遺物実測図

## 図2 土層解説

- 1 路褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 4 黑褐色 粘土ブロック・焼土粒子中量
- 5 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 極端褐色 烧土粒子・炭化粒子多量
- 7 墓赤褐色 焚土中ブロック・焼土粒子多量
- 8 極端赤褐色 焚土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量

ピット 6か所 ( $P_1 \sim P_6$ )。 $P_1$ から $P_4$ は径20~30cmの円形で、深さ20~30cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にある $P_5$ は径20cmの円形で、深さ29cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。南西コーナー部にある $P_6$ は径60cmの円形で、深さ22cmであり、覆土中から多量の土師器片が出土している。規模や位置、遺物出土状況から貯蔵穴と考えられる。

覆土 3層からなる。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

## 土層解説

- 1 崩褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 紺褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焚土粒子・中量、粘土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片139点、須恵器片19点、不明土製品1点、椀状鉄滓1点、礫5点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第232図1の杯は南西部の覆土下層から、2の高台付皿は覆土中から、3の鉢は竈2内から出土している。4の不明土製品と椀状鉄滓は南壁際の覆土下層から出土している。また、 $P_6$ 覆土中から土師器壺や甕の破片が多量に出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。椀状鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。重複している第614号住居跡より新しい。

## 第613号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計面積(cm)	器形の特徴		手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)				
第232図 1	壺 土師器	A [142] B (41)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内壇気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	体部から口縁部外面ロクロナデ、 内面丁寧なへら削き。外面口縁部・ 内面黑色処理。	砂粒・葉母・赤色粒子 にぶい橙色(外輪) 普通	P7359 南西部覆土下層	10%	
		C (18) D 40 E 0.7	高台部から底部にかけての破片。 高台は複く「ハ」の字状に開く。	底部へラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。内・外輪黑色処理。	砂粒 黒色 普通	P7361 覆土中	30%	
2	鉢 土師器	A [18.8] B (10.3)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は内壇して立ち上がる。	体部外面下位報位のヘラ削り、上位・内面丁寧なへら削き。口縁部内・外輪横ナデ後丁寧なへら削き。	砂粒・小石・赤色粒子 橙色 普通	P7362 竈2内	10%	
		C (18.8)						
図版番号	種別	計面積	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土地点	備考
4	不明土製品	(6.1)	4.1	3.0	(77.0)		南壁際覆土下層	DP7009

## 第614号住居跡(第231・233図)

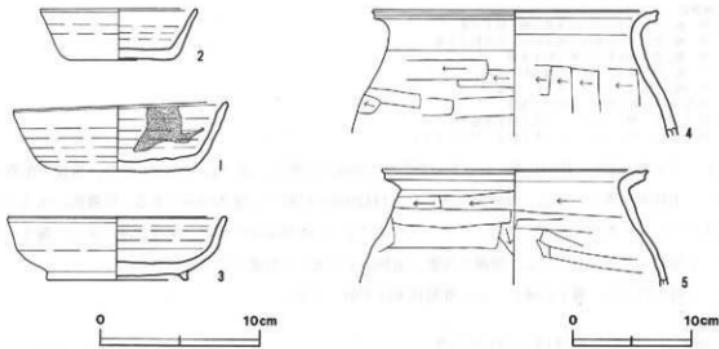
位置 調査7区中央部、N12b区。

重複関係 南部を第613号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸4.22m、短軸3.13mの長方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 壁高は17~28cmで、外傾して立ち上がる。



第233図 第614号住居跡出土遺物実測図

壁溝 全周している。上幅20~25cm、下幅6~10cm、深さ約7cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部から東寄りに砂質粘土で構築されている。袖部は良好に遺存している。規模は焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅80cmである。火床部は赤変硬化している。天井部は崩落しており、第1層から第4層が崩落土と考えられる。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 断土層解説

1 黒 褐 色	粘土ブロック多量、焼土粒子少量	4 褐 褐 色	粘土ブロック・焼土粒子中量
2 褐 褐 色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5 褐 赤 褐 色	焼土中ブロック・焼土粒子多量
3 黒 褶 色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量	6 極赤褐色	焼土中ブロック・焼土粒子多量

ピット 5か所 ( $P_1 \sim P_5$ )。 $P_1$ から $P_4$ は径20~23cmの円形で、深さ20~30cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にある $P_5$ は長径40cm、短径30cmの橢円形で、深さ22cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 植物褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 始褐色	ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色	ローム中ブロック・焼土粒子中量、粘土粒子・炭化粒子微量
4 黑褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子中量
5 褐褐色	ローム小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6 褐褐色	ローム小ブロック・焼土粒子中量、粘土粒子微量
7 褐褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量
8 褐褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
9 黄褐色	ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子微量

遺物 土師器片164点、須恵器片19点、鉄滓1点、礫4点が出土している。第233図1の須恵器壺と3の須恵器高台付壺は逆位で中央部から西側の床面で出土している。1の口縁部に油煙が付着している。2の須恵器壺は逆位で東部の床面から出土している。4の土師器壺は竈西側と東側の床面から出土した破片を接合したものである。5の土師器壺は中央部の床面と覆土中から出土した破片を接合したものである。鉄滓は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀中葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されなかった。重複している第613号住居跡より古い。

第614号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第233図 1	壺	A 13.4 B 4.3 C 8.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 灰色 普通	P7363 70% PL78 内面油煙 付邊 西部床面
	壺 恵器	A [9.8] B 3.2 C 6.5	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 灰色 普通	P7365 60% PL78 東部床面
	壺	A [13.6] B 4.0 D 8.8 E 0.6	高台付壺 A [13.6] 高台部から口縁部にかけて一部欠損。 B 4.0 平底。高台は脛く「八」の字状に開く。平底。 D 8.8 体部は内壁気泡に立ち上り、口縁部との境にわずかに隆起をもつ。 E 0.6 口縁部は外傾する。	底部削輪削り。高台貼り付け後ナダ。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・小石 灰色 良好	P7364 60% PL78 西部床面
3	壺 恵器	A [24.0] B (10.3)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内側して立ち上がる。頭部にくびれ。口縁部は外傾する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部上位内・外面ヘラナダ。口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・雲母・石英 にい赤褐色 普通	P7366 20% 竈西側と東部床面
	壺 土師器	A [22.0] B (9.5)	体部上位から口縁部にかけたの破片。体部上位は内側して立ち上がる。頭部にくびれ。口縁部は大きく外傾する。口唇部は上部につまみ上げる。	体部上位内・外面ヘラナダ。口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・雲母・石英 明赤褐色 普通	P7367 10% 中央部床面

## 第615号住居跡（第223・234図）

位置 調査7区南部, N12ha区。

重複関係 北東部が第610号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸5.83m, 短軸5.50mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 北壁東側は確認できなかった。壁高は35~58cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下東側では確認できなかった。上幅20~30cm, 下幅約10cm, 深さ約10cmであり、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部は遺存している。規模は焚口部から煙道部まで160cm, 両袖部幅130cmである。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかつた。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

## 竈土層解説

- 1 白 赤 灰 色 焙土中ブロック・炭化粒子多量  
 2 黒 灰 色 焙土粒子・炭化粒子中量  
 3 黑 灰 色 焙土中ブロック・燒土粒子多量  
 4 暗赤 灰 色 焙土粒子・炭化粒子少量

- 5 暗赤 灰 色 焙土中ブロック・燒土粒子多量  
 6 黑 灰 色 焙土中・小ブロック多量、灰中量  
 7 にい赤褐色 焙土中ブロック・燒土粒子多量

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径30~40cmの円形で、深さ30~40cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際中央部にあるP<sub>5</sub>は、長径50cm、短径30cmの椭円形で、深さ20cmである。

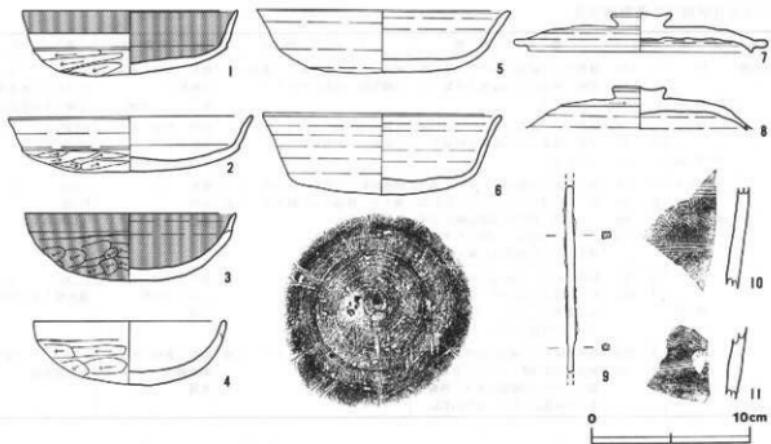
位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 灰暗褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量  
 2 黑褐色 ローム粒子微量  
 3 黑褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量

- 4 黑褐色 ローム粒子・燒土粒子中量、炭化粒子少量  
 5 灰暗褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量  
 6 黑褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子中量



第234図 第615号住居跡出土遺物実測図

**遺物** 土師器片543点、須恵器片76点、鉄製品（鉄鎌）1点、鉄滓1点、礫13点が出土している。第234図1の土師器片は正位で南東コーナー部の覆土中層から、2の土師器片は逆位で中央部から東側の覆土下層から、3と4の土師器片は正位で南壁際から、5の須恵器片は正位で北東部の覆土下層から、6の須恵器片は南部の覆土中から出土している。7の須恵器蓋は甕内から出土した破片を接合したものである。8の須恵器蓋は正位で北東コーナー部の覆土中層から、9の鉄鎌は南東部の覆土中層から、鉄滓は覆土中から出土している。10と11は須恵器の口縁部片で、いずれも櫛描波状文と櫛描区画文が施されている。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀前葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。重複している第610号住居跡より古い。

第615号住居跡出土遺物観察表

器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 土師器	A [13.5] B 4.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。 丸底。体部は内唇気味に立ち上がり。 口縁部との境にわずかに接をもつ。口縁部はやや外傾する。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口 縁部内・外唇横ナデ。口縁部外面・ 内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒 P7368 南東コーナー部覆 土中層	60%
	A [15.2] B 3.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。 丸底。体部は内唇気味に立ち上がり。 口縁部との境にわずかに接をもつ。口縁部はやや外傾する。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口 縁部内・外唇横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 P7369 にぶい褐色 普通	45% 東側覆土下層
3 土師器	A 13.2 B 4.2	丸底。体部は内唇気味に立ち上がり。 口縁部はやや外反する。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口 縁部内・外唇横ナデ。内・外唇黒 色処理。	砂粒 P7370 PL78 普通	100% 南壁際
	A 12.0 B 3.9	丸底。体部から口縁部は内唇気味 に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口 縁部内・外唇横ナデ。	砂粒 P7371 PL78 普通	100% 南壁際
5 須恵器	A 15.8 B 3.9 C 7.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部は内唇気味に立ち上がり。 口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁 部内・外唇ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 小石 P7372 PL78 普通	80% 北東部覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第234図 6	壺	A 15.0 B 5.1 C 12.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部削輪ヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 7373 65% PL 78 南部覆土上中
	壺	A [14.0] B 2.4 C 3.8 G 0.8	天井部から口縁部にかけて一部欠損。 ボタン状のつまみが付く。内側にかえりをもつ。	天井部外面上半削輪ヘラ削り。天井部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石 石英 黄灰色 普通	P 7374 40% PL 78 窓内
	壺	B (2.7) F 3.4 G 0.7	口縁部欠損。ボタン状のつまみが付く。天井部は笠形をしている。	天井部外面上半削輪ヘラ削り。天井部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 黄灰色 普通	P 7375 40% PL 78 北東コーナー部覆土中層
7	壺	A [14.0] B 2.4 C 3.8 G 0.8	天井部から口縁部にかけて一部欠損。 ボタン状のつまみが付く。内側にかえりをもつ。	天井部外面上半削輪ヘラ削り。天井部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石 石英 黄灰色 普通	P 7374 40% PL 78 窓内
	壺	B (2.7) F 3.4 G 0.7	口縁部欠損。ボタン状のつまみが付く。天井部は笠形をしている。	天井部外面上半削輪ヘラ削り。天井部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 黄灰色 普通	P 7375 40% PL 78 北東コーナー部覆土中層
	壺	B (2.7) F 3.4 G 0.7	口縁部欠損。ボタン状のつまみが付く。天井部は笠形をしている。	天井部外面上半削輪ヘラ削り。天井部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 黄灰色 普通	P 7375 40% PL 78 北東コーナー部覆土中層

### 第616A号住居跡(第235・236図)

位置 調査7区東部、N13hi区。

重複関係 全体的に第616B号住居跡、東部が第617号住居跡、南東部が第618号住居跡に掘り込まれているが、

床面まで達していない。南西コーナー部は第463・464号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸[4.1]m、短軸[3.7]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-14°-W

壁 北壁から東壁にかけて確認できた。壁高は約28cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下から東壁下にかけて確認できた。上幅約20cm、下幅4~10cm、深さ約5cmであり、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、踏み固められている。

窓 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部は遺存している。規模は焚口部から煙道部まで83cm、両袖部幅97cmである。火床部は赤変硬化している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 窓土層解説

- 1 砂赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 黒褐色 炭化粒子多量、焼土粒子中量
- 3 黑褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子少量
- 4 砂赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 5 砂赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量

ピット 北東コーナー部にあるP1は、径40cmの円形で、深さ15cmである。性格は不明である。

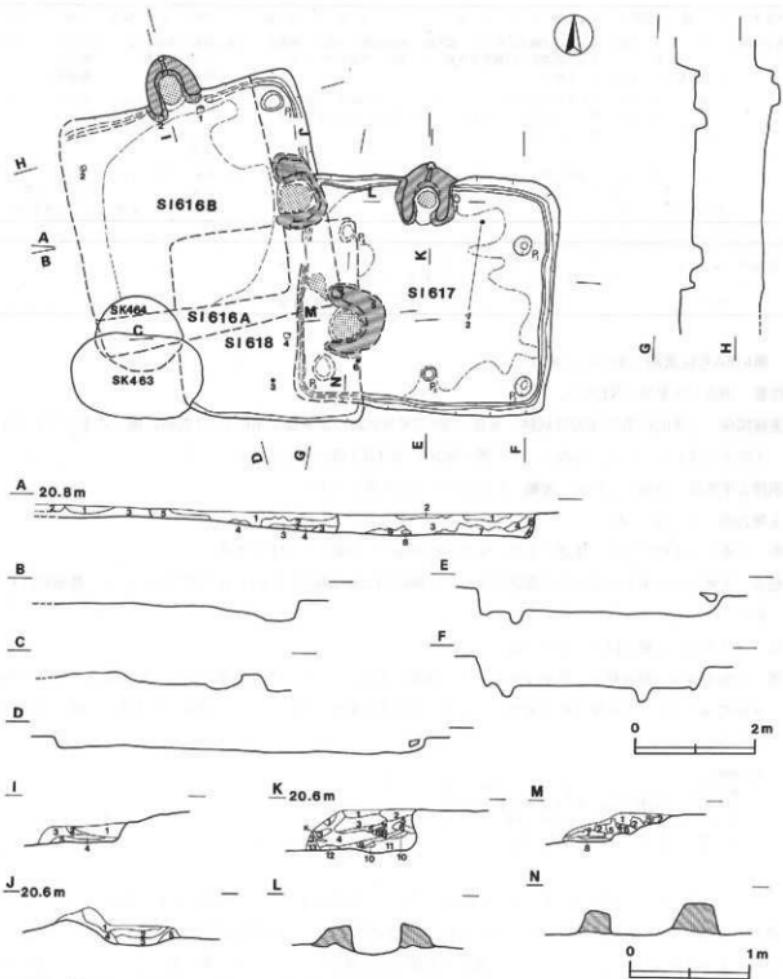
遺物 土器片が6点出土している。第236図1の土器杯と2の土器壺は窓前の床面から出土している。

所見 本跡は搅乱がはなはだしいため、覆土の堆積状況は確認できなかった。壁が確認できなかった部分は、

床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して8世紀前葉と考えられる。重複している  
第616B・617・618号住居跡、第463・464号土坑より古い。

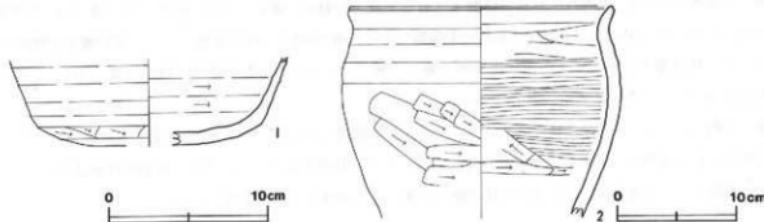
### 第616A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第236図 1	壺 土器	B (54) 土厚	底部から体部にかけての破片。丸底。体部は外傾して立ち上がる。	底部削輪ヘラ削り。体部内・外側ロクロナダ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 7376 35% 窓前床面

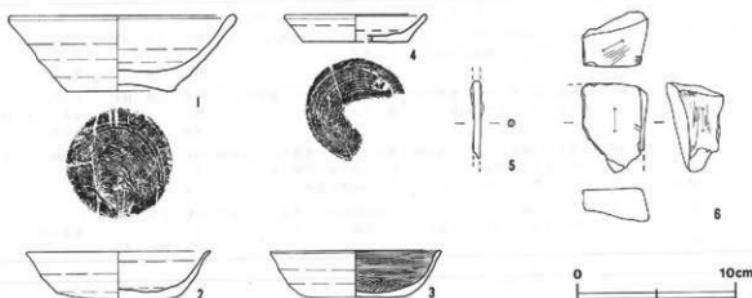


第235図 第616A・616B・617・618号住居跡実測図

国版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第236図 2	甕 土師器	A [22.2] B [17.3]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内側へラテナデ、外面上位横ナデ。口縁部は外反する。口 唇部は上方につまみ上げる。	体部内・外面へラテナデ、外面上位横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい橙色 普通	P7377 20% 電前床面



第236図 第616A号住居跡出土遺物実測図



第237図 第616B号住居跡出土遺物実測図

#### 第616B号住居跡（第235・237図）

位置 調査7区東部, N13h区。

重複関係 全体的に第616A号住居跡、南部が第618号住居跡、東部が第617号住居跡を掘り込んでいる。南西コーナー部は第463・464号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [3.9]m, 短軸 [3.4]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-77°-E

壁 南壁から西壁にかけては確認できなかった。壁高は約36cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 東壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部は遺存している。規模は焚口部から煙道部まで約70cm、両袖部幅約100cmである。火床部は、床面を約20cm掘りくぼめており、赤変化している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焙土粒子多量、炭化粒子中量
- 2 にぶい赤褐色 焙土粒子、炭化粒子中量
- 3 赤褐色 焙土中プロック・焼土粒子多量、ローム大プロック・ローム粒子少量
- 4 暗赤褐色 焙土粒子多量、ローム大プロック・炭化粒子少量
- 5 にぶい赤褐色 ローム小プロック・焼土中プロック・焙土粒子中量

覆土 3層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小プロック中量
- 2 暗褐色 ローム中プロック微量
- 3 黒褐色 ローム大プロック・ローム粒子少量

**遺物** 土器片226点、須恵器片34点、鉄製品（釘）1点、石製品（砥石）1点、鉄滓1点、礫3点、炭化物が出土している。図示した土器はいずれも土器部である。第237図2の环は北西コーナー部の覆土中層から、1と3の环は覆土中から、4の皿は南東部の覆土下層から、5の釘、6の砥石、鉄滓は覆土中から、炭化物は南東コーナー部の床面から出土している。

**所見** 本跡では、ピットと壁溝は確認できなかった。壁が確認できなかった部分は、床質から規模を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。重複している第616A・617・618号住居跡より新しく、第463・464号土坑より古い。

第616B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第237図 1	环	A [14.1]	体部から口縁部にかけて一部欠損。	底部回転糸切り。体部内・外面口子クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子	P7378 60%
	土器	B 4.7 平底。体部から口縁部は外傾する。			砂粒・雲母・黄褐色	PL78
	土器	C 6.5			普通	夏土中
2	环	A 11.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内脇気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部ナダ。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・黄褐色	P7379 70%
	土器	B 3.7 3.7			普通	北西コーナー部覆土中層
	土器	C 7.7			普通	中層
3	环	A [10.6]	底部から口縁部にかけて一部欠損。	底部ヘラ削り。体部から口縁部外周クロナダ、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色(外面) 普通	P7380 40%
	土器	B 2.9 2.9	平底。体部は内脇気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。			覆土中
	土器	C [6.0]				
4	皿	A [9.0]	底部から口縁部にかけての破片。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子	P7381 55%
	土器	B 1.7 1.7	平底。体部から口縁部は外傾する。			南東部覆土下層
	土器	C 6.5				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	釘	(5.0)	0.5	0.4	(3.62)	覆土中	M7028
6	砥石	(5.5)	(4.2)	2.1	(62.0)	覆土中	Q7008 磨灰岩

#### 第617号住居跡（第235・238図）

**位置** 調査7区東部、N13h区。

**重複関係** 西部は第616B・618号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。西部は第616A号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と平面形** 長軸4.25m、短軸3.75mの長方形である。

**主軸方向** N - 5° - E

**壁** 西壁は確認できなかった。壁高は15~50cmで、外傾して立ち上がる。

**壁溝** 上幅10~20cm、下幅4~10cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしており、全周している。

**床** ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

**窓** 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約100cm、両袖部幅約95cmである。

第11層の底部の焼土ブロックがゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめている。天井部は崩落しており、第4層と第12層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 富士層解説

1	暗 色	ローム粒子・焼土粒子多量、炭化粒子中量	8	に ぶ い 橙 色	焼土粒子多量、灰少量
2	褐 色	焼土粒子多量、炭化粒子中量	9	灰 色	灰多量
3	褐 色	焼土中ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子少量	10	褐 色	焼土粒子多量、炭化粒子少量
4	褐 色	焼土ブロック多量、ローム大ブロック・砂粒中量	11	に ぶ い 橙 色	焼土中ブロック・焼土粒子多量、灰少量
5	に ぶ い 赤褐色	ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子中量	12	に ぶ い 橙 色	ローム大ブロック・粘土ブロック多量
6	赤 色	焼土粒子・焼土中ブロック多量、炭化粒子中量	13	褐 色	焼土粒子多量、炭化粒子少量
7	に ぶ い 橙 色	焼土粒子・炭化粒子多量、灰少量			

ピット 5か所 ( $P_1 \sim P_5$ )。 $P_1$ から $P_4$ は径20~30cmの円形で、深さ約20cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にある $P_5$ は径20cmの円形で、深さ22cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

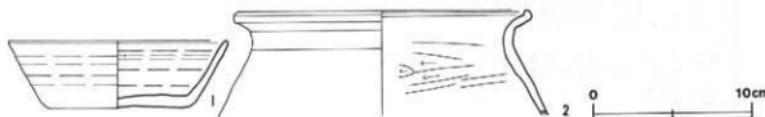
覆土 9層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
2	黒褐色	ローム中ブロック少量
3	黒褐色	ローム大ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
5	暗褐色	ローム粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子少量
7	褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
8	暗褐色	ローム中ブロック少量、ローム粒子微量
9	暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片315点、須恵器片67点、礫1点が出土している。第238図1の須恵器杯は菟東側袖部から出土している。2の土師器甕は、北部の覆土上層と中央部から南側の覆土中層で出土した破片を接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀中葉と考えられる。重複している第616B-618号住居跡より古く、第616A号住居跡より新しい。



第238図 第617号住居跡出土遺物実測図



第239図 第618号住居跡出土遺物実測図

第617号住居跡出土遺物観察表

器番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第238号 1	壺 須恵器	A [13.6]	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰黄褐色 普通	P7382 60% 竈東部袖部
		B 4.2				
		C 9.0				
2	壺 土部器	A [24.2]	体部上部から口縁部にかけての横片。B (8.5) 体部上位は内側して立ち上がる。頂部でくぎれ、口縁部は外反する。	体部上位外面ヘラナデ。内面ナデ。口縁部内・外側横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 子 にぶい黄褐色 普通	P7383 10% 北部覆土上層と南部覆土中層

## 第618号住居跡（第235・239図）

位置 調査7区東部、N13h:区。

重複関係 北部が第616A号住居跡、東部が第617号住居跡を掘り込み、北部を第616B号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。西壁を第463・464号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [3.2]m、短軸 [3.1]mの方形と推定される。

主軸方向 N-90°-E

壁 南壁のみ確認できた。壁高は12~19cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、踏み固められている。

竈 東壁中央部に砂質粘土で構築されている。袖部は良好に遺存している。規模は焚口部から煙道部まで70cm、両袖部幅100cmである。第8層の下部の焼土ブロックがゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

## 竈土層解説

- 1 黄色 ローム粒子多量、炭化粒子中量、燒土粒子少量
- 2 黄色 ローム粒子・燒土粒子多量、炭化粒子中量
- 3 黄色 燃土粒子多量、ローム粒子少量
- 4 粘土ブロック
- 5 赤褐色 燃土中ブロック多量、燒土粒子中量
- 6 黄色 燃土粒子多量、炭化粒子中量
- 7 灰色 灰多量
- 8 暗赤褐色 燃土ブロック・焼土粒子多量

覆土 5層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 黑褐色 ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 3 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子少量
- 4 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
- 5 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量、燒土粒子・炭化粒子微量

遺物 土器片101点、須恵器片16点、魚骨片が出土している。図示した土器はいずれも土器である。第239図3と4の皿は正位で南部の覆土下層から、5の皿は正位で竈内から、6の皿は竈南側の覆土下層から、7の皿は竈北袖部から、1の高台付壺と2の高台付碗が遺構確認面から出土している。竈火床部から小魚の骨片が出土している。種類は不明である。

所見 本跡では、ピットと壁溝は確認できなかった。また、北壁が確認できなかったため、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀中葉から後葉と考えられる。重複している第616A・617号住居跡より新しく、第616B号住居跡、第463・464号土坑より古い。

第618号住居跡出土物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	釉土・色調・焼成	備考
1 第239図	高台付壺	B (3.8)	高台部から体部下端にかけての破片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ削り後ナダ。高台貼り付け後ナダ。体部外側クロナダ。	砂粒・長石・石英 赤色粒子 にぶい黄褐色(外面)	P7384 30% 遺構確認面
	土師器	D 8.5	平底。体部下端は内骨気味に立ち上がる。	内面墨色処理。		
		E 1.4				
2	高台付壺	A 12.8	高台部と体部から口縁部にかけて一部欠損。高台はラッパ状に開く。	底部回転ヘラ削り後ナダ。高台貼り付け後ナダ。体部から口縁部内・外側クロナダ。	砂粒・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7385 70% PL78 遺構確認面
	土師器	B 6.5	平底。体部は内骨気味に立ち上がる。			
		D [6.2]				
3	皿	A 9.3	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部から口縁部内・外側クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7386 100% PL79 南部覆土下層
	土師器	B 1.7				
		C 6.4				
4	皿	A 8.9	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部から口縁部内・外側クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7387 100% PL79 南部覆土下層
	土師器	B 1.6				
		C 6.2				
5	皿	A 9.2	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・外側クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7388 100% PL79 室内
	土師器	B 1.5				
		C 7.0				
6	皿	A 9.2	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・外側クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7389 100% PL79 越南覆土下層
	土師器	B 1.9				
		C 6.0				
7	皿	A [8.0]	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は内骨気味に立ち上がる。	底部回転系切り。体部から口縁部内・外側クロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7390 45% 瓶北袖部
	土師器	B 1.9				
		C 5.6				

第619号住居跡(第240図)

位置 調査7区東部、N12j-区。

規模と平面形 長軸3.60m、短軸3.30mの方形である。

主軸方向 N-70°-E

壁 壁高は23~30cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南東コーナー部の壁下では確認できなかった。上幅約20cm、下幅4~8cm、深さ約9cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

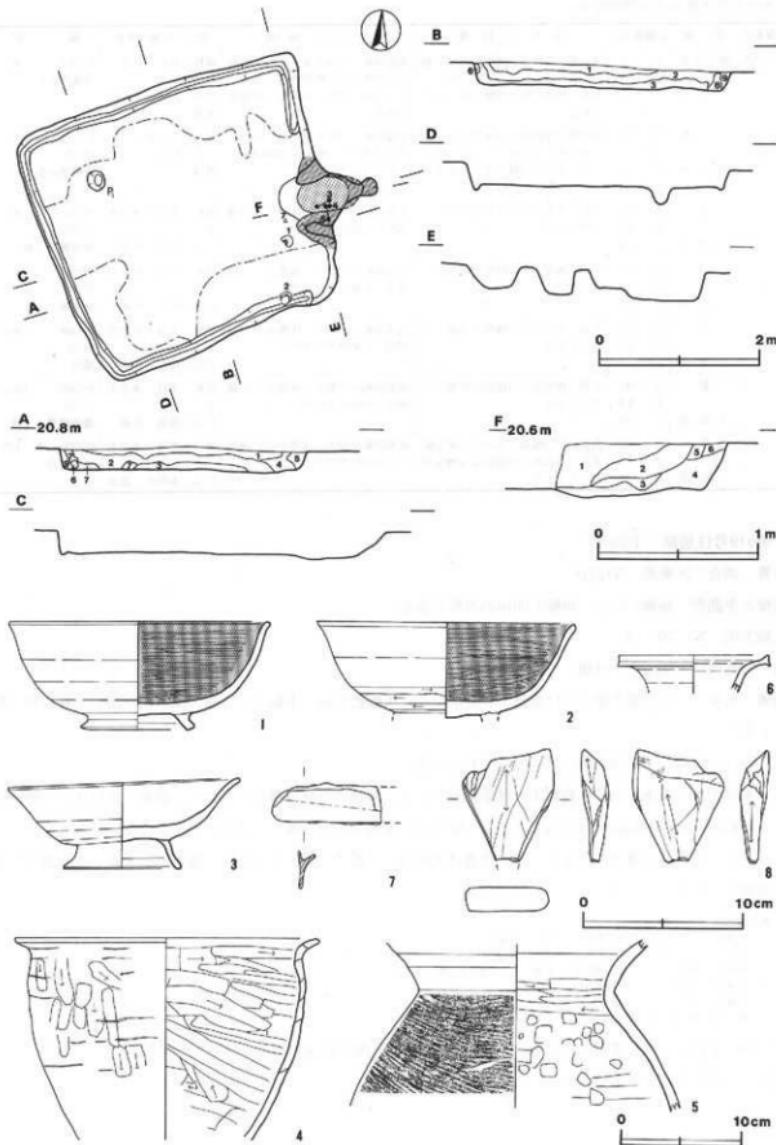
竈 東壁中央から南寄りに砂質粘土で構築されている。袖部は良好に遺存している。規模は焚口部から煙道部まで約120cm、両袖部幅約100cmである。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化しゴツゴツしている。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。覆土から多量の土師器片と須恵器片が出土している。

遺土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・鐵土粒子・炭化粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・鐵土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 鐵土中ブロッカ・鐵土粒子多量、ローム粒子少量
- 4 暗褐色 鐵土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 鐵土中ブロッカ・鐵土粒子少量
- 6 浅色 鐵土粒子・鐵土中ブロッカ中量

ピット 北西コーナー部にあるP1は、径20cmの円形で、深さ25cmである。性格は不明である。

覆土 9層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。



第240図 第619号住居跡・出土遺物実測図

## 土器解説

- 1 純褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 純褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 純褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 純褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子微量
- 6 純褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
- 7 純褐色 ローム粒子中量
- 8 純褐色 ローム中ブロック・ローム粒子多量
- 9 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

**遺物** 土器器片432点、須恵器片85点、鉄製品（鎌）1点、石製品（砥石）1点、椀状鉄滓1点、礫4点が出土している。第240図1の土器器高台付坏は逆位で竈前の覆土下層から出土している。2の土器器高台付坏は南東部の覆土下層と覆土中から出土した破片を接合したものである。3の土器器高台付皿、4の土器器甕、5の須恵器甕は竈内から、6の須恵器長頸瓶の口縁部は覆土中から、7の鎌、椀状鉄滓は竈前の覆土中層から、8の砥石は南東部の覆土下層から出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉と考えられる。椀状鉄滓が出土しているが、銀治炉は確認されていない。

第619号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	断形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第240図 1 土器器	高台付坏	A 16.1 B 6.7 D 6.2 E 11	口縁部一様欠損。高台は「ハ」の字状に窪く。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部鉛板へ割り後ナデ。高台貼り付け付後ナデ。体部から口縁部外側クロナデ、内面丁寧なハラ磨き。内面黑色處理。	砂粒・雲母・赤色粒子 PL79 橙色(外面) 普通	P7391 PL79 竈前覆土下層 75%
	高台付坏	A 16.2 B (5.9)	高台部と体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部鉛板へ割り後ナデ。高台貼り付け付後ナデ。体部外側面クロナデ、内面丁寧なハラ磨き。内面黑色處理。	砂粒・雲母・赤色粒子 PL79 明赤褐色 普通	P7392 PL79 南東部覆土下層 75%
	高台付皿	A (14.3) B 5.5 D 7.2 E 1.9	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台は「フ」の字状に窪く。平底。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部鉛板へ割り後ナデ。体部から口縁部内外側クロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 PL79 にぼい橙色 普通	P7393 PL79 竈内 60%
	甕	A [25.0] B (16.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外側へ割り後ナデ、内面ハラナデ。口縁部内外側横ナデ。輪模痕底。	砂粒・雲母・赤色粒子 明赤褐色 普通	P7394 竈内 20%
	土器器	B (14.0)	体部上端から頸部にかけての破片。体部は内側に立ち上がり、頸部で「く」の字に屈曲する。	体部上端外側横位の平行叩き、内面指印押捺後ナデ。頸部内外側横ナデ。	砂粒・長石・石英 灰色 普通	P7395 竈内 10%
6 須恵器	長頸瓶	A [9.2] B (2.4)	口縁部片。口縁部は外反し、口縁部は下方に折り返す。	内・外側クロナデ。	砂粒・雲母・黒色粒子 灰色 自然釉 普通	P7397 覆土中 5%

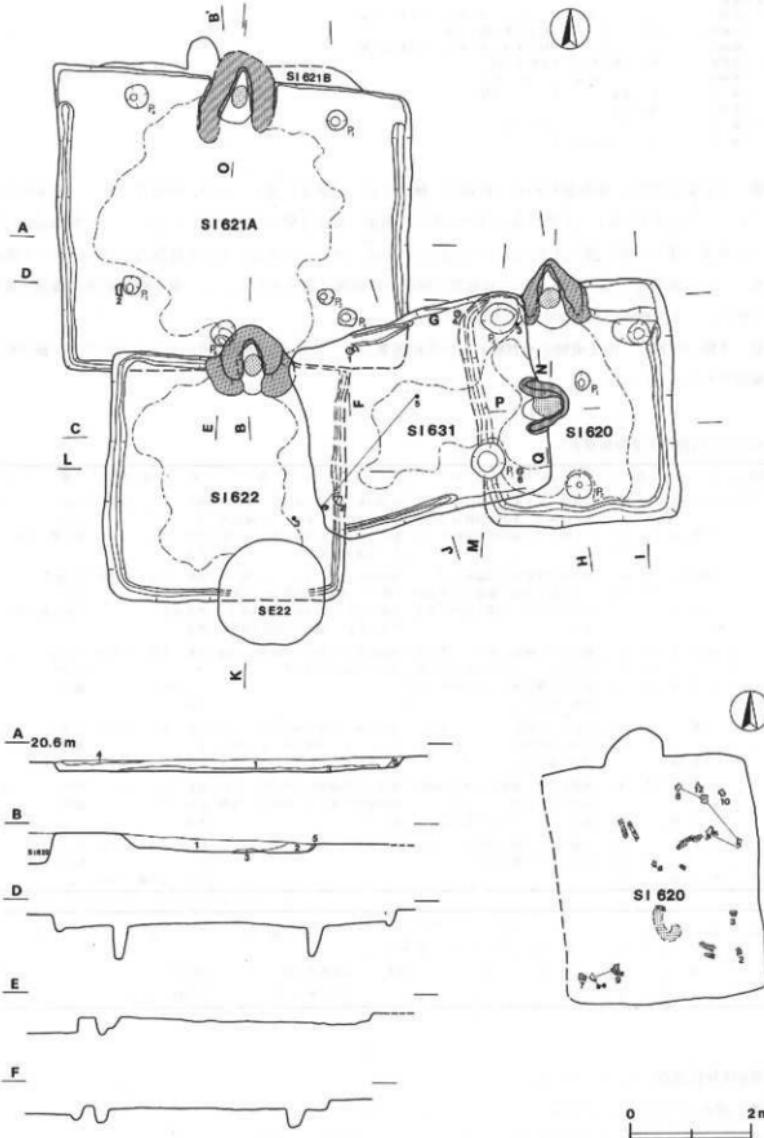
図版番号	種別	計測値				出土場所	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	鎌	(6.9)	2.6	0.2~1.1	(27.0)	竈前覆土中層	M7029 PL79
8	砥石	(7.0)	5.3	1.8	(67.0)	竈前覆土下層	Q7009 ホルンフェルス

## 第620号住居跡（第241～243図）

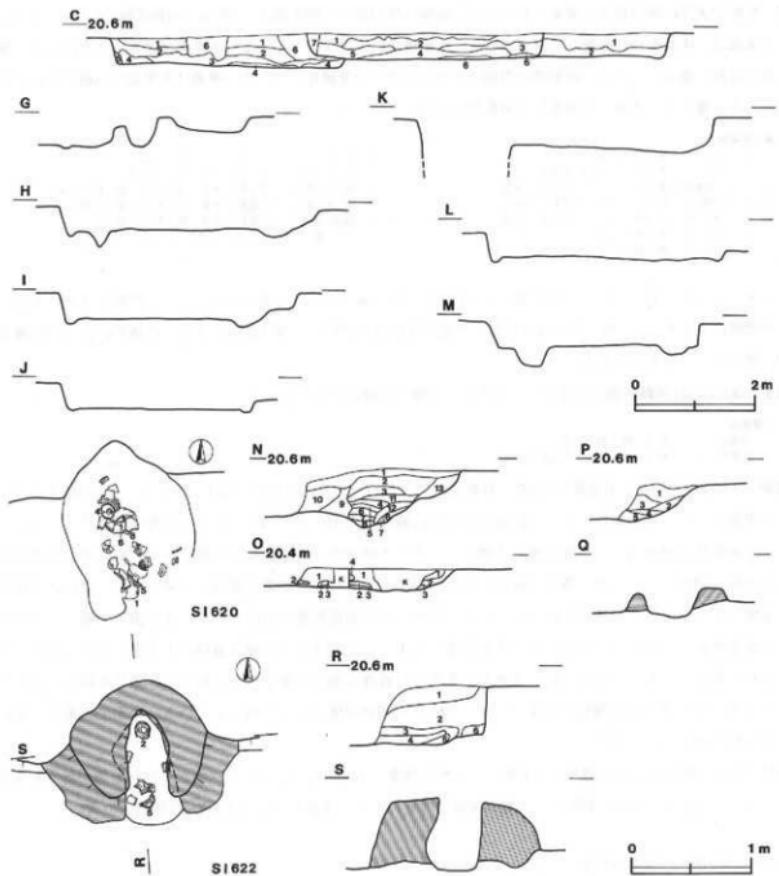
**位置** 調査7区中央部、N121a区。

**重複関係** 西部が第631号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

**規模と平面形** 長軸4.00m、短軸[3.5]mの長方形である。竈東袖部から東壁にかけて、幅40cm、長さ110cm、



第241図 第620・621A・622・631号住居跡実測図（1）



第242図 第620・621A・622・631号住居跡実測図（2）

高さ20cmの地山を生かした棚状遺構が確認できた。棚の上部からは土器片や須恵器片が多量に出土している。

主軸方向 N - 5° - W

壁 第631号住居跡と重複している部分は確認できなかった。壁高は25~50cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅20~25cm、下幅約10cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。棚状遺構の前に長径100cm、短径40cmの楕円形で、深さ20cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

竪 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅約110cmである。火床部は、床面を約13cm掘りくぼめており、赤変硬化しゴツゴツしている。天井部は確認できなかった。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上る。覆土から多量の土器片や須恵器片が出土している。

#### 竪土層解説

1	暗褐色	燒土粒子中量	8	暗赤褐色	燒土粒子・炭化粒子少量
2	灰褐色	燒土粒子・炭化粒子中量	9	暗赤褐色	燒土粒子・粘土粒子多量
3	にぶい赤褐色	燒土中ドロッカ・燒土粒子多量	10	暗赤褐色	燒土粒子多量・炭化粒子・粘土粒子少量
4	暗赤褐色	粘土ブロック・炭化粒子多量	11	暗赤褐色	炭化粒子多量・燒土粒子少量・灰微量
5	灰褐色	燒土中ドロッカ・燒土粒子中量	12	極暗赤褐色	炭化粒子多量・燒土粒子少量
6	灰褐色	燒土粒子少量	13	黒褐色	ローム粒子多量・燒土粒子少量
7	暗赤褐色	燒土粒子・炭化粒子多量・灰少量			

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。中央部にあるP<sub>1</sub>は、径24cmの円形で、深さ38cmである。性格は不明である。南壁際にあるP<sub>2</sub>は上端が径40cmの円形、下端が径10cmの円形で、深さ28cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 第631号住居跡に掘り込まれているため、2層しか確認できなかった。

#### 土層解説

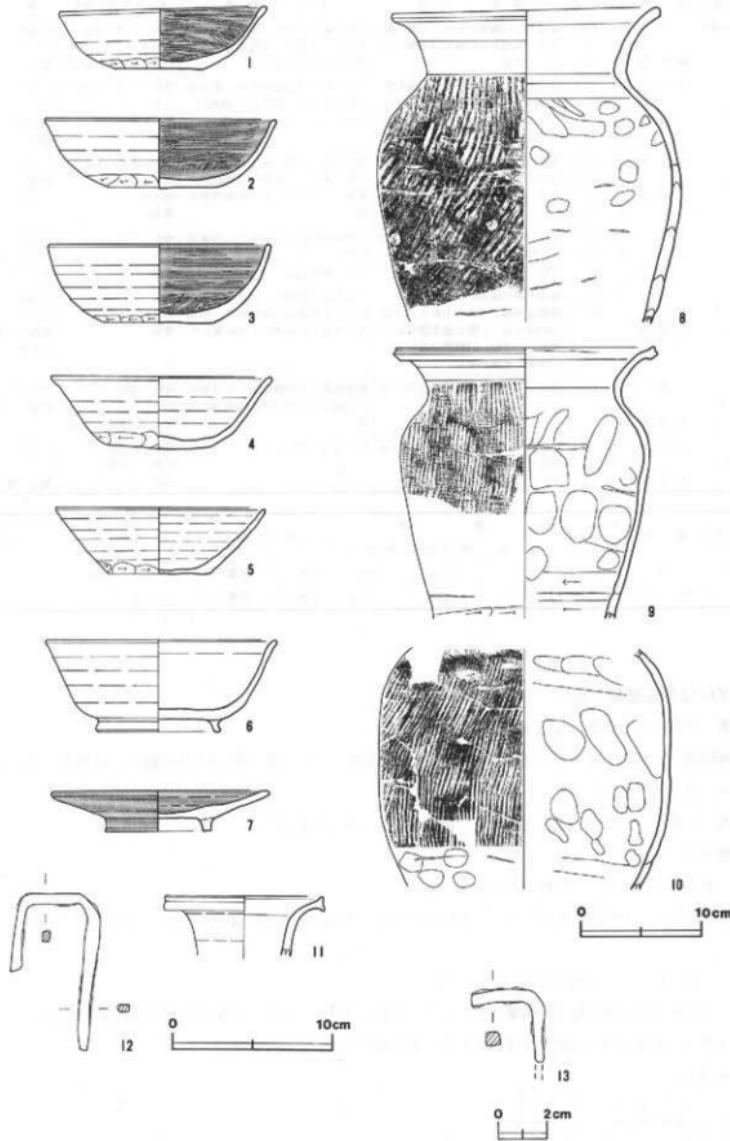
1	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子少量
2	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量

遺物 土器片971点、須恵器片229点、鉄製品(門、角釘)2点、炭化材が出土している。第243図4と5の須恵器杯、1の土器杯、6の土器高台付杯は竪内から出土している。6は二次焼成を受けている。2の土器杯は南東コーナー部の覆土下層から、3の土器杯は東部の覆土下層から、7の土器高台付皿は逆位で南西コーナー部の覆土下層から出土している。8の須恵器甕は竪内と北東コーナー部にある棚状造構の上から出土した破片を接合したものである。9の須恵器甕は南西コーナー部の覆土下層から出土した破片を接合したものである。10の須恵器甕は北東コーナー部にある棚状造構の上と覆土中から出土した破片を接合したものである。11の須恵器長頸瓶の口縁部は竪内と覆土中から出土した破片を接合したものである。12の門と13の角釘は北東コーナー部にある棚状造構の上から出土している。床面中央部から特に炭化材が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。また、床面から柱材と思われる炭化材が出土していることから判断して、焼失家屋と考えられる。重複している第631号住居跡より古い。

第620号住居跡出土遺物観察表

固有番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第243図 1 土 器 瓶	壺	A 12.5 B 3.9 C 5.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内輪気味に立ち上がり。口縁部は外輪気味に傾する。	底部ヘラ切り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部外面ロクロナギ、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色(外側) 普通	P7399 80% PL79 竪内
	壺	A 14.4 B 4.3 C 6.6	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内輪気味に立ち上がる。	底部ヘラ切り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部外面ロクロナギ、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 黒褐色(外側) 普通	P7400 70% PL79 南東コーナー部覆土下層
	土 器 瓶	A [13.6] B 4.9 C 6.8	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内輪気味に立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部外面ロクロナギ、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色(外側) 普通	P7401 30% 東部覆土下層
4 須 惠 器	壺	A [13.8] B 4.4 C 6.3	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外輪して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部外面ロクロナギ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい褐色 普通	P7398 65% PL79 竪内



第243図 第620号住居跡出土遺物実測図

調査番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第243回 5	壺	A 13.1 B 4.2 C 6.2	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P7402 PL79 窓内
	高台付壺	A 14.3 B 5.8 D 7.6 E 0.9	底部から口縁部にかけて一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内側気泡に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り後ナダ。高台貼り付け後ナダ。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石・石英 明赤褐色 普通	P7403 PL79 二次焼成 窓内
	土器	A 13.7 B 20 D 6.5 E 0.9	体部から口縁部にかけて一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部は外傾する。	底部回転ヘラ削り後ナダ。高台貼り付け後ナダ。体部から口縁部内・外面黑色處理。	砂粒・雲母・長石・石英 暗灰色 普通	P7404 南西コーナー部覆土下層
7	甕	A 22.2 B (25.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がる。頭部でくびれ、口縁部は大きく外反する。	体部外面継ぎの平行叩き。内面指壓押す。ナダ。口縁部内・外面横ナダ。輪積み灰。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	P7405 PL79 窓内と北東コーナー部覆土上層
	須恵器	A [21.2] B (22.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、上位で内側する。上位に最大径をもつ。頭部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部に弦接が認る。	体部外面下位継ぎのヘラ削り。中位から上位継ぎの平行叩き。内面當て具痕。口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・長石 オリーブ黒色 普通	P7406 PL79 南西コーナー部覆土下層
8	甕	B (19.6)	体部片。体部は内側して立ち上がる。	体部外面下位継ぎ押す。中位から上位継ぎの平行叩き。内面當て具痕。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P7407 北東コーナー部
9	須恵器	A [9.8] B (3.7)	口縁部片。口縁部は外反し、口縁端部は下方に折り返す。	内・外面クロナダ。	砂粒・黒色粒子 灰色 自然釉 良好	P7408 PL79 窓内と覆土中
	長頸瓶					
11	須恵器					

調査番号	種別	計測値			出土場所	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
12	門	(9.8)	5.7	0.4~0.5	(29.0)	北東コーナー部覆土中 M7030 鉄製
13	角釘	(3.1)	(3.1)	0.6	(5.10)	北東コーナー部覆土中 M7031

### 第621A号住居跡（第241・244図）

位置 調査7区中央部、N12j区。

重複関係 全体的に第621B号住居跡を掘り込み、南東コーナー部が第631号住居跡に、南壁際が第622号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.73m、短軸[5.1]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は19~29cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下と東壁下で確認できた。上幅20~30cm、下幅4~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。搅乱を受けているが、火床部と袖部の一部が残存している。火床部は、床面を約3cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- 1 黑褐色 粘土粒子・炭化粒子少量
- 2 黑褐色 粘土粒子・炭化粒子中量
- 3 淡赤褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量
- 4 黑褐色 ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子中量

**ピット** 6か所 ( $P_1 \sim P_6$ )。 $P_1$ から $P_4$ は径26~30cmの円形で、深さ40~60cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。 $P_2$ の南東側にある $P_5$ は、径約26cmの円形で、深さ26cmであり、 $P_2$ の補助柱穴と考えられる。南壁際にある $P_6$ は径30cmの円形で、深さ31cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

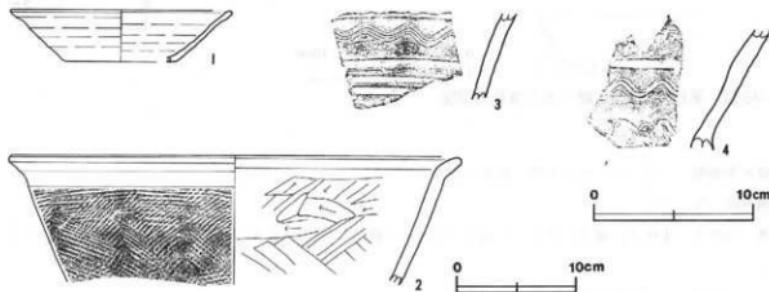
**覆土** 5層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 無褐色 燃土粒子少量
- 2 深褐色 ローム粒子・燃土粒子・炭化粒子少量
- 3 深褐色 燃土粒子・炭化粒子少量
- 4 深褐色 ローム粒子・燃土粒子・炭化粒子少量
- 5 深褐色 ローム粒子少量、燃土粒子・炭化粒子微量

**遺物** 土師器片378点、須恵器片104点、灰釉陶器片1点が出土している。第244図1の須恵器杯は南西部の覆土下層から、2の須恵器瓶は $P_3$ の西部の床面から出土している。3と4は須恵器壺の口縁部片で、いずれも外側に櫛描波状文が施されている。覆土中から狼投糞井ヶ谷78号窯式期の灰釉陶器長頸瓶の細片が出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。重複している第621B号住居跡より新しく、第622・631号住居跡より古い。



第244図 第621A号住居跡出土遺物実測図

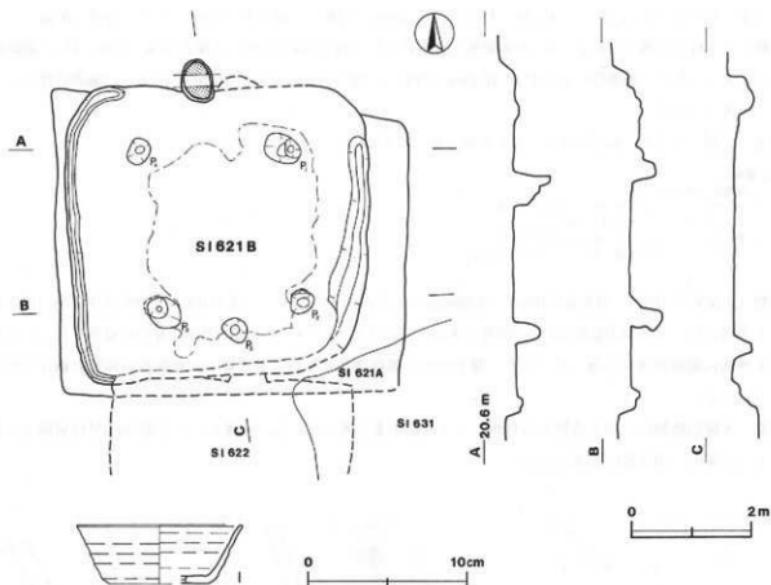
第621A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	前測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	杯	A [13.8] B [3.2] C [6.8]	体部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	P 7409 10% 南西部覆土下層
	瓶	A [36.8] B [10.6]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面上位横粒と斜粒の平行引き、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7410 10% P. 西部床面
	須恵器					

#### 第621B号住居跡（第245図）

**位置** 調査7区中央部、N12j区。

**重複関係** 全体的に第621A号住居跡に、南東コーナー部が第631号住居跡に、南部が第622号住居跡に掘り込まれている。



第245図 第621B号住居跡・出土遺物実測図

規模と平面形 一辺 [4.9]mの方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁溝 西壁下と東壁下に確認できた。上幅20~30cm、下幅4~20cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に構築されていたと推定される。搅乱がはなはだしいが、火床部と考えられる赤変硬化面が北壁際の床面に検出できた。

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径20~30cmの円形で、深さ40~60cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>5</sub>は径約40cmの円形で、深さ33cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土師器片41点、須恵器片7点が出土している。第245図Iの須恵器片はP<sub>3</sub>覆土中から出土している。

所見 本跡は搅乱を受けているため、覆土の堆積状況は確認できなかった。規模と平面形は壁溝や床質から推定した。時期は、P<sub>3</sub>覆土中の出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。重複している第621A・622・631号住居跡より古い。

第621B号住居跡出土遺物観察表

器皿番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第245器 1	壺 須恵器	A [10.4] B 3.7 C [6.0]	底部から口縁部にかけての破片。 底平。底部から口縁部は外傾して立上る。	底部へラ削り。底部から口縁部内・外側クロナザ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P7411 P1 覆土中 15%

## 第622号住居跡（第241・246図）

位置 調査7区中央部、O12a4区。

重複関係 北部が第621A・621B号住居跡を掘り込み、東部を第631号住居跡に、南壁際を第22号井戸に掘り込まれている。第631号住居跡の掘り込みは、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸4.15m、短軸4.00mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 第631号住居跡に掘り込まれている部分は確認できなかった。壁高は14~49cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 罐東側の北壁下の一部では確認されなかった。上幅20~25cm、下幅6~10cm、深さ14~49cmで、断面形は逆台形をしている。

床 ほぼ平坦で、罐前から中央部にかけて特に踏み固められている。

竈 北壁中央部から東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約100cm、両袖部幅約120cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2層と第3層が粘土ブロックを多量含んでいたため、天井部崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土師器片や須恵器片が出土している。

## 竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子中量
- 4 にじみ褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量
- 5 黒赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・灰中量
- 6 黒赤褐色 炭化粒子多量、焼土中ブロック・焼土粒子・灰中量

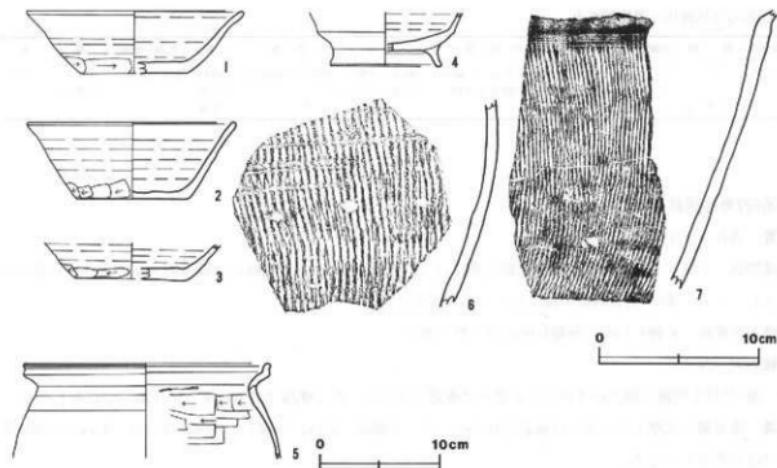
覆土 6層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 黒色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒色 ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒色 ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 黒色 ローム大ブロック中量、ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片422点、須恵器片155点、鉄滓1点、陶器片2点、礫2点が出土している。第246図1の須恵器片は中央部の覆土下層から、2の須恵器片は正位で窓内から、3の須恵器片は南東側の覆土中層から、4の須恵器高台付片は南西部の覆土中層から、5の土師器片は窓口部から、鉄滓は覆土中から出土している。6と7は須恵器の部品で、いずれも外面に縦位の平行叩きが施されている。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡では、ピットは確認されなかった。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉は確認されていない。重複している第621A・621B号住居跡より新しく、第631号住居跡、第22号井戸より古い。



第246図 第622号住居跡出土遺物実測図

第622号住居跡出土遺物観察表

国版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第246図 1 須恵器	壺	A [13.5] B 3.9 C [6.6]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外側下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい褐色 普通	P7412 15% 中央部覆土下層
	壺	A 13.0 B 4.8 C 6.8	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外側下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P7413 80% PL 79 窓内
	壺	B (2.1) C [6.8]	底部から体部下端にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外側下端手持ちヘラ削り。体部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	P7414 20% 南東部覆土中層
第246図 4 須恵器	高台付壺	B (3.4) D [7.0] E 1.3	高台部から体部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。平底。 体部は外傾して立ち上がる。	底盤回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P7415 10% 南西部覆土中層
	壺	A [20.6] B (7.7)	体部上位から口縁部にかけての破片。 体部上位は内傾して立ち上がる。 底盤でくびれ。口縁部は外反する。 口縁部直下に俊が通り、口縁部は上方につまみ上げる。	体部上位外側ナデ。内面横位のヘラナデ。口縁部内・外側横ナデ。 輪積み板。	砂粒・雲母・長石・ 石英 明褐色 普通	P7416 10% 窓焚口
	土師器					

第624号住居跡（第247図）

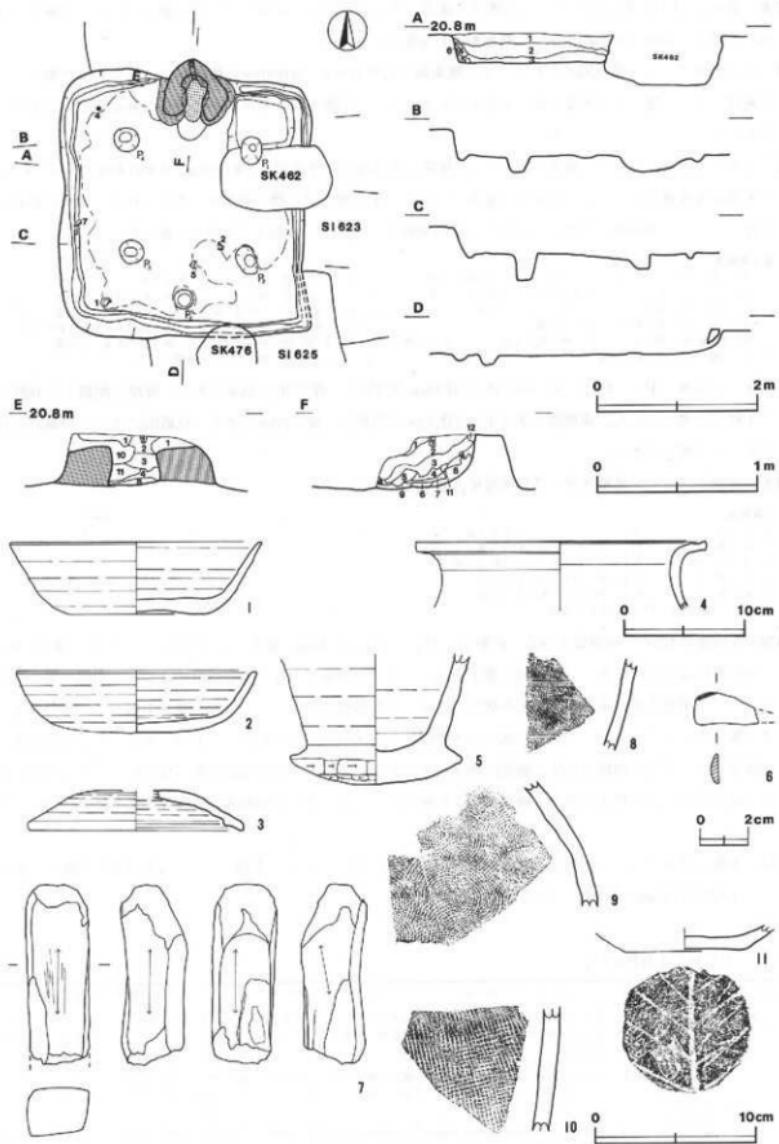
位置 調査7区東部、N13i区。

重複関係 東部が第623号住居跡を掘り込み、第462号土坑に掘り込まれている。南部が第625号住居跡、第476号土坑に掘り込まれている。第625号住居跡、第476号土坑の掘り込みは、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸4.43m、短軸4.15mの方形である。

主軸方向 N - 0°

壁 第462号土坑に掘り込まれている部分は確認できなかった。壁高は約53cmで、外傾して立ち上がる。



第247図 第624号住居跡・出土遺物実測図

**壁溝** 第462号土坑に掘り込まれている部分は確認できなかったが、全周していたと推定される。上幅20~30cm、下幅6~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

**床** ほぼ平坦で、よく踏み固められている。東側に長径110cm、短径80cmの梢円形で、深さ30cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

**竪** 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約130cm、両袖部幅約110cmである。火床部は赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2層と第3層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 塗土層解説

1 黒 緑 色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量	7 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
2 緑 緑 色 粘土小ブロック多量・焼土粒子・炭化粒子中量	8 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、灰中量
3 黒 緑 色 焼土中ブロック・粘土ブロック多量	9 暗 緑 色 灰少量、焼土中ブロック・焼土粒子中量
4 緑 緑 色 焙土粒子・炭化粒子中量	10 暗 褐 色 烧土小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子中量
5 緑 赤 緑 色 焙土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子少量	11 暗 赤 褐 色 焙土中ブロック・焼土粒子多量、灰少量
6 緑 緑 色 焙土粒子多量	12 にぶい橙色 粘土ブロック多量

**ピット** 5か所 ( $P_1 \sim P_5$ )。 $P_1$ から $P_4$ は径30cmの円形で、深さ20~30cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にある $P_5$ は径30cmの円形で、深さ20cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 6層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗 緑 色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
2 暗 緑 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒 緑 色 ローム粒子・炭化粒子少量
4 緑 緑 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
5 暗 緑 色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
6 にぶい褐色 焙土粒子・炭化粒子少量

**遺物** 土師器片422点、須恵器片78点、鉄製品（刀子）1点、石製品（砥石）1点が出土している。第247図1の須恵器は正位で南西コーナー部の覆土中から、2の須恵器と5の須恵器捏鉢は斜位で南部の覆土下層から、3の須恵器蓋は南西部の覆土中層から、4の土師器壺は北西コーナー部の覆土中層から、6の刀子の基は覆土中から出土している。7の砥石は西壁際から出土した破片を接合したものである。8は須恵器壺の口縁部片で、外面に櫛描波状文と櫛描区画文が施されている。9と10は須恵器壺の体部片で、9は外面に向心円状の叩き、10は格子目叩きと櫛描波状文が施されている。11は土師器壺の底部片で、木葉真が認められる。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀前葉と考えられる。重複している第623号住居跡より新しく、第625号住居跡、第462・476号土坑より古い。

第624号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画値(cm)	器 形 の 特徴	手 法 の 特徴	胎土・色調・焼成	備考
第247図 1	壺 須恵器	A 15.6 B 4.5 C 8.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。 底部ヘラ削り後ナデ。体部から口 縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・小石 灰色 普通	P7422 80% 南西コーナー部覆 土中	
2	壺 須恵器	A [14.8] B 3.9	底部から口縁部にかけての破片。 丸底。体部から口縁部は外削して 立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁 部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	P7423 35% 南部覆土下層
3	壺 須恵器	A [13.2] B ( 2.5 )	天井部から口縁部にかけての破片。 天井部は笠形であり、内面に低い かえりが付く。	天井部外削し半回転ヘラ削り。下 半面内ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石 灰黄色 普通	P7424 15% 南西部覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴		手法の特徴		黏土・色調・施成	備考
			A (24.2)	B (5.7)	口縁部片。頭部でくびれ、口唇部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナゲ。		
4 土部器	甕						砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P7425 5% 北西コーナー部覆土中層
5 須恵器	鉢	B (7.9) C 10.8	底部から体部にかけての破片。底部は薄い円錐状の丸底で、上位に明瞭な縦をもつ。体部は外傾する。		底部ヘラ削り。体部内・外面ロクロナゲ。		砂粒・石英 灰色 普通	P7426 5% PL80 南部覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	刀子	(2.7)	1.4	0.3	(1.18)	覆土中	M7032
7	砥石	11.1	4.0	3.0	273.0	西壁際	Q7010 錬泥片岩

### 第625号住居跡（第248図）

位置 調査7区東部、N13j区。

重複関係 北部が第623・624号住居跡を掘り込み、中央部が第476号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.28m、短軸3.15mの方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 瓦西側の壁は確認されなかった。壁高は40~45cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 瓦西側壁下では確認されなかった。上幅10~30cm、下幅4~10cm、深さ約5cmで、断面形はU字形をしている。

床 第476号土坑に掘り込まれている部分以外は、ほぼ平坦で踏み固められている。

竈 北壁中央部から東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約120cm、両袖部幅約120cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2層から第4層が崩落土と考えられる。袖部は遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から内鶯気味に立ち上がる。

#### 竈土層解説

1 黒褐色	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	5 赤褐色	褐色	燒土粒子中量、ローム粒子少量
2 黒褐色	褐色	粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子中量	6 赤褐色	褐色	炭化粒子多量
3 黒褐色	褐色	焼土中ブロック、焼土粒子多量	7 にぶい褐色	褐色	焼土粒子・炭化粒子多量、灰少量
4 黒褐色	褐色	粘土ブロック多量、焼土小ブロック・炭化粒子中量	8 晴赤褐色	褐色	焼土粒子多量、硬い

ピット 5か所(P1~P5)。P1からP4は径20~30cmの円形で、深さ20~30cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP5は径28cmの円形で、深さ23cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

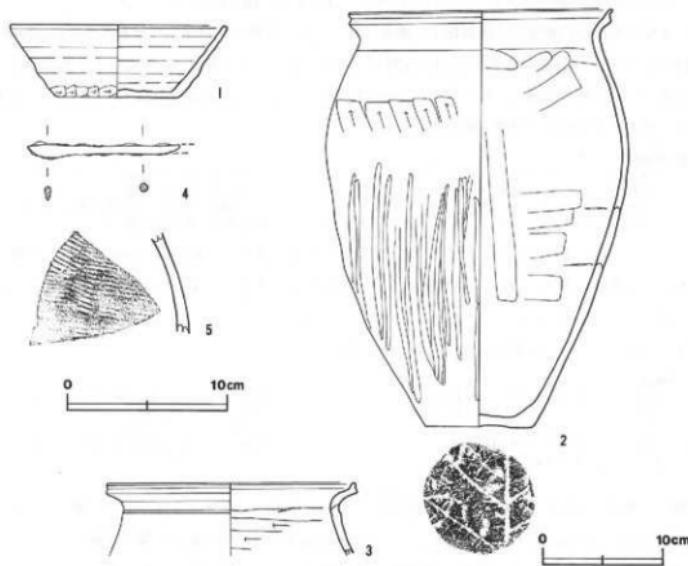
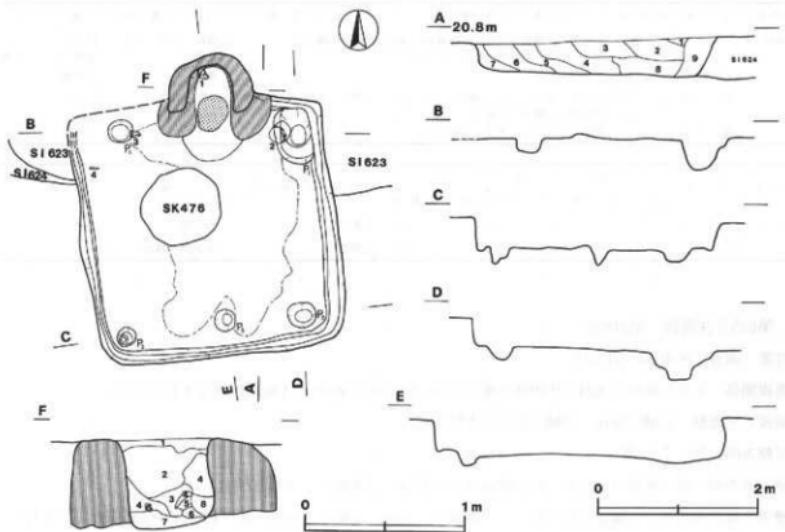
#### 土層解説

1 晴褐色	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6 晴褐色	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 晴褐色	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7 晴褐色	褐色	ローム粒子中量
3 褐色	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量	8 晴褐色	褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
4 晴褐色	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量	9 晴褐色	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
5 晴褐色	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量			

遺物 土師器片508点、須恵器片36点、鐵製品(刀子)1点、土製品(支脚)1点、礫1点が出土している。

第248図の須恵器片は逆位で窓内から、2の土師器片は斜位で北東部の覆土下層から、3の土師器片は西部の覆土中層から、4の刀子は西壁際の覆土下層から、支脚の破片が中央部の床面から出土している。

5は須恵器片の体部片で、外面に横位の平行叩きが施されている。



第248図 第625号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。重複している第623・624号住居跡より新しく、第476号土坑より古い。

第625号住居跡出土遺物観察表

目録番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第248回 1	壺	A [134] B 45 C (7.4)	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底基ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	P7428 50% 窓内
	甕 恵 器					
2	甕	A 220 B 344 C 90	平底。体部は内側気味に立ち上がり、上辺に最大径をもつ。肩部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	底部木製痕。体部外面下端丁寧なヘラ磨き、上部輪郭のヘラ削り。 内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石 赤褐色 普通	P7427 100% 北東部覆土下層
	土 師 器					
3	甕	A [208] B (5.9)	口縁部断。頭部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P7429 5% 北西部覆土中層
	土 師 器					

目録番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	刀 子	(9.5)	1.1	0.4~0.6	(7.70)	西壁際覆土下層	M7033

### 第626号住居跡（第249回）

位置 調査7区東部、N13j-h区。

規模と平面形 長軸3.40m、短軸2.77mの長方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は約50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅10~20cm、下幅4~10cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

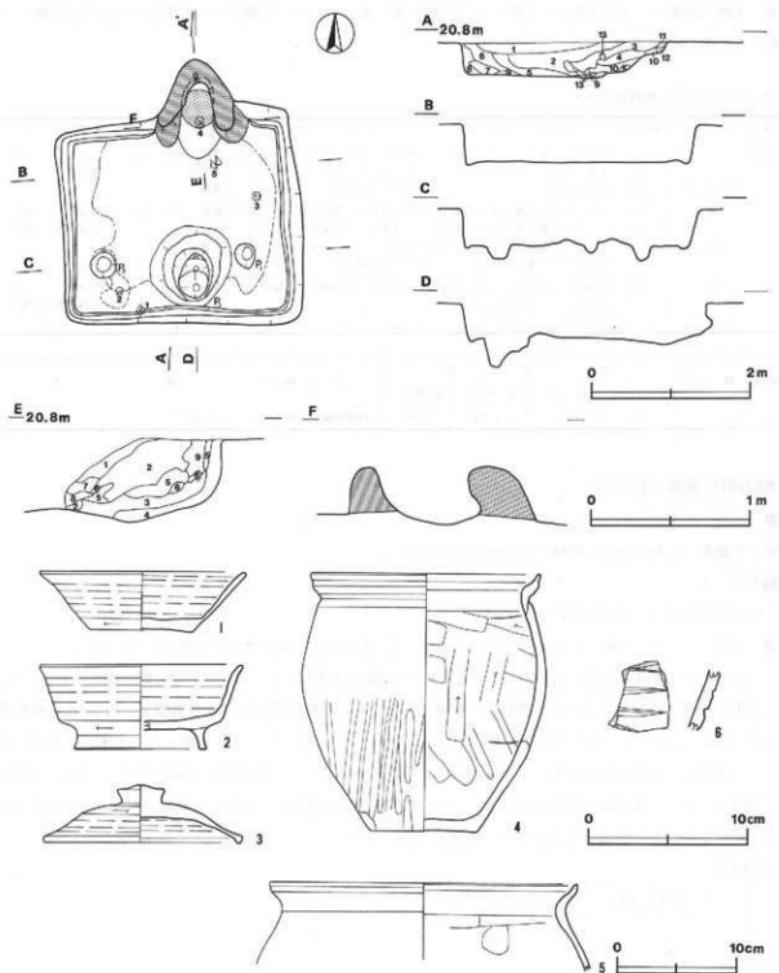
床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。P<sub>3</sub>の周囲は土手状に土が盛られ、硬く踏み固められている。竈 北壁中央部からやや東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約100cm、両袖部幅約110cmである。第4層の下部の焼土ブロックがゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は一部遺存しているが、大部分が崩落しており、第5層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から内鶴気味に立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 焼 色 ローム粒子・炭化粒子中量
- 2 焼 色 砂粉多量、熟土小・ロック中量
- 3 焼 色 焚土中ブロック・熟土粒子多量、ローム粒子少量
- 4 焚土ブロック、ゴツゴツしている
- 5 砂質粘土
- 6 焚土ブロック
- 7 焼 色 砂粉中量、熟土粒子少量
- 8 焼 色 熟土粒子多量
- 9 焼 色 焚土中・小ブロック多量

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は径20~30cmの円形で、深さ約20cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP<sub>3</sub>は径36cmの円形で、深さ40cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 13層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。



第249図 第626号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

- |       |                                  |        |                  |
|-------|----------------------------------|--------|------------------|
| 1 茶褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量・燒土粒子・炭化粒子<br>少量 | 7 黒褐色  | ローム粒子中量          |
| 2 茶褐色 | ローム粒子中量・ローム中ブロック少量               | 8 褐色   | ローム粒子中量          |
| 3 茶褐色 | ローム粒子中量・燒土粒子・炭化粒子少量              | 9 黒褐色  | 炭化粒子多量・燒土粒子中量    |
| 4 黑褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量       | 10 褐色  | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 5 茶褐色 | ローム小ブロック少量・ローム粒子微量               | 11 茶褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量     |
| 6 茶褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量                 | 12 黒褐色 | ローム粒子中量          |
|       |                                  | 13 褐色  | 燒土粒子・炭化粒子多量      |

**遺物** 土師器片123点、須恵器片22点、礫1点が出土している。第249図1の須恵器壺と2の須恵器高台付壺は、南西コーナー部の覆土下層から、3の須恵器蓋は東部の覆土中層から、4の土師器小形甕は正位で窓内から、5の土師器甕は窓前の覆土下層から出土している。6の土師器甕の体部片の外面には、砥石に使用したと思われる痕跡がある。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。

第626号住居跡出土遺物観察表

面番号	器種	計画値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第249図 1	壺	A 12.7 B 3.8 C 6.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部外面下端 手持ちヘラ削り。体部から口縁部 内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P7430 80% PL80 南西コーナー部覆土下層
	須恵器	A [12.6] B 5.3 D 8.2 E 1.4	高台部から口縁部にかけての破片。 平底。高台は「ハ」の字状に開く。	底部ヘラ削り。高台貼り付け後、 ナデ。体部から口縁部内・外面クロナダ。	砂粒・雲母・小石 灰色 普通	P7431 40% PL80 南西コーナー部覆土下層
		A [12.4] B 3.6 F 3.0 G 1.2	天井部から口縁部にかけて一部欠 損。天井部は笠形であり、口縁部 部分下方に短く屈曲する。	天井部外面上半回転ヘラ削り。下 半内面クロナダ。	砂粒・雲母・長石 小石 灰黄色 普通	P7432 50% PL80 東部覆土中層
4	小形甕 土師器	A [14.2] B 16.1 C 6.6	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部は外傾して立ち上がる。 上部に最大径をもつ。口縁部は外傾 する。口唇部は上方につまみ上げる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面 下端ヘラ磨き、上位ナデ。内面ヘ ラナデ。口縁部内・外面横ナダ。 輪積み底。	砂粒・雲母・長石 赤褐色 普通	P7433 60% PL80 窓内
		A [25.8] B (7.0)	口縁部。窓部でくびれ。口縁部 は外傾する。口唇部は上方につま み上げる。	口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P7434 10% 窓前覆土下層

#### 第627A号住居跡（第250図）

**位置** 調査7区中央部、N121a区。

**重複関係** 西部が第627B号住居跡を掘り込み、窓前から中央部にかけて第26号溝に掘り込まれている。

**規模と平面形** 長軸 [2.7]m、短軸 [2.3]mの長方形と推定される。

**主軸方向** N-84°-E

**壁** 第26号溝と重複している部分は確認できなかった。壁高は約20cmで、外傾して立ち上がる。

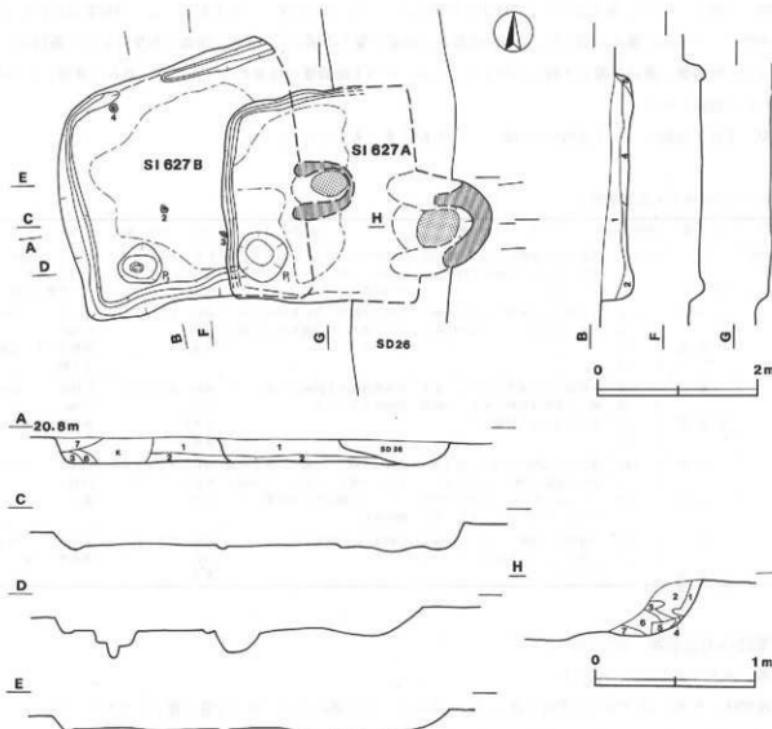
**壁溝** 北壁下から西壁下にかけて確認できた。上幅約17cm、下幅約6cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしていて。

**床** 中央部から西壁際にかけて、踏み固められた部分が残存している。

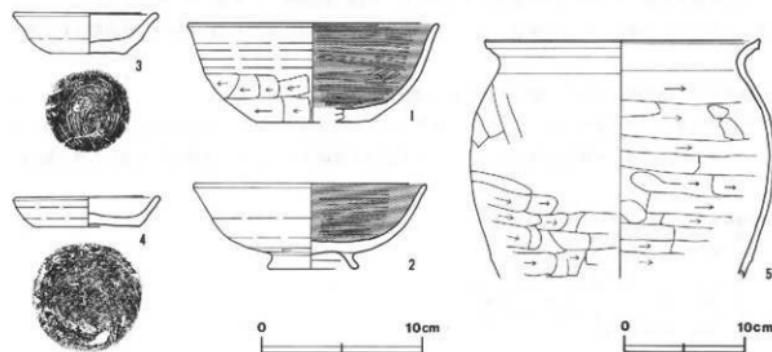
**竈** 東壁中央部からやや南寄りに、砂質粘土で構築されていたと推定される。第26号溝により掘り込まれていて、煙道部の一部と火床部は遺存している。火床部は赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

#### 竈土層解説

- 1 稲 色 ローム粒子中量
- 2 稲 色 ローム粒子少量
- 3 稲 色 ローム粒子・炭化粒子多量
- 4 黒 稲 色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量
- 5 稲 黒 色 燃土中ブロック・燃土粒子・灰中量
- 6 稲 黑 色 ローム粒子・燃土粒子・炭化物少量
- 7 にぶい褐色 燃土粒子少量



第250図 第627A・627B号住居跡実測図



第251図 第627B号住居跡出土遺物実測図

**覆土** 2層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
- 2 赤褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

**遺物** 土師器片18点、須恵器片1点の細片が出土している。図示できるものはない。

**所見** 本跡では、ピットは確認できなかった。時期を判断する遺物がないため、時期不明であるが、10世紀後葉の第627B号住居跡を掘り込んでいるため、10世紀後葉以降と考えられる。また、重複している第26号構より古い。

**第627B号住居跡（第250・251図）**

**位置** 調査7区中央部、N12h区。

**重複関係** 東部を第627A号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

**規模と平面形** 長軸〔3.2〕m、短軸3.15mの方形と推定される。

**主軸方向** N-75°-E

**壁** 東壁は確認できなかった。壁高は19~28cmで、外傾して立ち上がる。

**壁溝** 北壁下の一部と西壁下から南壁下にかけて確認できた。上幅約17cm、下幅約6cm、深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

**床** ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

**竈** 東壁中央部に構築されていたと推定される。第627A号住居跡に掘り込まれているが、床面の東部に火床部と思われるゴツゴツした赤変硬化面と袖部と考えられる砂質粘土の痕跡が検出できた。

**ピット** 2か所（P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>）。南壁際にあるP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は、径約60cm、底径30~40cmの円形で、深さ約30cmである。性格は不明である。

**覆土** 7層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- |                         |                   |
|-------------------------|-------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子多量、炭化粒子中量    | 5 黒褐色 ローム小プロトク少量  |
| 2 赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 褐色 ローム小プロトク少量   |
| 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量       | 7 黒色 ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 赤褐色 ローム粒子・炭化粒子少量      |                   |

**遺物** 土師器片386点、須恵器片81点、罐3点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第251図2の高台付壺と3の皿は中央部の床面から、4の皿は正位で北西コーナー部の床面から、5の甕は覆土中から、1の杯は遺構確認面から出土している。

**所見** 壁が確認できなかった部分は、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第627A号住居跡より古い。

第627B号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 土師器	壺	A [15.6] B 6.2 C [7.2]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内縫気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り、上端ロクロナダ。体部から口縁部内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 褐色(外側) 普通	P7442 30% 遺構確認面
	土師器	A [14.4] B 5.3 C 5.4 D 1.0	高台部から口縁部にかけての破片。 高台は窓く「ハ」の字形に開く。 体部から口縁部は内縫気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナダ。高台貼り付け後ナダ。体部から口縁部外面ロクロナダ、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 にぶい黄褐色(外側) 普通	P7438 30% 中央部床面
	土師器	E 1.0				

器取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第251図 3	皿	A 9.0 B 2.5 C 4.6	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P 7439 100% PL 80 中央部床面
	皿	A 9.0 B 1.9 C 6.6	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 7440 100% PL 80 北西コーナー部床面
	土器	A [22.8] B (19.4)	体部から口縁部にかけての模様。体部は内側で立ち上がる。底部にくびれ。口縁部は内側で張る。口縁部直下に後が残り、口唇部は上方につまみ上げる。	体部外腹下位横位のヘラ削り。上位ナデ。内腹横位のヘラナデ。指頭押圧。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい赤褐色 普通	P 7441 30% PL 80 覆土中
4	壺	A 9.0 B 1.9	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい赤褐色 普通	P 7440 100% PL 80 北西コーナー部床面
	土器	C 6.6				
5	壺	A [22.8]	体部から口縁部にかけての模様。体部は内側で立ち上がる。底部にくびれ。口縁部は内側で張る。口縁部直下に後が残り、口唇部は上方につまみ上げる。	体部外腹下位横位のヘラ削り。上位ナデ。内腹横位のヘラナデ。指頭押圧。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい赤褐色 普通	P 7441 30% PL 80 覆土中
	土器	B (19.4)				

### 第628号住居跡（第252・253図）

位置 調査7区中央部、N12j.s区。

重複関係 西部が第629号住居跡、第26号溝に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸3.29m、短軸3.27mの方形である。

主軸方向 N-81°-E

壁 第629号住居跡と第26号溝の重複している部分は確認できなかった。壁高は61~70cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅約22cm、下幅6~10cm、深さ約5cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約130cm、両袖部幅約120cmである。火床部は床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化してゴツゴツしている。天井部は一部を残し崩落しており、第5層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。第4層には多量の灰が含まれている。

#### 竈土層解説

- 1 焼着赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 灰褐色 焼土粒子多量
- 3 灰赤褐色 焼土粒子多量
- 4 灰赤褐色 灰多量、焼土中ブロッキ・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 にぶい赤褐色 粘土ブロック多量、焼土中ブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子中量
- 7 灰赤褐色 烧土粒子多量、ローム粒子少量
- 8 赤褐色 烧土粒子多量、炭化物少量

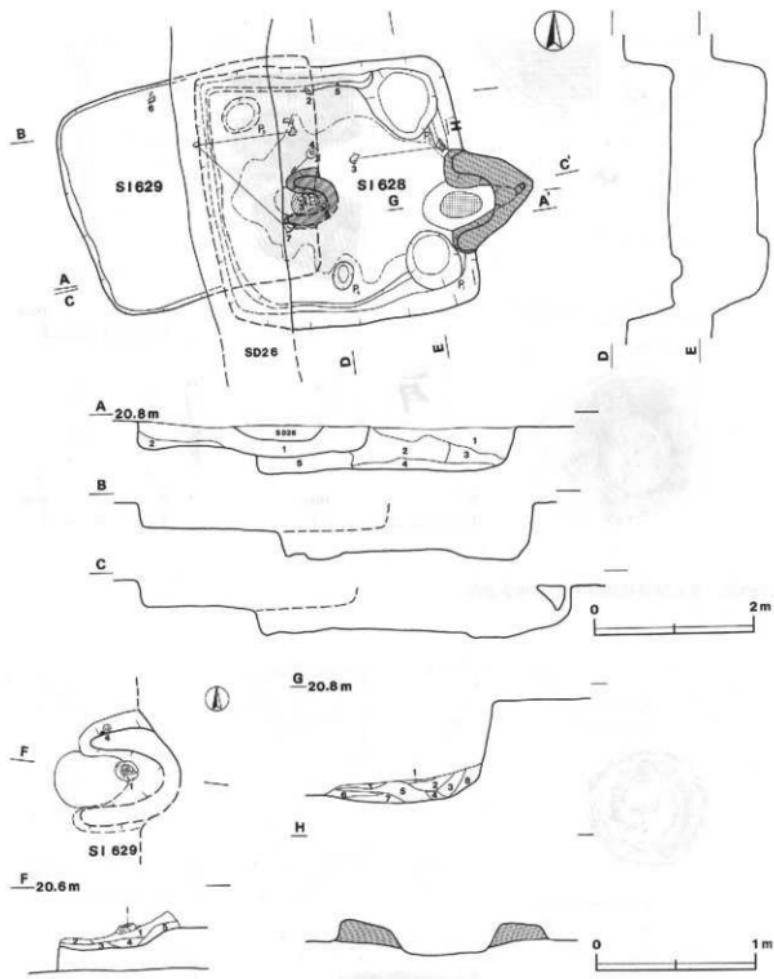
ピット 4か所（P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>）。南東コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、径60cmの円形で、深さ18cmである。北東コーナー部にあるP<sub>2</sub>は、径80cmの円形で、深さ10cmである。北西コーナー部のあるP<sub>3</sub>は、径50cmの円形で、深さ9cmである。いずれも各コーナー部に位置するが、規模から判断して柱穴とは考えられない。P<sub>4</sub>は長径30cm、短径20cmの楕円形で、深さ17cmであり、周辺が硬化している。位置的に考えても出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

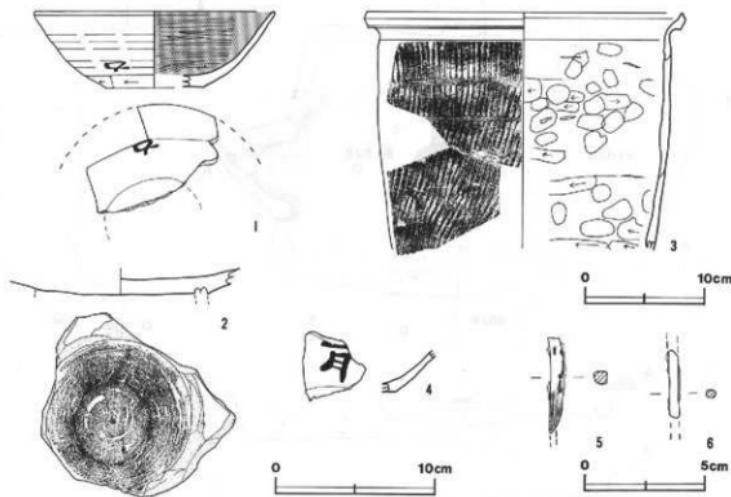
- 1 磁致褐色 ローム粒子多量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量
- 3 灰褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 土器片330点、須恵器片133点、鉄製品（釘）2点、礫4点が出土している。第253図1の土器器坏は南東コーナー部の覆土中から出土している。側面に墨書きされているが判読不能である。北部の覆土下層か

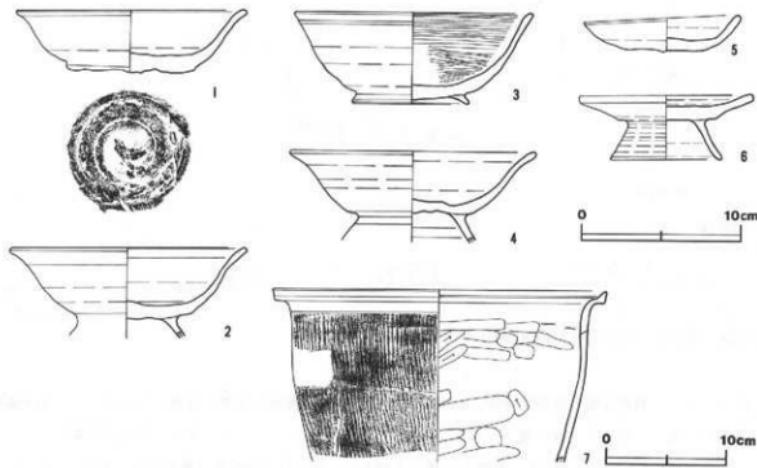


第252図 第628・629号住居跡実測図

ら出土した2の須恵器盤の底部片は現に転用されており、底部裏面に朱墨が付着している。3の須恵器盤は北壁側の覆土下層と中央部の覆土下層から出土した破片を接合したものである。4の須恵器片には「育ヶ」と墨書きされている。5の角釘は北壁際の覆土下層から、6の釘は南西部の覆土中から出土している。所見 壁が確認できなかった部分は、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第629号住居跡、第26号溝より古い。



第253図 第628号住居跡出土遺物実測図



第254図 第629号住居跡出土遺物実測図

## 第628号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1 土師器	壺	A [15.0] B 4.7 C [6.0]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は内縫気味 に立ち上がる。	底部へラ削り。体部外周下端手持 ちハラ削り。体部から口縁部外面 ロクロナデ。内面丁寧なヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 石英 赤褐色(表面) 普遍	P7444 15% 墨書き器 南東コーナー部覆 土中
	盤	B (18)	底部片。平底。	底部粗粒ヘラ削り。	砂粒・雲母・長石 灰色 普遍	P7445 15% 転用盤 北部覆土下層
	須恵器	A [26.6] B (18.2)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は外側にして立ち上がる。口縁 部は外反する。口縁部直下に後が ある。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外周縁部の平行叩き、内面指 頭押正。口縁部内・外面横ナデ。 輪積み直す。	砂粒・雲母・石英 に赤褐色 普遍	P7446 20% 竈北側と中央部覆 土下層

図版番号	種別	計測値				出土地點	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	角釘	(3.9)	0.9	0.5	(3.26)	北壁際覆土下層	M7034
6	釘	(2.8)	0.5	0.3	(0.91)	南西部覆土中	M7035

## 第629号住居跡(第252・254図)

位置 調査7区中央部、N12j区。

重複関係 中央部から東側が第628号住居跡を掘り込み、第26号溝に掘り込まれているが、床面までは達していらない。

規模と平面形 長軸 [3.3]m、短軸2.80mの長方形と推定される。

主軸方向 N-81°-E

壁 第26号溝と重複している部分は確認できなかった。壁高は約32cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約80cm、両袖部幅約80cmである。火床部は床面を約5cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は遺存している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

## 竈土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量
- 2 便 色 焼土粒子多量
- 3 斑 色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 焙赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 赤 色 ローム粒子・焼土粒子少量

覆土 2層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 細褐色 ローム小ブロック少量

遺物 土師器片229点、須恵器片64点、鉄滓1点、陶器片3点、礫1点が出土している。第254図1の土師器片は逆位で竈火床部から、2の土師器高台付片は覆土中から出土している。3の土師器高台付片は竈内と竈北側の覆土下層から出土した破片を接合したものである。4の土師器高台付片は竈北側の覆土下層から出土した破片を接合したものである。5の土師器皿は逆位で竈内から、6の土師器高台付皿は斜位で北壁際の覆土中層から出土している。7の須恵器鉢は中央部と東部の覆土下層から出土した破片を接合したものである。鉄滓は覆土中から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡では、ピットと壁溝は確認されなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、銀治炉は確認されていない。重複している第628号住居跡より新しく、第26号溝より古い。

第629号住居跡出土遺物観察表

器皿番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第254図 1	环	A 144 B 48 C 7.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内 外青味に立ち上がり、口縁部は外 反する。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁 部内・外側クロナデ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 橙色 普通	P7447 96% PL80 竈火床面
	高台付环	A 145 B (5.6)	高台部・口縁部一部欠損。高台は「ハ」 の字状に開く。平底。体部は内外青味 に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部内・ 外側クロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P7448 80% PL80 覆土中
	土師器	A [148] B 57 D 7.1 E 07	体部から口縁部にかけて一部欠損。 高台はよく「ハ」の字状に開く。 平底。体部から口縁部は内青味 に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部外 面クロナデ、内面丁寧なヘラ磨 き。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P7449 70% PL80 竈内と北側覆土 下層
4	高台付环	A [153] B (5.6)	高台部・口縁部一部欠損。高台は「ハ」 の字状に開く。平底。体部は内外青味 に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部内・ 外側クロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 浅黄褐色 普通	P7450 60% PL80 竈北側覆土下層
	土師器	A 9.7 B 22 C 48	平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁 部内・外側クロナデ。	砂粒・雲母・小石 にぶい橙色 普通	P7451 100% 竈内
6	高台付皿	A [108] B 40 D 68 E 24	体部から口縁部にかけて一部欠損。 高台は大きく「ハ」の字状に開く。 体部から口縁部は外傾して立ち上 がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部内・ 外側クロナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	P7452 70% 北壁際覆土中層
	土師器	B (140)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外 反する。口縁部は上方につまみ上げる。	体部外縁部の平行叩き。内面當 て具痕。ヘラナデ。口縁部内・外 面横ナデ。輪積模様。	砂粒・雲母 黃灰色 普通	P7453 10% 中央部と東部覆土 下層
7	鉢 須恵器	A [27.8]				

### 第630号住居跡（第255図）

位置 調査7区東部、O12a区。

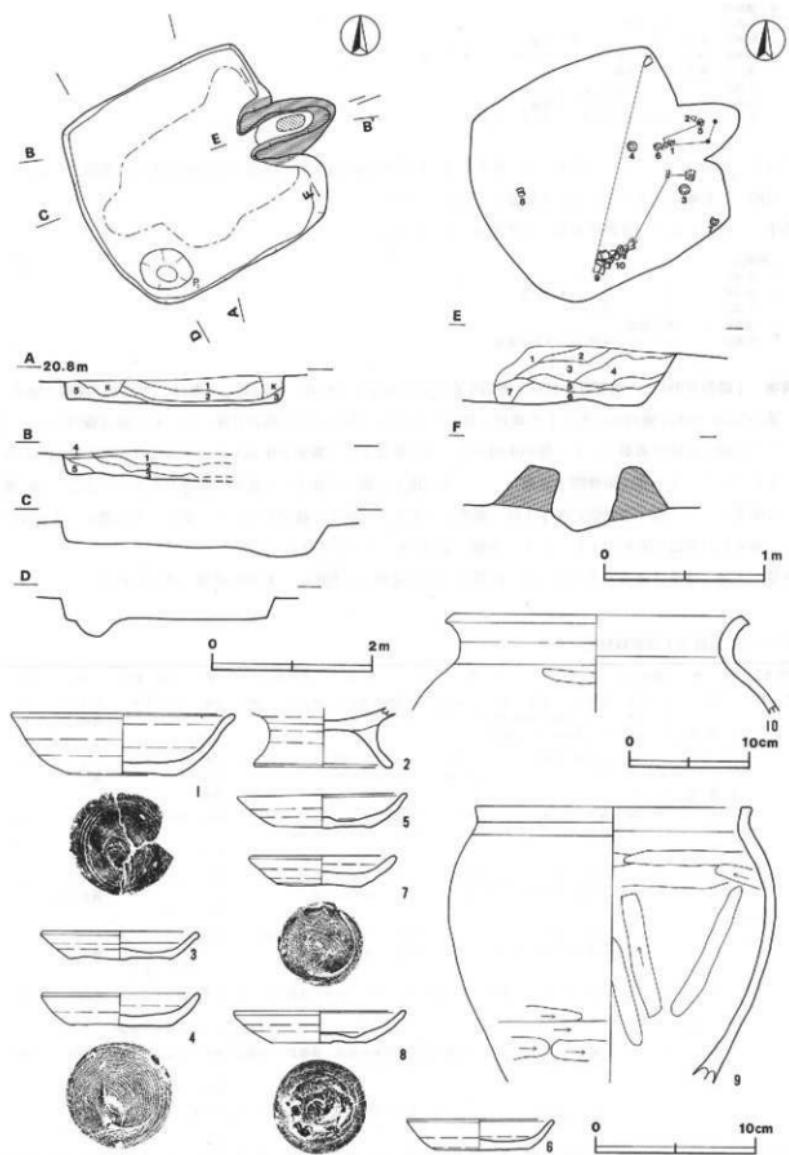
規模と平面形 長軸2.80m、短軸2.65mの方形である。

主軸方向 N-63°-E

壁 壁高は約26cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 東壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅95cmである。火床部は、床面を約14cm掘りくぼめており、赤変硬化している。雲母片岩を支脚に使用し、上部に第255図5の土師器皿が逆位で、かぶせられた状態で出土した。皿は焼けていない。天井部は崩落しており、第3層と第4層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。袖部は二度にわたり、小石混じりの粘土を貼り付けて作り替えが行われた痕跡がある。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。第6層には、灰が多量に含まれている。覆土から多量の土師器片、須恵器片が出土している。



第255図 第630号住居跡・出土遺物実測図

## 遺土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・ローム粒子中量
- 3 暗褐色 粘土ブロック・焼土中ブロック多量、ローム粒子少量
- 4 黒 色 粘土ブロック多量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子・灰多量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

**ピット** 南西コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、長径60cm、短径50cmの梢円形で、深さ約20cmであり、規模と位置から判断して貯蔵穴と考えられる。土師器片が出土している。

**覆土** 5層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

## 土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量

**遺物** 土師器片281点、須恵器片46点、雲母片岩1点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第255図1の杯は竈内から出土した破片が接合したものである。2の高台付杯、5と6の皿は竈内から、3と7の皿は正面で南東コーナー部の床面から、4の皿は正面で竈前の床面から、8の皿は西部の床面から出土している。9の甕は南壁際と北東コーナー部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。10の甕は南東コーナー部と南壁際の覆土下層、竈内から出土した破片が接合したものである。火床部から火を受け赤変した雲母片岩が出土している。支脚に使用されたものと思われる。

**所見** 本跡の壁構造は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。

## 第630号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
新255図 1	杯	A 13.8 B 3.8 C 6.6	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転糸切り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 にいわゆる 普通	P7454 竈内 45%
	高台付杯	B (3.4) D [8.6] E 2.7	高台部から底部にかけての破片。 高台は大きく「ハ」の字形に開く。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P7455 竈内 20%
	七 鍋 器	A 9.5 B 18 C 6.4	9.5 体部一部欠損。平底。体部から口 縁部は外傾して立ち上がる。 18 口縁部は内壁気味に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P7456 南東コーナー部床 面 95%
4	皿	A 9.6 B 21 C 6.4	口縁部一部欠損。平底。体部から 口縁部は内壁気味に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P7457 電前床面 95%
	土 師 器	A 10.6 B 22 C 6.0	10.6 口縁部一部欠損。平底。体部から 口縁部は内壁気味に立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部から口縁部内・ 外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にいわゆる 普通	P7458 竈内 95%
	皿	A 9.1 B 2.2 C 5.7	9.1 平底。体部から口縁部は内壁気味 に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にいわゆる 普通	P7459 竈内 100%
7	土 師 器	A 8.8 B 1.9 C 5.0	8.8 口縁部一部欠損。平底。体部から 口縁部は内壁気味に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・石英 赤色粒子 橙色 普通	P7460 南京コーナー部床 面 90%
	皿	A [10.7] B 2.0 C 5.8	[10.7] 体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P7461 西部床面 45%
	土 師 器					

裏版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第255号 9	土器	A [172] B (172)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内側して立ち上がり、上位 に最大径をもつ。口縁部は外傾する。	体部外面下位横位のヘラナデ。上 位ナデ。内面ヘラナデ。口縁部内 灰褐色 普通	砂粒・雲母・小石 灰褐色 普通	P7462 覆土下層 30%
		A [240] B (80)	体部上位から口縁部にかけての破 片。体部上位は内側して立ち上 がり、口縁部は外反する。口唇部は 面取りされている。	体部上位から口縁部内・外面横ナ デ。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P7463 窓内と覆土下層 5%
10	土器					

### 第631号住居跡（第241・256図）

位置 調査7区中央部、N12j区。

重複関係 北西コーナー部が第621A・621B号住居跡を、西部が第622号住居跡を、東部が第620号住居跡を掘り  
込んでいる。

規模と平面形 長軸3.95m、短軸3.40mの長方形である。

主軸方向 N-75°-E

壁高 壁高は18~45cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下の一部と南壁下の一部で確認できた。上幅20~25cm、下幅4~10cm、深さ約6cmで、断面形はU  
字形をしている。

床 ほぼ平坦で、竈前から中央部にかけて特に踏み固められている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約70cm、両袖部幅  
約90cmである。第5層の下部の焼土ブロックがゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。  
火床部は、床面を約6cm掘りくぼめている。天井部は崩落しており、第4層が崩落土と考えられる。袖部は  
良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上  
がる。

#### 竈土層解説

- 1 灰暗褐色 焙上粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 焙土粒子中量
- 3 黒褐色 焙土粒子・炭化粒子多量
- 4 純赤褐色 粘土ブロック・炭化粒子多量
- 5 純赤灰色 焙土ブロック・ゴツゴツしている

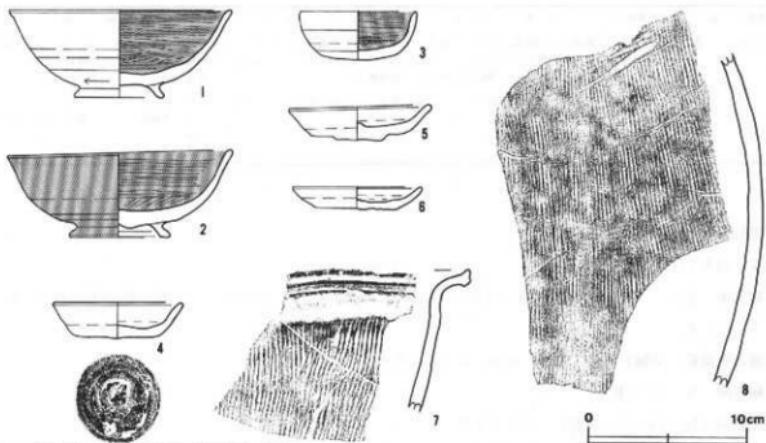
ピット 2か所(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。南東コーナー部にあるP<sub>1</sub>は、径60cmの円形で、深さ35cmである。北東コーナー  
部にあるP<sub>2</sub>は、長径60cm、短径50cmの橢円形で、深さ13cmである。いずれも性格不明である。

覆土 7層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 純褐色 炭化粒子少量
- 2 黑褐色 ローム粒子少量
- 3 黑褐色 焙土粒子・炭化粒子少量
- 4 黑褐色 ローム粒子・焙土粒子・炭化粒子少量
- 5 黑褐色 ローム粒子少量、焙土粒子微量
- 6 黑褐色 焙土粒子微量
- 7 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焙上粒子・炭化粒子少量

遺物 土器片195点、須恵器片23点が出土している。図示した1から6はいずれも土器である。第256図1  
の高台付杯は逆位で北西部の覆土中層から、2の高台付杯は覆土上層から、3のミニチュア土器は正位で北  
東コーナー部の覆土下層から、4の皿は正位で北壁際の覆土上層から出土している。5の皿は南西コーナー  
部と中央部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。6の皿は正位で南東コーナー部の床面から



第256図 第631号住居跡出土遺物実測図

出土している。7と8は須恵器片で、7の瓶口縁部片と8の甕体部片には、外面に縱位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉から中葉と考えられる。重複している第620・621A・621B・622号住居跡より新しい。

#### 第631号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第256図 1	高台付环 土器	A 14.0 B 5.5 C 5.8 D 1.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 高台は短く「ハ」の字状に開く。 体部から口縁部は内厚気味に立ち上がる。	底部削除ハラ削り後ナデ。高台貼付け後ナデ。体部外腹下端回転ハラ削り。 体部から口縁部外腹ロクロナデ。内面丁寧なヘラ磨き。普通	砂粒 にぶい褐色(外面) 普通	P7464 80% 北西側覆土中層
	高台付环 土器	A 14.0 B 5.5 C 6.0 D 1.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 高台は短く「ハ」の字状に開く。 体部から口縁部は内厚気味に立ち上がる。	底部回転ハラ削り後ナデ。高台貼付け後ナデ。体部外腹ロクロナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内・外腹黒色処理。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P7465 70% 覆土上層
	ミニチュア土器 土器	A 7.4 B 3.0	口縁部一部欠損。丸底。体部から口縁部は内厚気味に立ち上がる。	底部ハラ削り。体部から口縁部外腹ロクロナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色(外面) 普通	P7466 95% PL 80 北東コーナー部下層
	皿 土器	A 8.0 B 2.2 C 5.0	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ハラ削り。体部から口縁部内・外腹ロクロナデ。	砂粒・小石 褐色 普通	P7467 100% 北壁際覆土上層
	皿 土器	A 8.6 B 2.1 C 5.6	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内厚気味に立ち上がる。	底部ハラ削り。体部から口縁部内・外腹ロクロナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P7468 95% 南西コーナー部と中央部覆土上層
6	皿 土器	A 8.1 B 1.4 C 5.0	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ハラ削り。体部から口縁部内・外腹ロクロナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P7469 85% 南東コーナー部床面

### 第633号住居跡（第257図）

位置 調査7区東部、N13a.I区。

規模と平面形 長軸2.20m、短軸2.05mの方形である。

主軸方向 N-85°-E

壁 壁高は35~45cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅約20cm、下幅6~10cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 東壁の南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約60cm、両袖部幅70cmである。

火床部は赤変硬化している。天井部は崩落しており、第9層と第10層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がる。

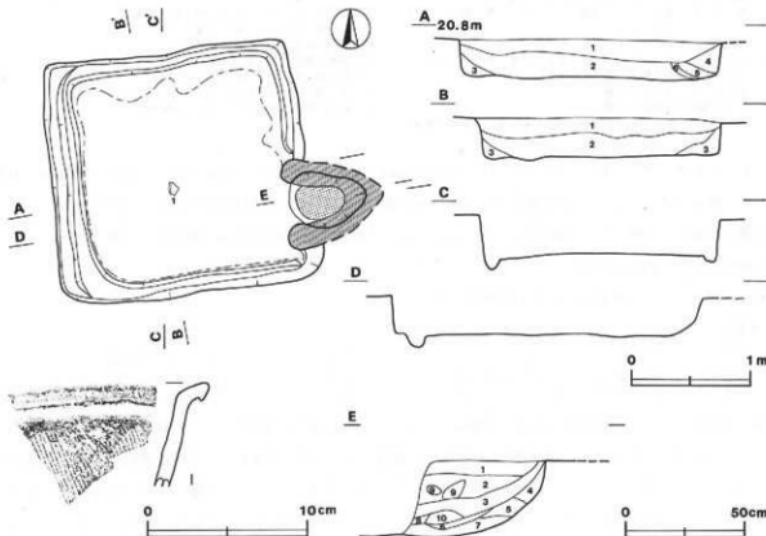
#### 覆土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6 赤褐色	焼土粒子多量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量	7 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子中量	8 暗赤褐色	焼土中プロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4 前赤褐色	焼土中プロック・焼土粒子・炭化粒子少量	9 赤褐色	粘土プロック・焼土中プロック多量、ローム粒子少量
5 暗赤褐色	焼土中プロック・焼土粒子少量	10 暗赤褐色	粘土プロック多量、焼土中プロック少量

覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック少量	4 灰褐色	焼土中プロック・ローム粒子中量
2 暗褐色	ローム小ブロック中量	5 暗褐色	ローム中・小プロック少量
3 暗褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量



第257図 第633号住居跡・出土遺物実測図

遺物 土器片67点、須恵器片13点の細片が出土している。第257図1は中央部床面から出土した須恵器盤の口縁部片で、外面に縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡のビットは確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。

#### 第635号住居跡（第258図）

位置 調査7区東部、O13bs区。

重複関係 北西コーナー部が第636号住居跡に掘り込まれ、第637号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.52m、短軸4.47mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 北西コーナー壁は確認できなかった。壁高は40~60cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナー壁下では確認できなかったが、全周していたと推定される。上幅約20cm、下幅約8cm、深さ約5cmで、断面形はU字形をしている。東壁溝と西壁溝のほぼ中央部にビットが各1か所検出された。性格は不明である。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部から東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで120cm、両袖部幅約140cmである。火床部は、床面を約20cm掘りくぼめており、赤変硬化しゴツゴツしている。天井部は崩落しており、第2層と第3層、第8層が崩落土と考えられる。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。第9層は灰の層である。

#### 遺土層解説

1	暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子中量	9	灰褐色	層
2	褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	10	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
3	板褐色	粘土ブロック多量、炭化粒子中量	11	暗褐色	ローム粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	12	暗赤褐色	炭化粒子少量
5	暗赤褐色	焼土粒子中量、山砂少量	13	極暗赤褐色	焼土粒子多量
6	灰褐色	焼土粒子少量	14	暗褐色	ローム粒子・砂粒少量
7	灰褐色	炭化粒子中量	15	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
8	暗赤褐色	粘土ブロック多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	16	暗赤褐色	焼土粒子・洗削した砂粒多量

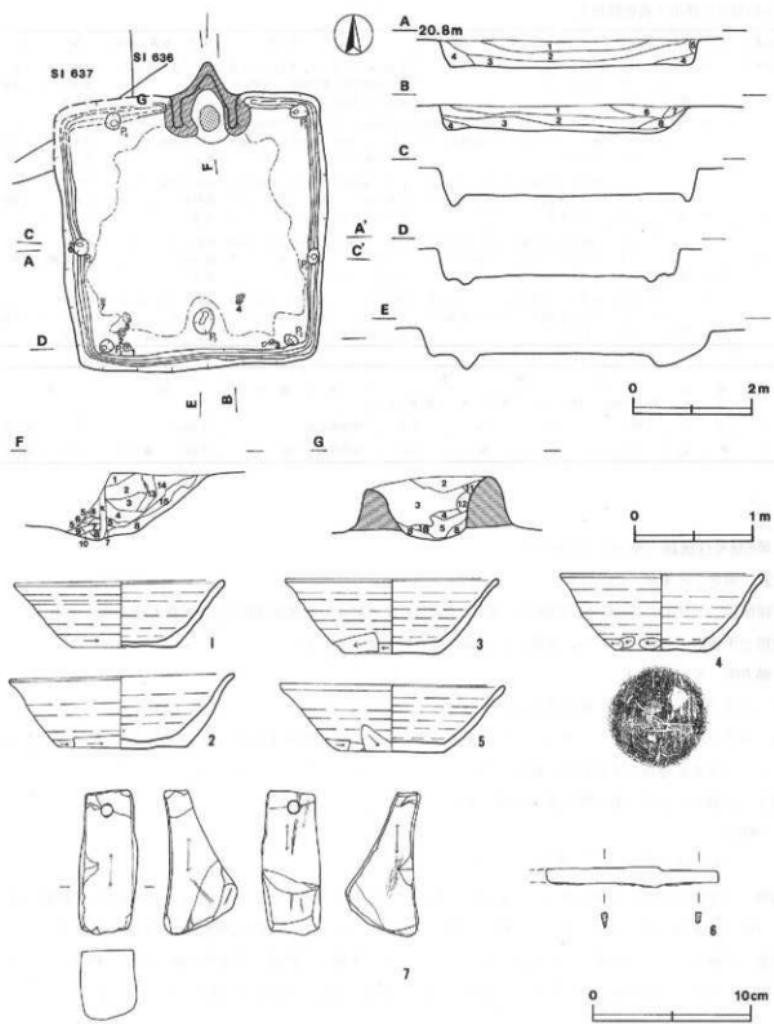
ビット 7か所（P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>）。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径約20cmの円形で、深さ10~20cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。東壁溝にあるP<sub>2</sub>と西壁溝にあるP<sub>6</sub>は、径約20cmの円形で、深さ約17cmであり、規模と位置から判断して、補助柱穴と思われる。P<sub>7</sub>は長径40cm、短径25cmの梢円形で、深さ28cmであり、位置的に出入り口施設に伴うビットと考えられる。

覆土 8層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量	5	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量
2	褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子中量	6	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、山砂少量
3	暗褐色	ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子多量、ローム粒子中量	8	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・山砂少量

遺物 土器片635点、須恵器片83点、鉄製品（刀子）1点、石製品（砥石）1点、鐵滓1点、炭化米が出土している。図示した1から5の土器はいずれも土器である。第258図1と5の杯は逆位で、2の杯は正位で南西コーナー部の覆土下層から出土している。3の杯は南東コーナー部の覆土下層と覆土中から出土している。4の杯は南東部の覆土下層と覆土中から出土している。底部にヘラ記号が認められる。6の刀子は西壁際の床面から、7の砥石は南西部の覆土上層から、鐵滓は覆土中から、炭化米は竈火床部の灰の中から出土している。



第258図 第635号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉等は確認されていない。重複している第637号住居跡より新しく、第636号住居跡より古い。

第635号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第258図 1	壺	A 13.2 B 4.2	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部開削へラ削り後一方向のヘラ削り。体部外端下端手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい橙色 普通	P7484 100% 南西コーナー部覆 土下層
	須恵器	C 6.1				
2	壺	A 14.1 B 4.7 C 8.0	口縁一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部開削へラ削り。体部外端下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P7485 95% 南西コーナー部覆 土下層
	須恵器	C 5.6				
3	壺	A 13.5 B 4.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外端下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・長石 黄褐色 普通	P7486 80% 南東コーナー部覆 土下層
	須恵器	C 5.6				
4	壺	A [12.8] B 4.8 C 5.8	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部やや外反する。	底部一方向のヘラ削り。体部外端下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・長石 黒灰褐色 普通	P7487 70% 南東部覆土下層
	須恵器	C 5.8				
5	壺	A [14.2]	体部から口縁部にかけて一部欠損。	底部一方向のヘラ削り。体部外端下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナヂ。	砂粒・雲母・長石・ 黒色粒子 灰色 普通	P7488 55% 南西コーナー部覆 土下層
	須恵器	B 4.2	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			
	須恵器	C 6.6				

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
6	刀子	(10.9)	1.3	0.4	(12.0)	西壁際床面 M7036 PL81
7	砥石	9.0	4.6	3.6	165.0	南西部覆土上層 Q7011 硬灰岩 PL81

## 第636号住居跡(第102・259図)

位置 調査7区東部、O13a区。

重複関係 全体的に第637号住居跡を、東部が第634号住居跡を、南部が第635号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸[3.9]m、短軸[3.4]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-62°-E

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 東壁に構築されていたと推定される。覆土が薄いため、竈の範囲は確認できなかったが、火床部と考えられる赤変硬化部分が床面東部に検出できた。

覆土 2層からなる。第2層は竈の土層である。

## 土層解説

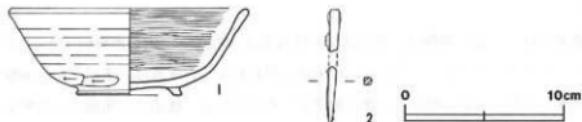
- 1 売褐色 ラーム粒子・焼土粒子中量  
2 煙赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量

遺物 土師器片36点、須恵器片9点、鉄製品(釘)1点、礫1点が出土している。第259図1の土師器の高台付壺は、竈内と覆土中から出土した破片が接合したものである。2の釘は西壁際の床面から出土している。

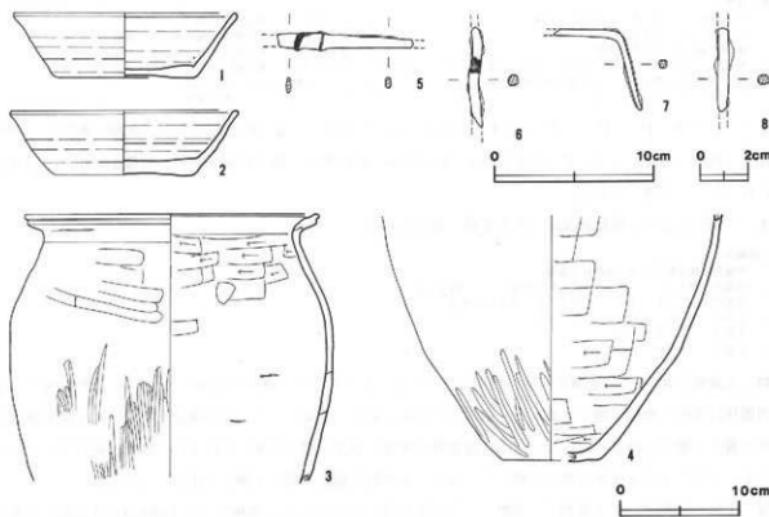
所見 本跡はピット、壁溝、壁が確認できなかったため、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第634・635・637号住居跡より新しい。

第636号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第259図 1	高台付壺	A [14.4]	体部から口縁部にかけて一部欠損。	底部開削へラ削り後ナヂ。高台端子	砂粒・雲母・赤色粒子	P7489 30%
	土師器	B 5.4 D 6.5 E 0.5	高台は短く「V」の字形状に開く。 平底。体部は内唇気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	へラ削り。体部から口縁部外裏ロ クロナヂ。内面丁寧なヘラ磨き。	橙色 普通	竈内と覆土中



第259図 第636号住居跡出土遺物実測図



第260図 第637号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第259図2	釘	(6.2)	0.6	0.4	(3.68)	西壁際床面	M7037

#### 第637号住居跡（第102・260図）

位置 調査7区東部、O13bl区。

重複関係 全体的に第636号住居跡に、南東部が第635号住居跡に、西壁際が第449号土坑に掘り込まれているが、床面までは達していない。北東部が第634号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 一辺4.40mの方形である。

主軸方向 N - 5° - W

壁 北東部の壁の立ち上がりは確認できなかった。壁高は45~50cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅20~25cm、下幅4~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。北東コーナー部に長径110cm、短径80cmの楕円形で、深さ18cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施

設あるいは土坑と考えられる。

竪 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約70cm、両袖部幅約120cmである。第11層の下部が焼土ブロックでゴツゴツしているため、火床部と思われる。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめている。天井部は崩落しており、第4層と第5層が崩落土と考えられる。煙道は火床面から内鷲味味に立ち上がる。

#### 竪土層解説

1	黒	褐	色	焼土粒子・炭化粒子中量	7	灰	赤	色	焼土粒子中量			
2	灰	褐	色	炭化粒子少量	8	暗	赤	褐	色	炭化粒子少量	焼土粒子微量	
3	灰	暗	褐	色	炭化粒子中量	9	極	暗	褐	色	焼土粒子中量	炭化粒子少量
4	黒	褐	色	焼土ブロック多量	10	暗	赤	褐	色	焼土粒子中量	焼土ブロック、ゴツゴツしている	
5	灰	褐	色	焼土ブロック多量	11	にぶい	赤	褐	色	焼土粒子中量	ローム粒子多量	
6	灰	褐	色	焼土粒子少量	12	褐		色				

ピット 5か所 ( $P_1 \sim P_5$ )。 $P_1$ から $P_4$ は径30~40cmの円形で、深さ約45cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。 $P_5$ は長径30cm、短径20cmの梢円形で、深さ17cmであり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	黒褐色	焼土粒子中量	炭化粒子微量
2	暗褐色	焼土中・小ブロック・焼土粒子多量	ローム粒子中量
3	黒褐色	ローム粒子多量	焼土粒子中量
4	暗褐色	焼土粒子多量	ローム粒子中量
5	黒褐色	ローム粒子多量	
6	黒褐色	ローム粒子中量	

遺物 土師器片407点、須恵器片64点、鉄製品（刀子1、釘3）4点、鍛1点が出土している。第260図1の須恵器は逆位で南部の覆土下層から、2の須恵器は斜位で北東コーナー部の床面から、3の土師器甕は南部の覆土下層から出土している。4の土師器甕は南部と東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。5の刀子は北西部の覆土中層から、6から8の釘は竪前の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀中葉と考えられる。重複している第634号住居跡より新しく、第635・636号住居跡、第449号土坑より古い。

第637号住居跡出土遺物観察表

出典番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第260図1 1	壺	A 14.0	口縁部一部欠損。平底。体部から	底部へラフ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・石英	P7490 85%
	須恵器	B 4.0	口縁部は外傾して立ち上がる。		灰白色 普通	南部覆土下層
	C 8.6					
2	壺	A [142]	体部から口縁部にかけて一部欠損。	底部へラフ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・灰色	P7491 50%
	須恵器	B 4.0	平底。体部から口縁部は外傾して		普通	北東コーナー部床面
	C 8.6	立ち上がる。				
3	甕	A [244]	体部から口縁部にかけての破片。体部	体部外面下位へラフ削き。上位へラナダ。内面へラナダ。口縁部内・外側横ナダ。輪積み底。	砂粒・雲母・石英・小石	P7492 25%
	土師器	B (222)	は内側して立ち上がり。載大型を上位にもつ。蓋部でくびれ、口縁部は外反する。口縁部は上方につまみ上げる。		赤褐色	南部覆土下層
4	甕	B (20.1)	底部から体部にかけての破片。平	底部木漿痕。体部外面下位へラフ削き。内面へラナダ。	砂粒・雲母・石英・小石	P7493 20%
	土師器	C [8.2]	底。体部は外傾して立ち上がる。		赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	南部と東部覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第639号5	刀子	(8.6)	1.2	0.3~0.4	(8.0)	北西部覆土中層	M 7038 PL 81
6	釘	(6.3)	1.0	0.7	(10.0)	竪前覆土上層	M 7039
7	釘	5.0	0.5	0.4	7.20	竪前覆土上層	M 7040
8	釘	(3.4)	0.8	0.4	(24.4)	竪前覆土上層	M 7041

### 第639号住居跡（第104・261図）

位置 調査7区南東部、O12b区。

重複関係 全体的に第641号住居跡を掘り込み、北部が第638号住居跡に、西壁際が第651・660号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸6.35m、短軸6.00mの長方形である。

主軸方向 N-4°-W

壁 第638・660号住居跡と重複している部分は確認できなかった。壁高は48~65cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下の一部を除いて確認できた。上幅20~30cm、下幅4~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竪 北壁中央部からやや東寄りに砂質粘土で構築されている。煙道部は第638号住居跡に掘り込まれているため、確認できなかった。規模は、両袖部幅約140cmである。火床部は、床面を約15cm掘りくぼめており、赤変化している。天井部は崩落しており、第3層が崩落土と考えられる。

#### 竪土層解説

1	褐	色	燒土粒子・炭化粒子少量	8	暗	赤	褐	色	炭化粒子少量	燒土粒子微量
2	褐	色	燒土粒子少量	9	灰	に	赤	褐	色	燒土粒子中量
3	黒	褐	色	燒土ブロック多量	10	暗	赤	褐	色	燒土粒子中量
4	黒	褐	色	炭化粒子多量	11	黒	褐	色	燒土粒子・ローム粒子少量	
5	黒	褐	色	燒土中ブロック・燒土粒子中量	12	暗	赤	褐	色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子中量
6	暗	赤	褐	焼けた砂粒多量	13	暗	赤	褐	色	燒土粒子中量
7	灰	赤	色	燒土粒子中量	14	褐	色	燒土粒子・炭化粒子少量	砂粒微量	

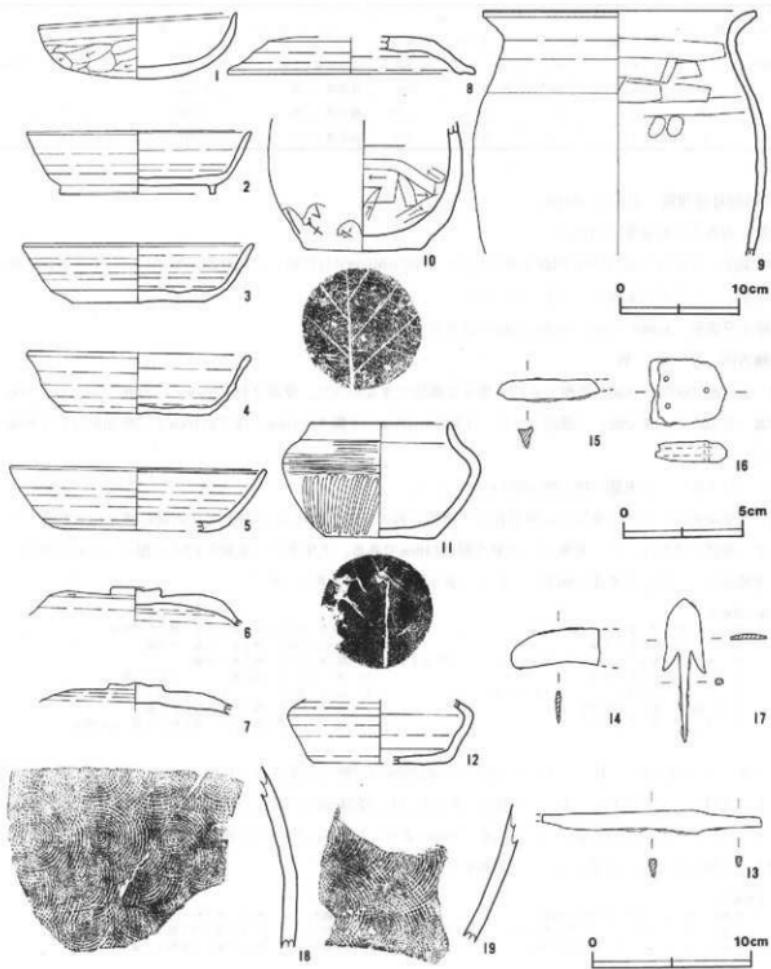
ピット 6か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は径約20cmの円形で、深さ30~40cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>の北東部にあるP<sub>5</sub>は、径34cmの円形で、深さ19cmであり、P<sub>3</sub>の補助柱穴と考えられる。P<sub>6</sub>は径20cmの円形で、深さ28cmであり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	暗褐色	燒土粒子中量	炭化粒子微量	4	黒褐色	ローム粒子・燒土粒子多量	
2	暗褐色	燒土中・小ブロック	燒土粒子多量	5	暗褐色	ローム粒子多量	燒土粒子少量
3	灰褐色	ローム粒子多量	炭化粒子微量	6	黒褐色	ローム粒子中量	炭化粒子少量

遺物 土師器片2,436点、須恵器片413点、銅製品(鉈尾)1点、鉄製品(鐵鎌、刀子、鎌、不明鉄製品)4点、鉄滓1点、陶器片1点、礫5点が出土している。第261図1の土師器杯は逆位で南西コーナー部の覆土下層から、2の須恵器高台付杯は逆位で中央部東側の覆土下層から、3の須恵器杯は正位で西部の覆土下層から、4の須恵器杯は逆位で、11の土師器短頸壺は横位で北西部の覆土下層から、5の須恵器杯と7の須恵器蓋、12の須恵器短頸壺、16の鉈尾、17の鐵鎌は覆土中から、6の須恵器蓋は逆位で南西部の覆土中層から、8の須恵器蓋は西部の覆土中層から出土している。9の土師器甕は北西部と南部の覆土中から出土した破片が接合したものである。10の土師器小形甕は正位で西部の覆土上層から、13の刀子は斜位で南東コーナー部の覆



第261図 第639号住居跡出土遺物実測図

土下層から、14の鎌は中央部からやや西側の覆土中層から、15の刀子は西部の覆土上層から出土している。18と19は須恵器壺の体部片で、いずれも外面に同心円状の叩きが施されている。鉄滓は覆土中層から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀前葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉等は確認されていない。重複している第638・651・660号住居跡より古く、第641号住居跡より新しい。

第639号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第261図 1	坏 土 部 器	A 12.4 B 4.1	丸底。体部は内唇気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外輪へラ削り。内面ナデ。口縁部内・外輪横ナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P7494 100% 南西コーナー部覆土下層
2	高台付坏 頬 恵 器	A 14.0 B 4.0 D 9.7 E 0.6	体部から口縁部にかけて一部欠損。半底。高台は短く直立する。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転へラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部内・外輪ロクロナデ。	砂粒・長石・小石 灰白色 普通	P7495 85% 中央部東側覆土下層
3	坏 頬 恵 器	A [14.4] B 3.7 C 8.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は内唇気味に立ち上がる。	底部回転へラ削り。体部から口縁部内・外輪ロクロナデ。	砂粒・雲母・小石 黄灰色 普通	P7496 40% 西部覆土下層
4	坏 頬 恵 器	A [13.8] B 3.8 C 9.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は内唇気味に立ち上がる。	底部へラ削り。体部から口縁部内・外輪ロクロナデ。	砂粒・雲母・小石 黄灰色 普通	P7497 50% 北西部覆土下層
5	坏 頬 恵 器	A [16.0] B 3.9 C [ 9.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部へラ削り。体部から口縁部内・外輪ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	P7498 10% 覆土中
6	蓋 頬 恵 器	B ( 22) F 3.2 G 0.5	天井部から口縁部にかけて一部欠損。天井部は笠形をしている。ボタン状の突みが付く。	天井部外面上半回転へラ削り。天井部から口縁部内・外輪ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰白色 普通	P7499 40% 南西部覆土中層
7	蓋 頬 恵 器	B ( 18) F 3.4 G 0.5	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は笠形をしている。ボタン状の突みが付く。	天井部外面上半回転へラ削り。内面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 にい程色 普通	P7500 10% 覆土中
8	蓋 頬 恵 器	A [15.6] B ( 23)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は笠形をしている。口縁部内面に膨らみをもつ。	天井部外面上半回転へラ削り。天井部内・外輪ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P7501 20% 西部覆土中層
9	蓋 土 部 器	A [22.6] B (20.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内寄して立ち上がり、最大径を上位にもつ。肩部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方に突み上げる。	体部内面ナデ、内面へラナデ。口縁部内・外輪横ナデ。	砂粒・雲母・小石 橙色 普通	P7502 20% 覆土中
10	小 形 壺 土 部 器	B ( 82) C 7.4	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内寄して立ち上がり、最大径を中位にもつ。	底部木葉痕。体部外輪下位に木葉痕、中位ナデ。内面へラナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 黒褐色 普通	P7503 30% 西部覆土上層
11	短 瓶 壺 土 部 器	A 8.7 B 7.2 C 6.9	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、肩部で大きく内傾する。口縁部はやや内傾する。	底部へラナデ。木葉痕を残す。体部から肩部外側丁寧なへラ磨き、内面ナデ。口縁部内・外輪横ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P7504 85% 北西部覆土下層
12	短 瓶 壺 頬 恵 器	B ( 4.0) C [ 8.2]	底部から肩部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、肩部で大きく内傾する。	底部へラ削り。体部から肩部内・外輪ロクロナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P7505 10% 覆土中

図版番号	種別	計測値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)		
13	刀子	(14.0)	1.6	0.4	(15.0)	南東コーナー部覆土下層	M7042 PL 82
14	鎌	( 5.7)	2.2	0.2	( 6.1)	中央部や西側覆土中層	M7043 PL 82
15	刀子	( 4.4)	0.9	0.5	( 3.94)	西部覆土上層	M7044
16	鉈 尾	3.2	2.7	0.8	18.0	覆土中	M7045 PL 82
17	鉄 鎌	8.9	2.7	0.3~0.4	10.0	覆土中	M7112 PL 82

### 第640号住居跡（第262・263図）

位置 調査7区南東部、O12b区。

重複関係 東部が第651号住居跡に掘り込まれ、第660号住居跡を掘り込んでいる。第651号住居跡の掘り込みは、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸3.03m、短軸[3.0]mの方形と推定される。

主軸方向 N-10°-W

壁 南壁から西部にかけて確認できた。壁高は約40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下から西壁下にかけてと北壁下の一部に確認できた。上幅約20cm、下幅4~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部から東側にかけて特に踏み固められている。

竈 北壁中央部からやや東寄りに構築されていたと推定される。第651号住居跡に掘り込まれているが、床面北側に火床部と思われるゴツゴツした赤変硬化部分が検出された。

覆土 第651号住居跡に掘り込まれているため、南壁際の2層のみが確認できた。

#### 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量	燒土粒子	炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子中量	ローム小ブロック	燒土粒子少量

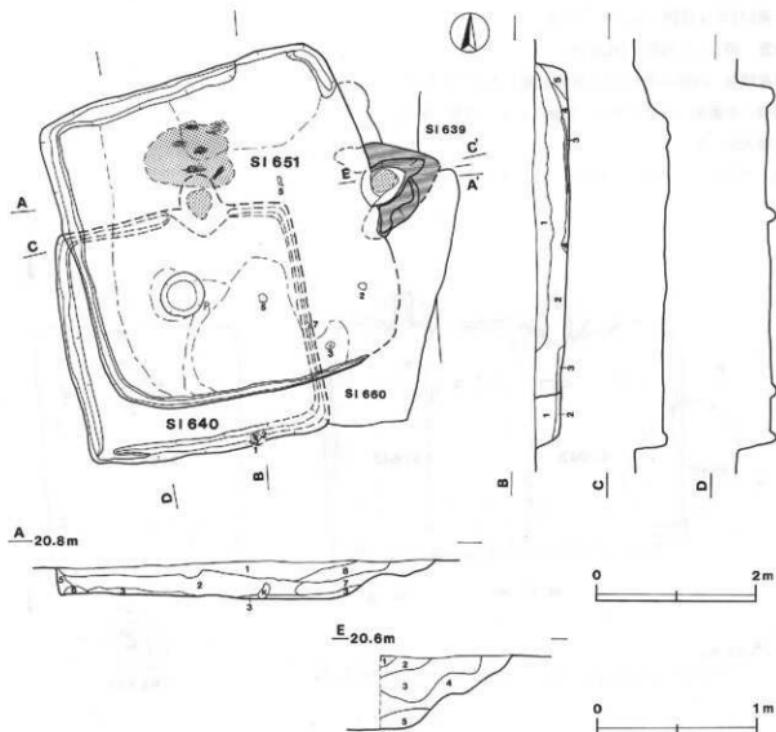
遺物 土師器片673点、須恵器片116点、鉄製品（角釘）2点が出土している。第263図1の須恵器壺、2の土師器壺は正位で南壁溝から、3の土師器壺は竈火床部から、4の須恵器蓋、6の角釘は覆土中から、5の土師器甕は東部の床面から、7の角釘は東壁溝から出土している。

所見 本跡のピットは確認できなかった。壁が確認できなかつた部分は床質から規模を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第651号住居跡より古く、第660号住居跡より新しい。

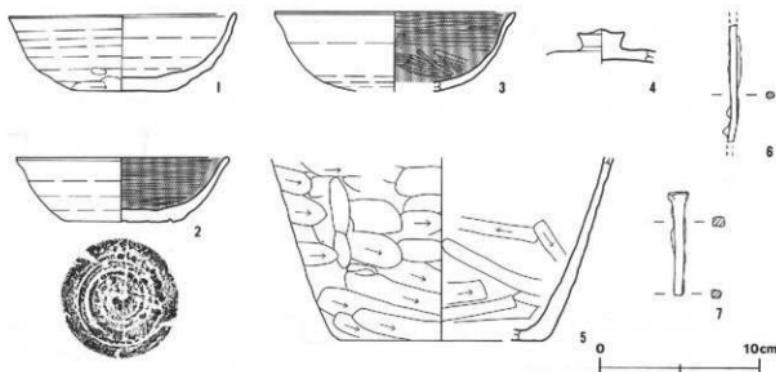
### 第640号住居跡出土遺物観察表

器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
1 須恵器 壺	A 14.2 B 4.9 C 5.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内唇気味 に立ち上がる。	底部一方へのハラ削り。体部外面 下端手持ちハラ削り。体部から口 縫部内・外縫にクロナダ。	砂粒・雲母・瓦石 にぶい褐色 普通	P7506 南壁溝 70%
	A 13.3 B 4.0 C 7.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内唇気味 に立ち上がる。	底部回転ハラ削り。体部から口縫 部外面クロナダ。内面丁寧なハラ 磨き。内面褐色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P7507 南壁溝 85%
	A [15.0] B (4.9)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内唇気味に立ち上がり、口 縫部はやや外反する。	内面丁寧なハラ磨き。内面黒色処 理。	砂粒・雲母・瓦石 にぶい褐色 普通	P7508 竈火床部 20%
2 須恵器 壺	B (2.1) F 3.0 G 1.3	天井部片。ボタン状のつまみがつ く。	天井部外面上半回転ハラ削り。	砂粒・雲母・瓦石 褐色 普通	P7509 覆土中 5%
	B (11.4) C (12.6)	底部から体部にかけての破片。平 底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ハラナダ。体部外面ハラ削り。 内面ハラナダ。	砂粒・雲母・小石・ 赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7510 東部床面 10%

器種	種 别	計 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6 角釘		(7.3)	1.1	0.4	(4.48)	覆土中	M7046
7 角釘		(6.4)	1.3	0.5~0.6	(9.30)	東壁溝	M7047



第262図 第640・651号住居跡実測図



第263図 第640号住居跡出土遺物実測図

第642号住居跡（第264・265図）

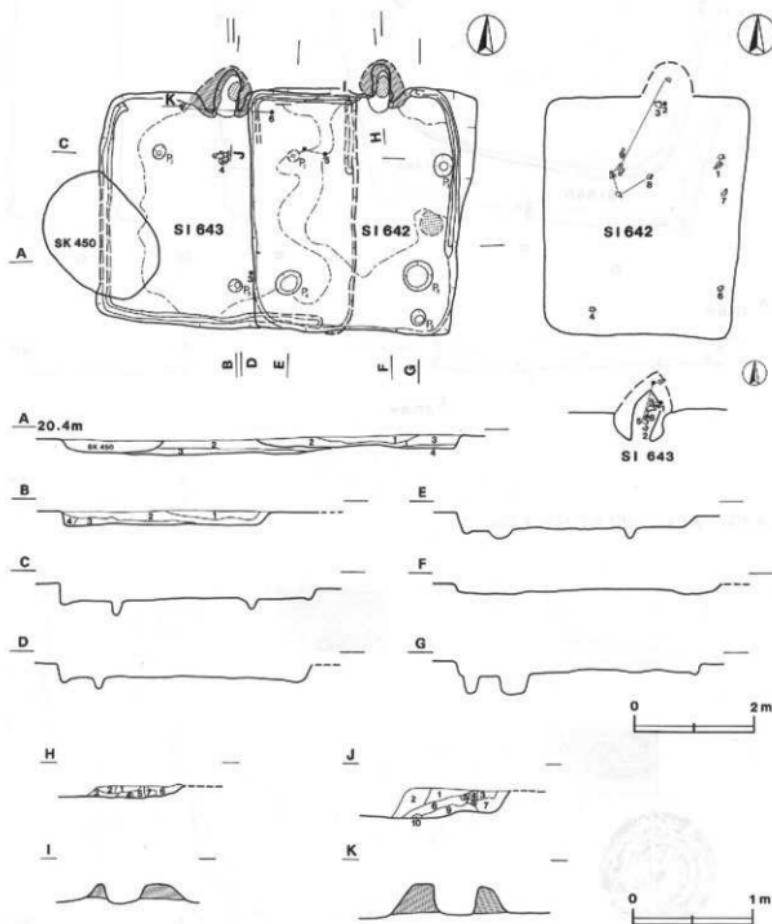
位置 調査7区南部、O12a区。

重複関係 西部が第643号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.90m、短軸3.75mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は13~20cmで、外傾して立ち上がる。



第264図 第642・643号住居跡実測図

**壁溝** 北壁下から東壁下にかけて確認できた。上幅12~18cm、下幅4~10cm、深さ6cmで、断面形はU字形を示している。

**床** ほぼ平坦で、竈前から中央部にかけて特に踏み固められている。東壁際床面に約40cm四方の焼土が確認できた。南壁中央部は床面に向かって、スロープ状になっている。さらに、上面が踏み固められていることや、位置的なことも加味すると出入り口施設の可能性がある。

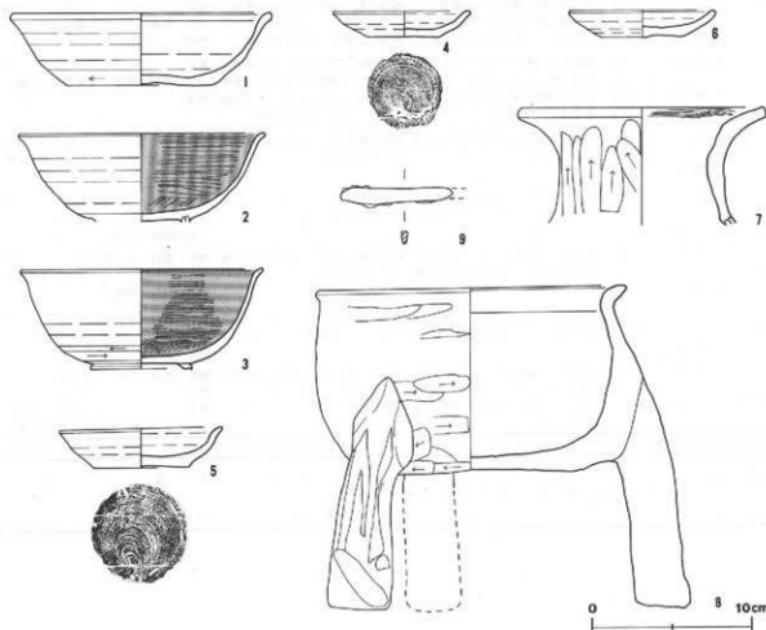
**竈** 北壁中央部から東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約80cm、両袖部幅約70cmである。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第5層と第7層が崩落土と考えられる。袖部は遺存している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。覆土から多量の土器片が出土している。

#### 竈土層解説

- 1 細赤褐色 漢化粒子中量
- 2 黒褐色 粘土粒子多量、焼土粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・漢化粒子中量
- 4 灰褐色 焼土粒子・漢化粒子多量

- 5 灰褐色 粘土ブロック多量、焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 6 黑褐色 焼土粒子多量
- 7 灰褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子微量

**ピット** 4か所( $P_1 \sim P_4$ )。東壁際にある $P_1$ と $P_3$ は、径約25cmの円形で、深さ約25cmである。性格は不明である。 $P_2$ と $P_4$ は、上面径約50cmの円形、底面径約30cmの円形で、深さ約25cmであり、規模と配置から判断して柱穴と考えられる。



第265図 第642号住居跡出土遺物実測図

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土器解説

- 1 純褐色 燐土粒子中量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 燐土粒子多量、ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 燐土粒子多量

遺物 土師器片278点、須恵器片64点、鉄製品（刀子）1点、鐵滓3点、礫6点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第265図1の壺は北東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。2の高台付壺は逆位で竈火床部から、3の高台付壺は逆位で竈前の覆土下層から、4の皿は逆位で南西部の覆土下層から、5の皿は覆土中から、6の皿は東壁際の覆土下層から、7の壺は東壁際の覆土下層から出土している。8の三足鍋は竈火床部と竈前の床面と覆土中から出土した破片が接合したものである。9の刀子は北部の覆土下層から、鐵滓は南部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。鉄滓については、覆土上層から出土したため、混入したものと考えられる。重複している第643号住居跡より新しい。

第642号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第265図 1 土師器	壺	A [16.2] B 4.5 C ( 9.2 )	底部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部は内壁気味に立ち上がり る。口縁部はやや外反する。	底部へラ削り。体部から口縁部内 外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7512 60% 北東部覆土下層	
	高台付壺	A [15.4] B ( 5.5 )	高台部欠損。体部から口縁部にか けて一部欠損。体部は内壁気味に立 ち上がり。口縁部はやや外反する。	底部回転へラ削り後ナデ。体部か ら口縁部外面ロクロナデ。内面丁 寧なへラ磨き。内面黒色處理。	砂粒 橙色(外側) 普通	P7513 40% 竈火床部	
	土師器	A [15.2] B 6.2 D 6.4 E 0.4	体部から口縁部にかけ一部欠損。 高台は僅く「ハ」の字形に開く。 体部は内壁気味に立ち上がり。口 縁部はやや外反する。	底部回転へラ削り後ナデ。高台取り 付け後ナデ。体部外面下端粗削へラ削り。 体部から口縁部外面ロクロナデ。内面丁 寧なへラ磨き。内面黒色處理。	砂粒 にぶい橙色(外側) 普通	P7514 40% 竈前覆土下層	
4 土師器	皿	A 8.4 B 1.6 C 4.4	平底。体部から口縁部は内壁気味 に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部 内外面ロクロナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P7515 100% 南西部覆土下層	
	土師器	A 10.2 B 2.5 C 6.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内壁気味 に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部 内外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P7516 50% 覆土中	
	土師器	A [ 9.0 ] B 1.7 C 5.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内壁気味 に立ち上がる。	底部回転へラ削り。体部から口縁部 内外・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P7517 45% 東壁際覆土下層	
7 土師器	甕	A 15.2 B ( 7.2 )	裏部から口縁部にかけての破片。 縁部は直立し。口縁部は外反する。	裏部外面裏縫のへラナデ。口縁部 外面ナデ。内面丁寧なへラ磨き。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P7518 20% 東壁際覆土下層	
	土師器	A 19.0 B 21.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。 三足が付く。平底。体部は内壁気 味に立ち上がり。口縁部は直立外 反する。	足部へラ削り後へラナデ。底部か ら体部外面へラナデ。内面ナデ。 口縁部内外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P7519 70% PL 82 底部二次焼成 竈火床部と覆土中	
9	刀子	( 7.1 )	1.5	0.4	( 7.60 )	北部覆土下層	M7048
計測値					出土地点		
長さ(cm)		幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考		
9	刀子	( 7.1 )	1.5	0.4	( 7.60 )	北部覆土下層	M7048

### 第643号住居跡（第264・266図）

位置 調査 7区南部、O12a区。

重複関係 東部を第642号住居跡に、南西部を第450号土坑に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸4.25m、短軸[3.9]mの方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 東壁は確認できなかった。壁高は15~25cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下と東壁下の一部では確認できなかった。上幅約20cm、下幅約8cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

窓 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約80cm、両袖部幅約80cmである。

火床部は、床面を約5cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は遺存している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の遺物が出土している。

#### 竪土層解説

1 緑 色	ローム粒子中量	6 枯葉 赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 緑 色	ローム粒子多量、焼土粒子少量	7 緑 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
3 緑 赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量	8 緑 色 ローム粒子多量
4 にじむ赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子中量	9 枯葉 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量
5 枯葉 赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量	10 緑 色 ローム粒子多量、焼土粒子中量

ピット 3か所(P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は、径約20cmの円形で、深さ約20cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>は径20cmの円形で、深さ18cmであり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

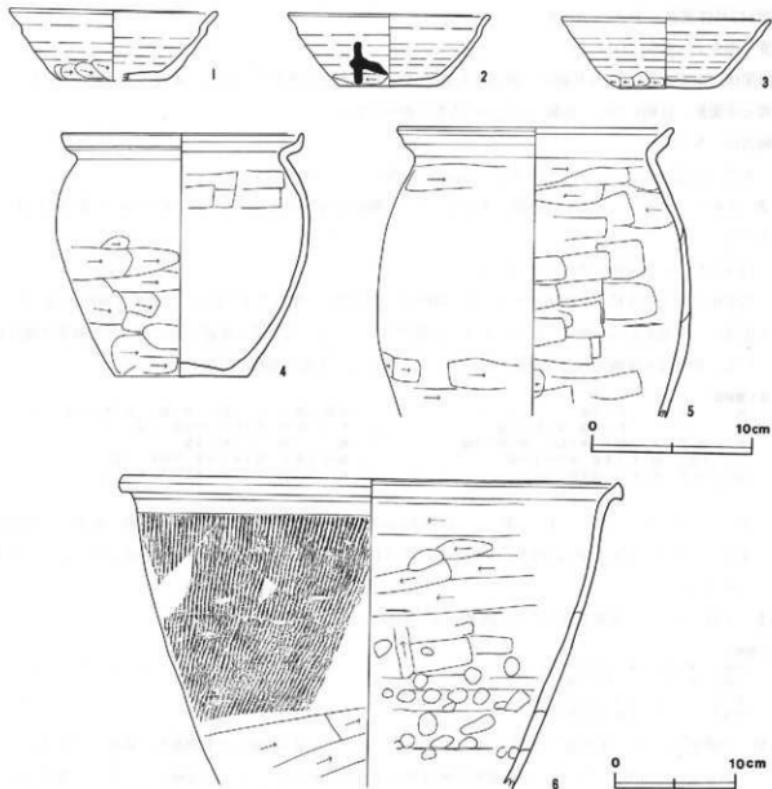
1 暗褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量
2 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
3 緑 色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子多量、炭化粒子少量

遺物 土師器片222点、須恵器片132点、礫7点が出土している。第266図1の須恵器は竪内から出土しており、熱を受けて赤変している。2の須恵器は竪火床部から出土している。側面に「ナカ」と墨書きされ、内面に朱墨が付着している。3の須恵器は南部の覆土中層から出土している。4の土師器小形甌は竪前の床面と覆土中から出土した破片が接合したものである。5の土師器甌は竪内と北東部の床面から出土した破片が接合したものである。6の須恵器鉢は竪内と竪東側、西部の床面から出土した破片が接合したものである。

所見 東壁が確認できなかったため、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。重複している第642号住居跡、第450号土坑より古い。

### 第643号住居跡出土遺物観察表

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第266図 1 須恵器	壺	A [13.0] B 4.0 C (6.8)	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部ハラ削り。体部外縁下端手持 ちハラ削り。体部から口縁部内、 外縁クロコナダ。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 褐色 普通	P7520 竪内 20%
	壺	A [12.4] B 4.2 C 6.2	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部ハラ削り。体部外縁下端手持 ちハラ削り。体部から口縁部内、 外縁クロコナダ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P7521 PL82 墨書き上器 竪火床部 20%
	須恵器					
2 須恵器	壺	A [12.4] B 4.2 C (6.8)	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部ハラ削り。体部外縁下端手持 ちハラ削り。体部から口縁部内、 外縁クロコナダ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P7521 PL82 墨書き上器 竪火床部 20%
	須恵器					



第266図 第643号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第266図 3	壺 須恵器	A [13.0] B 4.5 C [5.8]	体部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部外下端 手持ちヘラ削り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7522 20% 南部覆土中層
4	小形壺 土師器	A 15.0 B 15.1 C 8.2	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は 内傾して立ち上がり、最大径を上位に もつ。裏面でくびれ。口縁部は外反す る。口唇部は上方につまみ上げる。	底部ヘラナデ。体部外横位のヘ ラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・ 外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 小石 暗褐色 普通	P 7523 80% PL 82 竈前床面と覆土中
5	壺 土師器	A [17.2] B [18.0]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がり、最大 径を中位にもつ。腹部で「く」の 字に屈曲する。口縁部は外傾する。 口唇部は上方につまみ上げる。	体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・ 外面横ナデ。輪積み状。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい赤褐色 普通	P 7524 30% 竈内と北東部床面
6	鉢 須恵器	A [41.4] B (25.2)	体部から口縁部にかけての破片。体 部は外傾して立ち上がり、口縁部は 外反する。口縁部直下に後が温る。 口唇部は上方につまみ上げる。	体部外下位斜位のヘラ削り。中 位から上位段位の平行叩き。内面 指頭押圧後横ナデ。口縁部内・外 面横ナデ。輪積み状。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい赤褐色 普通	P 7525 20% 竈内と竈東側、西 部床面

### 第644号住居跡（第267～269図）

位置 調査7区南部、O12ea区。

重複関係 東部が第645A号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.30m、短軸2.70mの長方形である。

主軸方向 N-69°-E

壁 壁高は35～38cmで、外傾して立ち上がる。

壁構 東壁下の一部と南東コーナー壁下を除いて確認できた。上幅約20cm、下幅約8cm、深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに砂質粘土で構築されている。煙道部と南袖部の一部が搅乱を受けているが、規模は、焚口部から煙道部まで約80cm、両袖部幅約100cmと推定される。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部の遺存は悪い。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 覆土層解説

1	暗褐色	燒土粒子多量、炭化粒子中量
2	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子中量
3	黒褐色	燒土粒子・炭化粒子少量
4	赤褐色	燒土粒子・炭化粒子中量
5	黒褐色	燒土粒子・炭化粒子微量
6	黒褐色	燒土粒子少量
7	板暗赤褐色	燒土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量
8	板暗赤褐色	燒土粒子中量、ローム粒子少量

覆土 5層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

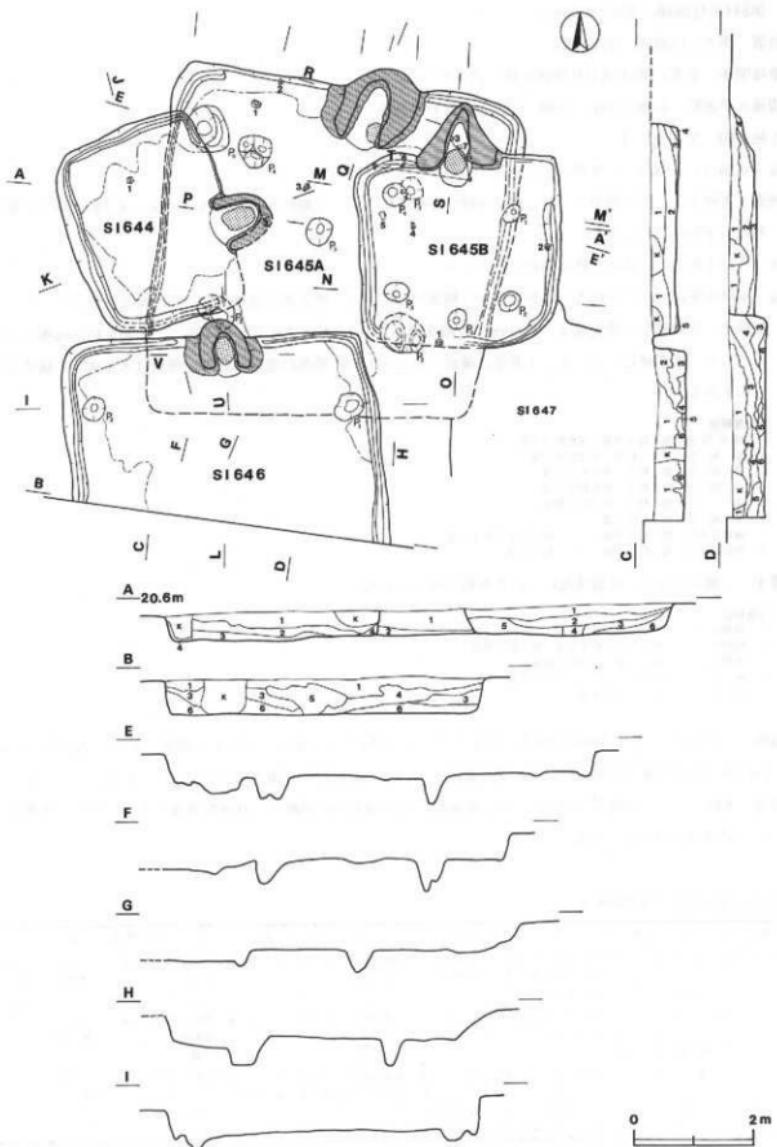
1	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子中量、炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、燒土粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量
5	褐色	ローム小ブロック多量

遺物 土器片170点、須恵器片36点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第269図1の高台付坏は北部の覆土下層から、3の壺は窓内から、2の高台付坏は覆土中から出土している。

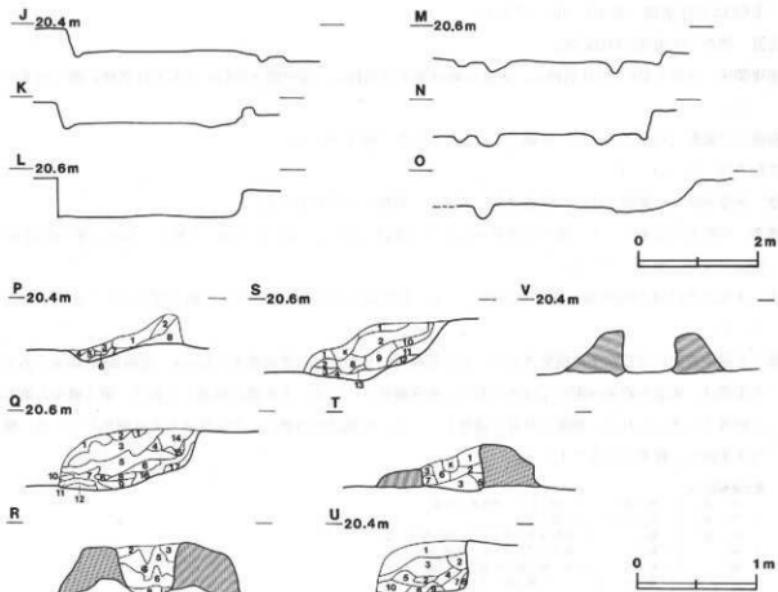
所見 本跡のピットは確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉と考えられる。重複している第645A号住居跡より新しい。

### 第644号住居跡出土遺物観察表

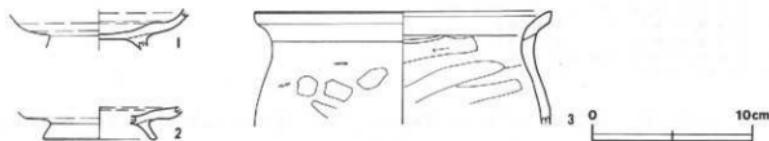
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第269図 1	高台付坏 土 師 器	B (25)	高台部欠損。底部から口縁部にかけて一部欠損。体部は内側気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい・橙色 普通	P7526 20% 北部覆土下層
2	高台付坏 土 師 器	B (20) D (7.0) E 0.8	高台部から底部にかけての破片。 平底。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・雲母・長石 淡橙色 普通	P7527 5% 覆土中
3	壺 土 師 器	A [18.4] B (7.1)	体部上位から口縁部にかけての破片。 体部上位は内側して立ち上がる。 縁部でくびれ。口縁部は外反する。 口部上方につまみ上げる。	体部外面ナデ、内面ヘラナデ。口 縁部内・外面横ナデ。輪横み痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい・橙色 普通	P7529 5% 窓内



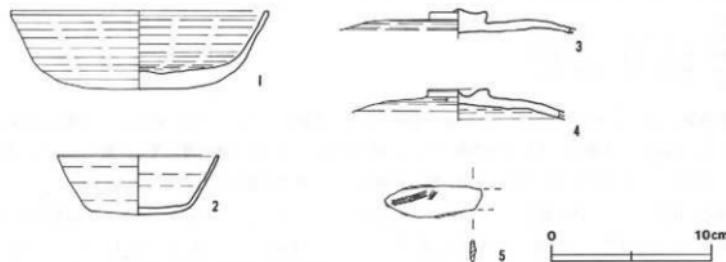
第267図 第644・645A・645B・646号住居跡実測図（1）



第268図 第644・645A・645B・646号住居跡実測図（2）



第269図 第644号住居跡出土遺物実測図



第270図 第645A号住居跡出土遺物実測図

### 第645A号住居跡（第267・268・270図）

位置 調査7区南部、O12c区。

重複関係 西部を第644号住居跡に、東部を第645B号住居跡に、南壁際を第646・647号住居跡に掘り込まれて いる。

規模と平面形 長軸 [5.8]m、短軸 [5.2]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-10°-E

壁 南壁を除いて確認できた。壁高は35~43cmで、外傾して立ち上がる。

壁構造 西壁下と北東コーナー部から東壁下にかけて確認できた。上幅10~20cm、下幅4~10cm、深さ約10cmで、 断面形はU字形をしている。

床 東部は第645B号住居跡に掘り込まれている。中央部から西側一部にかけて踏み固められた部分が残存している。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで120cm、両袖部幅140cmである。

火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第3層から第5層 が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道 は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

1	黒褐色	色	焼土中プロック・焼土粒子・炭化粒子中量
2	黒褐色	色	焼土中プロック少量
3	暗褐色	色	粘土ブロック・砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子中量
4	褐色	色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量
5	褐色	色	粘土ブロック多量、焼土粒子中量
6	暗赤褐色	色	焼土中・小プロック・焼土粒子多量
7	黒褐色	色	焼土中プロック・焼土粒子少量
8	にじい赤褐色	色	焼土中プロック・焼土粒子・炭化粒子中量
9	暗赤褐色	色	焼土中プロック・焼土粒子少量
10	暗赤褐色	色	焼土中プロック・焼土粒子・炭化粒子中量
11	暗赤褐色	色	焼土粒子・炭化粒子多量、ローム粒子少量
12	黒褐色	色	焼土中プロック・焼土粒子中量
13	暗赤褐色	色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
14	暗赤褐色	色	焼土小プロック・焼土粒子微量
15	暗赤褐色	色	焼土中プロック・焼土粒子多量
16	暗赤褐色	色	焼土粒子中量、炭化粒子微量
17	暗褐色	色	焼土小プロック・焼土粒子少量

ピット 6か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は、径約40cmの円形で、深さ40~50cmであり、規模と配置から判 断して主柱穴と考えられる。中央部にあるP<sub>5</sub>は、径約40cmの円形、深さ37cmである。北西コーナー部近く にあるP<sub>6</sub>は、長径約80cm、短径約60cmの梢円形で、深さ24cmである。いずれも性格は不明である。

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	暗褐色	色	焼土粒子多量、炭化粒子微量
2	黒褐色	色	焼土粒子多量、ローム粒子中量
3	暗褐色	色	焼土粒子中量、炭化粒子微量
4	黒褐色	色	焼土粒子・ローム粒子中量

遺物 土器片176点、須恵器片67点、土製品(支脚)1点、鉄製品(刀子)1点、鉄滓2点、礫2点が出土 している。図示した土器はいずれも須恵器である。第270図1と2の壺は竈西側の覆土下層から、3の蓋は 竈前の床面から、4の蓋と5の刀子、支脚の破片は竈内から、鉄滓は覆土中から出土している。

所見 南壁と南西コーナー部は確認できなかったが、南東コーナー部を手がかりにして規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して8世紀前葉と考えられる。重複している第644・645B・646・647号住居 跡より古い。

第645A号住居跡出土遺物観察表

因版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
						P	%
第270版 1	壺 須恵器	A [16.0]	底部から口縁部にかけての破片。	底部ヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 灰色 普通	P 7530	50%
		B 4.9	丸底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			竪西側覆土下層	
2	壺 須恵器	A 10.0	体部から口縁部にかけての破片。	底部ヘラ削り。体部から口縁部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	P 7531	30%
		B 3.7	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。			竪西側覆土下層	
3	壺 須恵器	C 6.0					
		B ( 1.5 )	天井部片。ボタン状のつまみが付く。	天井部外面上半円板ヘラ削り。天井部内・外側ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 灰色 普通	P 7532	30%
4	壺 須恵器	F 3.7				PL 82	
		G 0.9				竪前床面	
5	刀子	B ( 1.9 )	天井部片。ボタン状のつまみが付く。	天井部外面上半円板ヘラ削り。天井部内・外側ロクロナデ。	砂粒・長石 褐色 普通	P 7533	20%
		F 3.8				竪内	
		G 0.5					

因版番号	種別	計測面積				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	刀子	(6.1)	2.0	0.4	(8.40)	竪内	M 7049 PL 82

## 第645B号住居跡(第267・268・271図)

位置 調査7区南部, O12e区。

重複関係 全体的に第645A号住居跡を掘り込み、南東コーナー部が第647号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.35m, 短軸3.20mの方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 南東コーナー壁は確認できなかった。壁高は約40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下と北東コーナー部では確認できなかった。上幅約20cm, 下幅約10cm, 深さ約10cmで、断面形は逆台形状をしている。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

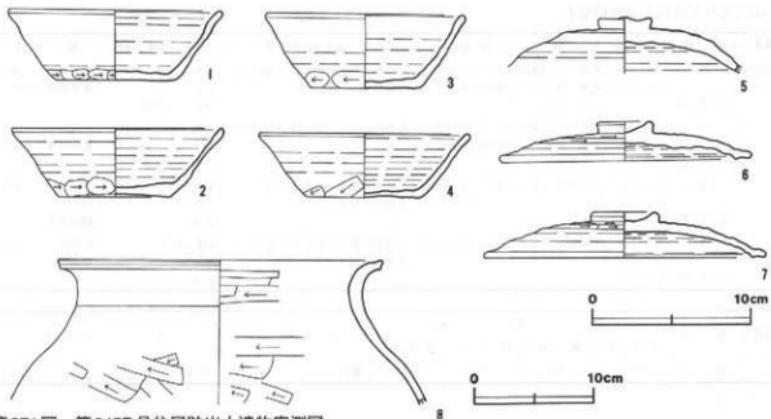
竪 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで140cm, 両袖部幅120cmである。

第4層が赤変硬化してゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめている。天井部は崩落しており、第8層から第10層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

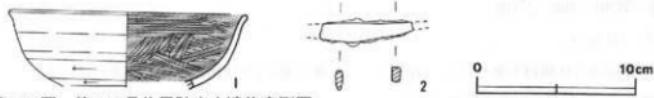
## 遺土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量
- 2 暗褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック、ゴツゴツしている
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 暗暗赤褐色 焼土ブロック多量、焼土ブロック中量、ローム粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土ブロック多量、焼土中ブロック中量、焼土粒子少量
- 10 暗赤褐色 粘土粒子・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
- 11 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 12 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量
- 13 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、灰中量

ビット 5か所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は、径30~40cmの円形で、深さ15~20cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は、径30cmの円形、深さ23cmであり、位置的に出入り口施設に伴うビットと考えられる。



第271図 第645B号住居跡出土遺物実測図



第272図 第646号住居跡出土遺物実測図

覆土 6層からなる。堆積状況から判断して、第1層と第2層は自然堆積、第3層から第6層は人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 細褐色 燐土粒子多量。ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 細褐色 ローム粒子、燐土粒子中量
- 3 黄色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 細褐色 燐土粒子・炭化粒子多量。ローム粒子少量
- 5 細褐色 ローム粒子中量、燐土粒子少量
- 6 黄色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物 土器器221点、須恵器片85点が出土している。第271図1の須恵器杯は正位で南壁際の覆土下層から出土している。2の須恵器杯は東壁際の床面と窓内から出土した破片が接合したものである。3の須恵器杯は窓内と北西コーナー部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。4の須恵器杯と5の須恵器蓋は北西部の覆土中層から、6の須恵器蓋は正位で北壁際の覆土下層から、7の須恵器蓋は逆位で窓内から、8の土器器は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第645A号住居跡より新しく、第647号住居跡より古い。

第645B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第271図 1	杯 須恵器	A 13.4 B 3.9 C 7.4	I縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 灰黄褐色 普通	P 7534 95% PL 82 南壁際覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第271図 2 須恵器	壺	A 13.2 B 4.3 C 7.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持 ちヘラ削り。体部から口縁部内・ 外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P7535 80% PL82 窓内と東壁際床面
	壺	A [12.4] B 4.3 C 7.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面 下端手持ちヘラ削り。体部から口 縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 灰色 普通	P7536 50% 窓内と西北コーナー 部覆土下層
	壺	A [13.2] B 4.0 C [7.0]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面下端手持 ちヘラ削り。体部から口縁部内・ 外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・石英 黄褐色 普通	P7537 40% 北西部覆土中層
5 須恵器	蓋	B (2.2) F 3.2 G 0.5	口縁部欠損。天井部はドーム状を している。ボタン状のつまみが付 く。	天井部外面上半回転ヘラ削り。天 井部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい黄褐色 普通	P7538 60% PL82 北西部覆土中層
	蓋	A [15.6] B 24 F 3.5 G 0.7	天井部から口縁部にかけての破片。 天井部は低く扁平である。環状の つまみが付く。口縁部内面に這い かえりをもつ。	天井部外面上半回転ヘラ削り。天 井部から口縁部内・外面ロクロナ ダ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい黄褐色 普通	P7539 20% 北西部覆土下層
	蓋	A [17.6] B 28 F 4.2 G 0.6	天井部から口縁部にかけての破片。 天井部は低いドーム状をしている。 環状のつまみが付く。口縁部内面 に這いかえりをもつ。	天井部外面上半回転ヘラ削り。天 井部から口縁部内・外面ロクロナ ダ。	砂粒・雲母・小石・ 赤色粒子 橙色 普通	P7540 20% PL82 窓内
8 土師器	壺	A [27.0]	体部上位から口縁部にかけての破片。	体部上位内・外面ヘラナダ。口縁 部内・外面後ナダ。	砂粒・雲母・其石・ 小石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P7541 10% 覆土中
	壺	B (11.9)	体部上位は内傾して立ち上がる。頂 部でくびれ、口縁部は外平する。口 縁部は上方につまみ上げる。			

#### 第646号住居跡 (第267・268・272図)

位置 調査7区南部, O12e区。

重複関係 北部が第645A号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 中央部から南部は調査区域外のため、平面形は確認できなかった。東西5.10m, 南北(3.3)m  
である。

主軸方向 N - 4° - W

壁 壁高は38~42cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅約20cm, 下幅4~10cm, 深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm, 両袖部幅120cmである。

火床部は、床面を約5cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。袖部は良好に  
遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

第8層に灰が多量に含まれている。

#### 竈土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量
2 黒褐色 焼土粒子少量	8 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭多量・炭化粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量	9 暗赤褐色 炭化粒子多量・焼土粒子少量
4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量	10 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量	11 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
6 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量	

ピット 2か所 ( $P_1$ ・ $P_2$ )。 $P_1$ と $P_2$ は、径約30cmの円形で、深さ約25cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。

**覆土** 6層からなり、堆積状況から人为堆積と考えられる。

土層解説	
1	褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
2	褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
3	褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
4	灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量
5	暗褐色 ローム粒子中量
6	褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量

**遺物** 土器片354点、須恵器片91点、鉄製品（刀子）1点、椀状鉄滓3点、礫5点が出土している。第272図

1の土器器部と椀状鉄滓は覆土中から、2の刀子は瓶内から出土している。

**所見** 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。椀状鉄滓が出土しているが、鍛冶炉等は確認されていない。重複している第645A号住居跡より新しい。

第646号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴		手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
			A	B			
第272図 1	坏	A [14.8] B (47)	体部から口縁部にかけての破片。 体部外面下端面板へラ削り。体部 内面には内骨氣味に立ち上がり、口 縁部はやや外反する。	砂粒・雲母 から口縁部外側面クロナザ、内面 丁寧なハラ磨き。内面黒色処理。	P 7543 覆土中	30%	
2	土器				普通		
図版番号		計測値			出土地点		備考
長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
2	刀子 (5.9)	1.8	0.6	(8.65)	瓶内	M 7050	

第647号住居跡（第273・274図）

**位置** 調査7区南部、O12e区。

**重複関係** 北部が第645B号住居跡を、西部が第645A号住居跡を、北東コーナー部が第22号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

**規模と平面形** 長軸3.50m、短軸3.00mの長方形である。

**主軸方向** N-0°

**壁** 壁高は18~20cmで、外傾して立ち上がる。

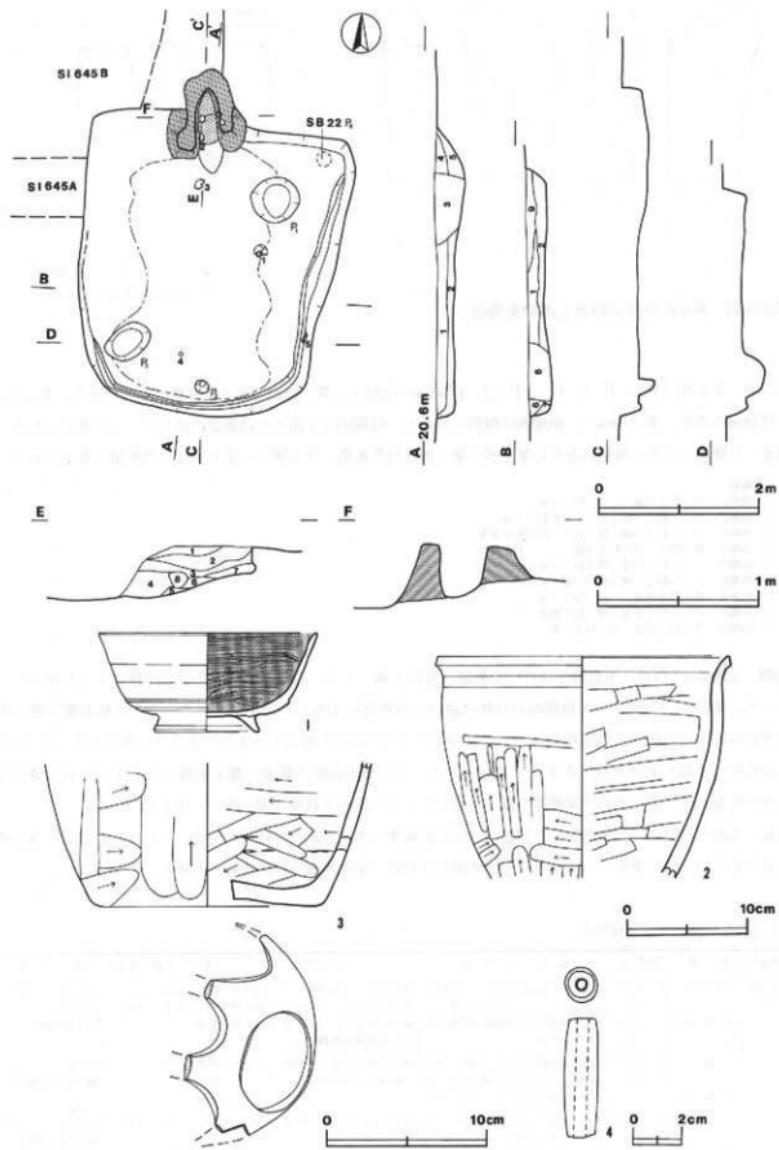
**壁溝** 南壁下から東壁下にかけて確認できた。上幅20~25cm、下幅4~10cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

**床** やや起伏があり、中央部が特に踏み固められている。

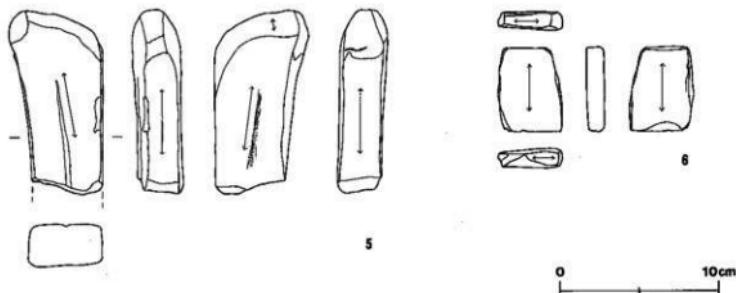
**竈** 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅95cmである。

火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化しゴツゴツしている。天井部は崩落しており、第3層と第4層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。補強材として土筋器甕が使用されている。甕道は火床面からほぼ垂直に立ち上がる。

竈土層解説	
1	黒褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
2	暗褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3	暗褐色 粘土ブロック多量、焼土小ブロック・焼土粒子中量
4	暗褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック中量
5	暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量
6	黒褐色 烧土粒子・炭化粒子微量
7	暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
8	黒褐色 烧土粒子中量、ローム粒子微量



第273図 第647号住居跡・出土遺物実測図（1）



第274図 第647号住居跡出土遺物実測図（2）

ピット 3か所 ( $P_1 \sim P_3$ )。 $P_1$ と $P_2$ は、径60cmの円形で、深さ22cmである。性格は不明である。 $P_3$ は、径18cmの円形、深さ19cmで、南壁側に傾斜しており、位置的にも出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層からなる。堆積状況から第1層と第2層は自然堆積、第3層から第9層は人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量、ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 7 暗褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量
- 8 黑褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 9 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量

遺物 土師器片124点、須恵器片10点、土製品（管状土錐）1点、石製品（砥石）2点、鉄滓1点が出土している。第273・274図1の土師器高台付杯は逆位で中央部の床面から出土している。2の土師器甕は竈火床部から出土した破片と袖部補強材として使用されていた破片が接合したものである。火床部出土のものは、補強材の一部が剥がれ落ちたものと考えられる。3の須恵器甕は竈前の覆土上層から、4の管状土錐は南部の床面から、5の砥石は東壁際の覆土下層から、6の砥石と鉄滓は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉と考えられる。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉等は確認されていない。重複している第645A・645B号住居跡、第22号掘立柱建物跡より新しい。

第647号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計画値(cm)	器 形 の 特徴	手 法 の 特徴	胎土・色調・焼成	備考
第273図 1	高台付杯	A [13.6]	底部から口縁部にかけて一部欠損。	底部回転へラブリ後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部外	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色(外面)	P7544 65%
		B 6.2	高台は底く「八」の字状に開く。	面クロナデ、内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	PL83	
	土師器	D 6.6	平底。体部から口縁部は内等気味		普通	中央部床面
		E 1.1	に立ち上がる。			
2	甕	A [24.2]	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上り、口縁部は扱く外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面へラブリ。内面へラナデ。口縁部内・外傾ナデ。	砂粒・小石 褐色	P7545 5%
	土師器	B (18.1)			普通	竈火床部と袖部
3	甕	B ( 8.9 )	底部から体部にかけての破片。多孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面へラブリ。内面へラナデ。	砂粒・雲母・石英・ 小石 にぶい褐色	P7546 5%
	須恵器	C [13.4]			普通	竈前壁土中層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第273図4	管状土錐	1.1	4.9	0.5	9.75	南部床面	DP7010 PL101

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第224図5	砾石	(11.5)	5.9	3.2	(312.0)	東壁際覆土下層	Q7013 砂岩
6	砾石	5.2	4.1	1.2	37.0	覆土中	Q7014 磨灰岩

### 第649号住居跡（第275図）

位置 調査7区南部、O12c4区。

規模と平面形 長軸3.68m、短軸2.50mの長方形である。

主軸方向 N-88°-E

壁 壁高は約10cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 東壁中央部からやや北寄りに構築されている。覆土が薄いため、火床部と袖部の一部が確認できただけである。第3層の底部が赤変硬化してゴツゴツしていることから判断して、火床部と考えられる。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめている。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子多量、ゴツゴツしている
- 4 ロームブロック
- 5 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 6 暗褐色 烧土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
- 7 黒褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 7か所（P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>）。竈南側にあるP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は、径約18cmの円形で、深さ約14cmである。南壁際にあるP<sub>2</sub>と北壁際にあるP<sub>6</sub>は、径40cmの円形、深さ30cmである。北西コーナー部にあるP<sub>5</sub>は、径80cmの円形で、深さ60cmである。北東コーナー部にあるP<sub>7</sub>は、上面径80cmの円形、底面径20cmの円形で、深さ40cmである。いずれも性格は不明である。

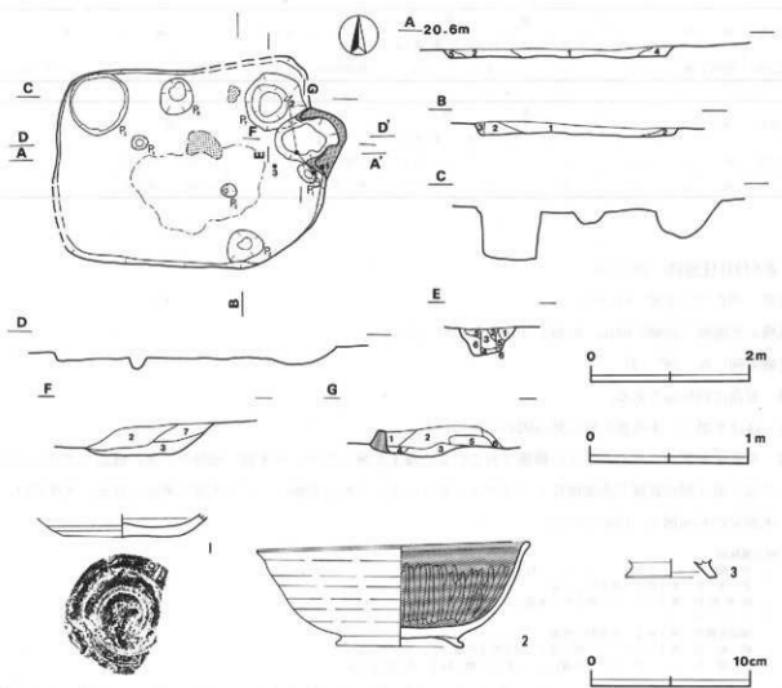
覆土 5層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量、ローム大ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子多量
- 5 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土器片151点、須恵器片12点、椀状鉄滓1点、雲母片岩1点、礫1点が出土している。図示した土器はいずれも土器器である。第275図1の坏は逆位で竈内から出土している。2の高台付杯は竈内とP<sub>7</sub>の覆土中から出土した破片が接合したものである。3の高台付杯の高台部は竈前の覆土下層から、椀状鉄滓は覆土中から出土している。雲母片岩は支脚として使用されており、火熱を受けて赤変している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀中葉と考えられる。椀状鉄滓が出土しているが、鐵治炉等は確認されていない。



第275図 第649号住居跡・出土遺物実測図

第649号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第275図 1	壺	B〔14〕 C〔7.6〕	底部片。平底。	底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P7550 20% 竈内
2	高台付壺 土師器	A 17.1 B 6.5 D 8.0 E 0.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。 高台は短く「ハ」の字状に開く。 体部は内骨気味に立ち上がり, 口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部外 面ロクロナデ, 内面丁寧なヘラ削 り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色(外面) 普通	P7551 70% PL83 竈内とP <sub>1</sub> 置土中
3	高台付壺 土師器	B〔1.1〕 D〔5.8〕	高台部分。高台は「ハ」の字状に開く。	高台部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P7552 5% 竈前覆土下層

第650号住居跡(第276図)

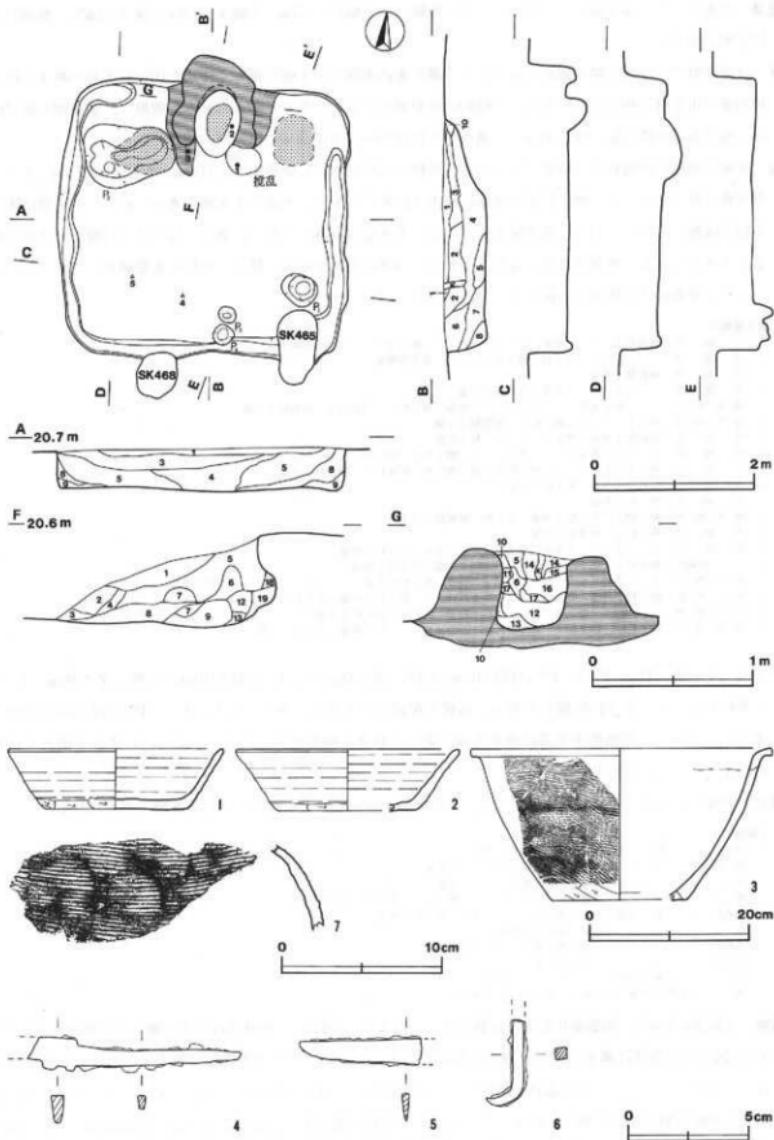
位置 調査7区南東部, O12d区。

重複関係 南東コーナー部を第465号土坑に、南壁中央部を第468号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.74m, 短軸3.66mの方形である。

主軸方向 N-8°-E

壁 壁高は60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第276図 第650号住居跡・出土遺物実測図

**塗溝** 北東コーナー部を除いて、遡っている。規模は、上幅13~27cm、下幅4~19cm、深さ7cmで、断面形はU字形である。

**床** ほぼ平坦で、全面が踏み固められている。竈の東西両側で、床面を掘りくぼめた中から多量の焼土と灰、相当量の炭化材が検出されており、一時的に灰を溜めておいた部分と考えられる。規模は、竈東側が長径62cm、短径48cmの楕円形、深さ30cmで、竈西側が長径78cm、短径60cmの楕円形、深さ25cmである。

**竈** 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで112cm、両袖部幅127cmである。第9層は焼土ブロック・焼土粒子が多量に検出されることから、下面が火床面と考えられる。火床部は床面を約5cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第7・10・15~17層が天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており、内側は火熱を受け、粘土・山砂が赤変硬化してゴツゴツしている。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

#### 竈土層解説

1	黒	褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化物少量
2	黒	褐色	ローム小ブロック少量、焼土中ブロック・炭化物微量
3	浅	黄色	砂質粘土少量
4	黒	褐色	ローム大ブロック多量、砂質粘土少量
5	板	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
6	板	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・砂質粘土少量
7	浅	黄色	砂質粘土少量、焼土小ブロック・粒子中量
8	暗	褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
9	灰	褐色	焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、炭化物・炭化粒子・砂質粘土少量
10	浅	黄色	砂質粘土少量、焼土粒子少量
11	赤	褐色	焼土粒子・炭化粒子多量、炭化物・砂質粘土少量
12	板	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子多量、炭化物・砂質粘土少量
13	黒	褐色	焼土粒子・砂質粘土少量
14	暗	褐色	ローム小ブロック多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子微量
15	にぶい	褐色	焼土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
16	暗	赤褐色	ローム小ブロック・焼土小ブロック中量、焼土粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
17	暗	褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック・粘土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子少量
18	暗	赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・灰中量、炭化粒子少量
19	灰	褐色	焼土粒子・粘土粒子・灰多量、ローム小ブロック・粒子中量、炭化粒子少量

**ピット** 4か所 ( $P_1 \sim P_4$ )。 $P_1$ は径約46cmの円形、深さ66cmで、 $P_2$ は径約40cmの円形、深さ26cmである。いずれもコーナー寄りに位置しており、規模と配置から主柱穴と考えられる。 $P_3 \cdot P_4$ は径22cmの円形、深さ25~35cmで、南壁際中央部に南北方向に並んだ状態で検出されていることから、いずれも出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 10層からなる。各層からロームブロックが多量に検出されることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	
2	褐	褐色	ローム小ブロック多量、ローム大・中ブロック微量
3	褐	褐色	ローム小ブロック少量、山砂・粘土ブロック微量
4	褐	褐色	ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子少量、ローム大・中ブロック少量、焼土粒子微量	
6	褐	褐色	ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
7	暗褐色	ローム大・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	
8	黒褐色	ローム小ブロック・炭化物微量	
9	褐	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
10	褐	褐色	砂質粘土多量、焼土粒子・炭化粒子・小礫微量

**遺物** 土師器片134点、須恵器片41点、鉄製品3点(刀子2、角釘1)、椀状鉄滓2点、礪2点が出土している。第276図1須恵器杯は竈前の覆土下層から斜位で出土している。2の須恵器杯は竈内から出土した破片が接合したものである。3の須恵器鉢は竈内から一括で出土した破片が接合したものである。4・5の刀子は中央部やや南西側の覆土下層から出土している。6の角釘は覆土中から出土している。7は南西コーナー部の覆土下層から出土した須恵器壺の体部片であり、外面に平行叩きが施されている。そのほかに覆土中から炭化材が少量検出されている。椀状鉄滓は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀中葉と考えられる。純状鉄滓が出土しているが、鍛冶炉等は確認されていない。

第650号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第276図 1	坏	A [13.3] B 3.8 C 9.0	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外彫して立ち上がる。	底部削軸へラ引後、一方に向かって前り。体部から口縁部にかけて内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・英石・小石 灰青褐色	P7553 60% 窯前覆土下層 普通
	坏	A [13.8] B 3.8 C [8.4]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は外彫して立ち上がる。	底部へラ切。体部下面下端手持ちへラ削り。体部から口縁部にかけて内・外面クロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 灰青褐色	P7554 15% 窯内 普通
	鉢	A [37.2] B 18.7 C 16.5	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内壁気泡に外彫して立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁部は両端に後を持つ。	体部外面横位の平行叩き後、斜位の平行叩きが施されている。輪郭のみ残す。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P7555 15% 二次焼成 窯内
第276図 2	須恵器					
	刀子	(8.7)	1.4	0.5	(8.40)	M7051
	刀子	(5.1)	1.1	0.3	(4.82)	M7052
5	刀子	(3.5)	—	0.4	(4.36)	M7114
6	角釘					

第651号住居跡(第262・277図)

位置 調査7区南東部、O12b区。

重複関係 全体的に第660号住居跡、南西部が第640号住居跡、窯が第639号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.08m、短軸3.81mの長方形である。

主軸方向 N-71°-E

壁 壁高は約40cmで、外彫して立ち上がる。

壁溝 東壁下には確認できなかったが、それ以外は巡っている。規模は、上幅10~20cm、下幅4~10cm、深さ約8cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、北部と南部が特に踏み固められている。

窯 東壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm、両袖部幅約90cmである。

第5層の底部にゴツゴツした焼土ブロックが検出できたため、火床部と考えられる。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変化している。天井部は崩落しており、第2層が天井部の崩落土と考えられる。

煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。窯内の焼土から炭化材が検出されている。

#### 窯土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子少量
- 3 黑褐色 焼土粒子・炭化粒子中量

- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 粘土ブロックで、ゴツゴツしている

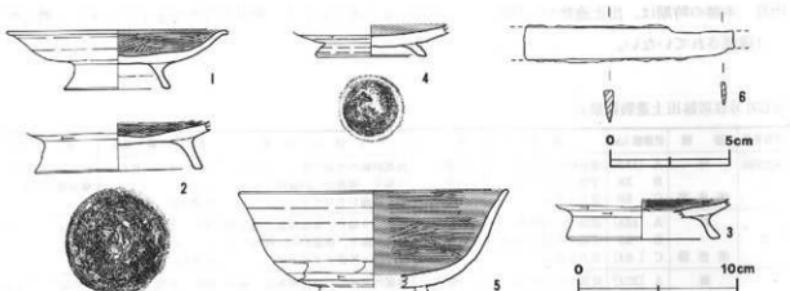
ピット 南西部にあるP<sub>1</sub>は径約60cmの円形で、深さ18cmである。性格は不明である。

覆土 8層からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子多量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
- 4 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量

- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量



第277図 第651号住居跡出土遺物実測図

遺物 土器片13点、須恵器片3点、鉄製品2点（刀子）、鉄滓1点、炭化物が出土している。図示した土器はいずれも土器である。第277図1の高台付皿は遺構確認面から、2・3の高台付杯は南東部の覆土下層から逆位で出土している。2の底部外面には朱墨が付着しており、硯に転用したものと考えられる。5の高台付杯は竈前の覆土下層から逆位で、4の高台付杯、6の刀子は覆土中から出土している。鉄滓は覆土中から出土している。北部の床面から炭化した茅が少量出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第639・640・660号住居跡より新しい。北部の床面から炭化した茅が出土しているが、柱材等の炭化材や焼土ブロックなどが検出されていないことから、焼失家屋とは考えにくい。鉄滓が出土しているが、鍛冶炉等は確認されていない。

#### 第651号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第277図 1 土器	高台付皿	A [14.0] B 37 C 6.6 D 1.5	体部から口縁部にかけて一部欠損。 高台は「ハ」の字状に開く。体部は内側気味に大きく外に開きながら立ち上がり。口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ切り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部外側クロロナデ。内側丁寧なハラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色(外側) 普通	P7556 60% 遺構確認面
	高台付杯	B (3.0) C 2.0 D 10.6	体部から口縁部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ切り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。底部内面丁寧なハラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P7557 30% 南東部覆土下層 底部外側朱墨付着
	高台付杯	B (2.5) C 1.3 D 9.6	体部から口縁部と底部の一部欠損。 高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ切り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。底部内面丁寧なハラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 橙色 普通	P7558 40% 南東部覆土下層
	高台付杯	A (2.0) B 6.8 C 0.9	体部から口縁部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ切り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。底部内面丁寧なハラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 赤色粒子 にぶい橙色 普通	P7559 20% 覆土中
	土器	A [16.8] B 6.0	底部から口縁部にかけての片断。高台部欠損。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部をわずかに外反する。	底部回転ヘラ切り後ナデ。体部から口縁部にかけて内・外側クロロナデ。内面ハラ磨き、黒色処理。	砂粒・雲母・長石 赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P7560 20% 竈前覆土下層

図版番号	種別	計測 値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第277図6	刀子	(8.9)	1.3	0.4	(17.0)	覆土中	M7053 PL.83

茨城県教育財團文化財調査報告第149集  
(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

熊の山遺跡  
(上巻)

平成11(1999)年3月16日印刷

平成11(1999)年3月19日発行

発行 財団法人 茨城県教育財團  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 (株)平電子印刷所  
〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13  
TEL 0246-23-9051